
のはStrikerS ~ Magical girls with Death&Strawberry ~

黒棺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS\Magical girls with Death&Strawberry\

【Nコード】

N1658V

【作者名】

黒棺

【あらすじ】

元死神代行の青年黒崎一護は、死神の力を取り戻すために「X-cutition」と協力して完現術の力を手に入れた。「これで死神の力を取り戻せる」そう思い突き進んだ先にあったのは残酷な結末。青年は絶望し、その命に自ら終わりを告げようとしたが……

この小説は独自設定・解釈（という名の作者の趣味）や原作崩壊、ハーレム要素、キャラ崩壊、ご都合主義などを多分に含んでいます。お読みになる方は十分注意してお読みください。この作品は、旧「

魔法少女リリカルなのはStrikerS（完現術と死神の力）
版）です。タイトルが本決定しました。

プロローグ（前書き）

この小説は独自設定・解釈（という名の作者の趣味）や原作崩壊、ハーレム要素、キャラ崩壊、ご都合主義などを多分に含んでいます。そういった作品に嫌悪感を抱かれる方は読まないことをお勧めします。それでも構わないという方はどうぞお読みください。

プロローグ

森の奥にある洋館で二人の男が剣を交えている。

一人はまるで相手を見下すかのように冷静で、もう一人は激昂しながら戦っている。

その一人の名は月島秀九郎。柔の完現術「ブック・オブ・ジ・エンド」を使い過去を

分岐させる完現術士である。

そして、もう一人の名は黒崎一護。代行証、通称死神代行許可証の完現術「レスキュー」

シヨン・セイント」を使う元死神の完現術士であり、今現在月島に対して激しい憎悪の

念を抱いている男である。

一護

「…なんでだ…」

俺はみんなを護りたかっただけなのに……どうしてこうなっ
た……

これじゃあ……俺は……俺はいつた何のために力を取り戻した
んだ……!

月島ア……!!」

> i 2 8 0 6 2 | 3 5 0 6 <

月島は一護の周りの人間を完現術の能力によって別の過去を歩んだ
ことにし、月島の

ことを知らないのは一護だけという状況作り出し、一護を精神的に
追い詰めていき

ながら自らも完現術で一護の過去も思いもなかったことにしようと
している。

当然一護もだまってやられるはずもなく、自らの完現術で月島と渡
り合おうとするが、

かつての仲間がそれを許さない。

さらに、一護の恩人であるルキアを助けることができたのも、最大の敵であった藍染を

倒すことができたのも月島のおかげだと言う。

このことでさらに動揺した一護は、完現術を使いこなしながらも次第に追い詰められて

いく。

続く……………

プロローグ（後書き）

その場のノリと勢いで始めてしまったこの小説ですが、なんとか完結まで行けたらなあと思います。また、感想や誤字の指摘などいつでも気軽に書き込んでください。これからもよろしくお願いします。

第1話 物語の終焉そして…)(The end of the story)

2話目も更新です。

やはり小説は難しいですね。それに、BADエンドに近い話は苦手ですし。

何はともあれ第2話、どうぞご覧ください。

第1話 物語の終焉そして…(The end of the story)

先ほどまでの大規模な戦闘とは違って変わって現在はあたりは静まり返っている。

なぜなら、すでに戦闘はすでに決着を向かえ、片方は地面に膝を付きながら肩で息をし

ているからである。

そしてもう片方は、相変わらず冷めた眼で相手を見下ろしなにやら言葉を掛けている。

月島

「もう分かっただろう一護……」

君ではどう足掻いたところで僕たちには勝てないって……」

そう、すでに月島に過去を操作された者たちまで戦闘に加わったために一護はここまで

追い詰められてしまったのだ。

おひらに月島は続ける。

月島

「言っただろっ??君だけが違っんだ?と。」

でももう終わりだよ一護。

今まで辛かっただろっ?僕が終わりにしてあげるよ。

全…
てをね」

月島が「ブック・オブ・ジ・エンド」を振り上げる。そこへ、

石田

「黒崎!」

一心

「一護!」

浦原

「黒崎さん!!」

月島の力を受けていない3人が駆けつけた。しかし、

月島

「やはり来たか…」

たいして動揺もせずに淡々と続ける。

月島

「惜しかったね、もう少し早く此処にたどり着いていたら助けることも

出来たろうに。でも、もう手遅れだ。彼の想いは此処で終わる。

この僕の手によってね!!!!」

そしてついに、月島の完現術が一護に振り下ろされた。

一護

「(こんなところで終わるのか?)」

…俺には結局なにも護ることはできないのか？

…俺は…俺は…こんな世界を望んだんじゃない…!!」

その時、

ギァン!!

月島の凶刃は一護の周りを包む謎の光によって弾かれた。

月島

「なっ…!!?」

月島の声が驚愕に染まる。

さらに、一護の後ろの空間が突然ひび割れ巨大な穴がした。

月島

「これは…いつたい…!?!」

月島は動揺を隠せないでいる。それは周りの人間も同じことで、助けに来た3人でさえ

思考が止まってしまっている。

さらに異変は続く。今度は一護の体がその穴に引きずり込まれていくのだ。

一心

「一護オ!!!」

これにいち早く反応したのは父親である一心であった。

一心はその手にあった霊力の塊のような刀を一護の胸に向けて投げ、それは一護の胸を

貫くと溶けるように一護の中へ消えていった。

だが、一護は気を失っているのか全く動こうとしない。

石田が霊弓で一護の体を地面に縫いつけようとするが、見えない何かに阻まれて矢が

消えてしまう。

浦原も鬼道で引きとめようとするがやはり鬼道も消滅してしまふ。

そして一護は為すすべもなく穴の中へ落ちて行き、この世界から黒崎一護という人間は

消失した。

続
く
……

第1話 物語の終焉そして…(The end of the story)

というわけで随分と駆け足になってしまいましたが、BLEACH世界はこれで終わりです。たまに、気分などでIFの話を書くかもしれませんが、基本はなのはの世界でのお話です。

<次回予告>

一護「俺はまた…護れなかった…」

「ウオオオオオ!!」

怒りに身を任せて暴れる一護。

一護「もう俺には…何も無い…」

失意の底で一護は立ち上がることが出来るのか？

そこで出会っある人物とは？

次回「御神の剣士」

第2話 御神の剣士 (A f e n c e r o f G o d) (前書き)

はい、というわけで調子に乗って3話目まで更新してしまいました。勢いって怖いですね(笑)前回と前々回はシリアスすぎたのでこの話の序盤は少しふざけてみました。

今回は原作キャラが3話目にしてようやく出てきます。誰か分かりますとよね？

親バ…うわっ、何をする…チーン(死)

第2話 御神の剣士 (A f e n c e r o f G o d)

ある男が森の中を歩いている。

その男の外見は、20代後半から30代前半とっていい若さだ。

片方の手に小太刀を2本抱えながら進む男は、小太刀二刀御神流という剣術の正当

継承者であり、その筋では有名な剣術家である。

また、たいそうな親バ (チャキツ) : もとい家族思いの人物で、真昼間にも関わらず

嫁さんとイチャイチ (スラッ) すいません何でもありません (大汗)

その名を高町士郎という。

そもそもなぜ森の中を歩いているかというと、御神流の修行場へ向かっているからで

ある。

本来なら、自宅にある道場を利用するのだが、息子である高町恭也が恋人とドイツに

行ってしまってから森の中にある修行場をめっきり使わなくなったのでたまには気分

転換にと思い、ここまでやって来たのである。

しかし、この日の森の様子は少し違っていた。

いつもなら聞こえる鳥たちの鳴き声などが全く聞こえない。それどころか風に乗って

わずかに血の臭いがするのである。

ただ事ではないと感じていた土郎は気を引き締める。その時、

ドオオオオン！！！

という、とてつもない音とともに地響きが伝わってきた。

何事かと驚くが、人の気配に気づいた士郎は急いで音のした方へ向かうのだった。

一人の男が地面に横たわっている。その体は所々に傷があり、血まみれである。

???

「うっ…ここは…」

その男は先ほど月島秀九郎に敗れ、空間にあいた穴に落ちたはずの黒崎一護であつた。

一護

「どうして俺は生きているんだ…」

俺はあの時月島に切られて…」

一護はただひたすらに自分が生きていることに対する疑問を浮かべていた。

しかし、

一護

「はは…そうだ…なんで俺が生きているとかそんなことはどうでもいい…」

俺は…結局何も護れなかった…

…何も…護れなかった…

護れなかったんだ…！！ウオオオオオアアアア！！！！」

彼は気づいてしまった。自分が何も護れていなかったことに、全てを失くしたことに。

一護

「何でだ！！何で護れなかった！！」

「何で俺はまだ生きているんだ！！！！」

傷だらけの体で怒りに任せて剣を振り回す。そのたびにかつての仲間たちから受けた

傷から血が流れ出る。剣から放たれる衝撃波はあたりの木々を切り飛ばす。仲間を護れ

なかった無念から、仲間辛い思いをさせてしまった後悔から、一護は休むことなく

暴れ続ける。

だが、ついに失血と傷の痛み、疲労などで地面に膝をついた。

一護

「もう俺には何も無い…」

大切だった仲間も、家族も、俺の居場所も全て奪われた！！

もういい…もう疲れた…」

そういつと一護は自分の完現術の剣を自分の首に押し付け、一気にその刀身を引こうと

したが、

ガシッ！！

何者かによってその刃は止められてしまった。

その刃を受け止めたのは先ほどの爆音を聞きつけた高町士郎であった。

一護

「何で止めるんだ…」

士郎

「なに、此処は私個人の修行場でね。地形を変えるのまでは許されるが自殺は

ちよつとね。それに君に何があつたかは知らないが自ら命を絶つのはよくない

な。」

一護

「うるせえ……」

士郎

「そもそも親から貰つた命を粗末にするとはなにごとかね。ん？」

一護

「うるせえよ……」

士郎

「さて、このままにするのもいけないな。君の家の連絡先を教えてくださいませんか？」

一護

「うるせえって言ってんだ!!!!!!」

そう叫ぶと一護は土郎の手を振り払い、土郎を横薙ぎに切りつけようとした。これは

彼らしくない行動だが、それほどまでに憔悴しているのが分かる。

しかし、

ギーン!!

その刃は土郎を捉えることなく、土郎が構えた2振りの小太刀に阻まれた。

一護

「なっ……」

土郎

「ここは修行場だと言っただろう？ただの一般人だと思ったかい？」

一護

「くっ…」

士郎

「仕方ないな…聞き分けのない君には少しお仕置が必要だよ
うだ」

一護

「ふざけんなああ!!!」

それを皮切りに、元最強の死神と御神流剣士の戦いが始まった。

一護は強引に剣を振り抜き、士郎を吹き飛ばす。そして、完現術の
跳躍増幅を使い、

背後に回って斬撃を放とうとする。しかし、士郎も超人的な反応で
剣を受け止める。

一護は生身の人間に受け止められたことに驚愕するが、それが隙と
なって今度は逆に

士郎に吹き飛ばされてしまう。

一護

「あんた…何者だ？」

少し冷静になった一護がたずねると、

士郎

「ただのしがない喫茶店の店主だよ」

とおちよくった様な答えが返ってきた（事実なのだが）。なので一護は、

一護

「ふざけてんじゃねーぞ…！」

と怒りを露わにして再び切りかかってきた。

しかし、それもまた難なく受け止められてしまう。この現実に一護は焦っていた。

生身の人間が反応できるはずのない速度で攻撃しても反応され、生身の人間が受け

止めることの出来ない力で攻撃しても受け止められる。

そんなことを何度か繰り返した後、唐突に士郎が話しかけてきた。

士郎

「そろそろ限界なんじゃないかい？

動きの切れももうないし、それにその力は君本来の力じゃないよだね」

一護

「!!!!!!??」

一護は純粹に驚いていた。たった数回の剣戟でそこまで見抜くこの男の実力に。

士郎

「それにその力を手にしてまだ日が浅いよだね」

一護はもう声も出せなかった。そして、考えた「もう形振り構ってられない」と。

すると一護はバックステップをし、溜めの姿勢作った。

士郎

「（何をするつもりだ…？）」

士郎がいぶかしんでいると、

一護

「うまく避けてくれよ…」

という

士郎は構えを崩さず集中し感覚を研ぎ澄ます。そして、

一護

「月牙ッ……天衝！！！」

現在の一護最強の斬撃が放たれた。

士郎

「（疾い！…！）」

ドオオオオンー!!!

ポツツ…ポツ…ザアアアアアア

夕立だろうか雨が降り出した。先ほどの月牙で生じた煙が晴れてくる。そこには、

無傷の高町士郎がたたずんでいた。

一護

「まさか…本当に避けたのか…?」

現時点で自分の最強の技を無傷で避けられた。その事実がいやでも一護の思考を止めて

しまっていた。

士郎

「いやぁ驚いたよ。まさかあそこまで疾いとはね。

僕じゃなければ、いや本気の僕じゃなければ間違ひなく喰ら
って即死だったろう

ね。」

なぜか軽い様子で一人ウンウン言っている土郎。久しぶりに息子以
外に強い相手に会え

てうれしいようである。

土郎

「お礼にさっきの種明かしをしてあげるよ。」

御神流 奥義 神速!!!」

土郎がその名を口にした瞬間、一護の世界は暗転した。

それから2時間ほど経って

一護

「ぐッ……」

士郎

「おや、気がついたかい？」

一護

「俺は…負けたんすね…」

士郎

「そっちが本当の君の喋り方かい？」

一護

「さっきまでは頭に血が上ってたんすよ」

士郎

「悪いが君の持っていた五角形？の板は預からせて貰っているよ。」

さて、なぜ死のうとしていたのか訳を聞かせてくれるかい？」

一護

「ほとんど信じられないような話ですよ？」

士郎

「この期に及んで嘘をつくとは思わないさ」

一護はこの時嘘かもしれないとわかっけていてもなぜかうれしかった。

一護

「わかり…ました…」

そして、一護は自分の身に起きたことを話し始めた。

自分が元々死神という力を持っていたこと、その力を失くしたこと、そしてそれを

再び取り戻すために今の力を手に入れたことを……

短い時間だったので掻い摘んで話したが士郎にはことの重大さは伝わったようである。

士郎

「たしかににわかには信じがたい話だが…さっきの力を見ている以上本当なの

だろうな」

一護

「…はい…」

士郎

「それで？まだ核心については話してないだろう？話してくれるかい？」

一護

「そう…ですね…」

一護は説明を続ける。

月島によって過去を変えられ、孤立無援の状態でも諦めずに戦い続け、そして

敗れた後に気づいたら此処にいた事を伝えた。

一護

「もう俺には何もありません。護りたかった人も…大切な仲間も全て

奪われた!!

だからもう生きている意味もない…だから死なせて欲しかった!!」

一護の説明の後半はもう悲痛な叫びになっていた。そして続ける、

一護

「何も護れなかった俺なんかのうのと生きていていい訳がない!!」

士郎

「そんなことはない!!」

士郎も気づかないうちに叫んでいた。

士郎

「今までの話を聞いていてわかった。君がそう思っているならば、なおのこと」

生き続けるべきだ。」

一護

「どうしてそんなことが言えるんだ！今俺が伝えたことしか知らない」

あんたに！！」

士郎

「ああ知らないさ。だが生きているならまた護りたいものも見つかるはずだ！！」

一護

「あんたは俺にあいつらを忘れろってのか！！」

今度は怒りを露わにして一護は叫ぶ。

士郎

「そうじゃない、そうじゃないんだ。別に僕は君に忘れるなんてことは言わ

ないさ」

一護

「ならなんで…」

士郎

「僕が言いたいののは君が過去に捕われて、歩みを止めてしまっているという

ことだ」

一護

「!!!!??」

一護はこの時、天鎖斬月との会話を思い出していた。

（天鎖斬月「なぜなら一護、お前が絶望し歩みを止めたからだ!!」）

一護

「歩みを…止めた…」

士郎

「そうだ。人は生きていてただで未来に向かって進んでいる。死ぬということは

それを辞めるということだ。

だが生きているのなら人間はいくらでもやり直すことが出来るんだ。

過去を悔やんでもいい、振り返ってもいい、でも歩み続けることはやめるな。

前に進み続けてさえいれば護りたいものはきっと見つかる。

だから君は生き続ける」

一護

「俺は…生きていても…良いんですか？」

士郎

「もちろんだとも」

士郎がこれまでで一番やさしい笑顔で声を掛ける。そして一護は、

一護

「くっ……っ……」

声も出さずにただ泣いた。

雨はいつの間にか止んでいた。

続
く
.....

第2話 御神の剣士 (A f e n c e r o f G o d) (後書き)

士郎無双でしたね(笑)

やり過ぎた感もいなめませんが、後悔はしていません。

現在の一護ではブランクもありますし、完現術も手に入れたばかりですからね。

ちなみに完現術は術者が気を失うと解けるといふ設定になっていません。

感想や誤字の指摘も随時受け付けています。

感想を書いていただくとは調子に乗って書きまくりです。

これからもこの作品をかわいがってやってください。

第3話 そして、これから… (And the future…) (前書き)

すでにサブタイトルが思いつかない黒棺でございます。
最新話投稿です。どうぞお楽しみください。

生きる希望を見つけた一護

しかし、問題は山積みで……

第3話 そして、これから… (And the future…)

士郎「落ち着いたかい？」

一護「はい…何か…」

士郎「ところで気になっていたんだが…空座町とは何処にあるんだい？」

一護「……………は？」

士郎「いや、僕も日本中や世界中を周ったことがあるから地理には詳しいつもりなんだ

が、空座町というのは聞いたことがなくてねえ」

一護「〇〇県の 市っすけど…？」

士郎「ちょっと待ってくれないか？」

そういうと士郎は携帯取り出し、何かを調べ始めた。そして、しばらくすると

士郎「はあ…厄介なことになったな…」

一護「どういづことっすか？」

士郎「どうもいづもいづいづことだよ…」

おもむろに一護に携帯の画面を見せる土郎。

そこには、「空座町での検索結果0件」と出ていた。

一護「なっ…何で」

土郎「僕はあまりこういうのには詳しくないんだけど君はどつちから平行世界から来た様

だね」

一護「平行…世界…？」

一護は聞きなれない言葉に首を傾げる。

土郎「そう。君がいたところは地球だろうか？」

一護「そ…そうですね…」

土郎「実はこの世界には地球以外の世界がたくさん広がっているんだ。」

一護「え…？」

土郎「そのたくさんある世界の中に、地球という名前のある世界は此処しかないんだ」

「そこから導き出される答えは、この地球とは別の歴史、君たちの視点で言えば、

死神の力が発展した地球から来たと言う事になる」

一護「別の…歴史…」

士郎から揭示されたこの事実に一護は動揺を隠しきれない。

士郎「一度知り合いに聞いたことがあるんだが、この世界にあるたくさんの世界に行く

ことは出来ても、平行世界に行く技術は存在しないと
言っていた」

一護「じゃあ俺は…もう元の世界に帰ることは出来ないんですね…」

士郎「残念ながらそうなるな…」

一護「わかりました」

士郎「いいのかい？原因が分かればもしかしたら」

一護「原因なら分かっています」

士郎「なんだって！？何が原因なんだ？」

一護「今思い出したんです…俺は…月島に切られる寸前に？こんな世界を望んだんじゃ

ない？と思ったんです」

「今思えば簡単なことだった…俺は…俺が望んだからこの世界

に来たんです」

士郎「どうということなんだい？いくら自分で望んだからって世界を自力で渡るなんて」

一護「俺の世界には周囲の心を取り込んで具現化する能力を持つ「崩玉」という道具が

存在するんです」

「その力は強大で、作り上げた本人が破壊しようとしてまでしたけど、破壊できずに仕

方なく封印したような代物なんです」

「おそらく、俺があまりにも強く願い過ぎたせいでしょう」

士郎「しかし、君はこれからどうするんだい？」

一護「そうですね…さっきまでの俺だったら死んだかもしれませんが、今はとにかく生

き続けようと思います。でないと、あなたに助けてもらった意味がない」

「でも取り敢えずは衣食住の確保か…あれ？俺って戸籍無いからホームレス？」

「しかも働くことも出来ないなんて…ウガー！！どうすりゃいいんだ！！??？」

士郎もさすがにこの勢いには若干引き気味である。だが、このまま放って置くのもいけ

ないので

士郎「それならうちに来ないかい？」

一護「あがー…ぱーどうん？」

士郎「いや、だからうちでいいなら衣食住全てがまかなえるよ」

一護「いや…えつと？」

士郎「それにうちは喫茶店だしね。ちょうど男性の従業員が欲しいと思っていたところ

なんだよ

一護「いや、だから…」

士郎「ああ、戸籍についても気にしなくていいよ。知り合いに何とかなえる人がいるか

らね。それに…」

一護「聞けよ！！！！（怒）」

士郎があまりにも話を聞かずに進めるため軽くキレってしまった一護である。

士郎「だから、僕の家もしくは居候にならないかと言って
るんだよ」

一護「良いんですか？そんなに簡単に決めてしまって。指輪をして
いるところから見ても

他に家族の人もいるんでしょう？」

士郎「気にしないでいいよ。家の長女と奥さんがいるが、長男と末
娘は外国にいてね、

部屋は空いてるんだ。それにさっきも言ったけど喫茶店の従
業員が欲しかったと

ころでね、まあギブアンドテイクということはどうだい？」

一護「迷惑をかけるかも知れませんか？」

士郎「人間で迷惑をかけないような人はなかなかいないと思うけど
？」

一護「それに自分で言うのもなんですけど、俺相当に怪しいですよ
？」

士郎「僕が信じると言ったんだ。家族も皆信じるさ。それとも家に
来るのは嫌かい？」

この言葉が止めだったのか、一護はおもむろに立ち上がり、そして、

一護「よろしく…お願いします…!!」

ゆっくりとだがしっかりと響く声で挨拶をした。

それを士郎は優しい瞳で見つめ

士郎「こちらこそ、よろしく」

と互いに握手を交わした。

士郎「ところで君の名前は？」

一護「そういえば忘れてましたね。黒崎一護です。」

士郎「母か…随分とかわいい名前だね」

大事なことを忘れてる上にこの男、存外に天然である。

一護「そっちじゃねえよ!!」(怒)「一等賞の—に守護神の護だよ!」

士郎「そ…そうか(汗)じゃあ、一護くんと呼ばせてもらおうよ」

一護「あなたは？」

士郎「僕の名前は高町士郎。気軽に士郎と呼んでくれ。」

一護「じゃあ、士郎さんと呼ばせてもらいます。」

それからしばらくして、森を抜けながら話しているとふとしたことに一護は気づく。

一護「そういえば、世界を移動するってどんな技術なんすか？」

この疑問は当然のものといえよう、まあ返ってくるのは予想の斜め上の答えなのだが。

士郎「あー…君は魔法って信じるかい？」

そう言われて一護が思い浮かべたのは

魔女「ひえーひえっひえっひえ」

と笑いながら鍋の中を掻き回す老婆の姿であった。

一護「そ…そんなのがあるんですか？」

士郎は急に顔色の悪くなった一護の様子で何を考えたか気づいたようだ。

士郎「ああ、君が考えているようなものではなくもっと近未来的な

技術のような感じだ

よ。例えば、世界を移動するのは宇宙戦艦のような船で行うんだ。」

一護「ああ…なるほ」

士郎「でもヤマトとかじゃないよ？」

一護「うぐっ!？」

凶星だったようだ…

士郎「まあ、そういったものを一括管理しているのが時空管理局という組織だね。僕は

あまり賛同出来ないんだけど、いわゆる世界の管理者という立場をとっているん

だ。」

一護「世界を管理…ですか…」

士郎「途方もない話だろう？まあ本来なら君も管理局にお世話にならないければならない

んだろっが事情が事情だしね」

一護「はい…」

士郎「信頼の出来る知り合いもいるし、さっき言った末娘も所属しているんだが…」

「どうも一枚岩では無いようですね。いつかは話そうと思うが今はやめておいたほう

がいいだろうね。」

一護「そう…ですね。俺の力は特殊なものですから。それに使いこなせてませんし」

士郎「ふむ…時間があるときでよければ鍛錬を手伝えるが？」

一護「本当ですか！！？」

士郎「あ、ああもちろんだとも（汗）」

一護「（今度こそ護ってみせるんだ…俺の力で！！）」

士郎「でも、まずは家に帰って傷の治療をしないとね」

この後、一護が奥さんの桃子を見て絶叫し、さらに傷を不器用な美由希に治療され絶叫

したのは言うまでも無い。

第3話　そして、これから…（And the future…）（後書き）

4話めにしてすでに漂うグダグダ感（汗）

改めて小説の難しさを知った今日この頃でございます。

士郎詳しすぎじゃね？と思う方もいらっしやると思いますが、娘が所属するという組織についてこのくらいは説明されて無いと士郎や恭也は納得しないと思うんですよ。なので、説明役を彼に押し付ける形になってしまいました。本音を言えばリンディあたりが適役なんですけどね。

また、ここで崩玉かよ！！とか思われたと思いますが、これが作者の限界と想ってください（泣）

次回は日常のようなものを書いていきたいと思えます。

感想も一言でも良いので気軽に書き込んでください。

一護の設定（前書き）

ここでは、一護の設定について書いていきたいと思います。
また、初めて読まれる方にはネタバレを多分に含む可能性があります。
す。
注意してお読みください。

一護の設定

【名前】

黒崎 一護

【年齢】

現在：17歳

原作開始時：19～20歳

【身長】

181cm

【体重】

69kg

【好きなもの】

チョコレート、辛子明太子

【血液型】

A O型

【誕生日】

7月15日の蟹座

【一護の能力について】

現在の一護は気づいていないが、一心の行動によりまだ不完全ながらも死神の力は、

既に戻っている。だが、一護自身が鈍いのと、霊力自体が閉じて眠った状態にあるた

め、死神にはなれないでいる。また、死神の力が戻ったことにより、一護の完現術に

も変化が現れており、上半身が卍解のコートのような服の上に鎧？部分を少し減らし

て展開したようになっていいる。また、剣の刀身も若干伸びており通常の斬魄刀ぐらい

の長さになっている。この状態になっても気づかないことから一護の鈍さが伺える。

【原作開始時の一護の姿】

> i 3 4 0 9 5 | 3 5 0 6 <

とはいっても修行後の一護に完現術を展開させたただけですが（笑）

【死神化（始解）】

> i 3 4 0 9 7 | 3 5 0 6 <

復活一護の髪を伸ばしただけですが、一応このイメージで進めていきます。

【死神化（卍解）】

> i 3 0 8 9 3 | 3 5 0 6 <

復活一護の死覇装を卍解用に替えただけです。

一護の設定（後書き）

どうでしょうか？

内容は小説の進み具合によって更新されていきます。

また、一護の年齢を合わせるため、また、経験を積ませるために原作の2年前に飛ばしました。独自設定満載ですが何卒この作品をよろしく願います。

第4話 東の間の平穩？ (A Short-lived peace?) (前書)

調子に乗って再び投稿しました(笑)

ここから数話は日常にしようと思っていましたが、2話ほどでキングクリムゾン

して一気に原作まで飛ばうかと考えています。というのもリリカルなのはがタイトルについているにも関わらず、なのはの名前すら出てないからです。まあ、この話で強引に出しますが…

ともあれ、まだ決まってもいないことを言っても仕方ないので始めたいと思います。今回はあの2人も出しますよ。そして…

自分の居場所が出来た一護

その身に早くも災難が降りかかる？

第4話 束の間の平穩？ (A Short-lived peace?)

チュンチュン…

「ん…？朝か…」

そういつて目を覚ましたオレンジ色の髪 of 青年、黒崎一護。

昨日は、士郎の車で家まで運ばれた後、簡単な自己紹介とこれからの身の振りに

ついてと、自分の身に起こったことについての説明をし (美由希が号泣していたのは

ここだけの話)、 (美由希に) 傷の手当をしてもらい (かなり痛かったようだ)、

空き部屋 (恭也の部屋) で眠りについたのだった。

「久しぶりにゆっくり寝た気がするな…」

今まで、完現術の修行や月島の襲撃によってまともに眠ったことが最近は数えるほど

しか無かったからだ。

「嫌なこと思い出しちゃったな……でも……立ち止まる訳にはいかねえな……」

そういつて、覚悟を新たにし一護は部屋を出て行く。

その時、

チカツ!!

ベッドの横に置いていた代行証が光ったことに一護は気づかなかった。

「おはよう……しじょうまゆ」

一護はやはりまだ緊張しているようで挨拶が堅くなっていた。

しかし、

「あ、おはよう」

「あら、おはよう一護くん」

「やあ、昨日はよく眠れたかい？」

とやさしく声を掛けられ、緊張もいくらか和らいだようだ。

「はい、おかげさまで久しぶりにゆっくり眠れました」

「そうか、それはよかったよ」

「それじゃ、朝御飯にしましょう。空いてる席に座ってね」

そう言われたので、一護は土郎の前の席に座った。

すると、ある写真の存在に気づいた。土郎もそのことに気づいたようだ。

「ああこの写真かい？2年ほど前に家族全員で撮った写真だよ。

僕と美由希と桃子は分かるだろう？一番右端にいるのが長男の恭也で、

真ん中にいるのが末娘のなのはだ」

「恭也さんは今何処に？」

「ああ、言つて無かつたかい？」

恭也は今恋人と一緒にドイツで仕事をしているんだよ。

ちなみになのはは昨日言つたように、

ミッドチルダという世界で管理局に所属している

「へー…お父さん、魔法について話したんだ？」

「ああ、今はまだ駄目だがいつかは一護くんのことも伝えないといけないからね」

「私はてつきり』なのはやらんぞ!!』とか言つと思つてたよ」

「む…一護くん…君はなのはを狙っているのかい？」

「……………は？」

「いくら君が強いとは言え、なのははやらんぞー!」

「あちゃー、お父さんスイッチ入っちゃったよ…」

入れた本人が暢気なものである。

「そもそも（ガシツ）へ？（ギリギリ）」

なぜ肩を掴んでいるのでせうか桃子様？（大汗）」

「あまりにも1人であなただが暴走しているのですから少しO H A
N A S H I

しなればと思ひまして…ニコッ（怒）」

「ハハハ、桃子さんやその怒った笑顔もステキ…あーちよつと待つ
てください!」

ホントに!!その間接はそつちには曲がらな…ギヤース!!」

しばらくお待ちください……

~~~~~士郎さんは一身上の都合で早退されました~~~~~

「……(汗)」

「一護くん」

「ハハハハハ、ハイッ!!!?!?」

「どづかしたの?」

「イエッ、ナニモ!!!」

「?????」

あなたの所為ですとは口が裂けても言えない一護であった。

「ウチの人がごめんなさいね?あの人と恭也はなのはを溺愛してて

ね

「はは…まあ分かりますよ。俺の親父も妹たちを溺愛してましたからね」

「あら、そうなの。まあ、あんな人は放って置いて食べてしまいましょ」

「ま…待ってくれ…母さん、僕にも朝食を…」

「来たばかりの護くんに迷惑を掛けるような人にはありません  
!」

「ガーン!!」

士郎は見事な——OTZ——を決めた。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

「い…いただきます（汗）」

1人を除いた3人で朝食を摂ったが、たいそうおいしかったそうだ。

「僕にも食べさせてくれー!!!」

1人の男の叫びも同時にあがったという。

その後、一護は士郎に連れられてある場所へとやって来ていた。その場所とは

喫茶店「翠屋」である。

「1111が…」

一護は素直にきれいな店だと思ったようだ。

「君にはここでウェイターの仕事をして貰うよ。最初のうちは分か

らないことも

あるだろうから遠慮せずに僕や桃子に聞いてくれ」

「はい、よろしく願いします!」

「いい返事だ」

意気揚々と入って行く一護。だが彼は知らない…翠屋が超人気の喫茶店である

ことを…

自分に待ち受けている運命を…

数時間後……

「チーン（死）」

そこで屍になっているものはかつて一護だったものである。慣れない彼は

あまりの忙しさに疲れ果て、現在に至る。

そもそも、一護は接客業などしたことが無く、効率が良くなかったのも原因では

あるが…

「ははは…さすがにきつかったかい？」

「ウツス…とても…」

「まあそのうち慣れるさ。気楽にいらおうじゃないか」

「はい…そうですね！」

そうやって気合を入れなおした時、

「いらっしゃいませ〜。あら？2人とも学校はどうしたの？」

という桃子の声が聞こえてきた。

「おや、お客さんみたいだね？」

「そうみたいですな。じゃあ、俺もそろそろ仕事に戻ります」

「それじゃあ行くうか」

「はい」

そういつて奥から出て行くと、そこでは

勝気そうな金髪の女の子と大人しそうな紫色の髪の女の子が桃子と話していた。

「あら？新しい店員さん？」

「そうなの、丁度男手が欲しかったし、働き者で助かってるわ」

「見た感じ同い年ぐらいですよね？」

「そうよ、あなたたちと同じ17歳よ。ほら、一護くん自己紹介」

「黒崎一護です」

「私はアリサ・バニングスよ。あと、敬語は使わなくて良いわ。同い年だし、

慣れてないんでしょう？」

「!!!よく分かったな」

「そのくらい分かるわよ。ねえ、すずか？」

「無理している感じがしたからね。あ、私は月村すずかです。

私も敬語はいらないし、名前で呼んで欲しいな」

「分かった。アリサにすずかだな」

「2人とも今日は何しに来たの？」

「すずかの家でお茶をするのでシュークリームかケーキを買いに」

「あら、ありがとう。じゃあ、箱詰めするから少しだけ待っててね」



『はい』

2人はその後、世間話もほどほどに帰って行った。

それから数分後、桃子から一護に声が掛けられた。

「一護くん。買出しがてら士郎さんに町を案内してもらって来たら？」

「そうだね。今のうちに地理にも慣れておかないといけないし、どうだい？」

一護は少し考えた後、

「迷惑で無ければお願いします。」

と言った。

買い物&案内中…

買出しと案内もひと段落ついたころ、一護と士郎は先ほど会った、アリサとすずかを

見つけた。

しかし、次の瞬間2人は驚愕する。

キキーツ！！

『キヤツ！！』

突然車がアリサたちの横に着き、2人を中へ引きずり込んだのだ。

「な…何なんだあいつら！！？」

「とにかく追いかけよう。このまま見失うといけない。」

だが車はものすごい速度で走って行く。そこで一護は、

「俺が先に追うんで、士郎さんは警察に連絡してください。」

「何だって!?!どうしてだ?」

「単純な速度なら俺は車ぐらいなら追いつけます。」

「…分かった。2人を頼むよ。彼女たちは娘の親友なんだ。」

「言われなくても!!」

そういつて一護は跳躍増幅を使い、車を見失わないように且つ目立たないように

進んで行った……

とある廃工場

ここは誘拐犯のアジトになっている。総勢100人を越えるチンピラたちが集まって

たむろしているこの場所に似合わない2人がいる。誘拐されてきたアリサとすずかで

ある。

先ほどの誘拐犯が2人を柱に縛り付けている。

「まさか月村の家の令嬢だけじゃなく、バニングス家の令嬢まで捕まえられ

られるとは、俺たちについてますねボス!!」

ボスと呼ばれた男が答える。

「ああ、これで俺たちは遊んで暮せるぐらいの金が手に入る」

「マジッっすかボス!?!」

「ああ、何でも報酬は\*\*\*\*\*円出すらしい」

「すっげえええ!!マジすげえっすよボス!!」

「それより、この2人の身体チェックしてもいいっすか?うへへへへ」

カスAが下卑た笑みを浮かべながらそんなことを言った。すると、

「「「「「おおおおおおお！！！」「「「「「

当然男しかいないこのグループは大盛り上がりである。

「ハア…好きにしろ…」

リーダー格の男は乗り気ではないようだが、ここで止めると暴徒と化す可能性がある

ため、好きにさせることにしたようだ。

「「んー！んんー！！！」「

口も封じられ、身動きの取れない2人には為すすべも無い。

「悪く思つなよ…」  
「ヒヒヒヒヒ」

「もう駄目だ」と2人が思った瞬間、

ドガッ！！！！！

「ギャヒッ!!??」

突然横の壁が吹き飛び、それに巻き込まれてカスAが向かい側の壁に激突した。

「「「な…何が起こったんだギャー??」」」

ザコたちが騒然となる中、1人の青年が入ってくる。

「何だデメエは?」

「そいつらの知り合いだ」

「ほう…それはご苦労なことだ。」

「こいつらはお前にとってそんなに大切な知り合いなのか?」

「いや?知り合って1時間も経ってないが?」

「ならなんで助けようとする。理解できんな」

「別に理解してもらわなくて良いぞ。

ただ、こいつらには…こいつらが傷ついて悲しむ人がいる。

それだけで戦う理由には十分だ!!！」

「戯言を…お前ら全員やっちまえ!!！」

「「「「「おおおおー!!!!」「「「「

こうして、100人対1人のはたから見ればありえない戦いが始まった。

続く……………

第4話 束の間の平穩？ ( A Short-lived peace? ) (後書

修正しました。フラグはおそらく次回になるかと思われます。

ところで、土郎の親バカ具合はこんな感じで良いでしょうか？

早く他の原作キャラとも絡ませたいです。

感想もお待ちしています。それではまた次回。



## 第5話 護るために (To protect them) (前書き)

前話の修正に手間取ってしまいました。

当初とは完全に別の話になっています。

アイディアを下さった Reina さんありがとうございました。  
では、今回の話もお楽しみください。

100人のチンピラに1人で喧嘩を売った一護。

普通なら勝てない戦い。しかし、彼は普通じゃなかった。

## 第5話 護るために (To protect them)

ザコ(その他) 「「「「ブーツ殺せえええ!!!」」」」

チンピラたちが鉄パイプや木刀、中にはナイフや真剣を持って襲い掛かってくる。

それを避けては1人、また避けては1人ともせず叩きのめして行く一護。

真剣などの武器も当たらなければ意味は無く、また扱うほうも素人同然のために、

振りかぶっては振り下ろされる前に受け止められ、一護のカウンターの餌食に

なっていた。

これに痺れを切らした1人が銃を持ち出した。

それに周りも気づくと一斉に銃を構えだす。

一護はそれに気づくと、ポケットの中から一枚の板を取り出した。

一護「そっちがその気なら…こっちも本気でやってやる!!!」

それを聞いたチンピラたちは、

ザコ(その他) 「「「調子付いてんじゃねえぞ!!!」」」」

そういうのが早いか銃を乱射しだした。

アリサ「（一護ー!!）」

すずか「（うそ…）」

一斉に発射し尚且つ連射したため、辺りは煙だらけになっている。

そして、煙が晴れてくるとそこには…何の姿も無かった。

ザコA「ど…何処行きやがった!!??」

そして、一護の姿はすぐに見つかった。そうそこは、始めに一護がいた位置から

一番遠い、カスAが激突した壁の横であった。

ボス?「（莫迦な…有り得ん…あの一瞬で避けてあそこまでへ移動するなど…）」

「（奴は…人間なのか…?）」

一護「言ったらろ…本気でやるって…」

その底冷えするような声にチンピラたちは震え上がる。

一護「見せてやるよ…俺の…フルブリンゲ完現術!!」

そう言つと、再び一護の姿が掻き消える。

そして、

> i28069 | 3506 <

ロングコートの上に鎧を纏い剣を持った1人の戦士が現れた。

ボス? 「な…何だよ…そりゃ…」

一護「態々説明してやるほど…俺は優しくねーぞー!」

チンピラたち「「「!?!?!」「「「

再び一護の姿が消え、チンピラたちの背後に現れる。すると、

キーン!!

と言う甲高い音と共に全ての銃が切り落とされてしまった。

一護「おい…」

ザコたち「「「「ヒイツ!?!?」「「「

一護「ケガしたくない奴はとっとと出て行け…次は体に当てるぞ…」

ギロツ!!

ザコたち「「「「ウワアアアア!?!?!化けもんだああ!?!?!」「「

ザコたちは半狂乱になりながら、脱兎のごとく逃げ出した。

そこに残ったのはボス？1人のみだった。

一護「あんたは逃げねえのか？」

ボス？「お前は俺を逃がすつもりはねえんだろ？」

一護「あんたが首謀者みたいだからな。それに、逃げたとしても意味がないことも

分かってるみたいだしな」

ボス？「俺が逃げてもお前なら余裕で追いついて捕まえられるだろうからな」

一護「じゃあ、教えてもらおうか？なんでこいつらを誘拐したのかを。」

ボス？「本当に知り合って間もないんだな…へっ…こいつは良い」

一護「どついう意味だ？」

一護はすすかたちの拘束を解きながらも警戒は解いていない。

ボス？「教えてやるよ…月村家の人間の…いや、人の形をした化け物の秘密

をな！！」

すずか「やめてっ!!」

すずかが大声を上げる。しかし、男は気にも留めずに続ける。

ボス? 「そいつらの一族はな…人の血を吸って生きている吸血鬼なんだよ!!」

一護「なっ…」

アリサ「ど…どういうことよ!!」

ボス? 「なんだ? お前…友達みたいだったのに知らなかったのか。くくく…」

そりや傑作だ!! どうだ? 今まで友達とってた奴に騙されてきた

気分は?

アリサ「すずか? 嘘よね…あいつの嘘なんですよ? お願い!! 嘘つて言って!!」

すずか「……ホントだよ……」

アリサ「!!? そんな……」

一護「……」

すずか「私って昔から運動神経が良かったでしょ? 不思議に思わなかった? 自分より

華奢そうな私が体育とかで活躍しているのを」

心なしかすずかの声は震えている。しかし、すずかは続ける。

すずか「私の体は定期的に人の血液を摂取しないと生きられない。それに、寿命も

人の何倍もあつて、死ぬような傷以外は勝手に治る……化け物なの……」

アリサ「そんなこゝそんなことねえ!!!!」一護?

アリサの言葉を遮ったのは、それまで黙って話を聞いていた一護だった。

すずか「どうして……?」

一護「あん?」

すずか「どうしてそんなことが軽々しく言えるの……」

一護「別に軽々しく言った覚えはねえよ。ただ、俺に言えるのはお前には心が

あるってことぐらいだ。でもそれだけで化け物じゃないと俺は証明できる。」

そう、一護は知っている。心を失くすことで化け物に、悪霊に変化する存在を。

虚という名の存在を。

一護「心があるってんならそれは人間だ。それに……」

ギョッ

すずか「!!!!!!??」

突然手を握られ硬直するすずか。しかし、一護は優しく声を掛ける。

一護「こんなに手が震えてんじゃねえか……怖かったんだろ?もう大丈夫だ……俺が……」

俺がお前たちのことを護るからな……」

まるで、元の世界で妹たちにしていたように声を掛ける。その声には何故か包み

込むような優しさがあった。

すずか「怖く……ないの……?」

一護「怖くなんかねえよ。第一お前みたいな女の子に恐怖心なんか抱かないって」

すずか「女の子の子女の子女の子女の子女の子女の子……」

一護「すいません(汗)やっぱり怖いです。」



すずか「嘘つきー!!」

一護「真顔で同じ単語連呼してたら怖いに決まってんだろー!!」

アリス「あの…2人とも…私たちのこと忘れてない？」

一護・すずか「そんなこと…ないぞ(よ)？」

アリス「何で疑問系なのー!!」

一護・すずか「「???」」

アリス「何で私がおかしいみたいなのになってんのー!？」

すずか「冗談だよ、アリスちゃん。…でもいいのアリスちゃんは私が友達で…」

アリス「いいに決まってるでしょ!それに人には言いたくない秘密の1つや2つ

必ずあるもんだからね。」

すずか「アリスちゃん…」

ドオン!!

3人「「「!!!??」」」

突然銃声が響き渡る。一護が振り返ってみると、天井に向けて銃を構えたボス(仮)

が立っていた。

一護「銃は全部壊したつもりだったんだが…」

ボス? 「なに…最初から懐に入れてただけだ。お前は全ての銃を壊してるよ。」

一護「それで…効かないと分かっている銃で何をしようってんだ?」

ボス? 「大した事じゃないさ…たださっきの会話でイラツとしただけさ。」

「それに依頼に失敗した以上、もうこいつらに拘る意味もねえ。」

「だから殺してやるのさ…お前ら2人は死なないだろうが…  
バニングスの女は

違う…フヒヒヒヒ」

一護「チイツ!!」

ボス? 「シネエ!!!」

ドゥーン!!

男の銃から凶弾が放たれた。しかし、その弾がアリサを貫くことは無かった。

キーン！！

一護が射線上に割って入り、銃弾を弾き飛ばしたのだ。

ボス？「くツ…」

ガチャガチャ…

懐に入るサイズだったため一発ずつ装填しないとイケないようだ。

そして、それが致命的な隙になる。

ボス？「ぐわあ！！！！？？」

結局、あっという間に一護に押さえつけられてしまった。

一護「…お前はここで眠ってる！！！！」

ゴキーン！！

間接を極めて失神させたようだ。

一護「さて、あとは土郎さんに任せてここを立ち去るか」

一護は完現術を解除しながらそう言った。

一護「そういえば…俺の完現術の形が変わっていたような…」

ここにきてようやく気づいた一護であった。

アリサ「気になってたんだけど…あんたのその力…ひよっとして魔法？」

すずか「アリサちゃん!？」

一護「いや、これは魔法じゃねえよ。詳しいことは落ち着ける場所に行ってから」

教えてやるよ。」

すずか「じゃあ、早く行こう?」

そっいつておもむろに一護の腕に自分の腕を絡めるすずか。

一護・アリサ「!!!!!!!!?????」

このことには一護だけでなく、アリサも驚いたようだ。ただ、一護は

一護「歩き辛いぞ?」

と的外れなことを考えていたが…

ちなみに、脱兎のごとく逃げ出したチンピラたちは土郎と鉢合わせになり、1人残らず

ボコボコにされたのは言うまでも無い。

続く

第5話 護るために (To protect them) (後書き)

いかがでしたでしょうか。

これが私の限界です。

先ほど今週のBLEACHを読んできたのですが……あれ？

となってしまう。原作でもしものことが起こった場合は、

この作品はIFの話だと割り切ってください。

## 第6話 完現術（FULLBRING）（前書き）

再び投稿した作者の黒棺です。

今回は軽い説明回のようなものです。

ただでさえつまらない私の作品がさらにつまらなくなってないか心配です。

ちなみに、すずかにはフラグは立ったことにしています。

分かりにくかったら申し訳ありません。

完現術を使い、チンピラを撃退した一護。

その力を2人に目撃され、説明することになったのだが……

## 第6話 完現術（FULLBRING）

廃工場を後にした3人は、後のことを士郎に任せることにし、説明をするためにすずか

の家に向かっていく最中である。

しかし、3人の位置関係がかなり妙なものである。一護と腕を組み、心なしかうれしそう

に歩くすずかと、それを驚愕と僅かな羨望の眼差しで見つめながら歩くアリサ。

そして、それをやれやれといった表情で見ている一護といった感じである。

それにしても一護の脳みそは一体どうなっているのだろうか…

そうこの男、この状況でも何が起きているのか認知できていないのである。

そして、すずかの家に着くと…

一護「デカツ！…！！！」

その家の大きさにかなり驚いた様子。

すずか「アリサちゃんの家もこんな感じだよね？」



アリサ「そうね」

一護「……………」

このように軽い感じで話す2人に一護は声もでないようである。

すずか「それじゃ行こうか」

そう言っすずかかとアリサは呆然としている一護を強引に引き摺って入って行った。

一護再起動中……

一護「ハッ!？」

ようやく現実に戻ってきたようだ。

アリサ「やっと元に戻ったわね…」

若干呆れ気味のアリサである。

一方のすずかは、

すずか「あらあら」

なぜか嬉しそうであった。

アリサ「それじゃ、説明してもらおうよ。あの力は何なのか、あんなは一体何者

なのか、何で魔法のことも知っているのかについてね。」

すずか「アリサちゃん…一気に聞きすぎだよ（汗）」

一護「はは（汗）時間はあるんだ。全部きちんと話してやるさ。」

そして一護は自分の力について説明を始める。

一護「俺があの時使った力は完現術フルブリングと呼ばれているものだ。」

2人「フル…ブリング…?」「」

一護「そうだ。この力の最大の特徴は物質の魂を引き出して使役することだ。」

アリサ「た…魂…?」

すずか「え…?」

一護「ん…?」

少し怖がらせてしまったことに気づいた一護。そこで、

一護「あー…やっぱり俺の身の上から話した方が良かったか。」

「すずか」「どついつ事？」

一護「まあ、簡単に言えば俺はこの世界の人間じゃないんだ。」

アリサ「じゃあ、やっぱり魔法のある世界から来たの？」

一護「いや、俺が来たのはこと同じ地球って世界からだ。」

2人「「えっ…？」」

一護「士郎さんが言うには、平行世界って奴から俺は来たらしい。」

すずか「平行世界…つまり、IFの世界から来たの？」

アリサ「IF？」

一護「つまり、魔法じゃなく俺たち独自の技術が発展した世界ってことだ。」

「そして、その世界で俺は元々死神っていう仕事？をしていたんだ。」

2人「「し…死神！？」」

再び怖がらせてしまったようである。

一護「こつちでの死神の概念がそのままなら、俺たちの世界とは大分違うぞ。」

アリサ「死神だから魂を狩るんじゃないの？」

一護「随分と偏ったイメージだな（汗）俺の世界での死神は霊魂、つまり幽霊たちの

管理者みたいなもんだ。」

すずか「どうやって管理しているの？」

一護「あの世と現世を繋いで魂をあの世に送るんだ。俺の仲間は死神のことを現世と

あの世の均衡を保つ調整者балансиとも言ってたな。」

アリサ「均衡？崩れたらどうなるの？」

一護「俺にも詳しいことは分からないんだが…たしか、現世とあの世が入り混じった

文字通りの混沌とした世界になるって言ってたな。」

すずか「混沌…途方も無い話だね…」

一護「話を戻すぞ？死神の仕事としては大別するともう1つあってな。いわゆる悪霊

の退治も死神の仕事なんだ。」

2人「「！！！！」」

一護「そいつらは虚ホロウと呼ばれていて、特徴は胸に空いた巨大な穴と

顔を全

て覆い尽くす仮面があることだな。」

「ここで重要になるのは死神じゃなくて虚の方だな。この完現術は、死神の力より

も虚の力に近いからな。」

2人「……………」

2人は声を出せなくなっていた。

一護「俺は1年半ぐらい前の戦いで死神の力を失くしてな、その力を取り戻すために

この力を手に入れたんだが……」

そこまで言うと一護は自分がここに来た顛末を思い出したのか辛そうな顔をする。

「すずか」「どうしたの？何か言いづらいことがあるなら無理に言わなくても……」

アリサ「そうよ！無理させてまで私たちは聞こうと思わないわ。」

一護に優しく接する2人。一護は単純にうれしかった。だからこそ、

一護「いや……最後まで聞いてくれ……」

そうして一護は自分の身に何が起きたのか、ゆっくりとだが話し始めた。

たった1人の男によって絶望させられ、家族を仲間を全てを奪われ、失意の内にこの

世界に来たことを。

一護「これが俺の…今話せる全てだ…」

そう言っつて顔を上げると、

2人「うう…ヒック…グスっ…」

号泣している2人の姿があった。

一護「え…ちょ…そんなに泣くなよ（オロオロ）」

慣れない状況にあたふたする一護。だが、何かを決意したかのよう  
に「よし」と

呟くと……

ナデナデ

2人「えっ……？」

おもむろに2人の頭をなで始めこう言った。

一護「ありがとな、俺のために泣いてくれて。俺はもう大丈夫だよ。

「

「すずか」でも…」

「一護」土郎さんに言われたんだ…前に進み続けるって…そうすればきつとまた

「護りたいものが見つかるって。」

「こんなことを聞くのは変かも知れないが…俺にお前たちを護らせてくれ

「ないか？」

「2人は見つめあうと同時に、

「2人」もちろん!!」

と答えた。再び一護に護りたいものが出来た瞬間だった。

その後、

「アリサ」でも私たちも黙って護られるだけじゃないからね。」

「すずか」そうだね!!」

「一護」おいおい、無理しなくていいんだぞ？」

アリサ「何も護らないといけないのは身体面だけじゃないでしょ？」

すずか「一護くんの心は私たちが護るよ。」

一護「…ああ！ありがとなー!!」

その日の夜…

2人の少女が部屋で密談をしている。

それは、昼間に一護が助けたアリサとすずかであった。

アリサ「まさかすずかが惚れるとはね〜。意外だったわ。」

すずか「あれ？アリサちゃんもじゃないの？」

アリサ「ブハッ!？」

すずか「あ、やっぱりそうなんだ。」

何故か嬉しそうなすずかである。

アリサ「ななななな!!？」



すずか「嘘は良くないよ？アリサちゃん。」

アリサ「うっっ」

すずか「あ、そうだ」

何か思いついたようである。嫌な予感しかしな「うん？（黒）」何でも無いです。

すずか「あ、なのはちゃん？」

どうやらなのはに電話をかけていたようだ。というか何で繋がるのだろうか？

アリサ「ちょ、ちょっと！すずか！？」

あまりの事態についていけないアリサである。

なのは「どうしたのすずかちゃん？珍しいっていつか初めてじゃない？」

すずか「うん。どうしても聞いておきたいことがあってね。」

なのは「なにになに？」

すずか「ミッドチルダは一夫多妻制？」

アリサ・なのは「「は？」」

電話とこちらの声がシンクロした。

ここに、後に大事件を起こす月村すずかの壮大な計画が始まった。

続く…のか？

第6話 完現術（FULLBRING）（後書き）

どうでしたでしょうか？

強引かも知れませんが、こうでもしないと…

あ、ちなみにすずかと契約は結ばせたことにしました。

ただし、友達としてですが（笑）

不機嫌になったすずかが思い浮かびます。

アリサについては…すいません。これくらいしか出来ないんです。

まあ、デートの話でも書いて救済するつもりですが。

次回もよろしく願います。

あ、そういえば気づいたらPVが1万を越えていました。

ありがとうございます。

## 第7話 修行と模擬戦 (Training and mock battle)

テスト期間中にも関わらず再び更新です。

この回は、御神の剣士2人との修行と模擬戦をお送りします。

あと、この回は比較的短くなると思います。

再び護るべきものを見つけた一護。

今度こそ失わないために一護は自らを鍛え始める。

第7話 修行と模擬戦 (Training and mock battle)

一護「ふう……」

少し疲れた様子で高町家への道を歩いているのはさすがの家からよ  
うやく帰してもらっ

た、一護であった。

一護「なんか今日だけでたくさんのがあって疲れちまったな……」

それもそのはず。今日はまず翠屋での仕事で体力を消費し、完現術  
の連続使用や自分に

ついでの説明などでかなりの疲労が溜まっていた。

一護「でも…悪いことばかりじゃなかったからまあ良いか！」

そう、一護はこの世界でも護るべきものを見つけたのだ。

一護「また鍛え直さねえとな……」

そう言っつて一護は夜の道を進んで行った。

このときさすがが、とんでもない計画を推し進めているとも知らずに……

この日の出来事から2週間ほど経ったある日、一護は士郎から声を掛けられた。

士郎「一護くん。明日は翠屋が休みだから君の修行に付き合っ  
てあげられるよ。」

一護「本当ですか！？ありがとうございます！！」

今日に至るまで一護は基本的に体力作りなどの基礎的なトレーニングしかしていなかつ

たため、この申し出は願ってもいないものだった。

士郎「それじゃあ、明日の朝8時くらいにあの森へ出発しよう。」

一護「分かりました。」

士郎「ああ、それと。」

一護「???何かあるんですか?」

士郎「いや、大した事じゃないんだが、明日は美由希も連れて行くからね。」

一護「美由希さんも…?」

一護は美由希に対する第1印象は不器用な人のため、なかなか剣士という姿が思い浮か

ばないようだ。美「酷くない!?!」

何か電波が届いたようだ…

士郎「ふふ…きっと驚くと思うよ…」

一護「はあ…?」

こうして、一護の明日の予定は決まったのである。

翌日…

一護と美由希は士郎の運転する車に乗り込むと、修行場へと向かって行った。

修行場…

士郎「不思議なものだね…あれからもう2週間だなんて…」

一護「そうですね…」

美由希「??？」

一護「俺は…ここから始まったんですね…」

士郎「…今でもあの覚悟は揺らいで無いかい？」

一護「当然です。それに護りたいものもまた出来ました。俺はもう立ち止まりません」

「よ。」

士郎「それならいいんだ。さて、それじゃ準備運動から始めようか。」

美由希「ちよつとちよつと!!何の話なの!?!私にも分かるように説明してよ!!」

一護「ごめんな美由希さん。男同士の話なんですよ。」

士郎「そつだぞ。聞くだけ野暮つてもんだ。」

美由希「うつゝ…納得いかない…」



一護・士郎「ははははは！！」

準備運動中…

士郎「じゃあ、改めて君の力を見せてくれないか？美由希は初めてだからね。」

一護「分かりました。」

美由希「ワクワク…」

一護「ふっ…！！！」

そして、一護はこの世界で3回目の完現術を発動した。

美由希「すごっ！？ホントに戦士みたいだね。それにやっぱり魔法に似てるね。」

一護「そんなに似てるんですか？」

士郎「そうだね…特に似ているのは展開の仕方だね。」

一護「展開の仕方…？」

士郎「この世界の魔法使いもとい魔道士は、君の代行証くらいの大  
きさの物からバリ

アジャケツトという防護服を展開するからね。」

一護「成る程…確かに似てますね。」

士郎「完現術というのは全部が君のように服装が変わるのかい？」

一護「いえ…そういうわけではないんです。俺のが装衣型クラッドタイプの完現術  
だったから

服装が変わったんです。他の完現術は武器になったり、盾に  
なったりいろいろ

ありますよ。」

士郎「そうなのか…」

一護「それに完現術は地面や空気にも使えて…よつと！」

士郎・美由希「！！！！？？」

2人が見たのは、空気中に立っている一護の姿だった。

士郎「これは…一体…？」

一護「これは空気の魂を引き出して足場に変えてるんですよ。」

美由希「こんな事まで出来るんだ…」

一護「よっ…（スタッ！）後は、加速の手助けも出来たり、その気になればピルの

3〜4階ぐらいまでなら跳べますね。」

士郎「いろいろ規格外だな…（汗）」

一護「その規格外の奴に勝ったのは誰ですかまったく…」

士郎「それは君が冷静さを失っていたからだろう？空まで飛ばれたら僕もさすがに

無理だったよ？」

一護「あ…（汗）」

どうやら本当に気づいて無かった様である。

美由希「ねえねえ、一護はもうお父さんと戦ったんだよね？今度は私と模擬戦しよ

つよ！…」

一護「え…いいんですけど…」

美由希「あ、飛ぶのはナシね。」

一護「りょーかいです。」

士郎「やれやれ…それじゃ僕が合図するよ。両者構えて…：…始めっ  
！！」

こうしてなし崩し的に2度目の御神の剣士との勝負が始まった。

一護・美由希「ハアツ！！」

ギーン！！

一護「（早ええ！！）」

さっきまでとは違って変わってキレのある動きで斬撃を放ってくる  
美由希。

だが一護もその斬撃を的確に捌いていく。

美由希「（クツ…攻めきれない…！！）」

何度攻撃しても捌かれる美由希に焦りが生まれ始める。

これは単純に実戦経験の差だった。美由希に経験が無いわけではな  
いのだが、一護が

これまでに経験してきた戦闘は、期間こそ短いものの、密度で言え  
ば恭也よりも上で

士郎にも迫るものがある。そして、ついに美由希が痺れを切らし、  
大技を使おうとし

た。しかし、その一瞬の隙を突き、一護が背後に回りこみ美由希の

小太刀を弾き飛ば

し、その首に剣を突きつけ模擬戦は終了した。

美由希「いや〜一護くん強いんだね〜。」

一護「そんなこと無いっすよ。」

美由希「謙虚なのは良い事だけど、あまり度が過ぎると嫌味にしか聞こえないぞ?」

士郎「そうだぞ一護くん。君には力があってそれをきちんと使いこなしているんだ。」

だから、謙遜なんてする必要は無い。君は強いんだ。」

一護「はい…ありがとうございます!」

士郎「（一護くんは強くなる…もしかしたら1年後くらいには僕も越えられてしまう）」

かも知れないな…）」

どうやら優秀な弟子が出来て嬉しい様子の士郎であった。

一方その頃、夜のミッドチルダ…

なのは「ねえ、フェイトちゃん…」

そういつて、7年来の親友である金髪の少女フェイトに声を掛ける  
高町家の末娘

なのは。

フェイト「なあに？なのは…」

フェイトは少し眠いようである。

なのは「ミッドチルダって…一夫多妻制だっけ？」

フェイト「……………」

時間が止まった…



第7話 修行と模擬戦 (Training and mock battle)

いかがでしたでしょうか。

早くもすずかの計画が悪影響を出し始めています。

気になったんですが、一護の戦闘経験って密度で言えば恭也くらいかそれ以上はありますよね？

実際に何度も死に掛けたりして強くなっていますからね。

次回の更新は一体いつになるのだろうか…

答えはテストのみが知っている…

感想や誤字がありましたら気軽に書き込んでください。

では、また次回にお会いしましょう。



第8話 長男の一時帰還 With 婚約者 (The return with f

最近、BLEACHを再び読み返している作者の黒棺です。

改めて読み返すと使いたい描写の出ていること。

早く死神の力を取り戻させてあげたいものです。

今回は以前言ったとおりシスコン長男が出てきます。まあ、今はなのはがないのでシスコンは発動しません(笑)

今日も今日とて修行に励む一護。

そんな一護の前に1人の男が現れて…

第8話 長男の一時帰還 with 婚約者 (The return with f

海鳴市の入り口に2人の男女が立っている。

??? 「海鳴に来るのも久しぶりだな…」

??? 「そうね…」

??? 「数年帰ってないだけで随分長く感じるな」

??? 「ああ…早く家に帰って寛ぎたいわ」

??? 「そのことについてなんだが…お前は先に帰っていてくれな  
いか？」

??? 「あら？何か用事？」

??? 「そうじゃないんだが…ちょっとよって行きたいところがあるんだ」

??? 「ああ、修行場ね。分かったわ。でもあまり長くならないで  
ね？恭也」

恭也 「分かってるさ。忍」

そう言うと高町家の長男は1人海鳴市からは少し外れた場所へと歩  
を進めて行った。

一方その頃……森の修行場にて

一護「ふう…今日はここまでにするか…」

そう言つて完現術を解除したのは先日からここで修行をするようになった黒崎一護で

あつた。

普段なら、士郎や美由希も一緒に来て模擬戦などをやるのだが、一護は2人の都合の悪

い日も1人で来て修行をするようになっていた。

現在は12月、一護がこの世界に来てから既に8ヶ月の月日が経っていた。

最近では、士郎相手でもたまたまに勝てるようになってきている。美由希などは一蹴されて

落ち込む事がほとんどである。まだ本人は納得していないようであるが…

また、そのことについても士郎はまだ伸びしろがあると言っている

ので、おそらくその

事につつすらとだが気づいているのだろう。

一護「もうすぐ年越しか…あいつらはどうしてんだろっな…」

一護が思い浮かべるのは元いた世界の仲間と家族たち。年の変わり目、12月に友人た

ちと一緒に過ごした記憶、家族とクリスマスを祝った記憶これらは今も一護の中にある

のである。

一護「前向きになるって言ってもこればかりはな…」

そういつてしばらく佇んでいると…

???「おい、そこで何をしている?」

一護「!?!?誰だ!?!」

???「それはこちらの台詞だ!返答しただけではただでは済まさんぞ…」

そういつて木陰から姿を現したのは、一護も写真で見たことのある高町家の長男恭也で

あった。

一護「高町…恭也…？」

そして、これがいけなかった。

恭也「貴様…俺を知っているのか…何が目的だ…！」

どうやら盛大に勘違いをされたようである。

一護「は…？目的？」

当の一護はちんぷんかんぷんである。

恭也「まさか貴様…忍が目的か…！」

こっちはこっちで勝手にヒートアップしている。

一護「いや…だから何の話…！」

恭也「問答無用…！」

ヒュン…！！

一護「うわっ…！」

間一髪で恭也の斬撃を避ける一護。

恭也「む…貴様なかなかやるようだな…！」

一護「おい…！話を聞いてくれ…！」

一護は必死に恭也に訴えかける。しかし、

恭也「問答無用だと言ったはずだ!!」

頭に血が昇っているのかまるで聞こえずとしない。

一護もあまり気が長い方では無いので、さすがにイライラしてきたようだ。

一護「……って……ってんだろ……」

恭也「何？」

一護「話を聞けって言うてんだろ!!!!!!」

そう叫ぶと同時に恭也の脇腹に一護の渾身の回し蹴りが炸裂した。

ズドン!!

恭也「グワツ!!!!??」

そして、恭也の体は20メートル程吹き飛んだところで止まった。

恭也「きゅ……」

突然の出来事に恭也は目を回して気絶してしまったようだ。

一護「あ……やりすぎた(汗)」

そこでやっと自分がやり過ぎたことに気づく一護であった。

するとそこへ、

士郎「一護くん！さっきすごい音が聞こえてきたんだが…って遅かったか…」

恭也が修行場へ行つたと聞き、一護のことを説明するために来た士郎と、

忍「士郎さん速過ぎ…って恭也!？」

興味本位で付いて来た忍が現れた。

恭也「きゅ〜…」

士郎「随分派手にやったね(汗)」

一護「あははははは…はあ…」

一護は乾いた笑いしか出てこなかった。

数十分後：

一護「すいませんでした!！」

目を覚ました恭也に深々と頭を下げる一護の姿があった。

恭也「いや、こちらこそすまない。そもそもこの修行場にいる時点で家の関係者だと気

づくべきだったんだ。」

そう言い、恭也も頭を下げた。

恭也「それにしてもすごい蹴りだったな。一発で意識が飛ぶなんて父さんでも無理じゃ

ないのか？」

一護「…すみません…」

士郎「当然だ、恭也。最近の僕は一護くんに勝たせて貰ってないからね」

恭也「な…それは本当なのか？」

士郎「事実さ」

一護「ええ…まあ…」

恭也は純粹に驚いていた。自分の師でもある父が勝たせて貰えない相手がいるということ

とに。

恭也「彼には御神流を教えたのかい？」



士郎「いや、どうも彼の戦い方に御神流は合わないようですね、だから実戦形式で純粹な

戦い方を教えただけさ。」

恭也「合わない…?」

士郎「一番得意な得物は何か彼に聞いたんだが、身の丈ほどもある大刀が、野太刀ぐら

いの刀身の日本刀だそうだ。」

恭也「…確かにそれなら教える意味は無いな…」

忍「あのくさつきから私のことスルーですか?」

と、さつきから一言も喋れていない忍が不機嫌そうに会話に割り込んできた。

恭也「…なんだ…いたのか忍…」

忍「ぶーぶー（怒）恭也が冷たい…あ、私は月村忍。この恭也の婚約者よ。」

一護「はあ…どうも…って月村?もしかして、すずかのお姉さんか何かですか?」

忍「あら…?すずかは確かに私の妹よ。あの子に男の子の知り合いなんて珍しいわね…」

はっ！！これはもしかして…」

忍は何かに気づいたようである。

忍「ねえ一護くん。もしかして、すずかと何か契約みたいなのを結ばなかった？」

恭也「なっ…忍!？」

一護「契約…確か…一生…」

忍「そうそう!！」

目がキラキラ光っている忍。

一護「一生…友達でいるって奴ですか？」

ズルツ!!

その場にいる全員（一護を除く）が仲良くずっこけた。

一護「?????」

忍「すずか…頑張りなさいよ…」

そう言って忍は、タダでは振り向きそうにも無いこの男に惚れているであろう妹へ密か

にエールを送ったという…その妹が水面下でとんでもない計画を推

し進めているとも知

らずに…

そのころ、ミッドチルダでは…

???「フェイトちゃん！最近どうしたん？ため息ついたり、上の空だったり…」

フェイト「ねえはやて…」

そう言つてフェイトと何事かについて話し合っているのは、エース・オブ・エースのも

う1人の親友で、夜天の書の主である八神はやてである。

はやて「なにになに？フェイトちゃん」

フェイト「なのはがね…なのはがね…」

はやて「うんうん」

フェイト「ミッドチルダは一夫多妻制？って聞いてきたの!!」

はやて「……………」

再び時間が止まった…

はやて「な、なんやてええええええええええ!!!!」

キィー……ン!!!!!!

その威力は音爆弾さながらであった。

はやて「こらあかん!!今すぐ問いただしに行かな!!」

フェイト「ま、待ってよはやて」(泣)

至近距離にいたフェイトはまだ耳が痛いようである。

少女2人移動中…

はやて「なのはちゃん!!!!!!」

なのは「ふえええ!?!はやてちゃん?!?こんな時間にどうしたの!?!」

そう、時間はもう既に夜中の11時を越えているのである。

はやて「そないなことはどうでもええねん!!それより、一夫多妻制ってどういうこと

やねん!!!!!!」

なのは「ふえ……?ち、違つよ!!誤解だよ!!」

はやて「違つてどういうことやねん!!答えてなのはちゃん……相手はユーノ君なんか

い?」

なのは「?????ユーノ君はお友達だよ?」

今この瞬間、なにも行動を起こしていないはずのとある司書長の初恋が突然終焉を告げ

た。

とある司書長「クシユン!!ん…??」

はやて「あゝ…ユーノ君ご愁傷さま…」

なのは「?????」

はやて「じゃあなんでフェイトちゃんにそないなこと聞いたん？」

フェイト「そうだよなのは!」

なのは「それは…フェイトちゃんって執務官だから、此処の法律にも詳しいかなって」

フェイト「いや…確かに一夫多妻制だけどね…」

はやて「そうなん!？」

フェイト「うん。ほら、管理局って万年人員不足じゃない?それへの対策みたいな感じ」

でOKされたみたい」

なのは「そうなんだ!じゃあ、早くすずかちゃんに知らせないと…」

フェ・はや「すずか(ちゃん)!!?」

なのは「うん、結構前だったんだけどすずかちゃんからいきなり電話が掛かってきて、

『ミッドチルダって一夫多妻制？』って聞いてきたの」

はやて「まさかすずかちゃんだったとは…」

フェイト「い、意外だね…（汗）」

なのは「でも相手は誰なんだろうね？」

はやて「せやね。それにもう1人は確実にアリサちゃんやろ？」

なの・フェ「ああ〜」「」

こうしてミッドの夜は更けていく…自分たちがこの騒動にそう遠くない未来に巻き込ま

れる事も知らず…

続く!!

この話を執筆中にお気に入りが50件を越えててびっくりした黒棺です。

いやゝありがたいことです。

いきなり8ヶ月も経過させました。もっとゆっくり出来たらよかったです。

いかんせんなのはたちとの絡みを早く書きたいもので…

もしかしたらあと数回このようなことが起こるかも…

感想や意見も随時募集中です。

では、また次回でお会いしましょう。



第9話 Happy birthday Ichigo !!! (前書き)

今回は短いです。

タイトルで分かるように、誕生日の話です。

原作まで次元跳躍しまくりになるかも(汗)

冬も春も梅雨も終わり7月中旬。

この時期には一護にとっての大切な日が…

第9話 Happy birthday Ichigo !!

年が明けて1週間もすると、恭也と忍は再びドイツへと帰っていった。

どうやら既に仕事が入ったらしい。そんな中でもイチャイチャするのを忘れない辺り、

さすが士郎と桃子の息子であると言えよう。

それから半年が過ぎた7月

137

果たして一護は……

やはり相変わらず翠屋でのバイトと修行に明け暮れる毎日を送っていた。

一護「…それにしても今日は暑いな…」

7月も半ばに差し掛かり、夏本番という天気が続いている。

そして、この男に内密で高町家・バニングス家・月村家の3家総出である計画が進行していた。

ところ変わって月村家…

ここで、今回の計画の発案者である月村すずかと出資者であるアリサ・バニングスの両

名が密談をしていた。

すずか「このことは一護くんには…?」

アリサ「いいえ、ばれてないわ」

どうでもいい事だが、この場所でヒソヒソ声で話す意味はあるのだろうか?

すずか「じゃあ、当日は土郎さんたちと一緒に…」

アリサ「ええ。分かってるわ」

そういうと、まだ何か準備があるのか2人は別行動を取ることにしたようだ。

その部屋のカレンダーの7月15日のところは赤ペンで何重にも丸が書いてあるのではあ

った。

その翌日…

翠屋への道を1人で歩いているのは、昨日は何故か土郎さんたちに早めに家に帰るよう

にとわれ、半ば強引に翠屋から追い出された一護であった。

しかも、家でいつまで待っていても土郎たちは戻ってこず、結局1人で昨日の晩を過ご

したのであった。

一護「それにしても…一体何だったんだ…？」

そついいながら翠屋の扉を開けると……

パン！パン！！！！

突然クラッカーの音が鳴り響き

みんな「」「」「」誕生日おめでとーう！！！！」「」「」「」

みんなに一斉に祝福されたのだった。

一護「え…なんで…？」

一護はいまだに状況が飲み込めていない様子。

アリサ「あんだねえ…自分の誕生日くらい覚えときなさいよ…」

アリサは若干呆れ気味である。

すずか「まあまあ、アリサちゃん仕方が無いよ。一護くん毎日忙しそうだし」

そう言っつてすぐにフォローするすずか。

士郎「これはいつも頑張ってくれている君に、本当にささやかだけれど感謝の印だよ」

桃子「本当にいつもありがとうね」

そういつて、奥から蝋燭が19本刺さったケーキを持ってくる桃子と士郎。

美由希「ホント私もシフトに空きが出来て助かってるんだよ。後は模擬戦で一回で良い」

から勝たせ「美由希…?」「…何でもありません(泣)」

美由希は最後まで言わせて貰えなかったが…

一護「俺に感謝なんて…本当に感謝しているのはこっち」「一護くん…士郎さん」

一護の言葉は士郎に遮られた。

士郎「君がここに来る前に言っただろ?ギブ&テイクだって。それに僕たちだけじゃな」

いよ?」

一護「え…?」

アリサ「そうよ!何回私たちが助けられたと思ってるのよ!」

すずか「私とアリサちゃんが不良の人たちに絡まれてるときに何回も助けてくれたじゃ

ない」

アリサ「その所為であんたには「橙色の番犬」ってあだ名が付いちやっただけだね…」

すずか「あははは…（汗）」

一護「お前ら…」

一護は今この幸せをかみ締めるように目をとじ、そして、

一護「みんな…本当に…本当にありがとう…!!」

そう言っつてこの場にいる全員に深々と頭を下げた。

みんな「」「」「」「どういたしまして!!」「」「」「」

全員の絆が強くなった瞬間であった。

ちなみに、

いよいよ一護が蠟燭の火を消すというときに、美由希がクシヤミを  
してしまい、火が全

部消えたため桃子と士郎に折檻されたり、ケーキをアリサとすずか  
の2人が一護に対し

て俗に言う「あぐん」をしてきて、一護がたじたじになったりと沢  
山のことがあった。

そして、この時全員で撮った写真が一護の大切な物になったことは  
言わずとも分かるだ

らう。

原作まで…あと1話？



第9話 Happy birthday Ichigo !!! (後書き)

早く原作に入りたいよ〜(泣)

でも、いまだに非殺傷をどうするか迷っている黒棺であります。

なにか意見がございましたら、気軽に書き込んでください…

うまくいけばあと2話ほどで原作に入れるかと思えます。現在、力を取り戻した一護の案を描いているんですが、何故か正解のほうが先に出来上がってしまいました。

大分駆け足になってしまっています。こんな勢いで原作が始まって  
も進んでいったらフラグが立てれない(笑) まあ、当然のごとく原  
作が始まったらしっかりと進めて行きますが…  
では、また次回にお会いしましょう。

第10話 非日常への誘い… (The invitation to non

今回もまた短いです。

なんだか随分と時間が掛かったようですが、何とか10話まで来ました。

前話からさらに飛んで、年も明けて4月の話です。

正確ではないのですが、この1ヶ月後に出張任務があるようです。

この話では、一護が自分とこの世界の異変に気づきます。

この世界に来てから既に2年の月日が経とうとしていた。  
そして、あるとき一護は自分の異変に気づき…

第10話 非日常への誘い…(The invitation to non

誕生日から後の話を少ししよう。

正月前になり、恭也と忍が再び帰ってきた。

そして、お酒を飲み始めたのだが、何故か士郎と共になのはの話になり、一護に対して

2人「なのはは君(お前)にはやらんぞ!!」

と盛大に絡み酒を繰り広げ、さらに一護が

一護「別に貰うつもりは無いんですけど…」

と言えは、

2人「なのはが可愛くないと言っのか!!」

と訳のわからない逆ギレをするので桃子に

桃子「2人とちよつとOHANNA SIIしましょうか…?」

(怒)

2人「えっ…」

奥へ連れて行かれて強烈な折檻を受けることになった。

忍「あははははははは!!」

忍はそれを見て終始笑っていた…

そして、その恭也と忍もドイツへ帰り、季節は春の4月。

一護はある異変を感じていた。

一護「何だ…？ここ最近妙な気配が…？？」

そう、最近になって一護は、今まで全く感じていなかった気配を感じるようになってい

た。そして、その正体は意外にもすぐに見つかった。そして一護は驚愕する。

一護「なっ…何で…？」

それは、この町をさまよう霊たちであった。すなわちそれは一護が霊力をほぼ完全に取

り戻したことを意味する。さらに一護はあることに気づく。

一護「因果の鎖が…無い…？」

そう、この世界の幽霊たちには虚になるための重要な部分「因果の

鎖」が無いのだ。

一護「なら…虚は出ることは無いんだな…」

少し安心した一護だった。そして、同時に疑問に思う。

一護「霊力が戻っても…死神の力はまだなのか…？」

そう、一護は死神化がまだ出来ないのである。

一護「ま、気長にやって行くしかねえのか…」

ちよつとだけ残念な一護であった。

さらにそれから1ヶ月が経ったある日、

すずかとアリサの元に、一通のメールが届いた。

「出張任務で海鳴に行く事になったから活動拠点を提供してもらえへんかな？」

それは2人の友人のはやてからの依頼であった。

2人はこれを快諾し、アリサの所有しているコテージを貸し出すことにした。

その日の夜、

すずか「一護くん？」

すずかは一護に電話をしていた。

一護「もしもし？すずかか。どうかしたのか？」

すずか「あのね、今月の下旬に数日の間一護くんの手伝って欲しいことがあるの」

一護「ちょっと待ってくれ…士郎さんをお願いしてくる」

すずか「あ、無理にじゃなくて良いよ？」

一護「大方、お前とアリサじゃきつい用事なんだろう？それなら士郎さんも許可してくれ」

るを「

そういつと一護は士郎に許可を取りに行く。

すずか「やっぱり優しいな…一護くん…」

そつしづやくと、

一護「…俺がどうかしたのか？」

すずか「ひゃうんっ!？」

突然向こう側から声が聞こえて飛び上がってしまった。

一護「大丈夫か？」

すずか「大丈夫じゃないよう…」

一護「そ…そうか…(汗)それより、土郎さんが行って来ていいってさ」

すずか「ホント?無理とかしてない?」

一護「そんなことしてねーって」

すずか「ありがとね。一護くん…」

一護「別にイイよ」

そついつて電話を2人同時に切った。

その頃、ミッドチルダ…

はやて「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

フェイト「あ、はやて…！」

なのは「どうだった？」

はやて「すぐにOKしてくれたで！」

なのは「そっか、よかった」

はやて「これであのこの真相も聞きだせるで（わくわく）」

フェイト「はやての悪い癖が…！」

なのは「あはは…！」

はやて「覚悟しときいや！すずかちゃん！アリサちゃん！」

その頃の2人

すずか・アリサ「ゾクウツ…!!???」

ものすごい悪寒がしたようだ。



原作は…次回より

第10話 非日常への誘い… (The invitation to non

すいません。さらにかっ飛ばしてしまいました。

やっと原作キャラと絡ませられます。(ザッフィーはまだただけど…)  
感想の返信にも書きましたが、非殺傷設定の展開の仕方を決定しました。

まあ、あまり気にしないでください。特定の敵のときは即効で解除  
されますから。

では、また次回お会いしましょう。

こんなにも長く…時間が掛かってしまった…by・刹那・F・セイ  
エイ

やっとですよ。これから本格的に一護の戦いが始まっていきます。

あと、この話はおそらく過去最長となります。

あ、ちなみに原作のサウンドステージでは六課の人たちは泊まりませんでしたが、

この小説では1泊していきます。まあ、理由があるんですが…  
では、第11話お楽しみください!!

アリスのコテージの準備をする一護。

彼は知らなかった…自分がこの世界に来たことによる影響を…

なのはたちが出張任務で海鳴に来る当日、一護は活動拠点になるアリサ所有のコテージ

の片付けや備品の整理を1人でこなしていた。

一護「片づけと整理を手伝ってくれて…ほとんど片付いてるし整理されてるじゃねえ

か…」

こなせるのも当たり前であった。もう既にほとんど片付いていたのだ。

一護「これ…俺がいる意味ないんじゃない…」

そんなことを一護がぼやいていると、

鮫島「いやいや、そんなことはございません。細かいところを手伝って頂いて助かって

おりますよ。」

そういつて一護に声を掛けたのは、バニングス家の執事である鮫島だった。

一護「それなら良いんですけど…」

鮫島「それなら、屋根の点検をお願いできますか？お嬢様が仰るには身体能力が高いそ

うで。私たちがするより効率がいいかも知れませんので。」

一護「そういう事なら分かりました。」

そういつて一護は屋根の点検へ向かっていくのだった。

コテージ近く湖畔の前…

キイイーン！

突然地面が光ったかと思うと、魔方陣のような模様が浮かび上がり、そこから数人の人

たちが現れた。

リン「はい！！到着です」

スバル「ここが…なのはさんたちの…故郷…？」

フェイト「そうだよ」

なのは「ミッドとほとんど変わらないでしょ？」

ティアナ「…というか…ここは具体的には何処でしょう？…なんか湖畔のコテージって

感じですが…」

リン「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を快く快

諾して頂けたですよ」

キャロ「現地のかた…」

ブロロロロ…」

そこへ一台の自動車がやってくる。

ティアナ「こつちの世界にもあるんだ…」

ガチャッ

アリサ「なのは！フェイト！」

なのは「アリサちゃん」

フェイト「アリサ」

アリサ「なによもつ…ご無沙汰だったじゃない！」

なのは「じゃはは…」めんめん」

フェイト「いろいろ…忙しくって…」

アリス「私だって忙しいわよ？大学生なんだから！」

フォワード「……」

フォワード陣は完全に置いていかれてしまったようだ。

ここでやっとフェイトが紹介してくれた。

フェイト「紹介するね。私となのは、はやての友達で幼馴染」

アリス「アリス・バニングスです！よろしく！」

フォワード「……」よろしくお願いします！！」「」

アリス「うん！あ、私たちも紹介したい人がいるんだけど…鮫島！

一護が今何処か分か

る？」

そういつと、

鮫島「一護様なら今屋根の点検をされております。」

何処からか1人の執事が現れてそういった。

アリサ「ありがと、鮫島。じゃあ、一護〜!!!降りてきなさい  
!!!」

それを聞くと、アリサはコテージの屋根に向かって大声で叫んだ。  
すると、

一護「おう!今そっちに行く!」

その返事が返って来たかと思うと、屋根の向こう側から1人の男が  
現れ、

一護「よっ!!!」

おもむろに屋根の上から飛び降りたのだ。

全員（アリサと鮫島除く）「「「「「「「「!!!????????」」」」」」」」

全員が驚愕する中、

スタツ!

と普通に地面に降り立ち、

一護「なんか用事か?…ってこの人たちは?」

アリサ「丁度あんなのこと紹介しようと思ってたところなの」

一護「そうか。で…なんでみんな固まってるんだ?」



全員「……………」あなたが屋根から飛び降りたからでしょ……！  
！」「……………」

一護「うおお！？やけに迫力があるな…とにかく、そこにいるアリスの知り合いの黒崎

一護だ。よろしくな！」

アリス「ちなみに、なのは。こいつは今高町家に居候中よ」

なのは「ふええええ！？ウチに？」

一護「ってことは…あんたが高町なのはか…」

なのは「なのはでいいよ。私も一護くんって呼ぶから」

一護「ああ、よろしく。土郎さんたちにはお世話になってるよ。」

アリス「そう言えば、はやてたちは？」

リイン「別行動ですう。確か…違う転送ポートから来るはずですよ…」

フェイト「多分…すずかのところに…」

その頃、月村家では…

はやて「さあさあ！きちんと説明してもらおうで！！その人はどんな人なん？何処で逢っ

たん？どうして惚れたん？」

シグナム「あ…主はやて…？ずずか殿も困っておられるようですし…」

シャマル「そ…そうですね！それに一気に聞いても答えられませんですよ…！」

ヴィータ「どうしてこうなったんだ…？」

この家の持ち主をもの凄しい勢いで問い詰める狸部隊長とそれを必死に止める騎士たちの

姿があつたが、長くなりそうなので割愛させて頂く。

ずずか「助けてくれないの!？」

そついうのは一護に言ってください。

再び戻ってコテージ…

今、フォワード陣はなのはから捜査の指示を受けている。

一護やアリサはすることがないので邪魔にならないところで少し話すことにした。

一護「しかし、管理局ってのは随分小さい子どもまで働かせてるんだな……」

一護のこの感想ももつともである。普通なら就業制限に引っかかる年である。

アリサ「なんでも慢性的な人員不足だって」

一護「ふーん……」

一護はあまり納得してないようだ。

なのは「じゃあ、そろそろ仕事を始めるね」

アリサ「頑張りなさいよ！」

一護「時間があつたら翠屋にも寄ってみるといい」

なのは「ありがと！じゃ、行って来ます」

一護「おう」

アリサ「行ってらっしゃい」

その後、アリサと一護はすずかと合流し夕食の買出しに行くことにした。

そして、なのはたちは翠屋に寄り、士郎と桃子の若さに驚きながら、待機場所へと戻っ

たのであった。

士郎「僕たちの出番これだけ!？」

だって、喋ったのってなのはがどうしてるか聞いたぐらいじゃないか。

士郎「そんなあ…」（泣）

三度コテージへ…

なのは「運転お疲れ、フェイトちゃん」

フェイト「うん」

キャロ「あれ…？なんかちよつといい匂いが…？」

フリード「きゅる〜」

やっと喋れたフリードであった。というか飛んでていいのか？

フェイト「はやてたちがもう晩御飯の用意始めてるのかな？」

アリサ「おかえり〜！！」

すずか「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのは「すずかちゃん！」

フェイト「すずか！」

ようやく2人もすずかと再会することができた。

そして、所謂ガールズトークなるものを繰り広げ始めた。

それを見て、フォワードの2人は

スバル「ティア、やっぱり隊長さんたちが普通の女の子だよ」

ティアナ「同感…」

お前たちは隊長陣をなんだとおもってるんだ？

そこへ、

ブロロロロ…

また車がやってきた。そして、中から

エイミィ「はあ〜い！」

アルフ「みんな、お仕事してるか？」

美由希「お姉ちゃん、S参上！」

年上の女性2人と犬耳と尻尾が生えた幼女？が降りてきた。

一護「美由希さん…店は良かったんですか？」

美由希「丁度シフトの合間だったの。あ、エイミィは初めてだったよね？今、ウチに居

候中の黒崎一護くんだよ。」

一護「黒崎一護っす。えっと…」

エイミー「エイミーでいいよ。一護くん。」

一護「分かりました。エイミーさん。で、このチビツ子は？」

アルフ「む…チビツ子なのは間違いじゃないけどなんか釈然としな  
いな…まあ、いいや

アルフだ。よろしく母。」

一護「…なんか…もの凄い勘違いをされた気がするけど…とりあえ  
ずよろしく」

一護がお姉ちゃん、Sと挨拶をしているころ…

はやて「みんな、おかえり〜！」

シャマル「おかえりなさい〜い」

フォワード「…」「八神部隊長!?!」「…」

ティアナ「部隊長自ら鉄板焼きを!?!」

キャロ「そんなの私たちがやります!?!」

はやて「あ〜ん、ま、待ち時間あったし、お料理は元々趣味なんよ」

ヴィータ「はやて隊長の料理はギガうまだぞ。ありがたくいただけ。」

「  
といった感じの会話が行われていた。

そして、自己紹介も滞りなく終わり（一護の身の上については誤魔化した）、食事も済

ませたので、お風呂に入り、銭湯に行こうということになった。

海鳴市内のスーパー銭湯…

店員「いらっしやいませ…団体様ですか？」

はやて「え」と…大人13人と…」

フェイト「子ども4人です」

ティアナ「エリオとキャロと…」

リン「あたしとアルフです！」

アルフ「おう！」

スバル「えと…ヴィータ副隊長は？」

ヴィータ「あたしは大人だ!!」



一護「えっ…」

ヴィータ「アアン？」

一護「何でもねーです…」

店員「で、ではこちらへどうぞ（苦笑）」

はやて「お会計しとくから先行っててな」

全員『は〜い!〜!』

もちろん一護は言っていないが。

そして、

エリオ「良かった…ちゃんと男女別だ…」

キャロ「広いお風呂だって！楽しみだね、エリオくん!」

エリオ「あ、うん…そうだね。スバルさんたちと一緒に楽しんで来て」

キャロ「え…？エリオくんは？」

エリオ「ぼ、僕は一応男の子だし…」

キャロ「でも、ほらアレ!」

エリオ「注意書き？えつと…」

そこにはエリオを地獄へ突き落とすような文章が…

エリオ「女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみでお願いします…？」

キャロ「ふふ、エリオくん10歳」

エリオ「い…や…」

フェイト「折角だし一緒に入ろうよ」

キャロ「フェイトさん！！」

段々外堀から埋められてきている…

エリオ「や、ややややっぱりそれはですね…スバルさんや隊長さんたちとか…それに、

アリサさんたちもいますし」

ティアナ「あたしは別に気にしないけど？」

スバル「てゆうーか前から頭洗ってあげようか？とか言ってるじゃない」

エリオ「うう…」

アリサ「私らもいいわよ。ねえ？」

この世に神はいないのか？エリオがそう思ったとき、救いの手が差し伸べられた。

一護「お前らそこまでにしてやれって…風呂入る前なのにもう真っ赤じゃねえか…」

エリオ「一護さん！！そうだ！僕は一護さんと一緒に入るんでそれじゃー！！」

一護「おい？エリオおおおおお！！！？！？」

エリオはそう言って、もの凄い速度で一護を引っ張っていった。

フェ・キャ「む（怒）」

約2名ほど、ぶんすかしていたが…

キャロ「あー！！」

キャロは何か気づくと、女湯とは別方向へ進んでいった。

（男湯）

一護「全く…いきなり引っ張るからびっくりしたぞ？」

エリオ「す、すみません(汗)」

一護「ま、あの状況じゃな…よし、こっちこいエリオ。体洗ってやるよ」

エリオ「あ、ありがとうございます…!」

ザアアア…

一護「なあ、エリオ…」

エリオ「なんですか?」

一護「どうしてお前は管理局にいるんだ?まだ子供だろ?」

一護は先ほどから気になっていた質問をぶつけた。

エリオ「そうですね……」

そう言うとエリオは黙ってしまった。

一護「言いくいなら言わなくてもいいんだぞ?」

エリオ「…僕は…多分恩返しがしたいんです。」

一護「恩返し…誰にだ?」

エリオ「フェイトさんです。僕はフェイトさんに助けられて、引き取られたんです。」

一護「そうだったのか…」

「  
エリオ「だから、ぼくは管理局に入って恩返しがしたかったです。」

一護「分かった。ならもう何も聞かねえ。」

エリオ「え…?」

一護「まだ何か言っていないことがあるんだろうけど…今はそれだけ聞ければ十分さ」

エリオ「ありがとうございます」

一護「じゃあ、俺も洗ってくれるか?」

エリオ「はいっ!」

ザアアアア…

エリオ「うわゝすごい鍛えてますね…」

一護「そうか?」

エリオ「はい!それに背も大きいし…僕も一護さんみたいになれたらな…」

一護「はは、まだお前10歳だろ?俺もそのくらいの時はお前位か

少し小さかったっ

て

エリオ「そうなんですか？」

一護「本当だつて。それに、お前はまだ成長が始まったばかりだから。焦る必要は無

いぞ

エリオ「…そうですね!!」

一護「じゃあ、風呂に入るとするか!」

しかし、その時

ガラッ!!!

一護「ん…?」

エリオ「え…?」

キャロ「エリオくん!!来ちゃったよ!!」

エリオ「何でここ(男湯)にいるのおおおおお!!…!!…!!?…?…?」

そのころの女湯…

フェイト「あれ？キャラは？」

なのは「そういえばいないね…」

乳揉み狸「そういえばそうやね…ってなんやねん！！乳揉み狸って」

シグナム「主…普段の行いかと…」

ティアナ「もしかして…あの子…」

スバル「????？」

どうやらティアナだけ気づいたようだ

乳揉み狸「無視せんといて〜（泣）」

……ちやぼん……

結局キャラも入れて風呂に入ることになった男湯勢であった。

キャラ「エリオくん？顔真っ赤だよ？」

一護「（エリオ…強く生きるよ…）」

一護は傍観することを決めたようだ。

エリオ「うう…（泣）」

この後、子ども用露天風呂にキャロといったら、フェイトが待ち構えていて、そのまま

お持ち帰りされたエリオであった。

エリオ「助けてくださいあああ〜い！！！！！！！！！！」

一護はエリオがあまりに遅いので心配していたが、女湯のほうからエリオの雄たけび

（という名の悲鳴）が聞こえてきたので、ご冥福を祈りつつ、男湯を後にしたのであつ

た。

その時、サーチャーに反応があったという知らせが入り、六課の人々はあわただしく現



場へ向かって行った。

しかし、一護はある異変に気づいた。それは、以前の世界・一護の住んでいた世界で霊

圧と呼ばれるものであった。

一護「な…なんで…霊圧が…？」

しかも、その霊圧の気配は機動六課のみんなが向かって行った方向からするのだ。

一護「アリサ！すずか！」

すぐさま一護は、アリサとすずかに声を掛けた。

アリサ「な、何？どうしたの一護？」

一護「先にコテージに戻っていてくれ」

すずか「どうして？」

一護「俺の世界については話したよな？」

すずか「うん」

一護「実は…さっきから霊圧を感じてるんだ。もしかしたら虚かも知れない。だから、

先に帰っていてくれ…霊圧の元を確認したら戻る…」

アリサ「虚だったら…どうするの?」

一護「もちろん…倒してくるぞ…」

すずか「……分かった。でも約束して!絶対に帰ってくるって!」

一護「分かってるぞ」

そういつと一護は完現術を駆使し現場へと向かっていくのだった。

そのころのロストロギア対策現場…

ティ・キャ「シーリング…シユート!!」

エリオ「封印成功!!」

シグナム「ふむ…中々悪くない…」

はやて「よし、動作停止確認。完全封印処理しようか…シヤマル!」

シヤマル「はい」

キャロ「あの…すみません。八神部隊長、シヤマル先生」

はやて「ん?」

キャロ「完全封印…私がやってみてもいいですか？練習して置きたいんです！」

リン「うん、いい心がけですう！！」

こうして、完全封印が終わったと思った次の瞬間、

なのは「ティアナ！スバル！危ない！！」

そういつてなのはが2人を突き飛ばすと

ブォン！！

というもの凄い風切り音と共に何か巨大な丸太のようなものが無防備になったなのはを

吹き飛ばした。

なのは「あぐう！！」

数回バウンドしてようやく止まったなのはの体。

しかし、バリアジャケットを展開しているにも関わらず、ダメージがかなり通ったよう

で上手く動くことができない。

そして、その場に現れたのは魚のような仮面を付け、胸に巨大な孔の空いた3m超の

異形であった。

シグナム「な…なんだこいつは…!!」

フェイト「よくもなのはを!!」

そう言つてフェイトが魔力弾を放つが、大して効いた様子も無くなのはのいる方へ歩を

進める異形。

フェイト「魔力弾が効かない!？」

はやて「あかん!!みんななのはちゃんを連れて撤退して!!」

ヴィータ「はやて!？」

はやて「そいつは今ミッドで噂の魔法が効かない怪物や。ここは管理外世界やからまさ

か来るとは思てへんかった…とにかくそいつとは交戦せず  
に撤退することだけ

を第一に考えて「ダメ…だよ…」なのはちゃん!？」

なのは「ここで私たちが撤退したら…この町は…誰が護るの…？」

朦朧とする意識の中で、なのはは言葉を紡いだ。

はやて「なのはちゃん…」

なのは「（でも…もう体が動かないや…）」

フェイト「なのは！逃げて…！」

なのは「（ごめんね…みんな…）」

なのはは静かに目を閉じる…

そして、異形の巨大な左手が動けないのはに向けて振り下ろされた。

ズウウウウウン…！！

……………？？

しかし、いつまで経っても衝撃がこない。不思議に思ってなのはは目を開ける…

すると、そこには

> i 2 8 3 5 3 | 3 5 0 6 <

片手で異形の腕を受け止めるオレンジ色の髪をした1人の戦士の姿があった。

続く…

無駄に長くなってしまいました。

グダグダです、グダグダ！

記念すべき虚一号はもちろんあの子？です。

次回は戦闘…上手くかけるんだろうか…

この話書いてても凄く眠かったので誤字とかが無いか心配です。

私の方でも探しますが、気づいたら教えてください。

感想も随時お待ちしております。

では、また次回にお会いしましょう。

第12話 戦闘、説明、そして… (The battle, explanation

どうも、作者の黒棺です。

今回は前書きもほどほどに本編に入ろうかと思えます。

あとこの回は、作者による独自解釈満載です。(ついでにキャラ崩壊も)

一護が詳しくすぎじゃないか?とも思われるかも知れませんが、事件の後に

一心に聞いているという事にしてください。

現場に到着した一護。

そして、虚が出現した真相が明かされる…



一護「何とか間に合ったか…」

異形の腕を受け止めながら、そう呟く一護。

なのは「…一護……くん…?」

エリオ「一護さん!?!」

フェイト「ど…どうしてここに!?!」

なのはたちは驚いていた。急に目の前に現れ、なのはを軽々と吹き飛ばした一撃を片腕

だけで受け止めている一護に…

一護「それにしても…なんでコイツが…」

一護も内心では驚いていた。なぜなら、この場に出現した虚は一護が死神になって一番

最初に倒した虚だったのだから…

その名も「フィッシュボーンD」一護が死神になるきっかけとなった虚でもある。

虚「グオオオオオオ!?!」

虚の方も何故か一護のことを覚えているようで、先ほどまでとは打って変わって敵意を

剥き出しにして空いている右腕で再び襲い掛かるうとした。が、

一護「遅えっ！！」

ドゴオッ！！

すぐさま一護に蹴飛ばされ、吹き飛んでしまった。

ヴィータ「す…スゲエ…」

そして、一護は振り返ってなのはを抱き上げると、

一護「おい！誰か治療の出来るヤツはいないのか？」

そう六課の全員に聞いてきた。

シャマル「あ、あたしが出来ます！！」

一護「そうか…」

一護はそう短く答えると、

ブンッ！！ザッ…

シャマルの目の前になのはを抱えたまま突然現れた。

シャマル「ええええええええええ！？」

一護「そんなに驚くこたあねえだろ……」

全員『いやいやいや……』

一護「とにかくこいつの治療をしてくれ。あいつは俺が倒す」

なのは「無茶……だよ……」

シヤマル「なのはちゃん！今はじつとしてて……！」

一護「無茶じゃねえよ……俺が元いた世界ではこいつを倒すのが俺の仕事だったんだ。」

それに、お前らあいつの弱点知らねえだろ？」

なのは「元いた……世界……？」

一護「後でまとめて説明してやるよ……だから今は俺に任せて休んでる」

なのは「……うん……」

一護「お前らも……いいな？」

シグナム「………了解した……」

フェイト「シグナム！？」

シグナム「仕方あるまい？私たちには奴に対する情報が少なすぎる。」

ここは黒崎に

任せるべきだ。それにこの男かなり出来るぞ……」

はやて「シグナムがそう言うなら確かやるな…頼むで…一護くん」

一護「分かった……なら、さっさと終わらせるか……」

一護はそう言うのと、

ブンッ！！

再び虚の前に移動する。

虚「グアアアアアア！！！」

虚は再び両手で一護に襲い掛かろうとするが、

ザシュッ！！

一度の斬撃音と共に両腕が切り飛ばされる。

フェイト「！？」

キャロ「キャッー！？」

このようなことに慣れていないものは目をつぶったり、背けたりしている。

そのあと、間髪いれずに

ブンー!!

再び一護の姿が消え、虚の背後に現れる。

そして、

キン…

一護が剣を鞘に収めると同時に、虚の体は頭から真っ二つに両断されていった。

ズウウウウンー!!…ザアアアア…

虚の体が倒れる。すると、その体は灰のようなものになって消えてしまった。

シグナム「体が…」

はやて「霧散してもうた…」

一護「ふう…」

一護も安心したようで一息ついた。

一護「さて…これから一回コテージに戻ってくれないか?話、聞くんだろ?」

はやて「うん…わかった。みんな！一旦待機所のコテージに戻るで  
！」

全員『はい！！』

コテージにて…

はやて「……………それじゃ…話してくれるんよんね？」

一護「ああ…一先ず俺の身の上っつーか俺が何処から来たのかだな  
……………」

フェイト「地球…というかこの世界じゃないの？名前…偽名じゃな  
いよね？」

一護「地球って言うならあなたがち間違いじゃない…でも俺はこの世  
界とは別の地球……………」

平行世界の地球から来たんだ……………」

シグナム「平行…世界…？」

ヴィータ「何だそりゃ？」

はやて「平行世界…いわゆるEFの世界やね。簡単に言うとこの世

界とは違った歴史を

歩んできた世界ってことや

一護「そついうことだ」

ヴィータ「話が一気に眉唾になったな…」

一護「だが事実だ。この世界にここ意外に地球って世界はあるのか？」

ヴィータ「それは…」

一護「話が逸れたな…俺がいた世界ではあの化け物のことは虚ホロウと呼ばれている悪霊で、

死神って奴らが昇華・滅却することで普通の霊に戻してあの世に送るんだ」

フェイト「悪霊！？死神！？」

はやて「フェ、フェイトちゃん？落ち着いて…」

フェイト「怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない…」

一護「……………(汗)」

はやて「フェイトちゃんはほつといて…説明続けて？」

一護「…わかった。で、俺は今から大体3年と半年ぐらい前まで死

神として戦っていい

「ただ」

シグナム「戦って…いた…？どういうことだ？」

「護」その時に大きな戦いがあったな、ある技を使って戦いには勝つことができたん

だが…その代償として俺は死神の力の全てを失くしたんだ」

ヴィータ「それじゃああの力はなんだよ？」

「護」あれは完現術フルブリンゲつってな、簡単に言うと物質に宿る魂の力を引き出して使役する

「能力だ」

シヤマル「物質に魂…ですか…？」

「護」そうだ…本来、全ての物質には大きさに違いこそあるが魂が宿ってるんだ。

例えば…そうだな…練習を1つの道具で続けているとたまに使い易くなること

があるだろ？それは使い手が道具の魂を理解したからだ」

ティアナ「使い手が…理解…？」



一護「本来道具には使い手を助ける力が備わってるんだ。俺のよう  
な完現術士はその

力にブーストを掛けて爆発的に能力を上げるんだ。元々この  
力は、俺が死神の

力を取り戻すために手に入れた力なんだ…」

シグナム「では…お前は何故この世界に来たのだ？」

一護「それは…俺が…」

はやて「俺が…?」

一護「俺が…前の世界から消えることを望んだからだ」

全員「!?!?!」

一護「俺は…仲間と家族を奪われて…止めを刺されようとした時に  
願ったんだ。こん

な世界を望んだんじゃないってな」

はやて「なんで…なんでそんなことになったん？」

一護「わからねえ…あいつが何を考えてたのか…何が目的だったの  
か…今となっては

確かめる術は俺にはねえ。1つだけ言えるのは…俺は…みんなを護ろうとして

結局…何一つとして護れなかったってことだ…」

シグナム「…その……済まなかった…辛いことを聞いて…」

一護「別にいいさ。俺はこうして生きているんだ。前に進むことが出来る。っと…」

また話が逸れたな。で、虚についてなんだが…あいつらが悪霊の類ってのは分

かってるよな？じゃあ、どうやって悪霊は誕生すると思う？」

スバル「えっと…普通の幽霊が…悪霊になるとか？」

ティアナ「いや…さすがにそれはまんま過ぎでしょ？」

一護「いや、それで正解だ。まず、俺たちの世界の靈魂には胸の中心に「因果の鎖」

つてのが付いてるんだ」

エリオ「因果の…」

キャロ「鎖…？」

一護「この鎖は肉体と繋がっててな、この鎖が切れると肉体には戻れなくなつて、

さらに切断面から体に向けて侵食が始まるんだ」

シヤマル「侵食ってどんな感じなんですか？」

一護「一番端の鎖に口が無数に出来てな、鎖を徐々に喰っていくんだ。いや〜アレは

禿んじゃねえかってくらいに痛いからな〜」

全員『え……………？』

一護「あつ……………今のナシで」

全員『いやいやいや！！！！』

一護「で、その侵食が胸の中心に達すると、孔があいて虚が完成するんだ」

はやて「無視されたで…」

一護「そして、虚になった直後の奴は大抵自分の肉親を襲うんだ」

フェイト「な、なんで!？」

一護「孔の空いた胸の空虚を埋めるため、生前最も心の中を占めていたであろう肉親

を襲うことで心の渴きを失くそうとするんだ」

キャロ「そんな…」

一護「で、肉親を襲った虚が何をするかというと、霊的能力者俗に言う見える人や元

は自分と同じだった普通の幽霊を襲い始めるんだ。そして、霊的能力者や幽霊

を襲い続けることで、虚の力は増大していく」

はやて「じゃあ、何でこの世界にそいつらが現れたん？」

一護「正直…俺にも良くわからない…ただ、俺たちの世界とは決定的な違いがあつて

あいつらの体が霊体じゃなくて普通の生物体だったんだ」

フェイト「それは何か問題があるの？」

一護「いや…特に目立った問題は無い。頭を切ればさっきの奴みたいに消えていく」

キャロ「あ、頭…」

一護「ただ、気になったのは…さっきの虚が俺が向こうの世界で倒した虚だったって

事だな」

シグナム「何…？では何故ヤツはここにいたのだ」

一護「………この世界には…残骸とかからいろんなものを再生する技

術みたいなものは

無いか？あと、記録や記憶を引き継げるようなものも……」

フェ・エリ「……！！！？？」

一護「やっぱりあるんだな……」

はやて「それに何の関係が？」

一護「ただの推測でしかねえけど……虚つてのは死神に斬られると、元の魂は所謂あの

世に送られるんだ。でも、虚の体を構成していたものは虚圏ウエコムンドつてところに送られ

る。その送られる最中に何かの力が働いて……この世界に来てその技術で再び命

を受けたとしたら……つてことさ」

フェイト「何かの力って……？」

一護「俺がこの世界に来たときみたいな力さ……俺がこの世界に来たのは2年前なんだ

が……その……ミッドチルダ……だっけか？二年前に何か異状が無かったか？」

フェイト「……あ……かなり小規模だけど次元震が起きなかったっ

け？」

はやて「あゝ…そんな事もあつたなゝ…結局大した事無かつたんやけど」

一護「次元震つてのはいまいち分からねーけど…多分そのときだな…」

フェイト「じゃあ…」

一護「ああ…被害が起きたのは俺の所為だな…」

その場に嫌な沈黙が流れる……

なのは「それは…違うよ…」

その沈黙を破つたのは現在安静中のはずなのはであった。

一護「違わねえよ…俺があの時あんなことを願わなかったら被害は出ずに済んだんだ

ぞ？」

なのは「悪いのは一護くんじゃなくて、虚つて怪物を蘇らせた科学者の人たちじゃな

い！！」

一護「それでも！…俺の責任であることには変わりねえ…」

なのは「そんな…」

一護「怒鳴ってすまない…少し頭を冷やす時間をくれ…」

そう言って一護は部屋を出て行った。

「テージの屋根の上…」

一護はここで考えをまとめていた…

一護「（このままだったら確実に被害は酷くなる…なら俺に出来ることは…）」

すずか「一護くん…」

一護「お、おい！？すずか！こんなところに来たら危ねえぞ？落ちたらどうすんだ！」

すずか「そのときは一護くんが助けてくれるんでしょ？」

一護「！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…」

いつに無く歯切れの悪い一護。

すずか「…行きたいんだよね…」

一護「え……？」

すずか「ミッドに行つて虚を倒さないといけないって思ってるよね？」

一護「それは……」

すずか「正直に言うとな、私は一護くんには戦つて欲しくないの。私の知らないところ

で一護くんが傷つくいてる、そう思うだけで胸が苦しくなる」

一護「すずか……」

すずか「多分……アリサちゃんも顔には出さないけど同じだと思う……」

一護「……」

すずか「でもね……一護くんが自分の所為で誰かが傷ついて、何も出れないのを我慢して

いるのを見るのはもっと辛いんだ……だから……ミッドに行つて全部解決したら

みんなと一緒にここに帰ってきて……お願い……」

すずかは泣きながら言っていた……この一言のせいで一護がケガをするかもしれない……



命を落とすかも知れない…その仮定が彼女を苦しめる…

一護「…すずか…」

一護は自分の中で、覚悟が決まっていくなを感じた。

一護「今はこんなことしか言えないけど…俺は絶対にみんなでこの場所に帰ってくる。」

約束だ！

すずか「…うん…！」

そついうとすずかは一護の胸に飛び込む…

一護「お、おい…すずかさん？」

すずか「…今だけでいいから…こつさせて…」

すずかの肩が震えていることに気づいた一護は

一護「…今だけだぞ…」

そついつてすずかの頭を撫でてやるのであった。

すずかを先に屋根から降ろして、その後しばらくしてからコテージの中に戻ると、そこ

には仁王立ちしたアリサが立っていた。

一護「……………何やってんだアリサ？」

アリサ「うっ…うるさいわね！！あんたを待ってたに決まってるでしょ…！！」

一護「そうかい…ありがとな」

そう言っつて、頭の上に手を置く一護。

アリサ「…ねえ…」

一護はアリサの声が震えていたのは聞かなかったことにした。

一護「…何だ…？」

アリサ「帰って…来るよね…」

一護「当然だ」

そう短くだがはっきり答えた一護を見て、アリサは安心したようだ。

アリサ「そう…ならいいの！精一杯やって来なさい！！」

一護「アリサ…本当にありがとな…」

アリサ「いいわよ…別に…」

こうして、長かった1日はようやく終わりを告げたのである。

翌朝、

昨夜と同じ部屋に関係者たちが再び集められた。

その中には、なぜか高町家の人間もいた。

そして、一護が言葉を紡ぎだす…

一護「みんな…俺をミッドチルダへ連れて行って貰えないか？」

全員（アリサとすずかを除く）『！！！！！！』

士郎「一護くん…本気なのかい？」

一護「ええ…もし一連の騒動が俺の所為なら、俺が行って終わらせるべきです」

美由希「本当にそれでいいの？」

一護「はい、もう決めたことですから…でも、すみません。折角俺のことを拾って下さ

ったのに…」

士郎「気にしなくていいんだよ。息子がもう1人出来たようで嬉しかったしね」

桃子「そうよ。独り立ちするよなものじゃない。それに、君が何処に行ってもここは

あなたの帰る場所になるわ」

一護「ありがとうございます…」

はやて「一護くん…ホントにええんやな？」

一護「ああ、もう覚悟は出来てる」

なのは「そう…なら、改めてよろしくね！一護くん」

六課全員『よろしく…！』

一護「ああ！こちらこそ、よろしくな！」

ここに元死神代行黒崎一護のミッドチルダ行きが決定した。

そのころ、ミッドチルダの某所…

「????」「むうううう……」

ここに1人の紫髪マッドサイエンティストがうなり声を上げ、画面を食い入る様に見つ

めている。その男の名はジェイル・スカリエッティ……またの名を紐暮らしのスカリエツ

「言わせないよ!!」……チツ……ミッドではかなり有名な次元犯罪者である。

スカ「なんなのだ……この化け物は……といつかいくら僕の名前が長いからってその略し

方は無いんじゃないか？」

気が向いたらジェイルに変えてやる。

スカ「まあ、いいさ……」

先ほどからこの男が見ているのは、ロストログア関係の事件にここ最近頻繁に出現する

虚の映像であった。

スカ「気に入らないな……また僕に罪を着せようというのか……」

そう、この男は次元犯罪者の烙印を押されているが、その罪は実は何者かによって着せ

られたという被害者なのだ。

スカ「スポンサーから手を切って雲隠れしたからか？嫌がらせなのか？」

「どうやらかなりマイナス思考になっているようだ…」

ウーノ「ドクター…機動六課が管理外世界でこの化け物と交戦し退けたようです。」

「1人の女性から通信が入ってきた。この女性の名はウーノ。ナンバーズの中で一番最初

に稼動した戦闘機人である。もつとも、この男は戦闘機人たちを娘のように扱っている

のだが…」

スカ「それは本当かい？」

ウーノ「ええ、本部に潜入しているドゥーエからの情報ですので、まず間違いないかと

「思われます」

スカ「一体誰が倒したんだい？」

ウーノ「何でも…現地の協力者で、あの化け物に対しておそらく唯一の対抗戦力である

と報告にはあがっています」

スカ「そうなのか…一度…一度でいいから直に会ってみたいものだ…」

ウーノ「あ、名前が分かったそうです。…名前は黒崎一護、年齢19歳、出身世界は…」

一応「第97管理外世界…地球です」

スカ「その一応というのはなんだい？」

ウーノ「その…現地の戸籍を確認したんですが、偽造された跡があったんですよ。ほん

の僅かですが…」

スカ「では、彼は次元漂流者なのかい？」

ウーノ「いえ、正確なことまではまだ…」

スカ「それなら、何か分かったらまた連絡してくれたまえ」

ウーノ「かしこまりました、ドクター」

そういつて通信が終わった。

スカ「そうか…あの化け物を倒したか…実に興味深い…ふふふ…早く会いたいよ…黒崎」

「護くん」

「護」「ゾワゾワ……!!……!!……!!……!!……!!」

もの凄い怖気がしたようだ。

なのは「どうしたの???」

「護」「いや……なんか紐暮らしの科学者に目を付けられた気が……」

なのは「????????」

続く



いかがでしたでしょうか？

この作品のジエイルくんは基本いい人で、頭のネジがちょっと（かなり）残念な

ギャグキャラです。

すずかがなんかメインヒロインみたいに……いや、ハーレムにするつもりですよ？

真の敵キャラは大体考えてあります。

次回はいよいよミッド篇に突入です。

あ、ちなみにいきなりアグスタには行きませんよ。

ちよっとした魔法講義がありますので。

では、また次回にお会いしましょう。

第13話 魔法…え…？非殺傷ってなに…？（M a g i c … O h …？ W h a t

どうも黒棺です。

今回からミッドでの話になります。

まあ、あと数回は魔法の講義やらなんやらですが（笑）

機動六課に協力して虚を倒す決意を固めた一護。

そして一護はミッドチルダへと降り立った。

第13話 魔法…え…？非殺傷ってなに？？（M a g i c … O h …？ W h a t

キイイイイン

転送ポートの起動音が鳴り、そこには十数人の人たちが現れる。

彼らは機動六課の出張メンバーと協力者になった黒崎一護であった

……

約1名様子のおかしい者もいるが……

一護「うぶっ……酔った……」

全員「ええええええええ！？」

一護「何で…お前らは…平気…なんだ……」

なのは「あゝ…たまに初めての人は酔うって聞いた事が……」

一護「そういうのは…先に…言って……」

なのは「にやはは…ごめんごめん」

はやて「シャマル、一護くんを医務室で休ませたって」

シャマル「はい。ほら一護くん、もう少し頑張って……」

一護「悪い……うぶ……」

なのは「なんか…以外だね」

フェイト「あんなに強いのに…」

シグナム「人は見かけによらんな…しかし…」

フェイト「シグナム？どうかしたの？」

シグナム「いや…早く黒崎と模擬戦をしてみたいと思ってな…」

ヴィータ「でたよ…いつもの病気…あいつも災難だな…」

フェイト「え…私もしたかったんだけど…」

ヴィータ「こつちもだった!？」

はやて「一護くん…ご愁傷様やで…」

その頃の一護…

一護「うぷ…ん?…なんか…俺の知らない間に重要なことが決  
められたような

気が……」

シャマル「どうかしたの?」

一護「いや……何でもねえ……」

そもそも君が剣を使う時点で2人との模擬戦は避けられないのだが

……

数時間後……

ようやく復活した一護は機動六課の全員のまえで挨拶をしていた。

一護「第97管理外世界から来た黒崎一護だ。これからよろしくな」

全員『よろしくお願ひします!!』

はやて「一護くんは剣を使うので便宜上、ライトニング分隊に所属してもらいます。」

コールサインはライトニング5。みんな仲良くしたってや

「！」

全員『はい……!!』

はやて「じゃあ、一護くんには魔法についての簡単な講義を受けて貰うぞ」

一護「わかった」

はやて「それじゃ、一旦解散！」

それからしばらくして、デバイスルーム……

そこには隊長2人とこの部屋の主かと思われる人、そして

めがね狸「おっ、来たようやね」

なぜかメガネをかけ、指差し棒を持ち白衣を着た狸部隊長の姿があった。

はやて「誰がめがね狸……つてもどつとる!？」

シャマル「はやてちゃん、私の白衣返してください(泣)」

そこへ、被害者と思われる医務室のヌシも現れた。なかなかのカオスである。

シャーリー「あ、先に自己紹介しときますね。通信主任兼メカニッ

クの

「シャリオ・フィニーノです。気軽にシャーリーって呼んでください」

「一護」おう、さっき言ったけど民間協力者の黒崎一護だ。……あれはほっといていいの

か？」

シャーリー「良いんじゃないですか？どうせ止めてもやめないし……」

「一護」……………そうだな……………」

この後一護たちは30分近く待たされることになった。

30分後……………

はやて「いや〜ごめんな？ついシャマルがおもしろってな」

「一護」いや……………何でもいいから早く講義を始めてくれ……………」

若干だがぐったりしている一護である。

はやて「それじゃ、簡単にやけど魔法について説明してくで？」

はやて説明中……………

そして、目下最優先の事項が判明した。

一護「非殺傷……………どうやるんだ？」

4人「え……………？」

一護「いや、そんなもん今まで1回も使ったことないし……………」

はやて「……………想定外やった……………まさか魔道士の基礎の部分で躓くとは……………」

一護「そんなに無いといけないものなのか？」

なのは「とりあえず任務には出勤できなくなるね」

一護「意味ねーじゃん!!」

はやて「むむむ……………なんとかして使えないもんやるか……………一護くん、とりあえず1回

力を発動してみて」

一護「わかった」

そうして、一護は完現術を発動する。



はやて「シャーリー……どっ？」

シャーリー「とりあえず……非殺傷設定は発動してないですね」

なのは「やっぱり……」

フェイト「どうしたら……」

一護「……非殺傷の具体的な基準を教えてくださいませんか？」

はやて「ええけど……何か思いついたん？」

一護「思いついたってほどじゃないけど……イメージが具体的に  
なれば発動しやすいか」

と思っただが……」

なのは「とりあえず……斬撃だったら相手を切るんじゃないかと、  
当たった所に魔力由来」

のダメージを与える感じ」

一護「じゃあ……剣の周りに霊力を集める感じでいいか？」

なのは「できそうなの？」

一護「要は刃を潰した剣のイメージだろ？」

はやて「ま、ザックリ言っとそうやな。でも、それやると肉体以外

のものも切れなく

なるで?」

一護「機械か虚が相手のときは使わねえよ。俺のヤツ、なんか燃費悪そうだし……」

フェイト「そうなの?」

一護「そうだな…お前から言えば、剣に向けて魔力を放出し続ける感じだな」

なのは「あー……それは……」

はやて「それができるのはなのはちゃんぐらいか……」

フェイト「そうだね」

一護「とにかく1回やってみるぞ?……ふっ!」

ブン!!

すると、一護の剣の刃が青白い霊圧に包まれた。

はやて「シャーリー」

シャーリー「…はい!確かに非殺傷設定が発動しています!」

なのは「これで……」

フエイト「うん！」

はやて「正式に一護くんを機動六課に配属できるで」

一護「ふう……とにかくこれからよろしくな」

4人「うん（はい）！！」

こうして、一護たちは配属に関する最大の問題を解決したのであった。

そこへ

シグナム「ほう…非殺傷が出来るようになったのか……（ウズウズ）」

なぜかウズウズした様子のシグナムが現れた。

一護「……あんたは何でそんなにウズウズしてんだ？」

一護は聞いてはいけないと思いつつも、つい聞いてしまった。

シグナム「何、お前はライティング分隊に配属なのだろう？私は副隊長だからな」

実力を確かめるために模擬戦をと思ってな」

言っていることはもったもなのだが、目がキラキラしている為の説得力が皆無である。

一護「はやて…もしかして……」

このときの一護の頭の中には、2 m超の髪に鈴を付けた大男の姿が浮かんでいた。

はやて「シグナムは見てのとおりバトルマニアなんよ。だからこゝは付き合ってたって」

一護「……分かったよ……」

渋々ながら了解した一護であった。

シグナム「では訓練場へ行くぞ!!早く!!」

そういうが早いか、一護とこの部屋にあった整備中の自分の愛剣を持って

足早に出て行ってしまった。

そこには啞然とした表情のまま固まっている4人の姿があった。

4人『ポカーン』

続く……一護「誰かこいつを止めてくれええええええええええ!!!!」

?

……  
続くのか

第13話 魔法…え…？非殺傷ってなに？？（M a g i c … O h …？ W h a t

なんかいまいちだな……

すいません。ゲームしてたら更新が遅れてしまいました。

非殺傷設定は人間か戦闘機人にしか使いません。虚やガジェットには殺傷設定の

まま戦います。というか虚には非殺傷とか甘っちょろいものを使ってる余裕なんてありません。発動の仕方もご都合主義です。申し訳ありません。

あと、死神化の原案というか始解の設定画のようなものが出来上がりました。

設定の話に掲載すると思うので見たら感想などいただけると……

一応卍解のほうも出来上がってるんですが（というかこっちが先に出来た）

もう少し煮詰めようかと思えます。

次回はシグナムとの模擬戦です。さあ、どうなってしまふのか……  
またお会いしましょう。

どうも、作者の黒棺です。

この話に関係ないですが、始解の設定画を設定に載せました。  
シグナムとの模擬戦……どうなってしまうのか……

非殺傷設定が限定的にだけ出来るようになった一護。

しかし、それを見計らったかのように出現したバトルマニア……  
そして、一護は強引に拉致されて……

第14話 模擬戦……あれ？(MOGI SEN……Is it?)

シグナム「ふ……このときを待ちわびたぞ……!!」

一護「……何で模擬戦でここまでテンションがあがるんだ……?」

訓練場で対峙する2人の男女……明らかにテンションに温度差があるのだが……

シグナム「地球で一目見たときから分かっていた……お前が只者ではないと」

一護「そりゃ……あの人たちと修行してたら並以上にはなるだろ……」

シグナム「並……本気でそう思っているのか?」

一護「……まさか。ただ、アンタが何処の誰であれ簡単には負けねよってだけだ」

シグナム「ほう……では、改めて名乗らせてもらおう……」

ヴォルケンリッターが烈火の将シグナムだ」

一護「分かっているとは思いますが……元死神代行黒崎一護……」

そういうと2人は自らの装備を展開し構える。



シグナム「……行くぞ……黒崎!！」

一護「望むところだ!！」

こうして2人の剣士の戦いが始まった。

シグナム「ハアッ!！」

ギン!

一護「……………」

シグナムの一撃を無言で受け止める一護。

シグナム「……なぜ反撃しない?私を莫迦にしているのか?」

一護「別にそういうつもりはねえよ。ただ、アンタの剣筋を見ていただけだ」

そういうと一護は受け止めていたシグナムの剣を強引に薙ぎ払った。

シグナム「クッ……………!！」

シグナムは何とか体勢を立て直す。

一護「確かにアンタは強い……何かのリミッターを付けてるとして  
もだ……」

シグナム「!!…気づいていたのか……」

一護「霊圧が戻ってからそういうのも見れるようになってな……」

どうも隊長陣は全員付けてるみてーだな」

シグナム「そうだとしたら……どうするのだ？まさか手加減をする  
など……」

一護「いや……そんなことはしねえよ。まあ、対等な状態でやりた  
いのは

否定しないけどよ」

シグナム「では……」

一護「続きだ……」

ブン!!

そう言うつと一瞬で一護が背後に現れ、剣を横薙ぎに振るつ。

ギアン!!

シグナム「なッ!!…（なんとというスピードだ……テストロッサ並だ  
ぞ!?!）」

シグナムは経験からか少し遅れはしたが、何とか受け止める。

シグナム「（それにしても……なんという目をしている……確か……

主たちと年齢は同じだと言っていたな……）」

一護「考え事してる暇があんのか？」

シグナム「クッー！（どんな戦いをすればそんな悟ったような目ができるのだ……）」

シグナムは一旦バックステップして再び一護に切りかかる。が、

ドッー！

一護の左手にいとまたやすく受け止められてしまう。

シグナム「な……莫迦な……素手で……！？」

一護「アンタ……それは本気じゃないだろ？」

シグナム「……レヴァンティン……カートリッジ・ロード……」

一護「やっとか……」

シグナム「受けてみる……紫電一閃……！」

一護「（炎か……）」

ゴオオオ!!

シグナム「……………やったか？」

辺りには先ほどの紫電一閃での土煙が立ち込めている。

やがて、煙が晴れてくるとそこには

一護「ふう……………さすがに今は危なかったな……………」

ロングコートの一部が焦げているが、無傷の一護が立っていた。

シグナム「!?今のはどうやって防いだ!?!」

一護「どうもこうも……………同じようなのをぶつけて相殺しただけだが……………」

シグナム「こんなにも簡単に相殺するだと……………」

一護「そっぴゃ……………まだ見せてなかったな」

そう言うと一護は剣を左肩の位置にまで持ってきて溜めを作る。

ジャカッ! キュオオ!!

一護「上手く避けるよ……………」

シグナム「何!?!」

一護「月牙……………天衝!!!!」

チッ!!

シグナム「レヴァンティン!!」

ズウウウウン!!

そのころデバイスルーム……

はやて「ふえ〜…一護くんすごいな〜」

フェイト「紫電一閃を簡単に相殺するなんて……」

なのは「……………」

はやて「なのはちゃん? どないしたん?」

なのは「ふえ!?! ななな何でもないよ?」

フェイト「疑問形になってるよ」

なのは「ホントになんでもないんだってば〜!~!」

はやて「ふうん……ま、ええわ」

なのは「ホッ（うっ）昨日のこと思い出してたなんて言えないよ（！ー）」

ちなみに、昨日のこと＝お姫様抱っこである。

シャーリー「あれえ……？何か忘れてるような……」

シャーリーは何かを思い出そうとしているようだ。

そして、この部屋の床に落ちている整備中の札を見つけた。

シャーリー「……あ……」

なのは「どうかしたのシャーリー？」

シャーリー「あの……ですね……」

はやて「うん？」

シャーリー「レヴァンティンは……その……整備中……でして……」

フェイト「え……まさか……」

シャーリー「はい……しかも今調べたんですが非殺傷設定が発動してないんです」

3人『なっ！？』

なのは「今すぐ止めないと!!」

はやて「ここから通信は?」

シャーリー「今は出来ません!!」

はやて「フェイトちゃんは念のためにシャマルに連絡いれて!!」

フェイト「分かった」

なのは「直接行って止めよう!!」

はやて「せやね」

再び訓練場……

一護「……………」

ガシャッ……

一護はいつ反撃が来てもいいように構えを崩さないでいる。そこへ

ビュン……

一護「!?!」

蛇腹剣のようなものが飛んできた。

一護「クッ!?!」

若干反応が遅れた一護の首を剣が掠める。すると

ツウー……

掠った場所が切れたのだ。

一護「（非殺傷じゃない?! いや、普通なら当たり前だが……）」

シグナム「まさか初見で飛竜一閃を避けるとは……」

一護「なに……知り合いに似たような剣を使うヤツがいただけさ。  
アンタの攻撃速度は

そいつより数段速いけどな」

シグナム「そうか……」

一護「そろそろ終わらせようぜ」

シグナム「むう……私はもっと剣を交えたいのだが……」

一護「今日は疲れてるんだよ（さっきからあの剣……様子がおかしい……）」



次で終わらせないと……）」

シグナム「仕方ない……ではいくぞ!!」

一護「来い!!（強引にでも動きを止める!!）」

シグナム「飛竜……一閃!!」

ジャアアアアア!!

一護「月牙天衝!!」

すると、一護はなぜか自分の足元に月牙を打った。

ドオオオオオン!!

シグナム「何!？」

土煙が上がり、一護の姿を見失うシグナム。

すると、レヴァンティンが何かに絡め取られるような感覚がした。

そして、

グイン!!

思い切り引きよせられる。

シグナム「な……!!？」

その向こうにいたのは、

レヴァンティンを直接腕に巻きつけ引っ張っている一護であった。

シグナムが驚愕していると、一護は

「一護「悪い……少し眠っていてくれ……」

と言い、

シグナムの背後に回って首に手刀を当てて気絶させた。

「一護「あてて……」

非殺傷が切れていたので、当然一護の左腕は火傷や切り傷でボロボロである。

「一護「このままじゃ……さすがにダメか……よし！」

それにもかまわず、一護はシグナムを抱えると医務室へ向けて歩き出した。

医務室……………

シャマル「ええ！？非殺傷設定が？」

フェイト「うん…もしものことがあるかも知れないから今すぐ訓練場に……………」

コンコンー！

シャマル「はい！ごめんなさい今はちょっと……………って一護くんにシグナム！？」

一護「突然で悪い……………こいつにベッドを貸してやってくれ」

シャマル「え……………ええ、分かったわ」

フェイト「一護？ケガは？」

一護「ああ、大した事……………」

なのは「嘘はダメだよー！！」

一護「……………なのは？」

フェイト「なのは？どうして……………」



一護はそう言っただけ視線だけをシグナムへと向けた。

一護「アイツの剣の姿がおかしいのに気づいてな、あのときに止めておかないと」

不味いと思っただよ

なのは「だからって……何もここまで……」

一護「俺は……そんなに器用じゃないからな……」

シヤマル「とにかく!!一護くんは治療しますから3人はとりあえず席を外して」

ください

そう言われると3人は仕方なく出て行った。

シヤマル「……一護くん……ありがとう」

一護「?それはなんに對してだ?」

シヤマル「シグナムを助けてくれてよ」

一護「俺が勝手にお節介しただけだ。礼を言われることじゃねえよ」

シャマル「ふふ、それでもよ」

一護「……………まあ……………受け取っておくよ」

シャマル「はい、治療終了よ。でも今日は一応ここに泊まっています」

一護「分かった……………少し眠いから……………寝るぞ……………」

シャマル「ええ、おやすみ……………一護くん」

そう言つて一護は眠ってしまった。

シグナム「うつ……………ここは？」

どうやら入れ違いでシグナムが目を覚ましたようだ。

シャマル「あ、起きたわねシグナム」

シグナム「シャマル？それではここは……………医務室か」

シャマル「何処か痛むところは？」

シグナム「いや……………特に無いな……………ところで模擬戦はどつなつて……………」

シャマル「……………シグナム……………あなたは整備中のレヴァンティンを持ち出したそうね」

シグナム「何……………？……………あ……………」

シヤマル「はあ………一護くんがいなかったら今頃あなたは犬吠我よ」

シグナム「どういうことだ？」

シヤマル「レヴァンティンが暴発していたかもしれないと言ってるの。」

それに非殺傷設定まで切れていたそうよ」

シグナム「非殺傷……シヤマル！！黒崎は!？」

シグナムは気を失う直前に見た光景を思い出したようだ。

シヤマル「ケガの治療はもうすんだわ。今はあなたの横のベッドで寝てる」

シグナム「……私のせいで……こんなケガを……」

シグナムの目に入ってきたのは、包帯でグルグル巻きにされた一護の左腕であった。

シヤマル「もうほとんど治療自体は終わってるから安静にしていればすぐに治るわ」

シグナム「そうか……良かった……本当に良かった……」

シグナムは心底安心したようで、口調もいつもより柔らかくなっていた。

シャマル「それにしても……シグナム、あなたが一護くんにお姫様抱っこされて

現れたときは本当に驚いたわ〜」

シグナム「……………シャマル……………いまなんと言った？」

シャマル「ホントに驚いたわ〜？」

シグナム「その前だ!!！」

シャマル「お姫様抱っこ？」

シグナム「そ、それだ!!—体どういうことだ!？」

シャマル「どうもこうも……………気絶しているあなたを一護くんがお姫様抱っこして

「ここまで抱えてきただけじゃない」

シグナム「なん……………だと……………」

シャマル「（これは……………もしかして……………）ねえシグナム……………惚れた？」

シグナム「んなっ!?!ほ、惚れ!!?!?!?!」

シャマル「うわ〜…わかりやすい……………」



シグナムの今の顔は真っ赤である。

シグナム「うう／＼……／／／／／」

シャマル「（何この可愛い生き物……）」

シグナム「しかし……私は嫌われたりしていないだろうか……それに

私はガサツだし……」

シャマル「一護くんはそんなに気にしてないと思っわよ？それに、

嫌いならここまで抱っこなんかしてまで連れてこないっ

て」

シグナム「そうだろうか……」

シャマル「そうよ！まあ今日のところは自分の部屋に帰ってびっせ  
って謝るか

考えておくのよ」

シグナム「分かった」

そのころ職員寮……

なのは「はっ……！？なんか出遅れた気が……」

1人の女性局員が先にフラグを立てられたことに気づいたり気づいてなかったり……

次の日……

一護「ありがとなシャマル」

シャマル「いいのよ。これが私のお仕事なの！」

一護の腕はもうほとんど完治していた。そこへ、

シグナム「く、黒崎……」

若干モジモジしながらシグナムが現れた。

一護「お、もう大丈夫なのか？」

シグナム「その……だな……済まなかった……！」

一護「そのことはもういいよ。第一気づいて止めなかった俺が悪いんだ」

シグナム「しかしだな……」

一護「あーもう……もうこの話は終わり……！どっちも悪いってこと

で  
」

シグナム「な……ククツ……お前はへんなヤツだな……」

一護「アンタも相当だと思っぞ?」

シグナム「シグナム……」

一護「ん?」

シグナム「いつまでもアンタと呼ばれているのはあまり良い気分がしないからな。」

これからはシグナムと呼べ。そのかわり、お前のことも

一護と呼ぶ」

一護「ああ、わかったよシグナム。これからよろしくな」

シグナム「あ、ああ／＼／＼」

そう言うとシグナムは足早にその場を去って行った。

一護「どうしたんだ?アイツ……」

最後の最後までコイツはコイツだった。

一護「????????」

その頃の月村家……

すずか「ん……………？ふふ……………一護くんは順調かな？」

どちらの意味とも取れる意味深な言葉を言っていた。

続く

なんだこれは(爆)

あゝこれはちよつと(かなり)失敗したかも？

これが作者の妄想力の限界ですね。

何か感想や意見などありましたら、気軽に書き込んでください。

設定画についても意見がありましたらどうぞ。

では、また次回にお会いしましょう。

第15話 現れる虚。そして……（The hollow which appears）

た……タイトルが思いつかない……

まさかこんなところで躓くとは……

それに今回短い……

ともあれNewPCも来たことですし、頑張っていきたいと思いません。

先日の模擬戦で、ハプニングがありながらもシグナムを退けた一護。

みんなにも受け入れられ安心して一護に再び災難が……？

そして、ミッドに現れた虚の正体は……？

食堂でライトニング分隊の副隊長以下の4人が集まって話をしている。

エリオ「ええ！？一護さん、シグナム副隊長に勝ったんですか？」

そう言つてエリオは興奮気味に一護に話しかける。

一護「そうだな……ま、確かに勝ったけどな……俺も怪我したから痛み分けて」

とこだな

シグナム「何を言ってるんだ……あれはお前の勝ち以外にないだろう。それに、

私の剣を素手で受け止めるヤツにあのまま戦つていても勝てるわけが

なかるつ

一護「そんなもんか？」

シグナム「そんなものだ」

エリオ「はは……僕にはとてもできませんよ……」

キャラ「危ないことはダメですよ……」

一護「ああ、悪い悪い……なるべく使わないようにするよ。だからそんなに心配

するな」

そう言つてキャラの頭を撫でる一護。

キャラ「はい……なんか……お兄ちゃんって感じですね一護さん」

一護「ああ……元の世界に妹がいたからな。それで慣れてるってのが理由だな」

エリオ「あの……迷惑でなければ……お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

一護「え……？別にいいけど……？」

キャラ「あ、あたしもいいですか？」

一護「だから、いいって言ってるだろ？それにあまり畏まらなくていいぞ」

エリ・キャラ『……はい！』

一護「いや……だから畏まらなくていいって……（汗）」

シグナム「ふふ……（こづいづいのも偶には悪くないな……）」



一方その頃……食堂の端に居座って様子を窺っている出歯亀たち

なのは「むうううう……」――護くんとシグナムさん近過ぎじゃない？」

フエイト「いいなあ……エリオたちに甘えられて……最近あの子たちが全然

甘えてくれない（泣）」

はやて「むむ……まさかシグナムに先越されてまうとは……ああ出会いは来い……」

ヴィータ「といかなんであたらまで此処にいるんだ？」

スバル「なのはさん……ちょっと怖いです……」

ティアナ「そんなに話したいなら混ざってくれば……」

なの・フェ・はや『それができたら苦労しないよ（せえへんのや）

！！』

ティアナ「は……はい……すみません……（汗）」

というかお前ら仕事はいいのか？

はやて「あ……仕事まだ残ってた……」

なのは「はやてちゃん……それはさすがに……」

フェイト「あ……私まだ模擬戦してない!!」

なの・はや『何故にこのタイミング!?!』

フェイト「いや……戦力の確認って隊長の仕事じゃない?」

なのは「そ……そうだけど……」

フェイト「うん!明日の早朝にみんなの前でやるっ!!」

はやて「もつすることは決まりなんやね……(一護くん…ドンマイ)

」

その頃の部隊長室……

リン「はやてちゃん!?!どこに行っただすか?」(泣)

部隊長が残っていた書類を1人で片づけようとする空曹長の姿があった。

次の日

早朝の訓練場ではライトニング分隊の隊長と新入りが対峙していた。

一護「どうしてこうなった……？」

というのも、フェイトが一護に模擬戦を申し込んだ（強要した）ためである。

ちなみに断ろうとしたら、「シグナムとしたんだからいいよね？」と、とても

いい笑顔で申し込まれたそうだ。

一護「（俺なんか悪いことしたか……？しかも、なんかみんな見てるし……）」

その頃のギャラリー側……

スバル「ねえティア。どっちが強いんだろうね？」

ティアナ「やっぱりフェイト隊長じゃないの？」

ヴィータ「そうだな」

なのは「うーん……私からは何とも言えないね」

ヴィータ「？何か知ってるみたいない言い方だな」

なのは「だって、シグナムさんと一護くんの模擬戦見てたし」

ヴィ・スバ・ティ『え！？』

はやて「ちなみに私もやよ〜」

シグナム「それに、一護にはテストロツサと同等かそれ以上のスピ  
ードがあるぞ」

ヴィータ「シグナム！？それホントか？」

シグナム「事実だ」

ザフィーラ「ほう……それが本当なら凄いことだぞ……というかや  
つと出番が……」

ここにきてようやく喋れたザッフィーであった。

エリオ「ああ……僕たちはどっちを応援すれば……」

キャロ「うっうっ……」

この2人は、自分の保護者と兄代わりの人どちらを応援すればいいかで迷っていた。

ヴィータ「お、そろそろ始まるみたいだな」

シグナム「ふ……私の見込んだ男が簡単に負けるはずがなかつ……」

シャマル「惚れたじゃないの？（ニヤニヤ）」

シグナム「な！？／＼／＼／＼何故ここにいるシャマル……！」

なのは「むっ……」

ヴィータ「お前ら……静かに見れないのかよ……」

再び模擬戦側……

フェイト「じゃあ……始めるよー護……」

「護」おっ……いつでもいいぜ」

そういつて、2人は互いに得物を構える。

一護・フェイト『ハアツ!!』

ギャン!!

2人は同時に踏み出し、ほぼ2人の間でぶつかった。

しかし、やはり一護が速いのか若干フェイトは押されてしまっていた。

フェイト「く……重い!!」

フッ……

フェイト「え!？」

突然手応えがなくなり、前へつんのめるフェイト。

ブン!!

その背後に一護が現れる。そして、その刃が振られようとした瞬間

一級警戒のアラートが鳴り響いた。

一護「何!？」

フェイト「!!」

はやて「一護くん!!虚が出たで!!クラナガンを移送中のロスト

ロギアを

襲撃したみたいや」

一護「そいつの特徴は？」

はやて「…なんでも…蛇みたいな姿やったそうや」

一護「！！！！わかった！すぐに連れて行ってくれ！！」

フェイト「その虚に何かあるの？」

一護「俺の予想が当たってれば……そいつに……あの人に俺は逢わないといけねえ」

フェイト「一護？」

一護「先に行くぜ！！」

フェイト「あ、待って！！」

しかし、一護は脇目も振らずにへりの場所へと行ってしまった。

フェイト「あの人……？」

フェイトは一護の言った言葉が引っかかっているようだった。

移動中のへり内……

一護「やっぱり……あんなのか？」

ヴァイス「一護！！見えたぞ！！」

一護「あれは……やっぱり！！」

ヴァイス「知ってるヤツなのか？」

一護「ああ……あいつは……あの人は……俺の仲間の兄貴だ……」

ヴァイス「何！？」

一護「後は下がっていてくれ！！」

ヴァイス「お、おい！？待て！！」

バサ！！

そついうが早いか、一護はへりから飛び降りる。

一護「やっぱりあんなのか！？そら昊さん！！答えてくれ！！！！」

虚？「ゲオオオオオオ！！！！」



今、ミッドチルダでの初の虚戦が最悪の形で始まるつとじていた……

続く……

第15話 現れる虚。そして……（The hollow which appears

はい、というわけで一護の覚悟をより確固たるものにするために、本来なかった

虚戦を挟みました。

出てくる虚は……もう分かるかと思うので言いません。

ちなみに名前はwiki調べです。

少し間隔が空いてしまいました。もしかすると、このようなことが偶に起こるかも

しれませんが必ず更新はするので、これからもよろしく願ひします。

それと、今回短くてすいません。

第16話 その力は何の為に…… (What sake is the power)

どうも、PVが10万、ユニークが1万を越えて驚いた黒棺です。いつも見てくださってる読者の皆さんに感謝です。

それにも関わらず、執筆が遅れてしまいました。

この話を執筆せずに無月の絵を描いたりして遊んでいた作者を許してください。

では、今回の話もお楽しみください。

突然舞い込んできた虚出現の報告。

一護は現場に向かい、そこで一つの再会を果たす……

第16話 その力は何の為に……（What sake is the power

一護「やっぱりあんたなのか!? 臭さん!! 答えてくれ!!!」

一護はその男の名前を呼ぶ。しかし、

虚? 「グオオオオオオ!!!」

ブオン!!

一護「ぐっ……! 俺の声が聞こえないのか!？」

虚? には意識がないのかそのまま向かってきた一護に対して尻尾で攻撃してきた。

一護「……やっぱり……仮面をどうにかしないといけないのか?」

臭? 「グアア!!!」

ビュッ!!!

一護「な……!! これは……!」

ジュワ……

一護「く……」

思考に気を取られて一護はヴィトリアルショットを喰らってしまふ。

咄嗟に左手に受けたが重傷だ。

一護「……………しかたねえ……………多少強引だが……………」

そういつと一護は剣を逆手に持ち替え姿勢を低くする。

ブン！！カッ……………カラン……………

そして、虚の顔の真正面に現れ仮面のみを切り裂いた。

昊？「グアアアアアア！！！！？？」

すると、虚はいきなり雄たけびをあげた。

虚？「ゲアッ！？……………」

しかし、何かに気付いたような素振りを見せると今度は沈黙してしまった。

それに構わず一護は話しかける。

一護「……………どうだ……………昊さん……………」

昊？「……………君は……………黒崎……………一護くんか……………？」

一護「ええ……………多少容姿が変わってるかもしれないけど……………あの時の死神です」

昊「ここは……………一体何処なんだ？」

一護「まさか……記憶が!？」

昊「いや……虚の自分に吞まれていた間の記憶が無いみたいだ……僕にとつて

君に逢うのはあの後直ぐの様な感じだ」

一護「……実は……あなたは本当の井上昊じゃないんです……」

昊「それは……どういう意味だい？」

一護「本物のあなたの魂はすでに尸魂界ソウルソサエティに送られてるんです。」

昊「じゃあ……ここにいる僕は……一体……」

一護「この世界には遺体みたいなヤツから記憶をそのままに新しい存在を作れる

技術があるんです」

昊「じゃあ……この記憶は……?」

一護「あなたの記憶でもあるし、もう一人のあなたの記憶でもあるんです」

昊「……君はこの世界と言ったね……それはどういう意味なんだ?」

一護「それは……そのままの意味です……ここは尸魂界とも現世とも別の世界

なんです……」

昊「じゃあ……君はなぜこんなところに……？」

一護「すみません!！」

昊「ど、どうしたんだいきなり!？」

一護「俺の所為で……井上は……」

昊「……それは……どういっ……？」

一護は昊に簡単に経緯を説明した。

昊「そうか……もう元の世界には戻れないのか……辛かったらろう？」

一護「いえ……」

昊「無理はしなくていい。辛くないはずがないんだ……そうか織姫は敵に……」

一護「はい……俺が迂闊だったせいです……俺が力を求めたから……」

昊「いや……このことで君を責めることが出来るヤツはいないよ」

一護「な！？なぜ！！」

昊「君だって被害者じゃないか……無理に罪を背負おうとするのは感心しないな」

一護「でも……！！俺は……」

昊「君にはまだ力があって、生きているんだろ？僕が言えた義理じゃないけど」

「まだやり直せるじゃないか」





一護「はい……あつて間もない俺のことを仲間と呼んでくれる大切な人たち

がいます」

昊「そうか……最後になる……一護くん……大切な人を守れ……君のその力は

復讐の為じゃない……大切な人を守る……その為にあるんだ」

一護「はい……ありがとうございます……！！」

ザアアアアアアア……

そう言い残し、昊は消えていった。

一護はしばらくの間昊が消えていった場所を眺めていた。そこへ

シグナム「一護！！無事か！？」

虚の反応が消えたため様子を見にシグナムがやってきた。

一護「……」

しかし、一護は黙って何も言おうとしない。

シグナム「……一護……一体何があった……」

一護「……大丈夫だ……」



医務室にて……

シヤマル「…はい、これで治療終了よ」

一護「悪いなシヤマル……」

シヤマル「これが私のお仕事ですもの。気にしなくていいの!」

一護「それでもだよ」

シヤマル「むう……この前の仕返し?」

一護「さあな」

シヤマル「……………ふふっ変な一護くん」

一護「じゃ、俺はもう行くよ。ありがとな、シヤマル」

シヤマル「どういたしまして。一応明日は安静にして、模擬戦とかも禁止ね」

一護「おう、分かった。お休みシヤマル」

シヤマル「おやすみなさい、一護くん」

シヤマルは一人で医務室に残り考え事をしていた。

シヤマル「うーん…まさか守護騎士のなかで一番の堅物のシグナムが恋をするなんて

予想外ね……………」

そう、考え事とは自分の仲間の恋愛事情であった。

シヤマル「それにしてもうちの人たちって浮いた話が一つもないじゃない。

まあ、みんな仕事忙しいから仕方ないんだけど……………」

というか自分にもそんな話がないのではないか？

シヤマル「一護くん……………ここに来てから怪我ばかりしてるわね……………」

シグナムのことで思い出したのか、一護の身を案じるシヤマル。

シャマル「私たちは……彼に何もしてあげられないのかしら……それにも……」

私自身は彼のことをどう思っているのかしら」

どうやら自分の気持ちがよく分からないようだその時シャマルは一護の言葉を

思い出した。

（一護「ありがとな、シャマル」）

シャマル「ぽ／／／／／はっ！？わ、わたし……」

ここにもう一人一護の魔の手にかかった女性が増えた。

その頃、とある研究所……

科学者？「ほう……彼が僕の作ったおもちゃを倒すことの出来る唯一の男か……」

薄暗い空間で一護と虚の戦闘を見ている謎の科学者らしき人物。

その後ろには培養液に入った失敗作と思われる虚の姿がある。

科学者？「ふふ……君のことも是非研究してみたいものだ……黒崎一護くん」

紐の研究所……

ジェイル「おおい！！そこは僕の名前でよくないかい！？」

地の文に突っ込みを入れているのは紐科学者ジェイル・スカリエツティである。

ジェイル「ふう……ウーノ、化け物がまた出たようだね」

ウーノ「はい、あとあの化け物の呼び名がわかりました。虚ホロウと呼ぶそう

です」

ジェイル「虚か……それで？彼は出たのかい？」

ウーノ「はい、左腕を負傷したようですが見事に撃退したそうです」

ゼスト「ジェイル……次はアグスタだそうだが……」

そこへやってきたのは数年前に行方不明になったはずのゼストであった。

ジェイル「ああ、ゼスト。すまないがその日は僕も一緒に行かせてもらうよ」

ゼスト「本気か？お前はただでさえ一般の管理局員には犯罪者扱いされている

というのに……」

ウーノ「騎士ゼストの言うとおりです！今捕まってしまうえば全てが終わってしまう」

のですよ!?!?」

ジェイル「それくらいの危険を冒してまでやるべきことなのか」

ゼスト「お前が言っていた……黒崎一護とやらに逢うつもりか？」

ウーノ「!?!」

ジェイル「ああ、早いうちに彼に逢っておこうかと思ってね。誠意を見せるために



「僕自身が行こうと思ったのを」

ウーノ「あまりにも危険すぎます!?!」

ジェイル「ウーノ…心配してくれるのはありがたい。でも、これは僕自身がやら

なければならぬし、僕自身にしかできないことなんだ」

ゼスト「……………わかった」

ウーノ「騎士ゼスト!?!」

ゼスト「私が護衛としてついておこう。ウーノもそれなら構わんだらう?」

ウーノ「わかりました……………どうかドクターをよろしくお願いします。騎士ゼスト…………」

ジェイル「すまないなゼスト」

ゼスト「構わんさ……………お前がいなければ私もメガーヌも死んでいたのだ。このくらい

どつとどつとことはない」

ジェイル「そういつつもりで助けたわけじゃないんだがね…………」

ゼスト「それより、この男に逢ってどうするのだ?」

ジェイル「それは逢ってからのお楽しみさ」

ゼスト「……………いい大人が音符はどうかと思うぞ……………」

ジェイル「僕も今思ったところだよ……………」

何とも言えない空気がその場に流れた……………」

続く……………」？

戦闘少なくてすいません。

でも、アグスタではしっかり戦わせますので、何卒ご容赦を。

関係ありませんが、みてみん様の方に数個の絵を同じ名前で投稿しています。

そちらの方もご覧になっていただけたら幸いです。

これからの主な指針として、目指せ50万PVで頑張っていこうと思います。

あと、お気に入り登録者数も100件を越えていて幸せな黒棺です。これからもこの小説をよろしく願います。

では、また次回にお会いしましょう。

第17話 しばし休憩……？(It rests for a while……)

調子に乗って連続投稿でございます。

前回の昊戦が思いのほか好評でよかったです。

昊の最後のセリフの元ネタは、多分わからないと思いますがTOEのレイスの

最後の言葉をアレンジして使いました。この言葉はかなりカッコよかつたのを

今でも憶えています。

それはさておき、今回はちょっとした閑話みたいなものです。

短いですし……まあ、あまり気にせず読んでください。

再び覚悟を決めることが出来た一護。

彼は休暇を出され、一人クラナガンの街に来ていた。

彼がそこで出会うものとは………

第17話 しばし休憩……？(It rests for a while……)

ガヤガヤ……

クラナガンの街は活気にあふれている。

一護「……意外と元の世界と違わねんだな……」

そこを一人で歩いているのは黒崎一護。彼ははやてから怪我の様子見もあるため

休みを貰っていた。しかし、彼は寮では何もすることがないのでこうして

クラナガンの街に出てきているのであった。

一護「それにしても……覚えやすい街でよかったぜ……」

この街の地理を覚えるためにきた一護であったが、思いのほか覚えやすかった

ためにすでに目標を達成していた。ちなみに、

彼がクラナガンに行くと言うと、なのは、シグナム、シャマルの3人がついていく

と言ったが、一護に仕事はないのか？と聞かれて全員沈黙してしまった。

「護」「ふう……もつすることもねえし……帰る」「やめてくださいといっ  
！」「……」

こんなところも違わねえのかよ……」

そういつと「護は声のした方へ向かっていった。

女性「離してください……！」「

ナンパ1「いいじゃねえかよ……俺たちがいいところ教えてやるぜ」

ナンパ2「そうだけ。見た感じ暇してる感じだしいいだろ？」

女性「（こんなところじゃ力は使えない……それに私は戦闘向きじ  
やないし……」

誰か……（「

「護」「おい……随分ご機嫌なことやってんじゃねえか……」

ナンパ1「ああん？てめえ誰だよ？」

ナンパ2「俺たちの邪魔してんじゃねえよ!!」

一護「はあ……どこにでもこんな奴らはいるんだな……おい、あんた」

女性「は、はい!？」

一護「少しの間俺の後ろにいてくれ」

女性「わ、わかりました」

ナンパ1・2『無視してんじゃねえー!!』

一護「はあ……こんなとこまで同じなのか……」

ガシガシッ!!ギリギリ……

一護は二人のパンチを軽く避けると、その腕を掴んで思い切り捻った。

ナンパ1「あいたたたた!!」

ナンパ2「いてえ!いてえよお!!」

一護「……で?これ以上続けんのか?続けるなら……」

ナンパ1「ごめんなさい!ごめんなさい!!もうしませんから!!」

ナンパ2「すんません!!ホンマすんません!!」

一護「……………さっさとどっか行け……………目障りだ……………」

ギロツ!!

ナンパ1・2『ヒイヒイヒイヒイ!!!!!!』

ピユウウウウウ!!

そして、2人組はものすごいスピードで逃げ出した。

一護「つたく……………あんた……………怪我……………してねえか?」

女性「//////////えっ!? はははい!! だ、大丈夫です!!」

一護「そうか……………よかった……………じゃあな……………もうあんな奴らに捕まるなよ?」

女性「あ……………あの!!」

一護「ん? どうした?」

女性「今お時間はありますか?」

一護「ああ……………今日は仕事がないから大丈夫だけど……………」

女性「あの……………あなたは見た感じこの街は初めてですよね?」

一護「ああ……………でも大体の地理は覚えたぞ?」



女性「大体なんでしょ？なら私に細かいところまで案内させてください」

一護「なら……………折角だからお願いするぞ？」

女性「はい！任せてください！あ、自己紹介がまだでしたね。私の名前は

ドゥーエ・アルファードです。ドゥーエと呼んでください」

一護「ああ、俺は黒崎一護だ。好きに呼んでくれ」

ドゥーエ「黒崎……………一護さん？」

一護「ああ……………そうだけど……………？」

ドゥーエ「……………！？！？……………？（すすすすいませんんドクター！！ドクターより先に

逢ってしまいました。……………あ、でもこれは不可抗力だし  
いいよね？」

うん、大丈夫大丈夫。役得、役得（

一護「……………？どうかしたのか？」

ドゥーエ「いいいえ！なんでもないんです！！さ、早く行きましょ  
う……………！」

一護「おおおい！？そんなに引つ張るなってお前意外と力強いな

！？あれ？

こんなこと前にあったあああああ〜！？」

その頃、機動六課……

乙女3人『む！？一護（くん）に悪い虫がついた気が……』

どうでもいいけどこいつら人間やめてないか？

ドゥーエ「……すみません……結局あまり案内もできずに私の買い物まで手伝って

賣ってしまっ……」

一護「いいさ……俺が好きでやったことだ。あんたが気にする必要はないよ」

ドゥーエ「一護さん……ありがとうございます」

「護」……どういたしまして？」

ドゥーエ「どうして疑問形なんですか？」

「護」さあな？」

ドゥーエ「ふふ……おかしな人……（でもそんなところが……ってキヤー！ー）」

……こいつは頭の中で何考えてるんだ……

「護」そういえば……明らかにあなたのじゃない服を買ってたよな？あれは？」

ドゥーエ「あれは私の実家にいる妹たちの服です。まだ帰ることが出来ないのです

このくらいのことしかできないんです」

「護」そうか……でも、いつか会えるんだろ？」

ドゥーエ「はい、私のいない間に生まれた子もいるので逢うのが楽しみなんです」

「護」そうか……っと、もうこんな時間か……ありがとなドゥーエ。お前のおかげで

有意義な休みが過ごせた」

ドゥーエ「こちらこそ助けてもらってばかりで本当に感謝しています。

……あの……

連絡先を教えてもらってもいいですか？」

一護「ああ、そんなことくらいいいぞ」

ドゥーエ「また……逢って貰えますか？」

一護「おう！またこの街を案内してくれよ」

ドゥーエ「はい……！」

そういつて2人はそれぞれ帰路につくのだった。

その日の晩、ひm……ジェイルの研究所

ウーノ「ドクター。ドゥーエから連絡が入っています」

ジェイル「そうか……繋いでくれ」

ウーノ「はい」

ウーノがそう答えるとジェイルの前に画面が一つ現れる。

ジェイル「ドゥーエ、君から連絡を入れてくるのは珍しいね……どうしたんだい？」

ドゥーエ「ドクター……私……好きな人が出来ました!!」

ジェイル「!？」

ウーノ「!?!?!」

2人「!?!?!?!?!」

2人「な、何だつて〜!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

2人の大声が研究所内に響き渡った。

ゼスト「ジェイル!?!どうした!なにがあつた!?!つて……なんだこれは?」

あわてて駆け付けたゼストが見たのは、画面の向こうで「キャッ、言っちゃった」

とか言つて体をクネクネさせているドゥーエと、放心状態になっている2人の姿で

あつた。

ゼスト「とりあえず……ジェイル、しっかりしろ!ウーノもだ!」

ジェイル「ふう……あまりのことに意識が飛んでしまったよ……それ  
れで？相手は一体

誰なんだい？」

ドゥーエ「……………黒崎一護さんです？」

ジェイル「なっ…………ドゥーエ！！僕もまだ逢っていないのにズルい  
じゃないか！！」

ゼスト「ジェイル…………論点がずれてるぞ…………」

ドゥーエ「うふふ…………早い者勝ちですよ？ドクター」

ジェイル「うづうづう！！…………」

ゼスト「はあ……………」

ウーノ「すいません、騎士ゼスト……………はあ……………」

このカオスな空間に当てられてしまった2人であった。

一方その頃、機動六課…………

はやて「あ、一護くんの端末に女性のものと思しき連絡先が!？」

一護「おい!?!なに人の端末勝手に見てんだ!?!」

ガシッ!!

シグナム「一護よ……今日は確かにお前は休暇だった……しかし、その間も我々は

訓練や仕事をしていたのだ……それにもかかわらずお前は……」

一護「お、おい?シグナムさん!?!」

なのは「これはちょっとO H A N A S H Iしなきゃダメだね……」

一護「なのはまで!?!」

シヤマル「一護くん……(ニコッ)」

一護「シヤ、シヤマル……助けて「ガシッ!?!」へ?」

シヤマル「私がいるからちょっとくらいきついても大丈夫よね?」

一護「え？ちよつと……いやいやいや！俺は何もしてないや待つて……」

ウズダンドコブーン……！」

3人によって制裁された一護であった。

一護「俺……何も……してないのに……がくっ」

続く……

あ、ちなみに誤解はあとで解けました（笑）



第17話 しばし休憩……？(It rests for a while……)

やってしまった！！！！！！！

もうやりたい放題ですね。このままで大丈夫なのか？

ここであえて変化球を入れてみました。さてさて、どうなってしまうのか？

フラグはプロットに入っていないですよね……

次回でようやくアグスタになります。時間かかり過ぎですね。

おそらく、前編と後編に分けるかと思えます。長くなりますので。感想など随時お待ちしております。

では、また次回にお会いしましょう。

第18話 ホテル・アグスタ前編 (Deathberry Returns)

少し間隔が空きましたが、なんとか投稿です。

今回はアグスタです。さてさて、一護はどうなるのやら……

まあ、サブタイのまんまなんですが(笑)

では、今回もお楽しみください。

ついに訪れた、一護の六課としての最初の任務。

そこで一護の手にするものとは……

12/8 挿し絵を修正しました。

第18話 ホテル・アグスタ前編 (Deathberry Returns)

六課へリ移動中……………

現在、機動六課の主な人員はへりの中でこれから向かう現場での説明と任務の

目的について話しているところである。

はやて「……………違法研究で指名手配されてる広域次元犯罪者……………  
ひm……………」

ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める……………」

キャロ「ひm……………?」

フェイト「はやて?」

はやて「んん!なんでもないんよ!…」

全員『??????』

はやて「あははははは……………」

一護「……………なあはやて…この罪状…全部が本当にこいつだけのものなのか?」

フェイト「……………どづいづ意味?」

一護「いや……………やけにこいつは罪が集中してるなと思ってな……………」

フェイト「それだけのことをしてるんだ……………その男は……………」

一護「こいつがねえ……………まあ……………いかにも変態みたいな顔してるけどよ……………」

はやて「変態で……………」

一護「今日の現場にもこいつのガジェットが出てくる可能性があるのか？」

はやて「そうや。それに、ロストログアの事件には必ずと言っていいほど虚が

出てきてる。それなら一護くんの出番やろ？」

フェイト「虚についてもスカリエッティの線がでてるから、本格的な捜査は私が

担当するけど一応みんなも覚えておいて」

全員『はい!!』

一護「分かった」

そして、画面がスカから建物の写真に代わる。

リン「そして、これが今回向かうホテル・アグスタ」

なのは「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今日のお仕事ね」

はやて「一護くんは虚はどこに出るか分からんから最初は一応会場警備について

もらうな」

一護「ああ、いいぞ。虚が来ても俺なら分かるしな」

キャロ「……………？シャマル先生…その足元にある箱は何ですか？」

シャマル「？ああ、これ？ふふ……………隊長たちと一護くんのお仕事着」

一護「??????俺も？」

ホテル・アグスタ受付前……

「一護」……ふっ……やっぱりこういう畏まった服装は苦手だな……」

そう呟いたのはスーツに身を包んだ黒崎一護であった。

まあ、文句は言いつつもしっかりと着ているあたり律義さがうかがえる。

「一護」やっぱり女ってのは……時間の掛かるもんなのか……」

なのは「おまたせ」

はやて「いや〜ごめんな？更衣室めっちゃ混んでてん」

フェイト「退屈してなかった？」

「一護」いや……それほど待ってねえよ……へえ……3人とも似合ってるじゃないか」

はやて「あらそうっ、うまいこと言っちゃない。でも、一護くんも似合ってるで」

「一護」そうか？俺はこういう服はどつも……」

フェイト「はやての言つとおりだよ。ね、なのは」

なのは「……」

フェイト「……………なのは……………?」

なのは「//////////プシュー!!」

はやて「あかん!!なのはちゃんがオーバーヒート!!」

フェイト「なのは……………一護に女の人が話しかけてるよ(ボソッ)」

すかさずフェイトが耳元でささやく。すると、

なのは「おゝはゝなゝしゝなゝのゝ!!!!!!」(怒)

一護「うおっ!?!な、何だ!?!」

物凄い勢いで復活して一護にレイジングハートを突き付けた。

フェイト「なのは、冗談だよ」

なのは「ふえ……………?」

一護「……………なのは……………とりあえず俺の喉元からレイジングハートを引いて」

くれないか……………」

なのは「ああ!?!じ、じめんね一護くん!?!」

一護「ふう……………死ぬかと思った……………(汗)」

はやて「はははは……とりあえず中に入るうか」

ホテル・アグスタ内……

はやて「会場内の警備はさすがに厳重つと……」

なのは「一般的なトラブルには十分に対処できるだろうね」

さすがに真面目に仕事をこなしている2人である。

なのは「フェイトちゃんは一護くんと……いいなあ……」

前言撤回。約1名、真面目でない者がいるようである。

はやて「まあまあ、そのうちまた戻ってくるて」

なのは「ううううう〜!!」



その頃の2人……

フェイト「バルディッシュ……オークション開始まであとどのくらい？」

バル「Three hour and twenty-seven minutes（3時間27分です）」

一護「結構な時間があるな……」

フェイト「うん……それまでに全体の構造も把握しておこう?。」

一護「ああ、了解だ!。」

こちらは真面目だったようだ……

?????「あれ……?。」

?????「……先生……?どうかしましたか?。」

?????「ああ、いえ……」

その頃のスターズ3と4……………

スバル（（でも今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か））

ティアナ（（そうね……………あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長たちの

こと））

2人の警備位置は離れているため、念話で会話している。

スバル（（うーん……………父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど……………八神部隊長

……………中略……………ま、八神部隊長の詳しい出自

とか能力の詳細

は特秘事項だから私も詳しくは知らないけど……………）

ティアナ（（レアスキル持ちの人は皆そうよね……………））

スバル（（ティア？何か気になるの？））

ティアナ（（別に……………））

スバル（（そう…じゃ、またあとでね））

ティアナ（ん……………）

ティアナ「（六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常……………隊長格は全員

オーバーS、副隊長でもニアSランク……………ほかの隊員たちだって前線から

管制官まで未来のエリートたちばかり……………あの年でもうBランクを

取ってるエリオとレアで強力な竜召喚士のキャロは、2人ともフェイト

さんの秘蔵っ子……………危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊

で優しい家族のバックアップもあるスバル……………それに謎の生命体の虚

を倒すことが出来て、シグナム副隊長に勝てる黒崎一護さん……………

やっぱり……………ウチの部隊で凡人はあたしだけ……………」

ティアナはかなり悩んでいるようであった。才能ある人物たちのかで埋もれている

凡人の自分に対して……………

ティアナ「（だけど、そんなの関係ない……！！あたしは立ち止まるわけには

いかないんだ）」

その頃、アグスタ周辺の森の中……

ジェイル「ハアハアハア……ゼ……ゼスト……連れて行ってくれるのはありがたい

けど……少し休憩させて……」

ゼスト「なんだ……また休憩か……そんなことだからひm」言わせないよ！！」……

「元気ではないか……では休憩はいらないな」

ジェイル「ああ！？待ってゼスト！！これ以上は無理って……何も引張っていくこと

……うあああああ〜！……！！」

こいつらは間に合うのか？

アグスタ屋上……

キイイイイン！！

シャマル「！！クリアルヴィントのセンサーに反応……シャリー  
！！」

シャリー「はい！！来ました…ガジェットドローン陸戦1型機影  
30…35、

陸戦3型2、3、4それと……数体の虚も確認！！」

アグスタ地下……

シグナム「エリオ、キャロ…お前たちは上に上げれ……ティアナの  
指揮でホテル前で

防衛ラインの設置をする」

2人「はい!!」

シグナム「ザフィーラは私と迎撃に出るぞ」

ザフィーラ「心得た……守りの要はお前たちだ……頼むぞ……」

エリオ「うん！」

キャロ「がんばる!!」

再び屋上……

シャマル「前線各員へ……状況は広域防御戦です。ロングアーチ1の  
総合回線と合わせ

て、私シャマルが現場指揮を行います」

フォワード各員『了解!!』

その頃、会場内……

ズン!!

一護「!!これは……霊圧!!フェイト…虚が出たみたいだ…俺も前線に出る!!」

フェイト「分かった!2人には伝えておくね」

一護「ああ」

そついうと一護は現場へ向かって走っていった。

シグナム「私が大型をつぶす……虚は……」

一護「シグナム、ヴィータ!!」

ヴィータ「ちょうどよかった。虚は任せていいか?」

一護「ああ……その為に俺はここに来たんだ」

シグナム「……一護……気をつけるよ……」

一護「シグナム……ありがとな！そっちも気をつけるよ？」

ヴィータ「誰に言ってるんだよ」

シグナム「ふ……そうだな」

一護「じゃ……行くぞ!!」

そして、3人は分かれて迎撃に当たり始めた。

虚「グオオオオオオ!!!!」

一護「おせえ!!!!」

ズバアツ!!

一護「こいつら……もしかして石田の時のヤツか？」

虚「ギユウウウウウ!!」

一護「!?!?な……」



虚「ポオオオオオク!!」

一護「またテメーかよ!!しかも相変わらず牛かポークのどっちだよ!!」

ドシユツ!!

虚「チキイイイイン!!」

ザアアアアアア……

一護「チキン増えてるし……」

その頃のカジエツト組……

シグナム「ふう……大型の相手も楽ではないな……」

ガシャガシャ……

そこへ、数体のカジエツトが再び現れた。

シグナム「!?敵の増援か?」

しかし、

ドゴン!!

シグナム「なっ……！？味方を攻撃した？」

その頃、森の奥のスカ……

ジェイル「ふふふふふ……やはり粗悪品のガジェットのような……私の玩具と

比べたら脆い脆い……」

ゼスト「ルーテシア……危険だと言ったではないか……」

ルー「いいの……ドクターはお母さんを助けてくれたから……」

ジェイル「すまないなルーテシア……このまま敵のガジェットを攻撃し続けて

おいてくれ」

ルー「分かった」

ゼスト「ジェイル……やはり行くのか？」

ジェイル「ああ……ここらが潮時だと思ってね……なに、君たちの

「こともお願いする

つもりだから安心してくれ」

ゼスト「そういうことではない！！私たちは助かってもお前は……」

ジェイル「いいのさ……それにまだどうなるか決まったわけじゃないしね」

ゼスト「ジェイル……」

ジェイル「さあ、行くこうじゃないか……彼に……黒崎一護に会いに……」

防衛ラインでは……

スバル「副隊長たちとザフィーラさんそれに一護さんもすごい！」

ティアナ「これで……リミッター付き……くっ……」

キィィィィン……！

ルーテシア「……!? 敵の動きがよくなった!?!」

ゼスト「何!?!」

ジェイル「向こうにもルーテシアの様な人間がいるのか!?!」

シグナム「ハアアアアア!?!」

ガキーン!?!

シグナムの剣はガジェットのアームに受け止められていた。

シグナム「何!?!」

ヴィータ「ええい!?!」

ヒュン!?!

ヴィータの魔力球は躲されてしまう。

ヴィータ「急に動きがよくなった……?」

シャマル「有人操作に切り替わった!?!」

シャーリー「それが…さっきの召喚士の魔法？」

シグナム「ヴィータ…ラインまで下がれ。向こうに召喚士がいるなら新人たちの

もとに回り込まれるかもしれん」

ヴィータ「!?分かった!！」

シャマル（ザフィーラ！シグナムと合流して!!!）

ザフィーラ（心得た）

シャマル（一護くん!!虚が終わり次第防衛ラインまで後退して）

一護「!?!?!シャマルか…向こうには聞こえねーだろうが…了

解!！」

キイイイイイン!!

キャロ「遠隔召喚…来ます!！」

ティアナ「迎撃…行くわよ!！」

3人「おう!！」

ティアナ「(今までと同じだ…証明すればいい…自分の能力と  
勇気を証明して

…私はそれで…いつだってやってきた!!(」

ズウウウウウン!!

その時、これまでで一番大きい霊圧が出現した。

一護「な…この霊圧は…!!防衛ラインの…く…間に合っ

てくれよ……………」

ブンー！

シャマル「防衛ラインもう少しだけ持ちこたえててね！」

スバル「はい！！！」

シャマル「ヴェータ副隊長がすぐに戻ってくるから！！！」

ティアナ「守ってばっかじゃ行き詰ります。ちゃんと全機落とします！！！」

シャーリー「ちょ……………ティアナ！？大丈夫！？無茶しないで！！！」

ティアナ「大丈夫です！毎日朝晩…練習してきてんですから！！！エリオ、センター」

に下がって！！」

エリオ「！！？」

ティアナ「私とスバルのツートップでいく！！！」

エリオ「！！はい！！！」

ティアナ「スバル！！クロスシフトA、行くわよ！！」

スバル「おおう！！」

スバルがウイングロードでガジェットたちを引き付ける。

ティアナ「（証明するんだ……特別な才能や凄い魔力が無かったって……一流の隊長

……私は……  
たちのいる部隊でだって……どんな危険な戦いだって

ランスターの弾丸は……ちゃんと敵を撃ち貫けるんだって！！」

バチバチ……

シャーリー「ティアナ！4発ロードなんて無茶だよ！！それじゃティアナもクロス

ミラージュも……」

ティアナ「撃てます！！」

クロス「Yes」

ティアナ「クロスファイヤー……シューート！！！！」

ドガッ！ガン！ガン！ドガン！！



ティアナ「うあああああああ！！！！！！」

しかし、一発の弾丸が逸れてスバルへと向かっていった。

ヴィータ「！！間に「下がってる！！」！？」

ギョーン！！

射線に入ろうとしたヴィータの横を何かが通り抜けた。

スバル「え！？」

スバルは当たると思い目を閉じる……しかし、

ブン！！

ドガァン！！

爆発音はしても、いつまでたっても痛みが来ない……なので目を開けると

そこには

一護「ぐっ……ってっ……」

スバルをかばって弾丸を背中で受けた一護の姿があった。

スバル「一護さん……なんで……?」

ヴィータ「ティアナ!!このバカ!!無茶した上に味方撃ってどうすんだ!!」

ティアナ「あ……」

スバル「あの……ヴィータ副隊長……今のも……その……コンビネーションの内……」

ヴィータ「ふざけるタコ!直撃コースだよ今は!!」

スバル「違うんです!今のは私がいけないんです」

ヴィータ「うるっせえ!馬鹿ども!!後は私がやる……一護連れてすっこんでろ!!」

2人『!!』

一護「わりーけど……それは無理みてーだ……」

ヴィータ「何?」

一護「ここに残るのは俺だけだっ……どうやら奴さんが来たらしい……」

???「ほう……儂が相手をする前に既にボロボロとはな……些か残念ではあるが……」

まあ、よいか……この手で貴様を殺せるのならそれでよい」

一護「！？てめえ……まさか……」

……「ほつほつやはり儂のことは覚えてるようじゃな……黒崎  
一護」

一護「グラウンド……フィッシャー……」

フィッシャー「やはりこの姿で来て正解だったようじゃな……」

一護「何！？」

フィッシャー「貴様も破面アラシカルぐらいは分かるだろう……儂もなったのじ  
ゃよ」

一護「な……」

フィッシャー「見せてやろう！私の本当の力を……」

そういうと、フィッシャーは自分の仮面を割った。すると、

ズウウウウウウン……！

そこに、ビルくらいの大きさの刀を持った、巨大な虚の様なものが  
出現した。

一護「てめえ……いつの間に……！！」

フィッシャー「破面化したのは貴様にやられてからすぐじゃ……も

つともこの姿に

なったのは藍染とかいう輩に会ってからだかな……」

一護「そうかよ……まあ、いつなったにせよ……てめえは俺が倒す……それだけだ」

フィッシャー「ほうほう……面白いことをぬかすな小僧……あの時、母の仇を討て

なかつた貴様に言われるとはな……」

一護「……だろうが……!!」

フィッシャー「ん?」

一護「てめえが……だろうが……!!」

フィッシャー「聞こえんな?」

一護「おふくろを殺したのは……てめえだろうがあ!!!!!!!!」

ジャキツ!!

一護は単身でフィッシャーの巨体に斬りかかるうとする。しかし、

シグナム「一護!!」

シグナムによってそれは止められた。

一護「なにすんだ!! 離せよシグナム!!!!」

シグナム「だめだ!! 今のお前では勝てん!! 殺されてしまつぞ!!」

フィッシャー「その女の言つとおりだぞ? 前にも言つたであるつ…  
…短慮とな」

一護「く……………!!!!」

シグナム「ヴィータ! ザフィーラ! シヤマル! ヤツの足止めをするぞ!!」

3人『おう(了解)』

一護「(俺は……………何をやってるんだ……………)」

そうしている間にも、フィッシャーは一護とホテルの方へ歩を進めていく。

一護「(仲間を助けるどころか……………護られて……………俺は……………何のために……………)」

????「(……………な人を護れ……………)」

一護「!!!!?」

????「(一護くん……………大切な人を護れ……………君のその力は……………)」

一護「(そつだ……………俺の力は……………!!!!)」

一護・昊「俺（君）のその力は……復讐の為なんかじゃない……大切な人を守る……」

そのためにはあるんだー！（……）

「……一護……」

一護「え……？」

「……？」「よつやく……私の声を……聞いてくれたな……」

一護「斬……月……？」

斬月「久しぶりだな……一護……」

一護「おっさん……」

斬月「一護……今一度お前に問おう……お前は私を何のために振う？戦うためか？」

復讐の為か？」

一護「……どっちでもねえよ……」

斬月「ほう……」

一護「勝つために……勝つてあいつ等を護るために……もう一度……あんたの力を……」

貸してくれ!!」

斬月「ふ……………いいだろう!!」

ザアツ!!!!

それまでその場に立ち尽くしていた一護はその背の鞘を外し、剣を納めて腰の位置に

持ってくる。

シグナム「一護!!?何をしている!!下がれ!!」

フィッシャーを抑えきれずに後ろに飛ばされながらシグナムが叫ぶ。

だが、その叫びも虚しく一護の前までフィッシャーはやってくる。

フィッシャー「何をやる気からんが……………もう飽いた……………死ぬがいい!!」

そして、その巨大な刀が一護のもとに振り下ろされた。

シグナム「一護!!!!!!!!」

一護「なあ……もう一度あの時のアレ……言ってくんねえか？」

斬月「……ふっ……いいだろう……」

一護「わりーな」

斬月「敵は1人、お前も1人……何を恐れることがある……恐怖を捨てろ……」

前を見る……進め……決して立ち止まるな……退けば老いるぞ……

臆せば死ぬぞ……叫べ……我が名は……！！！！」

一護「斬月……！！！！」



今にもフィッシャーの刀が振り下ろさねえよんじやんじやんね……

……恐怖を捨てる……

……前を見る

……

……進め……

……決して立ち止

まるな……

……退けば老いるぞ……

……臆せば死ぬ

ぞ……

……叫べ……

……我が名は

……

一護「斬月……!!!!!!」

ドォア……!!!!!!

その名を口にした瞬間……物凄い爆風が辺りを覆った。

フィッシャー「な……なんじゃ!?!」

フィッシャーの刀を弾き飛ばしたことから威力の高さがうかがえる。

シグナム「一護……どこだ?」

シヤマル「一護くん……」

やがて、段々と煙が晴れてくる……そして、そこには……

> i 3 6 7 8 4 | 3 5 0 6 <

本来の力を取り戻した死神の姿があった。

続く

第18話 ホテル・アグスタ前編 (Deathberry Returns)

投稿が遅くなつてすいません。

というのも、原作（リリカル）の映像を見直してました。

やはり難しいですね……特にティアナの心理描写とか……

後半はなんか勢いで突っ走った感もありますし……

ともあれ、一護によく死神の力が戻りました。

でもよく考えたら原作と同じ感じになつてるような……

まあ、次回も楽しんでください。

今回は戦闘です。巨大なフィッシャー相手に一護はどのような戦いを

見せるのか……それは作者の力量次第……（泣）

また、感想や意見などもお待ちしております。

いや〜時間がかかってしまいました。

というのも、今週のBLEACHの具合を見てから投稿したいと思  
いまして。

そしたらいい感じに挿し絵のモチーフが……

一応、この話は原作を読んでからご覧になることをお勧めします。  
似たようなというかほとんど同じような場面がありますので……

あと、設定画の方もちょうどよかったですので描きあげました。

設定の話に載せています。気が向いたらご覧になっていただけたら  
幸いです。

では、今回もお楽しみください。

とうとう死神の力を取り戻した一護。

フィッシャーとの長き因縁に遂に終止符が……

そして、ジエイルたちの真意とは……

煙の中から現れたのは、黒い着物を身に纏い身の丈ほどの大刀を持った死神

黒崎一護であった。

ドスッ……………

一護はその大刀を地面に突き立てると静かに胸に手を当てる。

一護「これは…………ルキア…………恋次…………白哉…………剣八…………冬獅郎…………一角…………」

自分の中にある微かな霊圧の痕跡にかつての仲間たちの霊圧を見つけた一護。

一護「…………そうか…………みんな…………俺の為に…………俺は…………1人じゃ無かったんだな」

思わず泣きそうになるが、それを堪えて敵の姿を見据える。

フィッシャー「貴様…………なぜ今頃になつて死神の姿を…………」

一護「なに…………大したことじゃない…………ほんのさっきまで死神にはなれなかったって

だけだ……………」

シグナム「一護…………その姿は……………」

一護「わりい……今はそんなに余裕がないから後で話す。それまで待っててくれ……」

シグナム「一護……」

シヤマル「怪我……しないでね？」

一護「心配すんな。すぐに終わらせる」

フィッシャー「クククククク……すぐに終わらせるだと？あまり調子に乗るなよ」

小僧「……」

ガシャ……

一護「調子に乗ってるわけじゃねえよ……事実を言ったまでだ……」

フィッシャー「何……？」

一護「お前のその斬魄刀……昔の俺にそっくりだな……」

フィッシャー「フフフフ……何を言い出すかと思えば……儂の斬魄刀をああの頃の貴様

の刀と一緒にするとは……ならその力の差を思い知らせてくれる……」

一護「……」

それに対し、一護は無言で斬月を振った。

> i 2 9 6 6 8 — 3 5 0 6 <

ズアッ！！！！！！！

フィッシャー「！！！！！！！！！！」

斬月から放たれた衝撃波がフィッシャーの巨体を包み込む。

シグナム「な…なんという力だ……」

フィッシャー「グッ……貴様……今が月牙天衝というヤツか……  
しかし…残念

だ… た… た… た… この程度の攻撃では儂は…」

ピッ………ズズウウン！！！！

フィッシャーの斬魄刀は刀身が中ほどから折れてしまっていた。

フィッシャー「なっ！？儂の斬魄刀が！？」

衝撃波の中から出てきたフィッシャーの顔色が驚愕に染まる。

シグナム「………月牙天衝………？（今の斬撃に………霊圧はあったか  
？）」



〈回想〉

一護「月牙天衝のやり方あ？」

シグナム「そうだ！私に是非教えてほしい！！そして2人でおそろいの技を……」

ゴニョゴニョ……………」

すっかり乙女思考のシグナムである。（方向性がおかしいが）

一護「?????そうは言ってもな……月牙天衝は元々俺が死神だった頃に使っていた

刀の技なんだよ」

シグナム「むう……………では私では使えないのか……………」

一護「似たようなのは出来るかも知れねえけどな」

シグナム「それはどうやるのだ!??」

一護「ええと……まず、月牙天衝つてのは斬撃の瞬間に刀が俺の霊圧を喰って、刃先

から超高密度の霊圧を放出することで斬撃そのものを巨大化して飛ばすんだ」

シグナム「では、霊圧を魔力に置き換えてすれば……………」

一護「まあ、似たような技は出来るだろうな。特殊な装置とかもいるかもしれないねえ」

けど……」

〈回想終了〉

シグナム「（先ほどの斬撃には霊圧は感じ取れなかった……では……あの一撃は？）」

一護「やっぱりな……てめえのその刀には霊子が詰まってねえんだ……ただフワフワ

と膨張して刀の形を成しているだけ……だから昔の俺と同じなんだ……」

フィッシャー「!？」

一護「それに……今の斬撃は月牙天衝じゃねえ……？剣圧？だ」

ゴウツ「……………」

フィッシャー「な……何じゃ……何のなのじゃこの霊圧は……………」  
「……………」

尋常ではない一護の霊圧にフィッシャーに動揺が走る。そして、

一護「月牙天衝」

断罪の斬撃がフィッシャーに振り下ろされた。

ドン!!ゴアアアアアア!!

シグナム「く……………!!」

シャマル「きゃっ……………」

ザフィーラ「な……………なんという……………!!」

ヴィータ「くうううう……………」

……………

フィッシャー「ば……………馬鹿……………な……………」

ボボボツ……………ボボボボボボ……………ザアアアア……………

フィッシャーはそう断末魔を残すと、他の虚と同じように消えていった。

一護「やっと……………終わったよ……………おぶくろ……………」

10年にも渡る長い因縁がここに終わりを告げた。

その頃のジェイル……

ゼスト「な……！？これが……黒崎一護の実力なのか……！！」

ジェイル「まさか……これほどは……」

2人が見ている画面には、巨大な虚がいた所から後ろ50mほどま  
でに続いている

斬撃の跡があった。

ゼスト「これほどの男が管理外世界にいたとは……」

ジェイル「やはり君しかいない……奴らの……最高評議会の思惑  
を止められる

のは……」

一護が死神の力を取り戻す数分前のホテル内……

ズズウウウウン！……！！

グランドフィッシャーの破面化により生じた地響きはホテルにも伝わっていた。

はやて「な……これは……ッ！？何やあのデカ物は！？」

????「はやてー！！」

はやて「！？ロツサ？どうして此处に……」

現在、はやてに話しかけているナンパおと……失敬……古いず……

小野D………

もとい青年はヴェロツサ・アコース査察官。はやての兄の様な立場の人間である。

ロツサ「そんなことは後だ！早く此处から避難しろ！」

はやて「せやかて……部隊長のうちが現場を離れるわけにはいかんのか」

ロツサ「例の黒崎一護がいるからか？しかし、あれほどの大きさの化け物を

相手には………」

ドン！……！！

はやて「な、なんちゃって……倒しとる……」

ロツサ「こ……これは……（黒崎一護……彼の力は強大過ぎる……）  
…一応注意して

おくか……（）」

また、ホテル内の別の場所では……

フェイト「シャーリー！？何があったの！？」

シャーリー「そ……それが……虚が出たと思ったら……いきなり仮面を剥いだんです」

なのは「仮面を？」

シャーリー「はい……そしたら……虚がいきなり巨大化して……」

フェイト「巨大化！？今どついう状況なの？」

シャーリー「それが……えっ！？一護さん！？どうしていきなり……  
……お母さんの

……仇……？」

2人『！！！！！！！！？？？？？』

シャーリー「く…………お2人ともいつでも出れるようにしててください。フォワード陣

を下がらせますので」

ブツッ…………

なのは「…………お母さんの…………仇の…………虚？」

フェイト「そんな…………じゃあ一護は…………」

????「あれ…………？2人ともどうしたの？」

なのは「ユーノくん!？」

そこに現れたのは、2人の幼馴染で先ほどまで壇上でロストロギアについて説明して

いたユーノ・スクライアであった。

ユーノ「少し会場の外に出よう?何かあったみたいだし…………」

フェイト「うん…………」

なのは「…………わかったよ…………」

会場の外に3人が出る。そこには、ビルほどの大きさの巨大な虚が  
1人の青年に刀を

振り下ろそうとしている光景があった。

なのは「一護くん！？どうして避けようか……」

~~~~~斬月！！！！~~~~~

ドオア！！

ビリビリビリッ！！

一護から発せられた爆風の衝撃波が結構な距離のあるなのはたちの
位置まで

届いた。

ユーノ「な……なにが……！？」

フェイト「一護………？」

そして、煙が晴れて死神となった一護の姿が現れる。

なのは「！？あの姿は？」

フェイト「完現術じゃ……ないの？」

ユーノ「……彼の服装……地球の和服に似てるね」

フェイト「そういえば……死神の服装は全部日本の着物みたいなの
だって一護が」

言ってた気が……」

なのは「じゃあアレが……一護くんの本当の力なの？」

ユーノ「（そうか……彼が……黒崎一護……彼なら……きっとなのはを……）」

ユーノは先ほどからのなのはの反応で大体のことを把握したようだ。

~~~~~月牙天衝~~~~~

ドン！……ゴアアアアアア！……！

フェイト「なっ！？一撃で……？」

なのは「……こんなに強いなんて……」

ユーノ「少し……話してみたいな……彼と……」

フエイト「ええっ!？」

なのは「????????」

この中で状況が呑み込めてないのはなのはだけのようだ。

時間は戻って、一護たちのいる現場……………

現在は検証班によって、ガジェットの残骸などの調査が行われている。

一護「シグナム」

シグナム「どうした?一護」

一護「ここにおいても俺はあまり役に立たなそうだから見回りしてるぞ?」

シグナム「ああ……………あまり遠くへ行って迷うなよ?」

一護「……………お前は俺をなんだと思ってるんだ……………」

シグナム「冗談だ。帰ってきたらお前のその姿のことも話してくれるのだから?」

一護「ああ。それじゃ……行ってくるよ」

数分後……

一護「……やってしまった!!!!!!」

ものの数分で迷子になった死神がそこにいた。

一護「く……霊圧を探ろうにもこのヤツら魔力と混じって感じ  
づらいし……」

????「やあ……お困りのようだね!!」

一護「!?!?誰だ!?!」

????「私が誰か?それほどまでに知りたいというなら教えて」さ  
っさとしろ!?!」

ガアンー！！

????「痛い！！！！槍で殴るなんて酷いじゃないかゼスト！！！」

ゼスト「うるさい！さっさと始めんお前が悪いんだジェイル！！！」

一護「ぽかーん……………」

ジェイル「ほら！ゼストのせいで黒崎くんが固まってるじゃないか！！！」

ゼスト「な…………お前がふざけるのが悪いんだろー！！！」

ギャーギャー！！ワーワー！！ボコメキグシャ…………ギャース！！！！

仲間割れ中です。（但し一方的）しばらくお待ちください……………

数分後ようやく復活した一護の前には、異常に顔の膨れ上がった紫髪  
の男と、

ガタイのいいどこかすつきりした表情の男の姿があった。

一護「……………あんたら俺になんか用か？」

ジェイル「ふお…………ふおうだよ…………ふいみにおねふあいがあっふえ…………

…」

一護「????????」

ゼスト「……………すまん……………治療をさせてくれ……………話が進まん……………」

ジェイル治療中……………

ジェイル「実は折り入って君にお願いがあるんだ……………」

一護「もう一人の方は知らないけど……………お前は犯罪者のジェイル・スカリエッティ

だろ？仲間になってくれとか言うのか？」

ゼスト「違う！！この男は……………」

ジェイル「良いんだゼスト……………これが世間一般でのあたりまえな反応だ……………」

ゼスト「しかし……………いや、分かった……………」

ジェイル「黒崎一護くん……………君に頼みたいこととは私が自首した後  
の私の娘たちを

護ってやってほしいんだ」

一護「娘たち……？それに自首って……」

ジェイル「早い内から自首することは決めていたんだが……奈何せん娘たちは出自

が複雑というか……人造生命体として生み出された戦闘  
機人という人間

なのだよ……」

一護「戦闘機人……？」

ジェイル「そうだ。彼女たちの体にはかなりの技術が使われていて  
ね……それを

利用するような連中が出てくるかもしれない……だから  
君が所属している

機動六課で匿って貰いたいんだ……」

一護「話は大体わかった……でもお前はどうすんだ？」

ジェイル「自首すると言っただろう？もう足を洗ったとはいえ違法  
研究に手を出して

いるんだ……僕は大人しく捕まることにするさ」

一護「あんた……ゼストって言ったよな……あんたもそれでいいのか？」

ゼスト「……………良いわけがない……………良いわけが無かるう！！ジエイルは私や部下の

命を救ってくれたのだ！！それに捕まったらお前も何をされるのかわからん

のだぞー！！」

ジエイル「しかし……………」

一護「なあ……………スカリエツティ……………何でそんな簡単にあきらめてんだ……………」

ジエイル「……………なに……………？僕が簡単にあきらめてるって……………？君に何が分かる！！」

僕だってな！自分の手で自分の娘たちを護りたいさ！！でも、それが

出来ないならどうしようもないじゃないか！！」

一護「なんで出来ないってあきらめてんだよ！！まだお前は生きてんだろ？なら

精一杯最後まで足掻けよ！！あきらめるのは死んでからで充分だろ！！」

一護はジェイルの胸ぐらを掴んで訴えかける。

ジェイル「僕は……まだ……間に合うのだろうか……」

一護「間に合うさ……お前にその気持ちが少しでもあるなら……俺も出来る限り」

手伝ってやるからよ!!」

ゼスト「黒崎一護……感謝する……」

ジェイル「ああ……本当にありがとう……」

一護「さて……問題はこれをどうやってはやくはやくに伝えるかな……」

ジェイル「彼女たちをここに呼び出してくれないか？いきなり一般局員の前に」

出ていくと混乱させてしまってもいけないからね」

一護「そうだな……隊長陣と副隊長たち……それにシャマルとザフィーラってとこ」

かな……」

ジェイル「ああ、彼女たちなら大丈夫だろう」



その頃の現場……………

スバル「ティア……………」

ティアナ「スバル……………いろいろと……………ごめんね……………私……………一護さんにも謝らなきゃ……………」

スバル「私は気にしてないから……………それに私も一護さんにお礼言わないといけないし

ね……………後で一緒に行こう?」

ティアナ「そうね……………一緒に行きましょう……………」

スバル「うんうん!」

はやて「ん……………?一護くんからメール?」今から空に霊力の塊を打ち上げるから、

隊長陣と副隊長たち、ザフィーラとシャマルを連れてきてほしい」やて?」

なのは「はやてちゃん……どうしたの？」

はやて「なんか一護くんが来てほしいんやて」

なのは「どうしてかな？」

はやて「うん……」

ドン……！

はやて「……あそこか……じゃあ指定されたメンバーで行くことに  
しよか」

なのは「一護くん……どうしたのかな……」

数分後……

「一護」……来たか……」

はやて「一護くん？どうしてこんなところに……ってスカリエッテ  
イ！？」

フェイト「よくもぬけぬけと……！……」

一護「お前ら落ち着け!!こいつはことを荒立てるために来たんじゃないねえ!!」

なのは「どういう……こと?」

ジェイル「後は僕が自分で話すよ一護くん……」

一護「ジェイル……良いのか?」

ジェイル「これは僕のやるべきことだからね……」

こうしてジェイルは自分がここに来た目的を話し始めた。

自分の目的は娘たちを六課で保護して貰うことで、その間はどんな技術協力も

惜しまないということ、今の事件が解決して娘たちの安全が確認できたら改めて

罪を償うということ。

はやて「にわかには信じがたい話やな……みんなはどう?」

シグナム「確かに……簡単には信用することは出来そうにないですね。しかし、

一護がこの男を信用しているということは嘘というわけでもなさそう

ですね」

なのは「そうだね……一護くんはどうして信じたの？」

一護「……そうだな……具体的な理由はねえ……でも、こいつの覚悟は十分に」

分こいつの  
伝わってきたんだ……自分の娘を護りたい……この思いは多

分こいつの  
本当の気持ちだ」

フェイト「……本当にそう……？」

一護「フェイト……？」

フェイト「本当にその男の言っていることは信じられるの？」

一護「フェイト……それはどういっ……」「一護くん……」「ジェイル……？」

ジェイル「彼女とは私に話をさせてくれ……」

一護「……わかった……」

フェイト「私にはあなたと話すことなんて……」「すまなかった……！」「ッ……？」

ジェイルは地面に膝をつき、深々とフェイトに向けて頭を下げた。

一護「ジェイル……？」

フェイト「な……何のつもり……私にはあなたに謝られる道理なんて……」

ジェイル「分かっている……こんなことでは許してもらえないと……だが、私の

娘を護りたいという気持ちは本物だ……それだけは分か  
ってほしい……」

フェイト「……………」

はやて「……フェイトちゃん……」

なのは「フェイトちゃん」

シグナム「テストロッサ」

一護「フェイト」

フェイト「……………わかりました……………」

ジェイル「……!?!では……………」

フェイト「あなたの言うことを信じます……………でも少しでもおかしな  
行動をしたら……」

わかってますね?」

ジェイル「ああ!ああ!……勿論だとも!……」

シグナム「ところで……あなたは？」

ゼスト「その男に命を救われた男だ……ゼスト・グライガンツという」

シグナム「ゼスト……もしや数年前に行方不明になった騎士ゼストですか？」

ゼスト「ああ……部下ともどもジェイルの研究所で世話になっている」

はやて「ではその方たちも？」

ゼスト「ああ……保護してやってほしい……頼む」

はやて「分かりました。これから一旦六課に戻ったあとに研究所の方に向かわせて

もらいます」

ゼスト「すまない……感謝する」

一護「フェイト……ありがとな」

フェイト「……うん……どういたしましょ……」

先ほどのテンションが少し恥ずかしかったのか尻すぼみになりながら答えた

フェイトであった。

………ちなみに、

この後、合流したナンバーズとの顔合わせでドゥーエが一護のお嫁さん発言をし、

(一護は聞こえなかった)乙女たちとひと悶着あったのは別の話…

………

その頃……ミッドチルダのとある研究所の地下………

???「ほう……それが君の本当の力か………ますます興味深いよ  
黒崎一護くん……」

???女「ドクター………ジェイル・スカリエッティが機動六課に  
接触し協力を求め

ました」

ドクター?「ほう………それで?」

???女「六課は彼を司法取引という形で協力者にしたようです」

ドクター?「そうか…情報ありがとう……………いずれは君とも会わないといけない」

ね……………コードネームアンリミテッド・デザイア無限の欲望ジェイル・スカリエツ

テイ……………」

続く……………」



ふう……こんなのでいいのだろうか……

完全に今週のBLEACHの二番煎じでした……

あ、タイトルの意味は「因縁の終焉と新たな協力者達」です。

まんまですね(笑)

挿し絵も調子に乗って二枚も使いました。

全部今週のBLEACHがモチーフですけど……

また、感想や意見などがありましたら、気軽に感想ページに書き込んでください。

どんな些細なことでも構いません。

では、また次回にお会いしましょう。

皆さん、アンケートにご協力ありがとうございました。

皆さんの投票の結果、？の旧斬月+復活死覇装に決定しました。

したがって、卍解の死覇装のデザインも若干違った形になりますが  
ご了承

ください。

挿し絵も変更する予定ですのでしばらくお待ちを。

さて、挨拶もほどほどに本編に入りたいと思います。

遂にフィッシャーとの長い因縁を終わらせることが出来た一護。

さらに新しい仲間も加わり、六課の雰囲気も明るさを増したかに見  
えたが……

第20話 交わらない想い (Thought not to interfere)

スカリエツティたちの六課への移住も終わり、ようやくひと段落したかと思つた時に

事件は唐突に発生した。

それは、ナンバーズやゼスト隊の生き残りたちの挨拶の時、

ドゥーエ「一護さん」

一護「！…ドゥーエ……か？」

ドゥーエ「はい！思ったよりも早く会えましたね」

一護「そうか……お前の家族ってこいつらのことだったんだな」

ドゥーエ「……すみません……騙すつもりはなかったんですが……」

一護「いいさ……お前も悪気があったわけじゃねえだろ？それに家族に逢えて

良かったじゃねえか」

ドゥーエ「一護さん……はい！…！」

なのは「……………一護くんさつきからあの人と近過ぎない!?（怒）」  
シグナム「そうだな……………しかし……………ドゥーエという名はどこかで……………」

ヴァイス「…ドゥーエ……………ドゥーエ……………ああ!!ま……………まさか……………」

シャマル「ヴァイスくん?急にどうしたの?頭が悪くなったの?」

ヴァイス「ちょ!?!?シャマル先生酷くないっすか!?!それより一護のヤツ……………」

あの人とどこで知り合ったんだ……………」

シグナム「ヴァイス……………それはどういう」ああ!!……………なんだ?  
シャマル……………」

シャマル「ドゥーエって人……………一護くんが休暇で知り合った人じゃない?」

なのは「ああ……………そういえば……………」

ヴァイス「んぬあくにいく!?!?一護のやつ……………なんとうらやましい……………」

シグナム「さつきからお前は何なのだ……………」

ヴァイス「いや、だって?管理局お嫁さんにしたい人ランキング?、  
?恋人にしたい

人ランキング？1位のドゥーエさんと知り合いなんて……  
くう……

「うらやまし〜!!」

なのは「お嫁……さん……恋人……1位……？」

シグナム「なん……だと……」

シャマル「そんな……」

ドゥーエ「……あの人たち……そう……」

一護「ん？どうした？」

ドゥーエ「あ、いいえ。ただライバルが多いなと思っただけです」

一護「????????」

そして、その事件の時がやってきた……

まずはナンバーズから自己紹介が始まったのだが、ウーノが終わってドゥーエの

時に事件が起こった。

ドゥーエ「あ、一護さんは耳栓しててくださいね」

一護「は？まあ……良いけど……」

ドゥーエ「あと少しの間だけ後ろを向いてくださいね」

一護「????????なんなんだ……?」

一護は疑問に感じながらも後ろを向いた。

ここでドゥーエが話し始める……

ドゥーエ「ふふ……初めまして。ナンバーズのNo.2ドゥーエです。こちらの方たちは

ドゥーエ・アルファードと言えば分かるかしら？」

全員（男のみ）『おおー！……！……！……！』

一般男？「うおー！今日も美人です……！」

一般男？「お嫁さんになってくれー……！」

ドゥーエ「うふふ……ごめんなさいね。私はもう心に決めてる人が

いるの！……………」

「私は一護さんのお嫁さんになるので…！」

乙女3人+男衆『な……………なんだってー！！』

一護（後ろ向いたまま）「な！？なんだ！？殺気！？」

なのは「ちよ〜と待つのでー！！…！」

シグナム「そうだ…！そう簡単に一護の……………その……………嫁には……………させんぞ…！」

シャマル「そうよ…！いきなり出てきてそれはないんじゃないの？」

フェイト「……………なんだろう……………イライラというか……………モヤモヤする……………」

「ここにはフラグ予備軍までいるようだ……………」

ドゥーエ「あら？あなたたちここは一夫多妻制なのを忘れてない？」

なのは「！？」

シグナム「！！？？」

シャマル「！！？！？？」

全員『！！？！？！？！？』

全員『なんだってー！！！！！！！！』

ドゥーエ「やっぱり忘れてたのね……」

なのは「でもでも！！そういうのはあまりよくないと」「ふむ……」  
シグナムさん？

シグナム「いや……そういうのも……悪くはないのではないか？  
／／／／／／／／」

なのは「まさかの裏切り！？そうだ、シヤマル先生は……」

シヤマル「あら～ならいいじゃない！！」

なのは「敵しかいない」（泣）

ドゥーエ「あら？なにがご不満なのかしら？メリットというかもと  
もと女性に有利な

制度なのよ

なのは「……そういうことなら……」

はやて「あかん！！なのはちゃんまで悪の道に引きずり込まれても  
うた！！」

ドゥーエ「悪ではないわ！！ここでは私たちが正義なのよ！！」

乙女3人「そうなの！！」「そうだ！！」「そうよ！！」



ようやく鎮火したようだ……

しかし、

ドゥーエ「でも本妻は私よ!！」

乙女3人「ぬわあくにいく!!?!?!?!?!」

ドゥーエのいらん一言のせいで再点火。

ギヤーギヤーワーワー!!ドスンドスン!!

ちなみにこれが治まるのに50分近くかかりました。

一護「……俺……主人公だよ……?なんで放置されて……」

ご愁傷様です。

そのようなどんちゃん騒ぎの跡にもきつちりと仕事をするのが六課クオリテイである。

その日の夜……

一護のもとには意外な2人がやってきていた。

スバル「あの……」

ティアナ「……一護さん……」

一護「……あゝ……とりあえず……中に入るか？」

ティアナ「はい……」

スバル「すみません……」

一護「コーヒーしかねえけど……いいか？」

ティアナ「は……はい……ありがとうございます……」

スバル「（ティアナ……どうしよ〜）」

ティアナ「（と……とりあえず落ち着いて……しっかり謝ろ?）」

スバル「（……うん）」

一護「ほら……」

スバ・ティア『ありがとうございます』

一護「で……なんか俺に話があるのか？」

ティアナ「その……あの時はすみませんでした！！」

スバル「私も……すみませんでした！！それと……助けてくださいってありがとう」

「ごさいました！！」

一護「ああ……そのことだったのか？気にしてねえって。それにあれは俺が勝手に」

射線上に割り込んだだけだ。ただのお節介だよ」

ティアナ「でも……あの時は私が無茶したからで……そのせいで一護さんに怪我を」

させて……」

一護「ああ……怪我なら死神になった時点で治ったから別にいいぞ？」

スバル「……治った……？あの時に？」

一護「おう」

ティアナ「それに……あれが死神なんですか……？何かイメージが……」

一護「そういえばジェイルのことがあって説明するの忘れてたな…  
…また皆に時間が

あるときに話さないとな……」

ティアナ「あの姿で…元の世界でも戦ってたんですか？」

一護「そうだな…完現術と混じってるから若干の違いがあるけどあの姿だ。もつとも

向こうでは魂だけだけどな」

スバル「なんか…すごい存在ですね……」

一護「そんなことはねえよ……それに俺はこの力があるからって優越感を感じた

ことはねえしな……」

ティアナ「なんで……ですか？」

一護「……そうだな……このことも改めて皆の前で話すことにするよ。それまで我慢

しててくれ」

スバル「…は…い……（しょんぼり）」

ティアナ「まったく…スバルったら……」

一護「はは……まあこれから硬くならず気軽に話しかけてくれよ？」

スバ・ティア「はい!!」

一護「だから硬いって……」(汗)「

次の日の朝……

なんとなく早く目が覚めた一護は散歩をしていた。

すると、明らかに怪しい動きで遠くを監視しているヴァイスの姿が……

一護「……」(汗)「

さすがにこれはまずいと思った一護はヴァイスに声をかける。

一護「……おい……いくらなんでものぞきは不味いぞヴァイス」

ヴァイス「うおおい!?なんだ一護か……別にノゾキじゃねえよ……ほれ、お前も

見てみ」

そういつて一護に双眼鏡を渡すヴァイス。

しぶしぶ双眼鏡でヴァイスの見ていた方を見ると、朝練前なのに体を酷使している

ティアナの姿があつた。

一護「おいヴァイス……あれ……いつからやってる……」

ヴァイス「1時間ほど前からだ……」

一護「な!?!……止めなかつたのか!?!」

ヴァイス「止めたよ……でもアイツ……数分後にはまたはじめてやるんだ……」

一護「なあ……何であいつはそこまでやるんだ……」

ヴァイス「さあ……詳しいことは俺も……スバルや隊長たちなら知ってるかも」

しれねえけど……」

一護「そうか……一応……止めてくるよ……」

ヴァイス「そうか……頼んだぞ……」

一護「ああ」

ティアナ「ハアハアハア……まだ「ティアナ」!？」

一護「もう……そこらへんにしとけ……」

ティアナ「……ご心配なく……まだ大丈夫です!!」

一護「俺が言うのも変だが……あまり無理し過ぎるとかえって上達しねえぞ?」

ティアナ「……私は……私は凡人なので……このくらいしないと皆に追いつけ

ないんです!!」

一護「凡人……ねえ……」

ティアナ「あなたには!!……生まれつき力のあるあなたには……絶対わかりません

よ……」

一護「ティアナ……」

ティアナ「私は証明して見せるんです!!特別な力が無くても一流になれるって……」

一護「……そのことを……なのはに言ったのか?」

ティアナ「……え……？」

一護「そういうことは俺とかじゃなくて、上司で教官のなのに対して言うべきじゃ

ねえのか？」

ティアナ「それは……」

一護「それにな……」

ティアナ「……？」

一護「昨日も言ったみたいに……俺はこの力があるからって優越感に浸ったことは一度

もねえ……そこだけは勘違いしないでくれ……」

ティアナ「でも……そんな力がほしいと思うのは……仕方ないと思います……」

一護「……そのせいで……誰かが死ぬことになったとしてもか……？」

ティアナ「え……？」

一護「ツ……いや……今は忘れてくれ……じゃあな……体調……  
気をつけるよ……」

ティアナ「……はい……（誰かが……死ぬ……どうして……）」



ティアナのその疑問に答えてくれるものは誰もいなかった……

その日の夜……一護はティアナの真意を知るためになのはの部屋を訪れていた。

一護「なのは……夜遅くに悪いってお前まだ仕事してるのか!？」

なのは「うん……ティアナたちの訓練のスケジュールの見直しが終わってなかった

の……」

一護「お前……」

なのは「それで……どうしたの?一護くん……聞きたいことがあるんじゃないの?」

一護「……ああ……ティアナのことなんだが……」

なのは「む……一護くんはティアナみたいな子が良いの?」

一護「は???いや……なんでティアナはあんなに無茶すんのかなって……」

なのは「あ……ああ!そう!そうなの!!!いや」(やつちゃった)「

「護」????????」

なのは「な、なんでもないの!!!ティアナのことだよな?.....本当はティアナに

言つて貰わないといけないんだろっけど.....」

「護」.....どういうことだ.....?」

そしてなのは話し始めた.....ティアナの兄の話を.....どうしてティアナがそのことに

こだわっているのかを.....

「護」そうか.....それでアイツ.....」

なのは「ティアナに何かあったの?」

「護」いや.....ティアナじゃねえよ.....そうか.....それで.....」

なのは「????????」

「護」話してくれてありがとうな。あとなのは.....お前.....少しティアナと話せ」

なのは「????????」

「護」どんなことでもいいんだ.....自分の本音を言ったりできるよ  
一番いいんだが.....」

ティアナは上司のお前に話しかけづらいみたいだからな……お前から話しかければ

あいつも話しやすいだろ？」

なのは「……うん……そうだね……」

一護「じゃ……俺が言いたいのとはそれだけだ……お休みなのは……無理すんなよ……」

なのは「うん……お休み……一護くん……（私の……教導の……意味……）」

それから数日経ったある日、一護の前に一人の人物が現れた。

ロツサ「君が黒崎一護くんだね？」

一護「ああ……そうだけど……あんたは？」

ロツサ「ああ……まだ名乗ってなかったね。失敬、僕の名前はヴェロツサ・アコース。」

査察官をやっているよ」

「一護」で……その査察官が何の用なんだ？」

この男の話し方に違和感を覚えた一護は嫌悪感を露わにしてロツサに尋ねる。

ロツサ「おっと……ここでは話じづらいんでね……場所を移そう……」

「一護」……わかった……」

ロツサ「……ここならいいだろう……さて、なぜ君をこのような所まで連れてきた

かというところ……はやては僕にとっては妹のような存在でね……やはりその

近くに現れた不確定要素というのは気になるんだよ……」

「一護」……なるほどな……そういうことが……」

ロツサ「分かってくれたか……」

「一護」要するに……妹のはやてのことが気になって仕方ない超シスコンナルシスト

ってことだな」

ロツサ「わかってな〜い！！僕はシスコンじゃないし、ナルシストでもな〜い！！」

一護「嘘つけ……シスコンはまだしも……素面の時も白スーツ着てるってナルシスト

以外の何物でもねえじゃねえか……」

ロツサ「……このスーツ……そんなにダメかな……この前はやてにも変って……」

一護「やべ……いじりすぎた……」

~~~~~しばらくお待ちください~~~~~

ロツサ「とにかく！！君のことを簡単にで良いから調べさせてほしいんだ」

一護「なんだ……それならそうと言ってくれれば……」

ロツサ「言わせてくれなかったのは君ではないか……とりあえず、少し君の記憶を

見させてほしい……これは別に強制じゃない……君の意思で決めてくれ」

「護」いいぜ。俺の記憶でいいならいくらでもな

ロツサ「……いいのかい？」

「護」聞いてきたのはおまえだろ？それに別にみられて困るものがあるってわけでも

ないしな

ロツサ「……ありがとう……本当はその言葉だけでも充分なんだが……僕自身……

君の記憶に興味があるんでね……すまないけど見させても

らじゆ

「護」ああ……」

その後……

ロツサ「一護くん……はやての作ったこの部隊……敵が多いが……あの子たちを護って

やっほほしい……頼む」

一護「大丈夫だ……何があっても俺が護る……約束だ!!」

ロツサ「ああ……ありがとう……」

この世界にもう一人の一護の理解者が出来た瞬間であった。

しかし、喜んだのもつかの間。

無情にもなのはとティアナは想いを伝えず、互いにすれ違ったまま
模擬戦の日を

迎えてしまう。

続く

第20話 交わらない想い (Thought not to interest)

簡単な報告ですが、PVが20万アクセス、ユニークが2万人を越えました。

読者のみなさんありがとうございます。これからも精進していきますので、よろしく願います。

今回はいかがでしたでしょうか？

次回はよいよ魔王降臨です。一護はどう対応するのか……お楽しみに！！

では、また次回にお会いしましょう。

第21話 卍解・天鎖斬月(The Speed Phantom)(前書き)

うわ〜お！〜タイトルで何するか丸わかりです。

あと、一部の挿し絵を修正してます。

卍解の設定画もいずれは載せるかと……

戦闘シーンは対白哉戦をイメージしてください。

では、今回もお楽しみください。

なのはとティアナに話し合うように助言を与えた一護。

しかし、肝心の二人はすれ違ったまま模擬戦の日を迎える……

第21話 卍解・天鎖斬月(The Speed Phantom)

今から始まるスターズの模擬戦を見ようと、かなりの数のギャラリ
ーが集まって

きている。

一護「まずはスターズ…ティアナたちからか……」

ヴィータ「あいつらが終わるまでエリオとキャロはあたしと見学な」

エリ・キャロ『はい』

ジェイル「僕も見学させてもらっよ」

一護「ジェイル……珍しいな……研究室から出てくるなんて……」

ジェイル「偶にはね……それに訓練用のガジェットの開発にも役立
つしね」

ヴィータ「なんか…スゲー生き活きしてるな……」

一護「(ティアナはスバルと二人で何かやってたみたいだが……大
丈夫なのか?)」

それになのはとも話してないみたいだし……」

この一護の不安は的中することになる。

ティアナとスバルが構える。

ティアナ「やるわよ！スバル！！」

スバル「うん！」

ヴィータ「お！始まったな……」

フェイト「あ！もう模擬戦始まったちゃってる？」

一護「今始まったばかりだから大丈夫だ」

フェイト「私も手伝おうかと思ってただけだね……」

ヴィータ「今はスターズの番だ」

ジェイル「しかし……高町くんは少々頑張り過ぎではないか？」

フェイト「ホントならスターズの模擬戦も私が引き受けようと思っただけ……」

ヴィータ「ああ……なのはもここんとこ訓練密度が濃いからな……少し

ゴオオオオオ！！！！

なのはがクロスファイアを避けるとそこへめがけて、スバルのウィング・ロードが

伸びてくる。

なのは「……………！？フェイクじゃない！本物！？」

なのはは事前に展開させていた魔力弾をスバルに向けて放つ。

スバル「うおおおおお……………りゃあ！！」

それをスバルは一点に集中させた防御で突破してリボルバーナックルでの一撃を

放つ。

しかし、なのははレイジングハートで受け止め、逆にスバルを弾き飛ばした。

なのは「こらスバル！ダメだよ！そんな危ない軌道」

スバル「すいません！でも、ちゃんと防ぎますから！！」

なのは「……………！？ティアナは……………？」

なのははティアナの姿が見当たらないことに気づき、周囲を見渡す。すると、少し離れたビルの上で砲撃の態勢を取っているティアナを見つけた。

フエイト「砲撃！？ティアナが!？」

一護「(あいつら……)」

なのは「……………!……………」

なのははティアナを警戒しつつ迫ってくるスバルの方を一度見る。

ティアナ(特訓成果…クロスシフトC……いくわよ!スバル!!)
)

スバル「おお!」

スバルはカートリッジをロードすると、猛スピードでなのはへと突っ込んだ。

スバル「でえりゃあああ!」

ギインー！！

なのははシールドを張ってスバルの一撃を受け止める。

しかし、先ほどのように弾くことが出来ない。

なのは「……………！？」

なのはは何かに気づき、後ろを振り向く。

スバル（ティア……………！！）

スバルが念話でティアナに呼びかける。すると、砲撃の構えをとっていたティアナの

姿が忽然と消えてしまった。

キャロ「あつちのティアさんは幻影！？」

エリオ「本物は！？」

一護「あそこか……………」

全員『！？』

一護の目線の先にはスバルのウイング・ロードを駆け抜けてなのはに接近している

ティアナの姿があった。

ティアナはクロスミラージユをダガーモードに切り替える。

ティアナ「（バリアを切り裂いて…フィールドを突破する…！）」

そして、ティアナはなのはへ躍りかかる。

ティアナ「一撃必殺！！でええええい！！！」

なのは「……………レイジングハート……………モードリリース……………」

レイジング「All right」

ドオオオオオオオン！！！！

フェイト「！？なのは？」

「護」……………」

やがて、煙が晴れてくる……そこには……

なのは「おかしいな……二人とも……どうしちゃったのかな……？」

スバル「!？」

ティアナ「え……？」

ティアナとスバルの一撃を素手で受け止めているなのはの姿があった。

さらに、ティアナのダガーモードを受け止めている右手からは鮮血が流れ出ている。

なのは「頑張ってるのは分かるけど……模擬戦は喧嘩じゃないんだよ……」

なのはは続ける

なのは「練習の時だけ言うこと聞いてるふりで……本番でこんなに危険な無茶する

なら……練習の意味……無いじゃない……」

ティアナ「!?!?!」

なのはの右手から流れる血に動揺するティアナ。

なのは「ちゃんとさ……練習通りにやるつよ……」

スバル「あ……あの……」

なのは「ねえ……私の言ってること……私の訓練……そんなに間違ってる？」

ティアナ「!!」

クロス「Blade erase」

ティアナ「くっ……!!」

ティアナは魔力刃を消すと後ろへ飛び退る。

ティアナ「私は!!もう……誰も傷つけないから!!失くしたくないから!!」

スバル「ティア……」

ティアナ「だから……強くなりたいんです!!」

ティアナの叫びも今のなのはには届かない……

なのは「少し……頭冷やそうか……」

キイイイン!!

なのはの足元に魔方陣が広がる。

なのは「クロスファイア……………」

ティアナ「うわああああ！！ファントムブレイ……………」

なのは「シュート……………」

ドウツ！！！！

ティアナ「！？」

ドオオオオオン！！！！

スバル「ティアア！！……………！？バインド？」

なのは「じっとして……………よく見てなさい……………」

一護「……………！！……………チイツ……………！！」

キイイイイイ……………

スバル「！？なのはさん！？」

無情にも2発目のクロスファイアがティアナめがけて放たれる。

ドゥーンー!!

イイイイイイ……………バリイン……………

しかし、それはティアナに届くことはなかった。

なぜなら、

なのは「!?……………なんで……………」

スバル「!?ああ……………」

なのは「なんで……………邪魔するのかな……………一護くん……………」

死神化した一護が魔力弾を素手でかき消したからであった。

一護「ティアナ…動けるか?」

ティアナ「う……………一護さん…どうして……………?」

一護「とりあえず…スバルと一緒に下がって……………」

ティアナ「…はい……………」

なのは「ねえ……………答えてえよ……………なんで邪魔したの?」

一護「なんで……………だと……………?本気で言ってるのか?」

なのは「二人はいけないことをしたんだよ……だから私が体に教えてあげてるの……」

一護「なら一発でいいだろう……さっきのままであったら俺は見逃したさ……でも、」

今のもう一発は余計だ……」

なのは「そう……一護くんも……私の教導は間違ってるって言うんだね……」

一護「ああ……この際だからはっきり言ってやる……なのは……お前は間違ってる……」

そもそも俺は言ったよな……ティアナと話し合えて……まさか……」

何もしなくても……勝手に分かってくれらなくても思ってたのか？」

なのは「……うるさい……」

一護「悪いが言わせてもらおう……何も言わないで分かってくれらる奴なんていない……」

自分が分かってもらいたいなら……まず相手のことをわかってやるべきとするべき

だろうが……」

なのは「うるさい!!」一護くんになにが分かるの!？」

一護「わからねえよ!!お前は何も言わねえだろうが!!」

なのは「…もういい……一護くんも……頭冷やそうか……」

一護「いいぜ……そっちの方が手っ取り早い……」

そついうと一護はなのはへ人差し指を向ける。

なのは「……?」

一護「ふっ!!」

なのは「キャッ!？」

そして、その指先から見えない力が発せられ、なのはは地面すれすれまで飛ばされる。

なのは「く……一護くんは……」

ザッ……

一護も同じくらいの場合へ降りてきた。

なのは「…今のは……?」

一護「ただ霊圧をぶつけたただけ……大した威力じゃなかったろ?」

なのは「私のことを……馬鹿にしてるの？こんな攻撃じゃ私は倒せないのは

分かるでしょー!」

一護「……………」

白一護「(よう!一護…なかなか難儀なことになってるな…俺の力がいるか?)」

一護「(いや…………お前の力は敵を倒す時だけだ。あいつは…………俺の仲間だ)」

白一護「(ふん…………まあいぜ…………でも…アレは使っんだろ?)」

一護「(ああ…………)」

斬月「(一護…………)」

一護「(いくぞ…………斬月!!)」

ドオア!!

一護がそつ心の中で告げると、突然青白い光が一護の周りを包み始める。

なのは「!?なに…………この力…………」

シグナム「テストタロツサ…模擬戦はどうなって…」

フェイト「！シグナム！！大変なの！一護となのはが…」

シグナム「何!?!」

ドオア!!

全員『くっ……………!?!?』

シグナム「い…今は……………一護の…?」

ザアツ……………

霊力の奔流がやむ……………

一護は斬月をなのはへ向けて突き出し、左手を右腕に添える。

> i 2 9 8 8 1 | 3 5 0 6 <

すると、斬月の柄の巻き布が一護の腕に巻きつき、一護は徐々に霊圧を高めていく。

そして、一護は遂にその名を口にする。

「一護」……………卍……………解……………」

キイイイイイイン……………ドン！！！！

その瞬間、辺りの建物を破壊しながら爆風が広がっていく……………

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……………

シグナム「く……………一体……………なにが……………」

フェイト「なのは……………一護……………」

なのは「……………一護くんは……………？」

咄嗟にシールドを展開して、爆風を防いだなのはは一護の姿を探す。

エリオ「一護さん……」

ジェイル「なんと……！まだそんな力があつたというのか……！！」

一護「これが……斬魄刀戦術最終奥義……卍解だ……」

なのは「卍……解？」

一護「そうだ……」

そう一護がつぶやく……その瞬間、なのはの視界から一護の姿が掻き消える。

なのは「！？」

なのははあわてて一護の姿を探そうとするが、気付いたら喉元に刀を当てられて

いた。

なのは「な……」

ガシャ……

なのは「！？なんで切っ先を引いたの！？」

一護「……わからないか？……お前の意見を……力で真正面から押しつぶすためだ！」

なのは「！？どうして……どうしてそんなことをするの！！」

一護「どうしてだと……？本当に分からないのかよ……！！」

なのは「……え……」

一護「俺が……今からすることは……なのは……お前がティアナにしようとしたこと

そのものだ！」

なのは「！？」

一護「相手の意見を聞くこともせず……自分の意見だけを押し付けて満足する……」

お前がしようとしたことはそういうことだ！」

なのは「違う……」

一護「なら！！お前は……ティアナと話したのかよ……俺は言ったよな……お前は年上

で尚且つ上司だ。だからお前から話しかけてやれってな」

なのは「！私は……」

一護「……………もうゴチャゴチャ言っても進まねえ……………始めるぞ……………なのは……………」

なのは「レイジングハート……………セットアップ!!」

レイジング「Stand by ready, set up」

なのは「クロスファイア……………シュート!!!!」

すると、なのはから先ほどの比じゃないほどの数の魔力弾が飛来する。

それを一護はギリギリまでひきつけ、一気に飛んで躲す。

なのはは一護の回避先を予測し、そこへ再度大量の魔力弾を放つ。

しかし、一護は上半身を動かしただけですべてを避け、瞬歩でなのはの目の前へ現れ

斬りつける。

それは障壁に遮られるも、それはなのはの体の数センチ前で止まっていた。

さらに一護はスピードを上げてなのはの周囲を駆け抜ける。

なのは「なんなの……………このスピード……………!?!」

目にも留まらない一護の動きにギャラリーも戦っているなのはも驚

愕していた。

一護「……………どうした？ついて来れねえか？」

なのは「……………！！舐めないで！！」

一護「（弾速が上がった！？集中力が上がってるのか？）」

なのはは魔力弾で一護を空中へ追い込む。

そして、一気に周囲を囲んで攻撃する。

イイイイイイイン……………ガガガガガガガガガガガガアン！！！！

一護はそれすらものともせずすべての魔力弾を撃ち落とした。

しかし、それは布石で本命はディバインバスターによる撃墜であった。

なのは「これで……………終わりだよ……………」

シグナム「！！一護！！」

フェイト「なのはーやめてー！！」

なのは「ディバイン……………バスター！！！！」

一護「……………」

ズアッ……………

だが、一護はディバインバスターでさえも難なく打ち消していた。

なのは「そんな……………」

一護「……………悪いな……………なのは……………」

ドッ！！

そして、なのはは一護の辛そうな声を背後で聞いたのを最後に意識を失った。

一護が気を失ってるなのはを抱えてギャラリィたちの前までやってくる。

ヴィータ「おい！！一護…なのはは……………」

一護「心配いらねえよ……………ちょっと霊圧を打ち込んで気絶させただけだ……………」

普段からあまり休まないこいつにはちょうどいい薬だ……………」

フェイト「一護……………」

一護「俺はこいつを医務室まで連れて行く……………フェイト、シグナム……………後は頼む。」

ヴィータは付き添いで来てくれ」

ヴィータ「！おう！！」

こうして模擬戦の日は過ぎていったのであった。

続く……………

第21話 卍解・天鎖斬月(The Speed Phantom)(後書き)

加筆修正しましたが……いかがでしたでしょうか……
独自解釈・設定の名の通りやりたい放題やってしまいましたか……
なんか一護つぽくないかも……なのはたちも微妙だし……
何かご指摘がありましたら気軽に感想ページまでよろしく願います。
ます。

また、些細な感想でも作者は大変励みになります。
よければ感想の方もよろしく願います。
では、また次回にお会いしましょう。

第22話 過去への誘い (The Invitation to the p

タイトルの通りです。

一応は話させることにいたしました。

でもちょっとだけです。のでトラウマ成分控えめとなっております。

まあ説明自体は次回になるんですが……

あと、記憶を映像として見せるためにご都合主義&独自設定を用います。

その点はご了承ください。

では、今回もお楽しみください。

互いの思いが交錯した模擬戦……

しかし、彼女たちの思いが交わることはなかった。

一護は悩む……自分は彼女たちに何がしてやれるのかと……

第22話 過去への誘い (The Invitation to the p...

機動六課の屋上……………そこでは一人の男が考えを巡らせていた。

一護「……………」

一護が気にしているのはティアナに言われた言葉……………「あなたには……………生まれつき

力のあるあなたには……………絶対わかりませんよ……………」

一護「特別な力……………か……………」

一護はある意味この力のせいで戦いに巻き込まれてきたようなもので、4年前まで

は幽霊が見える以外は普通の高校生だったのである。死神の力も、最初からあつた

としても眠っていて、ルキアに譲渡されなければ目覚めることもなかったのである。

ガチャ……………

そうしていると、屋上のドアが空いて誰かが入ってきた。

一護「……………シグナム……………か？」

シグナム「！よく分かったな……………」

一護「ここまで近くに來られるとさすがに靈圧でわかるさ……」

シグナム「そういえばそうだったな……高町は2時間前に……テイアナは先ほど」

目を覚ましたそうだ」

一護「……そうか……二人の様子は？」

シグナム「2人と怪我どころか模擬戦前よりも体調が良いようだ」

一護「ならよかったよ……」

シグナム「……一護……お前は……」

そういつてシグナムが口を開こうとした瞬間、緊急出動のサイレンが鳴り響いた。

一・シグ『!!』

一護「俺は虚の確認にはやてのところに行く！お前は先に行って待機してくれ」

シグナム「了解した!!」

そう言うと二人は分かれてそれぞれの目的地へと向かっていった。

はやて「ガジェット・ドローン？型が12機か……………目的もわからんし……………」

迂闊に手を出されへんな……………」

一護「はやて！虚はいるか？」

そこへ虚の有無を確認しに一護がやってくる。

はやて「今んところは確認されてへんよ。でも万が一の時のために待機しとつてや」

一護「虚については分かった。あと、待機についてなんだが……………」

はやて「???どうしたん？」

一護「今回は俺一人でいかせてくれねえか？」

はやて「!?!?いくらなんでもそれは……………」

一護「俺が出ている間にティアナたちフォワード陣となのはたちを話し合わせ

たいんだ」

はやて「うゝん……………まあ……………部隊の纏まりの為に必要なんは分か

るけど……」

一護「これぐらいしか……俺にはあいつらにしてやれることがねえ……それに……」

……俺についても少し話したいからちよつどいいと思ってな

はやて「一護くんについて？」

一護「ああ……出来るだけ早く終わらせてくるから……なのはたちの後にでもと

思ったんだが……だめか？」

はやて「……よし！ええよ！それじゃみんなはヘリポートで待ってるから早よ

行ったって」

一護「ああ……あと……ヴェロッサをここに呼んで貰ってもいいか？」

はやて「一護くん、ヴェロッサといつ知り合ったん！？」

一護「？この前……六課の前に来てたけど……その時に俺の記憶を見せたから

フォローを手伝ってくれるかと思ってな」

はやて「いつの間……」

一護「まあ…とりあえず行ってくる!」

はやて「うん!気を付けてな?」

一護「おう!」

機動六課ヘリポート……………

なのは「今回は空戦だから…出撃は私と…」「ああストップ!」……
一護くん?」

一護「今回の出撃は俺のみだ……みんなはロビーで待機してろ」

なのは「!?!ど……どうして……」

シグナム「一護……一体どういっ……」

一護「ちなみに…部隊長命令だ……お前たちは待機しながらしっかり話し合っ……」

特にティアナとなのは!」

ティア・なのは『!?!?!?!』

フェイト「でも一護……もう一人ぐらい連れて行った方が……」

一護「いいから！お前らは待機！！ヴァイス！行けるか？」

ヴァイス「おうよ！乗り込んでくれればいつでも行けるぜ！！」

一護「いいか？絶対に話し合っどけよ！そしたら俺のこともきちんと話すからよ！」

全員『!?!?!?!』

一護「ヴァイス！頼む！」

ヴァイス「任せな！現場まで一直線だぜ！！」

ババババババババババ……

こうして一護を乗せたヘリは現場へと向かっていった。

なのは「………とりあえず………みんなロビーに戻ろうか？」

全員『はい（おう、ああ）』

こちらも前に進むために行動するようだ……

六課東部海上……………

ヴァイス「しっかし……………あの時はお前に乗ってやったが……………ホントに大丈夫か？」

一護「ああ……………あの程度ならすぐに終わるさ……………虚もいねえしな……………」

ヴァイス「武運を祈ってるぜ！」

そうヴァイスが冗談めかして言う。

一護「ああ……………そうだ！ヴァイス……………」

ヴァイス「？何だ？」

一護「巻き込まれなくなかったら少し下がってるよ？」

ヴァイス「は……………？お……………おう……………」

ズアツ……………

一護が死覇装を展開して死神化する。

バツ!!……………ザツ……………

一護が現場の空域に降り立つ……………

一護「待たせてる奴らがいるからな……………今回は一撃で偵察の意味もねえくらいに

圧倒させてもらう!!」

ダンッ!!!!

一護は空気中ではあるが、霊子を踏みしめ斬月に霊圧を込める。

ズアッ……………

> i 3 0 0 6 7 | 3 5 0 6 <

一護「おおオ!!!!!!!!」

> i 3 0 0 6 8 | 3 5 0 6 <

ゴオア!!!!!!!!

ズズウウウウン!!!!!!!!

その一撃で、12機のガジェットたちはすべて蒸発してしまった。

ヴァイス「おいおいおい……………下がってるってのはごっついごっとかよ……………(汗)」

内心冷や汗だらだらヴァイスであった。

そのころの機動六課……………

はやて「ちょ……………！？いくらなんでも一撃……………」

ジェイル「さすがに……………これは予想外だよ……………」

シグナム「……………」

あのシグナムですら呆気に取られてしまっている。

フォワード陣『ポカーン……………』

フォワード陣はあまりのスケールの違いに思考が止まっているよう
だ……………

なのは「……………はっ！？そうだった……………お話しなくちゃ……………」

フェイト「……………O H A N A S I（極太砲撃言語じゃないよね……………？違うよね……………？）

「
フェイトはお話になんか嫌な思い出があるようだ……………」

なのは「……皆には……私の失敗談を聞いてほしいの……」

そうしてなのはフォワード陣に自分の過去について話し始めた…

……

一護が六課のロビーの入り口へ戻ってくると、そこには

なのはと抱き合いながら涙を流して謝るティアナの姿があった。

一護「……よかったな……ティアナ……なのは……」

2人には聞こえないようにそう一護はつぶやく。

一護「あんたも……一安心ってどこか……？ティードさん？」

ティード「……そうだね……君には随分迷惑をかけたようだ……」

一護が敢えてロビーの中に入らなかったのはこの人？と話すためであつた。

一護「ティアナになんか憑いてると思った時はビックリしたぜ……」

ティード「ははは……僕もまさか見える人がいるとは思わなかったよ

……」

一護「ティアナに……一言ぐらい言ってやったらどうだ？」

ティーダ「そうしてやりたいのは山々なんだが……僕の姿も声も認識できない

だろう？」

一護「一応……出来んことはない……」

ティーダ「本当かい!？」

一護「ああ……今度ティアナと話させてやるよ」

ティーダ「ああ……ありがとう……」

ヴェロツサ「一護くん?こんなところで何してるんだい?」

一護「うおおおおい!?!ヴェロツサか!?!どうして此处に……」

ヴェロツサ「どうしてって……ここに呼んだのは君じゃないか……」

一護「あ……忘れてた……」

ヴェロツサ「まったく……僕の方は女性とのデートを断ってまで来たというのに……」

一護「悪い悪い!……じゃ、そろそろ行くとするかな……」

そういつて一護はロビーの中へと足を進めた……

一護が中に入ると、そこには外から伺っていたのでわからなかったが、ナンバーズ

たちもそろっており、全員が『一護の話を聞きたい!!』というオラを出して

いた。

一護「よう……話はきちんと終わったみたいだな……」

なのは「うん……模擬戦の時は……ごめんね……一護くん……」

一護「いいよ……こっちこそ首に霊圧当てちまったんだけど……大丈夫か？」

なのは「うん！むしろ今までより調子がいいのー！」

ティアナ「あの……一護さん……」

一護「?どうしたティアナ？」

ティアナ「その……生意気なこと言って……ホントにすいませんでし

「やめい！」イタッ!?一護さん!?!」

ティアナが謝ろうとした所へデコピンをして黙らせる一護。

一護「なんで謝る…お前は何も間違ったことは言っていないさ……現に俺はお前の

気持ちが言われるまで分からなかったんだ……言われて当然だ！」

ティアナ「でも……」

一護「まあ……今から俺の話をするから……俺のこともわかってくれればいいさ……」

ヴェロツサ「そろそろいいかい?一護くん?」

一護「ああ……こいつは知ってるヤツもいるかと思っけど…ヴェロツサ・アコース……」

査察官だ……こいつの能力で俺の記憶をみんなに見せることにしたんだ」

ヴェロツサ「先に言うておく……はっきり言うて……ここにいる全員の方がいい」

ほどの戦いを彼は経験してきている……その中にはもちろん残酷なもの

も含まれている……それでも君たちは彼の記憶を見る

かい？」

六課全員『……はい！……！』

ヴェロッサ「いい返事だ……では……？」

一護「ああ……やってくれ……ところどころは俺自身が解説するからな……」

こうして一護の過去の話が始まった……

続く……

第22話 過去への誘い (The Invitation to the p

今回はちょっと短かったですね……

まあ、次回が長くなる予定ですので……説明長いし……

一応トラウマシーンはヴェロツサに頼んで減らしてもらおう予定です。

まあ、それでもある程度の残酷なシーンはあると思うんですが……

この小説に関するご意見や感想を随時受け付けております。

気軽に感想ページに書き込んでください。

では、また次回にお会いしましょう!!

第23話 一護の過去・その1（死神代行篇）（前書き）

すいません！本当にすいません！！

あれだけ早くすると言ったにも関わらず、こんなにも時間がかってしまいました。

しかも、内容は原作の繰り返しみたいだし……

こんなもので申し訳ないですが、どうぞお楽しみください！！

あと、簡単な報告ですがお気に入りか200件とユニークが

30000人を越えていました。PVもあと少して30万を越えそうです。

読者のみなさんありがとうございます！！

そして、これからもよろしくお願いします！！

遂に和解することのできたティアナなのは。

そして、一護も自分のことを解って貰う為に自分の過去を見せる決心をする……

第23話 一護の過去・その1（死神代行篇）

今から4年前……………空座町……………午後7時13分……………金曜日

1人の派手な髪をした高校生がヤンキーたちをボコボコにしている。

その高校生は、

黒崎一護 / 15歳

髪の色 / オレンジ

瞳の色 / ブラウン

職業 / 高校生

特技 / ……………

一護「オマエら全員アレを見る!!」

ヤンキーたちが目を向けた方向には倒れた花瓶がある。

一護「問1!!」

ヤンキーたち『ビクッ!!』

一護「アレは一体何でしょうか!? ハイそこの一番臭そうなオマエ!!」

ミツちゃん「え…? お…俺? クサそう…?」

あ…あの…こないだココで死んだガキへのお供え物…」

一護「大正解!!」

ヤンキー? 「ミツちゃん!!」

一護「問2!!!!」

じゃあどうしてあの花瓶は…倒れてるんでしょうか?」

ヤンキー? 「そ…それは…」

ヤンキー? 「俺らがスケボーしてて倒しちゃった…から…?」

一護「そうか」

「ユウレイが見える」………

一護「それじゃコイツに謝んなきゃなア!？」

そういつて一護が指差した方には頭から血を流している少女の幽霊の姿があった。

ヤンキーたち『いやあああああ!！

ごめんなさいごめんなさい!！

ごめんなさいもうしませんごめんなさい!！!』

一護「そう……俺は物心ついた頃には当たり前のようにユウレイが見えてた」

一護の独白が続く……

一護「本当に……普通の人間を見るのと同じように……物心ついた頃には当たり前前の

ようにユウレイが見えてた……だから……?死神?なんてもの

の存在は……

考えたこともなかったんだ……」

場面は戻って空座町……黒崎家の一護の部屋……

ス…トツ…ザツザツザツザツ

黒い着物を着た少女が一護の部屋に突然現れた。

ルキア「近い…！」

一護「近い…！じゃあるかボケエ…！」

すーん…！

そういつて一護は侵入者？の少女を蹴飛ばす。

一護「随分堂々と……」（省略します）

……省略……（汗）

一護「見るコイツを！この家のセキュリティはどうなってんだ！？」

一心「ん？見ろって…何を見るんだ？」

一護「あ？何ってこのサムライ姿の…」「無駄だ」

ルキア「常人に私の姿を見ることなどできん。

私は……？死神？だ」

シグナム「このころはまだ……死神ではなかったのか？」

一護「そうだ……このころはまだユウレイが見えるだけの普通の高校生……」

まあ学生だった」

一護は先ほどの死神に術を掛けられ床に這いつくばっている。

そこへ怪我を負った妹の夏梨がやってくる。

夏梨「一兄は……あいつに見つかる前に……早く……」

そういつて夏梨は気を失う。

ビキン…ベキン…ギシ…

一護はルキアにかけられた術…鬼道を自力で解こうとしている。

ルキア「よせ！何をしている！

やめろ！それは人間の力では決して解けん！！

無理をすればお前の魂が…」

一護「才ああああああアア！！」

バキイ！！

鬼道を解いた一護はバットを持って一階へと駆ける。

そして、そこには…

第97管理外世界…地球に現れた虚がもう一人の妹の遊子を襲っている姿があった。

なのは「あの虚は…あの時の…！！」

一護「そうだ…何の因果か…最初に倒したのはあいつだったな…

…」

映像の中の一護たちは追い詰められ、絶体絶命になる。

ルキア「…家族を助けたいか?…」

一護「!!あるのか!? 助ける方法が!? 教えてくれ!!」

ルキア「一つだけある…いや正確には…一つしかないと言っべきか
…」

そう言うとルキアは自らの斬魄刀を抜いて一護へ向ける。

ルキア「貴様が…死神になるのだ!!」

一護「!!…!!な…!!…!!何言っただ…!!そんなことが…!!」

ルキア「できる!!」

貴様がこの斬魄刀を胸の中心に突き立て…

そこに私が死神の力の半分を注ぎ込むのだ!!」

シヤマル「胸の中心に突き立てるって……死んじゃわないの!？」

一護「…これは…あくまで俺の霊的資質が強かったから成功したよ
うなもんで…」

何回もうまくいく保証はねえし、あの時だって失敗すれば死
んでたな」

ジエイル「随分な方法だね……」

一護「でもあの時はああするしかなかったし…俺が死神にならな
かったとしても」

どっちにしろ死んでたんだ…あの方法は最適だったともいえ
るんだ…」

一護「……………いくぞ」

ルキア「……………ああ」

ドスツ! ……………ドン!!

刀が突き立てられた瞬間、辺りを物凄い爆風が襲う。

その中に、人の姿を確認した虚が襲いかかろうとする……しかし、

ピン！！

虚の腕が切り裂かれる。

そして、その背後に死神の服を纏い身の丈ほどの日本刀を持った黒崎一護の

姿が現れる。

一護「ウチの連中に手エを上げた罪を思い知れサカナ面！！」

そういつて一護が虚の頭を一刀両断するところでこの映像は終わった。

ジェイル「おお！！一護くんあれが君の最初の姿かい？」

一護「そうだ…後でわかることだけど…あれはルキアから譲り受けた力で俺の

本当の力じゃねえんだ」

はやて「ほんならいつ本当の力を手に入れたん？」

一護「まあ……この映像みてきゃすぐわかるぞ」

はやて」「むづ…早よ教えて欲しいんやけど……」

場面が変わって数日後の一護の部屋……

ピュピュピュピュピュピュ

一護「なんだ？こんな夜中に…遊子か夏梨がゲームでもやってんのか？」

ピッ……

一護「お、止まった」

ピシヤン！！

ルキア「一護！！」

一護「うおあ！？」

いきなり押し入れの扉が空くと中からルキアが……

一護「てててててめえ！！いつからそこにいやがった！？

ていうかそれ遊子のパジャマじゃ……」

ルキア「すべて後にしろ！指令だ！！」

一護「指令…！？虚が出るってことか！？場所は！？」

ルキア「時間も場所も…今…ここだ！！」

そういうとルキアは一護を死神化させる。

それと同時に一護の枕辺りから巨大な腕が突出してきた。

一護「……………な……………ッ」

メリメリメリ

そして、虚の巨体が空間の罅から出てくる。

ルキア「頭を狙え！！」

一護「わかってるよ！！」

ガッ！！

しかし、浅かったのか虚は消滅しない。

虚「おオオオオオオオ！！」

一護「！！！！」

バシユア……………

虚はすぐさま逃亡を図った。

ルキア「逃がしたか……！追うぞ……！」

一護「……までよ……！……どういうことだ……？……今は……井上の兄貴だった……！」

ルキア「背後から一撃で頭を割るのが虚退治のセオリーだと言った……」

戦いにおけるダメージを減らすために……と、だがそれにはもう一つ

もっと大きな理由がある。一撃で倒し……虚の正体を決して見ぬように

するためだ！虚というものは全て……元は普通の人間の魂だったもの

だからだ……！」

ジェイル「な……あの化け物が……人間……？」

ウーノ「そんな……どうして……」

はやて「そういえば……あの時もそんなこと言ってたな……」

クアットロ「……………」

ジェイル「？先ほどからクアットロが何も言っていないんだが……どうしたんだい？」

ドゥーエ「あら……？気を失ってますね……」

チンク「そういえば……クアットロは幽霊とかの非現実的な物は苦手だったな……」

トーレ「……………意外な一面だな……」

一護「まあ……そのままにしといてやれ……」

場面は再び移って井上織姫の家……………

虚「……………俺の声も忘れたのか……………悲しいな織姫……」

そう言うと虚は織姫に自らの腕を振り下ろした。

ゴッ……………

一護はなんとかそれを斬魄刀で受け止めた。

虚「……………邪魔する気が…！」

一護「…悪リイが…それが死神の仕事なんでね…井上を殺したけりゃ…」

先に俺を殺すんだな！」

織姫「……………あ…！やっぱり！黒崎くんだ…！」

一護「……………おまえ……………どうして俺の姿が見えて…」

織姫「え…？えっと…？どうして…？…？」

虚「決まっているだろうそいつが魂だからだ…！」

一護「！？」

虚「残念だったな織姫はもう……………死んだ…！」

ガン…！

虚の尻尾による一撃を受け止める一護、しかし…

一護「（鱗…！？刃が通らね…）」

ドン…！

硬い鱗に阻まれて刃が通らず、窓から吹き飛ばされてしまう。

ダン！ガガガガガガ……

咄嗟に一護は空中に足を止める。

一護「くそ……ッ」

虚「どうした……威勢のいいセリフを吐いた割には……随分と動きが鈍いじゃ

ないか……そんなに……織姫の魂が体から抜けていたことがショックか……？

なア！？黒崎一護……！

ジャッ

虚の口から酸性の液体が吐き出される。

一護「……！」

バシャアッ……ジュウ……ッ

一護「ッウア……っ……？」

一護はそれを右手に喰らい、斬魄刀を落としてしまう。

ヒュ……ドン……！……ズドオオオオン……！

さらに虚は尻尾で追撃し、一護を地面に叩きつけた。

ルキア「一護!!」

虚「……淋しかった……!淋しくて淋しくて何度もおまえを……殺……」

虚の独白が響く中、一護が再び戻ってくる。

ドン……!

しかし、一護は尻尾によって壁に叩きつけられる。

一護「く……ッ」

織姫「黒崎くん!!」

虚「さあ……一緒に行こう織姫……俺といっしょに……また、あの頃のように」

二人だけで暮らそう……」

織姫「……どうして?淋しかったならそう言ってくればいいのに……」

どうしてこんな……黒崎くんやたつきちゃんをキズつけたりするの……

どうして…あたしのお兄ちゃんは…こんなことする人じゃな
かったのに…！」

ガッ

織姫「んう…」

虚「殺してやる…！俺をこんなにしたのは誰だと思ってるんだ…！！

お前だろっ織姫…！殺してやる…殺してやる殺してやる殺して
やるぞ…！！」

ドン…！！

突然、虚の手首が切り裂かれる。

ドドドドドドドドドドドド…

それに続けて尻尾も細切れにされてしまった。

一護「…兄貴つてのが…どうして一番最初に生まれてくるか知って
るか…？」

後から生まれてくる…弟や妹を護るためだ…！！

兄貴が妹に向かって？殺してやる？なんて…死んでも言うん
じゃねエよ…！！」

織姫「黒崎くん…！！」

虚「うオオオオおおお!!」

ティアナ「一護さん……」

ティーダ「（彼は……兄の鏡みたいな存在だな……）」

ウエンディ「カッコいいす!!」

一護「……………」 照れてる

一護「……あなた……一体何見てたんだよ……あいつのヘアピン……あれ、
あんたからの

プレゼントなんだろう？井上言ってたぜ……お兄ちゃんが初め
てくれた

プレゼントだ、って……だから毎日つけてるんだ、ってな……
同じなんだよ

死んだ奴も残された奴も…どっちも同じだけ淋しいんだ…！

自分一人だけ淋しがってるなんて…そんな勝手なこと思っ
てんじゃ

ねえよ…！」

虚「…気付かなかった…」

ズル…ズル…

一護「お…おい…どこ行く…」

ドン…！

虚は一護の斬魄刀に近づくと、自らの仮面を切り始めた。

一護「…な…あんた…！何して…」

虚「…いいんだ。このままでいても俺は…きつといずれまた自分を失って織姫を

襲う…だから今、少しでも正気を保っている間に消えておきた
いんだ…」

一護「何でそんな…なにも…」

ルキア「一護！…そいつの判断は正しい…一度虚になったものは二
度と元には

戻らぬ！そのまま消えさせてやれ」

一護「ルキア…！」

ルキア「…案ずるな。虚を？斬る？ということとは？殺す？ということではない。」

罪を洗い流してやるということだ」

シグナム「なるほど……普通の霊も悪霊もすべて成仏させるのが死神の仕事なのか」

一護「そういうことだ……まあ…例外みたいなものもあるけどな……」

フェイト「例外……？…？…？…？…？…？…？」

一護「それも見てれば分かるから焦るなって」

虚「…それじゃ…さよならだ織姫……」

織姫「…お兄ちゃん………いってらっしゃい………」

ザア……………

3人に見送られ、井上織姫の兄・井上昊の霊は微笑みながら消えていった……

なのは「うう……………グスッ……………良い話だよお……………」

クアットロ「ホントですわぁ……………グスッ……………」

ウーノ「いつの間にか復活してるし……………」

ジェイル「これまた意外だねえ……………」

場面は再び変わって空座町の路地……………

蝙蝠のような姿をした虚と一護たちは対峙していた。

そして、一護が死神化すると同時に虚が己の武器のヒルを吐きつけた。

ドパアンー!!

しかし、

タン……

一護「遅えよ……」

ドン……!

一護は難なくかわすと虚の肩口を切りつけた。

虚「へへへ……死神の本体が出やがったか……」

ルキア「気をつける……一護……奴らの吐き出すヒルは……爆弾だ……!」

ドッ……ドッ……

一護は虚の投げつけてくる手下を切り裂いていく……

虚「へへ!てめえよく動くじゃねえか!ヒルが爆弾だってんなら吐き出される

前に切つちまえば良いってか!?だがてめえは一つ勘違いをしてるぜ……!

斬った後に出てきたヒルも…まだ爆弾であることには変わりねえんだぜえ!!」

ポポポツ……ズドオン!!

虚「ヒヤハハハハ!!……」

ドウツ!!

虚が高笑いを上げていると、煙の中から一護が飛び出してくる。

虚「へえ…えええええあああ!!!!」

ビタツ……

一護は虚の首筋に刀を当てて止めた。

一護「一つ……てめえに聞きてえことがある……」

インコの中の子の母親を殺したのは…てめえか!?

虚「そうだ」

一護「!」

虚「あの餓鬼の母親を殺したのは俺だ! 4・5年前か…まだ俺が生きてた頃だ。」

その頃の俺は名の知れた殺人鬼でね…あの餓鬼の母親はその最後の殺しだ!

楽しかったぜえ…何回刺しても逃げ続けて、あの餓鬼抱えてを
守るごと

しやがるんだ…これこそ殺しの醍醐味ってヤツだ…！」

一護「てめえ…！！」

虚「でもそこからがいけねえ…ベランダに出た母親にとどめを刺し
たまでは

良かったんだが…あの餓鬼が俺の靴ひもを掴みやがった…その
せいで俺は

バランスを崩して…くやしかったぜえ……母親は殺せてもあの
餓鬼は殺せ

なかったんだからなあ…だから俺はあの餓鬼の魂を抜き出して
インコの中に

ぶち込んである任務を与えた…俺から3か月の間逃げ続けるこ
とが出来たら

アイツの母親を生き返らせてやるってな…！」

一護「生き…かえらせる…そんなことが…？」

虚「バアカが…！そんなことできるわけねえだろ…！アイツにこれ
を続けさせる

ための俺の口先だけの嘘さ!!だが!アイツには効果てき面だったぜえ!!

俺があいつを庇うヤツを殺すたびにあの餓鬼は言うのさ…もうやめて、

こんなことしたくない、もう殺さないでってな。そのたびに俺がこっ言うのさ

?ママが助けを待ってるぜえ?楽しいぜえ…分かるか?その一言だけで餓鬼は

すぐに元気になって喚くのさ?ママ、ママ?ってな!

ギリッ…

今日「どうした?死神!!懐が…がら空きだぜえ!!」

ドピア…ドチャドチャ…グ…ッ

虚「見たか!?喰らったな!!こいつで終わりだ!!ヒヤハハハハハハハハ!!」

ドズン!!

一護は自分の手につかんだヒルごと虚の口の中に突っ込んだ。

「護」「…よう…返すぜ…この爆弾…」

虚「あ…おっ…ああ……」

「護」「どうした…？この舌で爆発させるんだろ…！？さあ…鳴らし
てみるよ……」

虚「ああ…うあ…うおおおおあああ…」

虚は恐怖で声が出せない……

「護」「鳴らせねえか…？ならその舌……俺が貰っぜ！……」

ブチィ！！

虚「ぐおおおおお！！くそ…くそお！！てめえ！！よくも俺の舌を
おおお！！」

ドスッ！！

「護はその声に構わず、虚の足に刀を突き立てる。

虚「ぐわあああああ……足…足が…俺の足が！！」

「護」「これでてめえは動けねえ…武器を使って戦うこともできねえ
……

「？
少しは理解できてるか…！？狩られる側の気分ってやつが！

虚「ヒィ…ィィ……」

すると虚は足を引きちぎって、翼で空へ逃げようとする。

一護「…忘れんなよ…その恐怖を！！頭の芯まで叩き込んだまま…消える…！！！」

ドン…！！…ゴウン…！！

一護「！？？」

ビシッ…ベキッ…バキン！！バキバキバキ…ゴオオオンンン…

突然、虚の体がひび割れ始めたかと思うと、虚の後ろに巨大な門が出現した。

一護「な…！なんだよ…あれ…！？？」

ルキア「…地獄だ。

斬魄刀で洗い流せるのは、虚になってから犯した罪のみ…

生前に大きな罪を犯した者は地獄へと引き渡されることになっている。

…そら…地獄の門が開くぞ…！！

ガラアアアッ…

虚「ぐわああああああ…」

ズドン…！！

虚は門の奥から出てきた巨大な刀によって串刺しにされてしまい、そのまま地獄の

中へと引きずりこまれていった……

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……ゴオオオオオオオオオオ……

一護「地獄に……堕ちたのか……？」

シグナム「なるほど……先ほど例外があると言ったのはこういうことか……」

一護「そうだ……ここに限っては普通の霊も虚も関係ない……生前に罪を犯したら

どんな理由でも地獄に囚われることになる……そして、地獄に囚われると

咎人っていう存在になって、絶対に地獄から出ることが出来なく

なるんだ……」

ジェイル「……？一護くん……君は……随分と地獄に詳しいみたいだけど……まさか

見て来たことがあるのかい？」

一護「へえ…よく分かったな…確かに俺は地獄に入ったことがあるぞ…でも」

その話はまた今度な……」

はやて「また誤魔化した！！」

ちなみに、コンについての映像をみんなに見せたところ、後半のいい話を前半の巨乳&

女好き騒動で相殺どころかマイナスイメージの方を強くしてしまったりする。

一護談「俺のせいじゃねえ！自業自得だ！！」とのこと。

………6月16日………夜・一護の部屋………

ルキア「楽しそうだったな」

一護「……………何が？」

ルキア「何が…ってさっきの家族会議だ。あれか？明日は学校サボって

ピクニックにでも行くのか？」

一護「なあるキア…死神の仕事…明日一日だけ休むっての…ダメかな…」

ルキア「な…何を言っているのだ！？そんなのダメに決まっているだろうー！！

貴様一体どうしたというのだ！？今朝からずっと様子が…」

一護「命日だよ。

明日はおふくろが死んだ日なんだ……………いや、違うか……………

正確には？死んだ日？じゃない…？殺された日？だ」

……………翌日6月17日……………空座町墓地……………

一護「…ふー……………しかし…6月だったのに暑いなア今日は……………

同じ6月17日なのに……エライ違いだよな……」

一護「なんでついて来てんだよっ!?!」

ルキア「たわけ! 私が傍におらねば虚が出たときにどうするのだ」

一護「だからってあんな……ていつかついて来るならもっとコッソリついて来い!!」

ルキア「そりやすまん。気がつかなかった」

一護「……おまえ……何怒ってんだ?」

ルキア「別に怒ってなどおらぬ。……殺された……と言ったな。貴様の母親……」

一護「……言ってねーよ」

ルキア「……誰に殺された?」

一護「言ってねっての。忘れるよ」

ルキア「貴様は物心ついた頃から霊が見えたと言ったな。ならば……つだけ答えて」

くれ。貴様の母親を殺したのは…虚ではないのか？

可能性はあるのだ！物心がついた頃から靈魂が見える程靈
的濃度が

高かったのならその貴様を狙ってきた虚が…誤って母親を

…」

スウ…

一護「やって…らんねー！！！！」

一護は突然大声を上げる。

一護「冗談じゃねーぞ。てめーにかかったらナンでもカンでも虚の
仕業に

なっちまうのな。もとからジョーダンじゃねーのにだ、そん
な理由に

されちゃ更にジョーダンじゃねーことこの上ねー……

…虚とかじゃねーよ！予想が外れてザンネンでした…」

そこで一護はルキアの後ろにあるものを見つける。

一護「ウ…ウソだろ…なんでこんなトコに…」

ルキアは一護の様子が変わったのに気付く。

ルキア「?…どうした?…」

ザッ!ダッ…

すると、一護は突然振り返って走り出した。

ルキア「一護っ!?!」

ルキアは自分の後ろを振り返って一護の見たものを探す。しかし、

そこには何もいなかった。

ルキアは一護を追いかける。

ルキア「一護!」

ルキア「はあっはあっ…な…なぜ逃げる!何が…」

一護「…ねえんだよ。虚でもなんでもねえんだよ…!おふくろを殺したの…」

…俺なんだ…!!!!」

なのは「ど…どういふこと…？だって…あの時の虚がお母さんの仇
つて…」

一護「そつだ…このころはそのことを知らなかったからな…」

フェイト「でも…どうしてそう思ったの？」

一護「…ヴェロツサ…映像を10年前に飛ばしてくれ」

ヴェロツサ「…ああ…」

一護「…物心ついた頃からユウレイが見えた。あんまりはつきり見
えるもんだから

子供の頃は生きてる人間と死んでる人間の見分けがつかなか
った。でも、

そんなことは些細なこと…大したことないと思っていた。

それは…あの日まで…ずっと…」

…10年前…一護・9歳…6月17日・雨…

雨の中、大人の女性一人と男の子が川沿いの道を歩いている。

一護「1人の女の子がいたんだ……」

その日は雨で、その前の日も雨で、そのまた前の日も雨で、

おかげで川の水はけっこう増水してて……それなのにその女の子は傘もささずに

フラフラと……今にも飛び込みそうなカンジで川べりに立って……そして……

当時の俺はまだ生きてる人間と死んでる人間の区別がつかなくて……

……最初はおふくろを守りたいと思った……妹が生まれて守る対象が増えた……

守るために道場に通い続けた……少しずつ強くなった……もっともっととたくさんの

ものを守りたいと思うようになった……」

真咲「だめ！一護！！」

そこで映像は一旦途切れる……そして、映像が戻ると……

一護を何かから庇い、背中から血を流している一護の母・真咲の姿があった。

一護「おふくろが、大好きだった。俺だけじゃない。その頃まだ4つだった遊子や

夏梨も親父だっておふくろが大好きで……つまるところ、その頃のウチは

おふくろを中心に回ってた。その中心から…俺がおふくろを奪い取って

しまったんだ。俺が………」

ティアナ「一護さん………それである時……」

一護「………大きな力つてのは………必ず大なり小なり欠点つてのがあるもんなんだ。」

俺はこの力のせいで…おふくろを死なせてしまった…そうい
うことだ……」

場面が飛んで……

あの時の少女？と中型の虚が一護と対峙している場面が変わる。

一護「……………どういうことだよ…？てめえ…あの時川べりに
いた奴だろ…！？」

6年前だ…！それがどうしてここにいる…？どうして…虚と
いっしょに

いるんだよ…！？」

少女？「6年前…か。そんな昔のことは覚えておらんが…成程…お
まえはわしを見た

ことがあるのだな……」

一護「そつだ！てめえ一体何者だ！？虚の手下なのか！？」

それとも虚に操られてんのか！？何とか言えよ…！」

少女？「…どれも外れだ小僧」

そうつぶやくと、少女？の体に異変が起り始める。

ズル…ッ

一護「……………！！！！てめえは……………！！！！」

少女？「…わしの姿を見ても生き残っておる奴がおったとは…ふふ…
……………おまえ…」

運の良い奴よの「

一護「……………」

バリバリ…ズロロロロロ…

突然、少女の形を成していた皮が破れ、中から小型の虚のようなものが現れる。

さらに、それから触手の様なものが出てきて虚と合体する。

一護「……………な…何だよそれ…！！？」

虚「…だがその運もここまでよ。この姿を見せた以上…お前の魂…
喰らわずに

帰すわけにはいかん「

一護「……………どういうことだよ…さっきのガキ…テメーの体の一部だったのか…」

ルキア「グランドフィッシャー。奴の呼称だ。自らは姿を隠し、首から生えた

疑似餌に人の形をとらせ、それが見えた人間…つまり霊的濃度の高い

魂を持った人間のみを襲って喰らう。そうすることで自らも力を得、

54年の長きに渡って我々死神を退け続けてきた」

そう言うとルキアは自分の端末から情報を取り出す。

ルキア「そういうやつだ。知名度は中の上。ほれ、こうして尸魂界のデータベースに

しっかりと記録が残っている程度には、名が知れておるといふことだ」

フィッシャー「言うね、餓鬼」

くしゃ……っ

一護はその情報の書いてある紙を握りしめる。

フィッシャー「それにしても、わしの姿が見える奴が多いの。大漁だわい…ひひっ」

一護「(…それじゃあ…あの時俺が助けようとしたのはこいつの疑

似餌で…

それはつまり、俺がこいつの罠に嵌ってたってこと。それはつまり……

おふくろはこいつに………）」

フィッシャー「参ったの。こりゃ、ぜんぶわしの腹におさまりきるかの。

ひひひひひひひひっ」

ザッ……！

一護は耐え切れなくなり、飛び上がってフィッシャーを切りつけようとする。

ルキア「一護っ！？」

一護「ああああああああア」

ルキア「ばっ……」

ズドン……ゴッ……

しかし、一護の刀は空振りになる。

一護「……」

ルキア「迂闊だ莫迦者……」

フィッシャー「ひひっ。青いの…小僧！じゃアッ！！」

そう言うとフィッシャーは先ほど一護に切り飛ばされた左足を再生させて一護を

攻撃する。

一護「くっ！！」

ガガガガガガッ

一護はそれを刀で何とか逸らし、近くの岩に着地するが…

一護「！！」

上空からフィッシャーが髪を絡めて攻撃してくる。

ルキア「一護！！」

自壊せよロンダニーニの黒犬！！一読し、焼き払い、

自らの喉を掻き切るがいい！！」

一護「やめるルキアあ！！！！」

そう叫ぶと、一護はフィッシャーの髪を切り落として地面に落ちた。

ルキア「一護！！」

一護「ルキア！…今回オメーは引っ込んでろ。俺一人でやる。」

オマエはコンと一緒に遊子と夏梨をたのむ」

ルキア「莫迦を言うな。奴は強い！言ったらろう！奴は50年以上も死神を退け…」

一護「うるせえ！…」

…たのむ。手エ出さないでくれ。これは俺の戦いだ」

フェイト「いくらなんでも…一人じゃ…」

一護「そうだな…すぐに思い知ったよ…でもな…コイツだけは…俺の手で」

倒したかったんだ…」

一護「ああああアア」

一護は左手に絡みついたフィッシャーの髪を切り飛ばす。しかし、

フィッシャー「のろいぞ小僧」

一護「な……………」

フィッシャー「ひひっ!!」

物凄い速度のフィッシャーの攻撃に払いのけるだけで精一杯になっている。

一護「おおおおおおお」

一護が意を決してフィッシャーの懐に入ろうとするが、

フィッシャー「迂闊だと言われなかったか？小僧。そうして策も無しに敵の懐に

飛び込むのは!!」

一護「く……………」

逆に接近され左手で攻撃される。

ガッ…………

一護は咄嗟に斬魄刀で受け止めるが、

フィッシャー「そら気を抜く!!」

バチバチン…バチツ!!

フィッシャーの左手から爪の様なものが飛び出し、

フィッシャー「そこが迂闊だというのだ小僧!!」

ズルツ……ドドドツツ!!

一護の胸と背中に突き刺さる。

一護「げほ……ッ」

ドクン……ドクン……ドクン……

ズ……ッ

一護「はっ……はっ……」

フィッシャー「短慮、短慮よ。一時の感情で仲間を払い、一時の感情で敵の懐に

飛び込む。おまえはこうしてわしに弄ばれ、一太刀の傷もわしに

与えることなく死んでゆくのだ」

一護「ふ……ッざけんな!!!!」

ブン!!

一護はフィッシャーに向けて刀を振るう。

一護「倒すんだよ！腕が千切れようが足が飛ぼうが…俺はてめえを絶対に！！」

フィッシャー「……………だからおまえは死ぬというのだ」

バサツ…

そうフィッシャーつぶやくと、疑似餌を再び皮のようなものが覆う。

フィッシャー「おまえは若い。若いがゆえにたやすく怒り、怒るがゆえに心乱す」

フィッシャーはその顔の部分を右手で掴む。

グチ……………ッグチユ……………

フィッシャー「そして、心乱すがゆえに刃は鈍る」

そして、フィッシャーが右手を開くと

フィッシャー「終わりだ小僧！おまえはわしと戦うにはあまりに若すぎた！！」

6年前と変わらない姿の母の顔があった。

一護「……………！！！！！！」

フィッシャー「ひひ、驚いておるな。わしは6年前のことなど憶えていない。

母親の姿を

確かにそう言った筈なのに。なぜこうしておまえの

作ることができたのか、それが不思議でしょうがない。
い。そういう顔を

しておるなあ！！ひひひひひひっ！！！！」

「護」……てめえ……」

フィッシャー「……気がつかなかった？わしがおまえを攻撃する時、
こ^{左手}っちの手だけを

使っていたことに……

覗いたのだこのツメで！おまえの記憶を！！

こ^{左手}ちらの手で敵の記憶を覗き、そいつが最も斬るこ
とのできぬ

ものをさがす。そして、こ^{右手}ちらの手でそれと同じも
のを作りあげる！」

「護」……」

フィッシャー「どんな冷徹な死神も決して斬ることのできぬ相手が
一人はいる。

それは必ずだ。それを捜し出す事でわしはこれまで
死神共を退けて

きた。そして、おまえにとってその相手とは……
である筈なのだ……！」

真咲？「……そうでしょう……？……一護……！」

一護「…………」

ゼスト「むう………なんと卑劣な………！！！」

ウェンディ「むう………コイツ汚いッス！」

ドワーエ「一護さん………」

一護「………ヴェロッサ……映像を一旦止めてくれないか？」

ロッサ「？ああ………いいけど………」

フェイト「？………どうしたの？一護？」

一護「………あ………そのだな………ここから先の映像は……… P G - 1 2
………いや……… R - 1 5 指定か？」

ぐらいの映像でな………あまり見ることを勧めないんだが………」

なのは「………どのくらい………」

なのはは恐る恐る一護に尋ねる。

一護「う〜ん……言ってもいいけど……こっちじゃまず即死クラス
のヤツだし……」

ジェイル「即死って……」

ノーヴェ「……言っても良いんじゃないね？」

クアットロ「ドンとこい！ですわー!!」

フェイト「ままま待って!? エリオたちは聞いちゃだめだよ!!」

トーレ「……お嬢様……さすがに過保護すぎでは……?」

シグナム「お前の話し方だと……ここ以外にもそのような場面がある
のだから?」

それなら試しに言ってみたらどうだ？」

一護「確かにそうなんだけどよ……分かった……まあ……」

……ぶっちゃけ……敵の腕が俺の腹を貫通するんだが……

……」

全員『!……!……!……!』

一護「……見るか?」

全員（ゼスト他除く）『そのままは……ちょっと……』

一護「ヴェロツサ…モザイクって付けれるか？」

ロツサ「うん…出来るよ？」

全員『余計に生々しいからやめて（くれ）!!』

これにはゼストたちも同意のようだ。

一護「じゃあ普通に見せるけど……我慢しろよ？」

フェイト「エリオたちは目を瞑っててね!!」

ウーノ「だから過保護ですって……」

一護「はっ…はっ…はっ……」

フィッシャー「どつした、名を呼ばただけでもう身動きがとれんか。ひひ」

一護「てめえ…自分が何してるかわかってんのか…!？」

フィッシャー「んん？」

一護「おぶくろの姿を!こんな場所にかつぎ出すんじゃ…ねえよ!

！」

そう言つて一護は刀を振り上げるが、真咲？が立ちはだかる。

真咲？「だめよ一護！刀を引いて！お願い…母さんを斬らないで…」

一護は声を上げることにも動くこともできない。

ヒュン…ドスツ…！！

そして、フィッシャーの腕が無防備な一護の体に疑似餌ごと突き刺さった。

フィッシャー「言つたろう。？怒りは刃を鈍らせる？！終わりだ小僧！

中で、
そして敬意を表しよう！！おまえはわしが出会つた

最も若く、最も短慮で、そして！最も弱い死神だつた！！

ひひひひひひひひひひ

ドス……………

フィッシャー「……………あ……………？」

フィッシャーの体には一護の刀が刺さっている。

「一護」……やつと……捕まえたぜ……！」

「一護は自分の体を貫通しているフィッシャーの腕を掴む。」

「一護」？怒りは刃を鈍らせる？か……確かにそうかもしれねえ……だけどな

グランドフィッシャー、あんた一つカン違いしてる。

「テメー程度の奴を倒すには……その鈍った刃で充分だつてこ
とだよ……！」

「終わりだフィッシャー！そして敬意を表しよう！テメーは俺
が出会った中で

「一番年喰ってて、一番汚くて、そして一番カンに障る虚だつ
たぜ」

「ドン……！」

「一護はそう叫ぶと、フィッシャーの体に刺さった刀を完全に振りぬ
いた。」

「バシヤアアツ……！」

「フィッシャー」うきやあああああああああつ。うでが……
腕がわしの

「体がアアア……！！あああああああああ」

一護「ゴホッ……………」

ミチミチ……………バツンッ！！…ガラン……………ポツ…ポツ…ザアアアアアアア……………

一護の背負っていた鞆のベルトが千切れて地面に落ちる。

それと同時に雨も降りだした。

一護「はーっ…はーっ…はーっ…」

フィッシャー「ばはーっ…ばはーっ…ばはーっ…ゴブッ…」

ルキア「一護ー！！」

一護「…よオ…遅かったじゃねーか…もう全部…片付いた後だぞ…」

ルキア「……………たわけ…手を出すなど言ったのは……………貴様ではないか」

一護「…そうだったか……………へへ……………」

ズ…

ルキア「…！！後ろだ一護ー！！」

一護はフィッシャーの顔から出てきた触手をかろうじて躲すが、顔をかすめ、さらに

腹の傷口の出血を酷くさせてしまう。

一護「…てめえ…ッ」

一護は激昂して斬りかかろうとするが、怪我の所為でうまく動くことが出来ない。

ルキア「…よ…止せ一護！無茶だ！！」

フィッシャー「ひひっ…そうだ止めておけ！視覚の発達した獣は全て視覚に

支配される！！そう、おまえは中身がわしだと判つていても

母親の姿をしたわしを斬ることはできんだ！！

そして！たとえ斬れたとしてもその体ではわしを追うことなど

できん！！」

そう言うとフィッシャーは雨の中を飛び去っていく……

一護「待てよ…ッ！！」

ルキア「一護！」

ガシッ……

ルキアは一護を掴んで止めようとする。

ルキア「もう良い！もう止せ！おまえも…奴ももう戦えぬ！戦いは……」

終わったのだ…！」

一護「…まだまだ…！！」

あいつはまだ死んでねえ…！俺はまだ戦える…！まだ…」

ルキア「一護！！」

そこで画面は暗転した。

一護「……………ってわけなんだが……………って……………やっぱり駄目だったか？」

そこにいるメンバーは、ほとんどの人間が涙目になっていた。

その上、エリオたちは映像が終わったにも関わらずまだ目隠しをされたままである。

ゼスト「しかし……………なぜお前は生きていたのだ？」

ジェイル「それは僕も気になるねえ……………」

一護「……………死神ってのは…魂…所謂人間の魂魄と同じ存在ってのは

分かるか？」

はやて「そりゃ…………一護くんが死神になると体が動かへんようになるし…………」

一護「でだ…魂の状態での生命力は霊力の大きさなんだ」

ジエイル「…………なるほど…………君は霊力が大きかったからあの傷でも生きて

いられたのか…………」

一護「そついうことだ…………あと、これより酷いのがまだあるからな…………」

フェイト「うづ…………」

なのは「まだあるの…………？」

一護「もうチヨイ先だけだな…………」

ここでは端折るが、観音寺の映像を見せると

オットー&デイド曰く『カツコいい…………服が…………』とのこと。

その後、みんなに「え…………弟子なの…………？」と可哀想な人を見

る目で見られた

一護くんであった。(ちなみに例の双子は羨ましそうに見ていた)

一護「俺は弟子じゃねー……………!!……!!」

一護たちの学校の期末試験が終わった日の夜……………

一護「結っ局!!また虚はいなかったじゃねえかよ!!昼間のも!
今回のも!」

そう、最近になって指令は出るのだが肝心の虚が出現しないのである。

ルキア「うるさい!さっさと体に戻れ!」

一護「いいかげんホントどうにかしろよ!」

ルキア「私のせいだというのか!?私は伝令神機に入る指令のままを貴様に伝えて

おるのだ!!」

一護「だからそいつを早く直せつての!!」

??「仲間割れかい?みつともないな」

一護たちが口論していると、突然何者かに話しかけられた。

??「こんばんは。黒崎くん、朽木さん」

一護「…誰だおまえ？へんなカツコしてんな、神父か？

なんで俺らの名前知って…」

??「黒崎くん、きみは霊が見えるんだよね？」

一護「な…何言ってるんだ！？そんなモン見えるワケ…」

??「あつ…新しい虚が来たね」

ピピピッ

一・ルキ『!!』

ルキア「ほ…本当に来た！！指令だ！」

一護「ど…どつちだ!？」

??「あつちだよ。その程度もわからないで…キミはそれでも死神か？」

??は腕につけたブレスレットのようなものから弓を作り出し、先ほど指差した

方向へ矢を撃った。

??「疾ッ!」

ルキア「反応が…消えた……!」

一護「な……何なんだおまえ……!?!」

石田「石田雨竜…滅却師^{クインシー}…僕は死神を憎む」

一護「………何だと……?」

石田「わからないかい黒崎一護。こう言ってるんだ。君を憎むと」

なのは「……一護くん……何であの人は一護くんを憎むなんて……」

一護「まあ……それに関しては俺が何かしたわけじゃないんだが……」

シグナム「では……なぜあの男は一護にそう言ったのだ?」

一護「しいて言うなら……俺が死神になったから……ってのが答えかな」

全員「????????」

場面は移り、翌日の放課後……通学路の一角……

石田「家までついてくる気かい？黒崎一護」

一護「ちえっ、バレてたのか。いつから気付いてた？」

石田「井上さんと教室のドアの所から僕を盗み見てた時から」

一護「ほーーすげーすげーたいしたもんだ」

石田「君の霊力はバカみたいに垂れ流しだからね。猿でもわかるよ」

一護「何だとオ？」

石田「君はどうもそういう霊力の高い人間を察知する能力は欠けている」

「みたいだね。その証拠に、今日まで僕の存在に気付かなかつた」

一護「悪かったな！俺は人の力とか憶えんの苦手なんだよ！

だからオメーのことも……」

石田「そうじゃない。僕は気付いてたよ。この学校に入学した時から

君の霊力の異常な高さ。その君が、5月の半ばに死神の力を

身につけたことにも。そして、朽木ルキアの正体も」

石田「…僕は滅却師^{クインシー}。虚を滅却^{こじつ}する力を持つもの…勝負しないか黒崎一護

死神と滅却師^{ほく}とどちらが優れているか。解らせてあげるよ。

死神なんてこの世に必要ないってことをさ」

一護「……勝負だと…？俺とおまえが？」

石田「そうだ。この世に死神なんて必要ない」

シグナム「この男…かなり死神を憎んでいるようだな……」

一護「……まあ……あいつにも事情があつたんだよ……」

はやて「また内緒なん？」

一護「今回はすぐにわかるわ」

一護は結局勝負を受けることにしたようで、すでに死神化している。

一護「サア、とつとと説明しろよ。勝負のルールを！」

石田「これで勝負しよう」

そう言っつて石田は胸のポケットから何かを取り出す。

一護「…あ？何だそりゃ？」

石田「対虚用の撒き餌だよ。これを砕いて撒けば虚がこの街に集まってくる」

一護「…何だと……？」

石田「集まってきた虚を24時間以内に多く倒した方の勝ち…ってのはどうだい？」

わかりやすくいいルールだろ？」

石田はこともなげにそう言い放つ。

一護「何だそりゃ！？ふざけんな！！俺らの勝負のために街中の人間を危険に

曝す気か！？何様だよてめえ！！」

石田「うるさいんだよ、御託がさ！」

パキン！！

そう言つて石田は撒き餌を砕く。

石田「他の人間の心配なんて必要ない！集まつた虚は一匹残らず僕が滅却

するんだから！

君も……………虚から人々を守りきれぬ自信があるなら…………この勝負…………

受けられる筈だろっ？」

一護「……………！！」

……………ガンッ……………

石田「…まずは一匹…！！」

ガッ！

石田「！！」

ダガン！！

一護は石田の襟を掴んで壁に叩きつける。

石田「…なんて顔をしてるんだ？黒崎一護」

一護「…元に戻せ。虚を追い返すんだよ！」

石田「…無茶を言うな君は。見てただろう？今僕、が何をしたか。賽は投げられた

というやつさ。じきに撒き餌につられた虚でこの町は埋め尽くされる。

僕に掴みかかるより先に、走った方がいいと思うよ。君が少しでも多くの人を

虚から守りたいと願うならね」

一護「てめえ…」

石田「そして気をつけた方がいい。知ってるだろうが虚は靈力の高い人間を好んで襲う

習性がある」

一護「！」

一護はすぐに思い当たった人物がいたようで、脇目も振らずに駆け

だした。

一護「くそ……ッ！」

ガッ……

一護は路地を駆け抜けながら虚を切り裂く。

一護「……よし！（今のヤツでさっき夏梨を見かけた場所から家までの間の虚は

あらかた倒した！これでひとまず夏梨は安全だ！）

あとは石田！！テメーを泣かしてこの状況を收拾させる！！」

~~~~~注・一護のイメージです~~~~~

石田「キミでいどの力でボクを見つけれられるかな？……かな？……かな？……かな？」

ふふふふふふふふふふふふふふ……

~~~~~

~~~~~

「護」……………」

イラッ……………！！

「護」うるせえ！！ぜってースグに見つけてやる！！俺のカン  
の良さをナメんなよ

石田ア！！…ルキアのケータイ早く持って帰ってこいコー  
ン！！（怒）」

だだだだだだだだだだだだだだだだ……………

……………空座町……………空き地……………

コン「お…おい見るよー護っ！！何だよありゃ…！！？」

そこにいる全員がコンの目線の先、空を見る。そこには

コン「空のひびが……………一箇所に集まってきてる…！！」

「護」……な……………」

石田「…！！…待て。どうやらそれだけじゃないぞ……よく見る…！！」

「コン」!

「ルキ」!」

石田「虚が…その一点を目指して集まってきた…!」

ダンッ

石田は虚の大群に向かって1人で駆けていく。

石田「こつちだ!!虚ども!!最後の滅却師…石田雨竜が相手をする!!」

一護「最後の滅却師…?あいつ何言って…」

ルキア「…滅亡したのだ。200年前に、滅却師は」

一護「!な…!?!」

ルキア「全ての滅却師の生き残りは死神を憎んでいる。その憎しみの源は、その

200年前の滅亡にある。200年前、滅却師は…

死神たちの手によって滅亡したのだ…!」

一護「死神が…滅却師を滅ぼした…？」

ルキア「そうだ。それ以外に選択肢は無かったのだ。この世界の崩壊を防ぐためには」

なのは「死神が…滅却師を滅ぼした……？」

シグナム「それに…世界の崩壊とは…？」

一護「隊長陣とかフォワード陣には前にも言ったと思うが…死神はバランス調整者とも

呼ばれてるって話をしたよな」

ティアナ「はい…確か…世界の崩壊を防ぐためでしたよね…？」

一護「そうだ…死神が魂をあのだ世である尸魂界へ送り、尸魂界から零れた魂がまた

新たに命となる…その繰り返して世界の均衡を保っているのが俺たちの世界

なんだ」

シグナム「では…滅却師の何がいけなかったのだ？」

一護「死神も滅却師も虚を倒す力があることには変わらない。でもな……」

些細なことだけど……一つだけ……決定的に違うことがあるんだ

……」

フェイト「……違うこと……？」

一護「そう……それは虚を滅却するか昇華するかだ」

ジェイル「それは一体どういった感じで違うんだい？」

一護「死神が虚を斬るということは、虚になってからの罪を洗い流して尸魂界へ

行けるようにしてやること。でもな……滅却師は虚を完全に消滅させて

しまうんだ。それはつまり、現世に行った魂が尸魂界に戻ってこなくなる

ということであり、結果として現世側にはかり魂魄が増えるということ。

そして発生するのが、現世に尸魂界が流れ込むという現象。それは生と死の

入り混じる渾沌……すなわち世界の崩壊に繋がるんだ……」

はやて「死神はそのことを滅却師に伝えたん？」

一護「ああ…でも滅却師は頑として受け入れなかった…仲間の仇の虚をどうして

安らかにあの世へ送らなければならなかったのかってな…」

フェイト「そんな…」

一護「そして世界の崩壊まで予断が許されなくなる寸前に…滅却師殲滅の決定が

下されたんだ」

石田「昔話だよ」

一護「……あ？」

石田「200年前の滅却師……」

~~~~~再び省略~~~~~

………僕は僕のをただ証

明するだけだ」

一護「………は」

石田「？」

一護「話が長げえッ!!」

がん!!

一護は突然声を上げると、石田の頭を後ろから思い切り蹴飛ばした。

石田「な…ななな何をする!!」

一護「うるせえ!!」

ゴガ!!

そう言つて一護はまた石田を蹴り飛ばす。

一護「納得がいかねんだよ!ハナシ長すぎて最初の方とか忘れちまつたけどよ!

要するにオメーのセンセイの一番の望みつてのは…死神に滅却師の力を

認めさせることじゃなくて!死神と力合わせて戦うことだつたんじゃ

ねえのかよ!?

だったら、今ソレちゃんねーでいつやるんだよ!!

死神と滅却師は正反対!結構じゃねえか!!

大人数相手のケンカなんてのは…背中合わせの方が上手くやれるモンだぜ!!」

石田「…？背中合わせ？…？何だそれは？

共同戦線を張るといふことか？死神と滅却師が!？」

一護「それ以外の意味に取れんのかよ!？」

石田「ムチャを言つな。滅却師と死神が力を合わせるなんて…」

ガシッ

一護「まだそんなこと言つてんのかよ!？」

グイッ

石田「…な…!？」

一護は石田の肩を引っ張つてその後ろにいた虚を斬る。

石田「…!!」

態勢を崩した石田に向けて虚が襲ってくるが、それを石田は霊弓で撃ち貫く。

一護「そつだよ!」

石田「勘違いするな!今のは撃たなければ僕がやられていたからだ!

君に協力したわけじゃ……」

一護「それでいいんだよ！」

石田「……何……!？」

一護「やらなきゃやられる。でも一人じゃキツイ。だから仕方ねえ!

力を合わせる!そんなモンでいいんじゃないかねえのか。力合わせる理由

なんてのはよ!」

石田「……!」

一護「……俺は元々人間だ。正直、死神のことなんてまだよくわかってねえし、

この仕事に誇りとかもってやってるワケでもねえ。

ただ、俺は虚を倒したいだけなんだ」

石田「……なぜ？」

一護「俺のおふくろは……虚に殺された。？それが理由で虚を倒したいのか??」

そう訊かれりゃそりゃもちろんそうだ。だけどそれだけじゃねえ。

なんて言うか俺は…俺の同類を作りたくねえんだ。

虚におふくろが殺されて、ウチの親父も妹達もキツい目に遭った。

そんなのもういらねえって思うんだ」

ドン…!

一護は自分の思いを口にしながら虚たちを切り裂く。

一護「そんなのもう見たくねえ…そう思うんだよ。

俺はスーパーマンじゃねえから、世界中の人を守るなんてデケーことは

言えねえけど、両手で抱えられるだけの人を守ればそれでいい、なんて

言えるほど控えめな人間でもねえんだ。

俺は山ほどの人を守りてえんだ。

石田、どんな理由があってもめーの持ちかけたこの勝負は、その山ほどの

人間を巻き込むやり方だ。フザケンじゃねえ。俺はてめーを許さねえ。

けど、今はそんなこと言ってるトキじゃねえ。なにしろ敵の数が多い。

やらなきゃやられる。だから仕方ねえ！てめーと組みたくもねえ手を組む！

てめーを殴んのはその後だ！てめーはどうだ？

バシユ！！…ガッ！！！！

突然、一護の顔の横を矢が通り抜け、後ろの虚を撃ち貫く。

石田「やれやれ…君もいいかげん話が長いね。でもよく解ったよ。要するに…

お互いここで生き残らなけりゃ…殴る相手がいなくなるってことだ！」

一護「……………上等オ！てめーは絶対後で泣かす！！」

石田「どうぞ、君が生き残れたならね！」

二人は背中を合わせて臨戦態勢に入る。しかし、石田が何か異変に気付く。

石田「…！？待て黒崎」

一護「…？どうしたよ石田？」

石田「…虚共の様子がおかしい…みんなが天を仰いで…まるで何か

祈っているような……」

バシィッ！！

突然、虚たちの向いている空がひび割れる。

一護・石田『！！』

バキバキバキバキバキ……ドン！！

そして、その中から今までにないほどの大きさの虚のような存在が出現した。

はやて「なななな！？なんやのアレは！！アレも虚なん？大きさもこの前の虚と

変わらんようやけど……」

一護「あいつはメノス……？メノスグランデ大虚？だ」

シャマル「メノス……？」

一護「そう……あいつは幾つもの虚が折り重なって生まれた巨大な虚だ」

ジェイル「君の記憶はいろんなことがあり過ぎて怖いね……」

石田「あんな奴とどうやって戦えば……」

一護「…へへ…」

石田「…何が可笑しい？黒崎」

一護「…あんなバケモノ相手に戦い方なんて考えたってしょうがないだろ……」

石田「何…？」

一護「あんな奴は…斬って斬って斬って斬って力の限り斬り倒す！！」

それ以外に無えッ！！！行くぜ石田ア！！」

石田「ま…ままま待て黒崎ッ！！」

ゴアアアアア……

メノスが空間の切れ目から足を踏み出してくる。

一護「あアアアアアア」

一護はその足めがけて思い切り刀を振り下ろす。

ドッ…………ギョーン!!

その一撃で一護を認識したメノスは、一護を刀が喰い込んだままの足で蹴飛ばした。

一護「う…わ…ッ!？」

ドザッ…………

石田「黒崎!!言わないことじゃない!!」

そう言つて、石田もメノスへ矢を放つが、威力が足りないのか効いた様子がない。

石田「大丈夫か黒崎!!」

一護「おう…割と大丈夫だ…」

そうは言っているが、頭は血みどろである。

石田「全く…何を考えているんだ君は!?!今のでどうやってアレを倒す気

だったんだ!？」

一護「イヤ…足元から順に斬り飛ばしてけば最後には頭が落っこちてくるかなー

と思つてよ…」

石田「……だるま落としか……」

しかし、何とも頭の悪い作戦である。

シグナム「……………」

一護「……………ハア……………」

ジェイル「さすがに……………それは……………」

なのは「……………これはフォローできないね……………」

一護「うう……………過去に戻れるならあの時の俺を蹴っ飛ばしてやりてえ……………」

石田「よし！！準備完了！！これで奴と戦えるぞ！！」

ゴリゴリゴリゴリゴリ……………

そこには、斬魄刀の柄を頭に括り付けて巨大な弓を構える最後の滅却師（笑）が……………

(通称・ソウルドッキング)

一護「…おまえ…バカだろ…？」

石田「何！！！」

フェイト「…あの人も似たり寄ったりだったね…」

なのは「あれは無いよ…」

一護「……………(今やったらあの弓どこまでデカくなるんだ……………?)」

ギユウ…ンン…

突如、今まで動きらしい動きを見せなかったメノスに変化があらわれた。

チリチリチリチリチリ…

ブリッ…ブリイ…

メノスは仮面の付近に霊圧を集め始める……

石田「……やはりこれ以外に方法は無い！いくぞ黒崎！！僕の体にも
う一度刀を

接触させ……る……」

ピュウ！！

そう石田が言い終わるよりも早く、一護は走り出していた。

石田「く……くくく黒崎！？待て……どこ行く黒崎っ！！！」

ギュウン………キウン！！

一護へメノスの？虚閃？が迫る。

ゴウツ………バチンツ！！

それを一護は正面から受け止めて弾いている。

石田「ツわ………は……弾いた……ツ！？」

キイイイイイイイ………ドクン！！

突然、一護の霊圧が虚閃に呼応する様に上昇しはじめる。

ググ………ッ………ドン！！！！

そして、一護は虚閃ごとメノスの体を両断した。

石田「…な……」

メノス「ゴオアアアアアアオオオオオ」

メノスは苦しみで雄たけびを上げる。そして、

メギ…ツ…ズズズズズズズズズ…

空のひびの向こうの空間に帰っていく。

一護「はあっ…はあっ…はあっ…」

ズカッ！！

一護は空へ向かってVサインを掲げると、

一護「勝オーーーー利！！！」

そう宣言したのだった。

ジェイル「………そうか………キミは昔から規格外というか………こちらの予想を裏切り

まくるといっつか………ああ………石田君の気持ち分かる気がする

る……」

一護「……おまえに言われたくねーよ……」

はやて「一護くん…あのメノスが撃ってきたビームみたいなのは何？」

一護「ビームって……ありゃ？虚閃？っていうメノス特有の技だ…
というかアイツ

のことはギリアンっていうんだが…あの技くらいしかまともな技がない」

フェイト「あれだけ？」

一護「あとは主に蹴ったり、舌伸ばしたり、殴ったりだな…知能もあまり高くないし」

ゼスト「ただ…あのデカさだけでもうすでに災害レベルだと思うが……」

はやて「ミッドに出たら大変やな……」

一護「まあ……俺がどうにかするしかないんだけどな……」

一護は再び真面目な様子に戻る。

一護「俺は……あの時は気付かなかった……気付くことが出来なかつた……」

この戦いのせいで……俺たちの運命が……悉く変わってしまったこと……」

一護の過去・その2（敗北・修行・尸魂界潜入篇）に続く……

第23話 一護の過去・その1（死神代行篇）（後書き）

いかがだったでしょうか……

もう……限界です……正直……丸写しみたいでしたし……

これからはトラウマシーンが増えるというのに!!

どうしょ……行き詰ってきました……

こういう時はゲームかスポーツしかすることがない黒棺です（泣）

ですが、この作品をちゃんとした形で完結させるためにも

これからも頑張っていきたいと思います。

次も時間がかかるかもしれませんが待っていてください。

では、また次回にお会いしましょう!!

第24話 一護の過去・その2（敗北・修行・尸魂界潜入篇）（前書き）

長〜！！36000文字という大ボリュームです。内容は薄いですがど（泣）

？丹坊とギンはごめんなさい！！こうしないとまず収まらなかったんです。

まあ、？丹坊とギンはその3でちゃんと出せるので勘弁してください。

では、過去最長の第24話！お楽しみください！！

一護の過去…それは戦いの連続であった。

なのはたちは一護の過去に何を思うのか……

第24話 一護の過去・その2（敗北・修行・尸魂界潜入篇）

……夏休みも近づいてきた夏の日の夜……黒崎家……

遊子「お兄ちゃん!!」

一護の妹である遊子の非難めいた声上がる。

遊子「また勝手に残り物いじって!!」

一護「夜食だよ夜食。育ちざかりは大変なのだ」

遊子「太つても知りませんからね!」

たしたしたしたしたしたしたしたし

一護「へーい。気をつけまーす」

一護「おい、ルーキアー。晩メシだぞー……って……ありゃ?」

一護はそう言って本来そこにいるはずの者の名前を呼ぶが……

一護「何だよ。アイツまたどっか行ってやがんな……」

返事はなく、また一護の机の上に置かれた手紙に一護が気付くこと

もなかった。

コン「イヤー！！まいった！！マジ助かったぜ一護！！」

一護「どーいたしまして？」

数分後の一護の部屋には、なぜか異臭のする喋るぬいぐるみと一護の姿が……

コン「なにしろあの位置じゃ入ってくる奴の力才なんて確認できねーから、物音だけで

オメーかどうかを判断しなきゃなんなくてなあ！！」

そう、このライオン？は一護の家の便器の裏に縛り付けられていたのである。

一護「ほー、そりゃー大変そうだ」

コン「そう…大変だったぜ…なにしろオメーに当たるまでに…オレ様はオメーの親父の

小に3回、大に2回おつきあいしちまった……

現にさつきオメーが入ってくる5分前にもオメーの親父がウ

ン……」

ブシューッー！

コンへとめがけて消臭剤を吹きかける一護に何も言えなくなるコン。
さすがに最後まででは言わせなかった一護である。

「一護」そういうことは最初に言え。どつりでクセえハズだ」

フェイト「……やっぱり残念だね……コンって……」

「一護」……………」

「一護はコンに置手紙の存在を教えられる。

「一護」くっそ！結局手がかりはこの手紙しか無えってコトかよー！」

ビビ

「一護」(一体何が書いてあんだよ…何が…)」

その手紙の内容とは……………」

~~~~~以下手紙の内容~~~~~

楽しく解読せよ。

たわけあたって私たはでたたていたく。

さたがたすなた、そたたしたてしたんたばたいたすたるなた。

こたたのたてがみたはたよたんだたらたもたやせた。

そたれたからできたれたたはこのたまたましたばたらくたどこ

たかにみたをたかくたしていたるた。

~~~~~

『一護・コン』(出ていく直前にいらんトン手憶えやがってー!!--!)
『

しかも、その横にあるヒントが問題である。

> .i i 3 0 8 2 2 9 | 3 5 0 0 6
<

『一護・コン』(何だコレ!?!?)
『

そこには地球にはおそらく存在しないであろうと思われる動物？の姿が……

一護「ええい！本文にこんだけ？た？が多いんだから多分？たぬき？だー！」

？た？を消して読むぞー！」

コン「えーっと……わけ……あ……って私……はで……てい……く」

一護「？搜すな。そして心配するな？」

コン「？この手紙は読んだら燃やせ。それからできればこのまましばらく……？」

一護「？どこかに身を……隠している……？」

はやて「あれが……たぬき……（ズーン—————）」

一護「……いや……どう見てもたぬきじゃ無かったんだけどな」

一護「いくぜコン。死神化してルキアを追うー！ーついて来いー！」

コン「お…おうッ!」

二人は気合を入れる…しかし、

コン「…で…どうやって死神化するんだ?」

一護「あの魂抜くグローブで…」

コン「ネエさんが持ってんだろ」

一護「義魂丸で…」

義魂丸はコンの中にある。

一護・コン「……………」

一護「ああッ本当だ!!俺ルキアがいねーと死神になれねえッ!!」

気合とか以前の問題であった。

一護「どうすんだコノヤロウ!!ルキアは尸魂界の連中とモメてんだろ!？」

せめて死神化してかねーと手助けも何もできやしねえぞ!？」

コン「何だコラオレのせいか、ああ!？ぬいぐるみナメんなコラ!」

浦原「まいど〜〜?どうやらお困りみたいっスねエ」

一護「……………あんだ…！」

浦原「何かあたしにお手伝いできることは？なに、大事なお得意様の一大事。」

今回は特別にツケといてあげますよん？」

空座町……………路地……………ルキアの現在地……………

そこには腹から血を流して倒れている石田と止めを今にも刺そうと
している死神

阿散井恋次の姿が……………

恋次「さて……………そんじゃトドメといつとくか。死ぬ前によく憶えと
けよ」

石田「……………」

恋次「阿散井恋次、てめーを殺した男の名だ。よろしくっ…！」

そういつて恋次は石田に刀を振り下ろそうとする……………が、

ズドン…！！

恋次の足元に巨大な刀が振り下ろされ、それは阻まれる。

恋次「…な…!？」

ダツ……ザン!!

恋次は驚き、距離をとる。

恋次「…! …何だてめーは…!？」

一護「黒崎一護、テメーを倒す男だ!! よろしく!!」

恋次「……………死覇装だと…………？」

石田「……………」

恋次「なんだテメーは…? 何番隊ドコの所属だ…! ? 何なんだその…

バカでけえ斬魄刀は…! ?」

一護「なんだ、やっぱりでかいのか、コレ。ルキアのと比べてずいぶんデケーなどは

思ってたんだけどな…なにしろ今まで…比べる相手がいなかったからよ!!」

恋次「……………」

ルキア「…一護…! 莫迦者…何故来たのだ…!」

恋次「！…そうか…読めたせてめえが…ルキアから死神能力を奪つた人間かよ…！」

一護「だったらどうするってんだ？」

恋次「殺す…！」

ダン…！

そう言つて恋次は一護に斬りかかった。

白哉「…黒崎…一護…」

フェイト「…どうして…殺そうとするの…？」

一護「もともと…死神の力の無断譲渡は重罪なんだ…だからあいつらはルキアを」

連れ戻そうとしてるし、力を手に入れた俺を殺そうとするんだ」

はやて「……理不尽やな…あの人も一護くんや一護くんの家族を守るために」

やったのに……」

一護「…頭の堅い連中ってのはどこにでもいるんだよ……まあ…俺の今の力は

あいつらの力を貰って眠ってた俺自身の力を起こさせたみたいなんだけどな…」

ギイン！ギインッ！！

恋次「オラオラオラオラあ！！どうしたどうしたア！？」

ガッガガガガガ！！

恋次「何だてめえ！？そのデケー刀は見かけだけかよ！？ああ！？」

一護「ベラベラうるせエ奴だな…ッ。舌噛むぞテメー！」

ギリッ…

一護「だらアッ…！」

ゴッ…！！

一護はこのままでは勝てないと思い、刀を一気に振り下ろす。が、

ヒュン……ドゥッ…！！

恋次は軽々と躲すと一護の肩を斬りつけた。

ドッ……ブシッ……!

一護は膝をつく。

「一護」………

恋次「終わりだな。てめーは死んで、能力はルキアへ還る。そしてルキアは

尸魂界で死ぬんだ。

しっかしバカだなてめーも。せつかくルキアがてめーを巻き込まねえように

一人で出てきたんだ。おとなしくウチでじっとしてりゃいいものを、追っかけて

来ちまいやがって……

てめーなんか追っかけてきてどうにかなると思ってたのによ? てめーみてえな

ニワカ死神じゃオレ達本物にはキズ一つだってつけられやしねえん……」

ドッ……!

恋次の言葉が続く中、刀が唐突に振り下ろされて恋次の顎に傷がつ

く。

恋次「……………！」

一護「…おつとワリー…ハナシの途中だったけどよ、あんまりスキだらけだったもんで

つい手が出ちまった…ハナシの邪魔したか…？」

悪いな。続ききかせてくれよ。？キズ一つ？が…何だつて？」

恋次「…てめえ……………！」

白哉「…気を抜き過ぎだ、恋次」

恋次「…朽木隊長。何がスカ！？こんな奴にはこんくらいで…」

白哉「…その黒崎一護とかいう子供…見た顔だと思ったら…33時間前に隠密機動から

映像のみで報告が入っていた。メノス・ケランデ大虚に太刀傷を負わせウエコムンド虚圏へ
帰らせた…

と…」

一護「(メノ…？何だ…？あの鼻デカノツポのことかな…？)」

恋次「ぶっ！！ぶははははっ！！ははははははははははっ！！！！」

恋次は突然笑い始める。

恋次「やってらんねーな！最近は隠密機動の質も落ちたもんだ！
こんな奴が大虚に

傷を負わせた！？」

一護「こんな奴！？」

恋次「そんな話信じられるワケがねエ！！」

白哉「…恋次」

恋次「だって見るよ隊長！こいつの斬魄刀！！デカイばっかでみっ
ともねえったら

無え！！霊気を御しきれてねエのが丸見えだ！！

オイてめえ！その斬魄刀なんて名だ！？」

一護「あ！？名前！？無えよそんなもん！…てか斬魄刀に名前なん
かつけてんのか

テメーは！？」

恋次「…やっぱりな。てめーの斬魄刀に名も訊けねえ！！そんなヤ
ローが俺と対等に

戦おうなんて…二千年早えエよ！！！！」

恋次がそういうと同時に斬魄刀の形状が変化する。

一護「！斬魄刀が…！？」

恋次「咆える蛇尾丸！！前を見る！目の前にあるのは…てめえの餌だ！！！」

一護「……………！！！」

一護は咄嗟に防御の構えをとろうとするが、

ドッ！！！！

蛇尾丸は蛇腹剣のように形状を変えて、一護の防御をすり抜けた。

シグナム「なるほど…似たような剣を使う知り合いとはこの男の事か！！！」

一護「そつだ」

はやて「…………映像の一護くんはやられとるのに冷静やな…………」

一護「ああ…………もうチヨイしたらまた刺されるからな」

はやて「またかい！？」

フェイト「ああ！？目隠しの用意を…………」

全員』……………(汗)』

ルキア「に…ッ逃げろ一護!!立て!!立ち上がって逃げるのだ!
!一護!!」

ルキアは恋次の腕にしがみつきながら一護にそう訴えかける。

ガッ……

しかし、一護は再び刀を握った。

恋次・ルキア』!!』

恋次「…なんだ、てめーまだ動く力が残ってやがったのか…丁度イ
イぜ。

死にかけの奴にただトドメ刺すのもつまんねえと思ってたと
こだ。

そんじゃいつちよ景気よく、派手に斬り合って死んでくれ!」

ルキア「一護!!立てるなら逃げろ!!逃げるのだ一護っ!!…!」
…」

ルキアの声にもなぜか一護は反応しない…

恋次「どうした？来ねえならこっちからいくぜ」

チツ…チリツ…パツ…パシツ……ボツ！！！！

一護の斬魄刀周辺に霊圧が集まり始め、最後には耐え切れなくなつた柄頭の紐が

吹き飛ぶ。そして、その瞬間に一護は恋次に肉薄し、その体を切り裂いた。

恋次「何……………だてめえ…！」

恋次はすぐに防御を固めようとするが、

ガ…ドン…！！

その防御ごと体を一振りで吹き飛ばされる。

ドツ…ギギキキキキ……ズダン…！！

恋次はなんとか態勢を立て直すか、額には大きな傷ができている。

一護「はっ！どうしたよ！？えれー動きがニブくなつたじゃねえか！？急によ…！！

はっ、何でだかわかんねーけどいい気分だ！今…！傷の痛みも無え…！！

テメーに敗ける気も全然しねえ…！！」

恋次「…！」

一護「…終わりにしようぜ」

ゴウツ！！

そして、一際大きな霊圧が一護から放出される。

一護「俺が勝って終わりだ…！！」

> i 3 1 0 8 9 | 3 5 0 6 <

！？

一護「（何…だ！？刀身が…消えた！？違う。こいつは何もしてねえ）」

！！

だが、一護はあるものを見つける。

十数メートルは離れている白哉の手に自分の斬魄刀の刀身が握られているのである。

一護「（あいつか！？まさか！！あんな間合いから何もできる筈が無え…！！）」

白哉は掴んでいた刀身を離し、自らの刀に手をかける。

チキ…ッ

一護「（来るか!?!）」

その瞬間、一護の背後に白哉があらわれ、そして……

ドッ!?!?!?!?!

一護の胸はいとも容易く刺し貫かれた。

ドゥーエ「……………え……………?」

ゼスト「な……………速い!?!」

一護「うゝん……………やっぱり昔の俺の視点だから速く見えるな……………」

ジェイル「??速く見える?」

一護「そ、昔の俺が見たまんまが映像になってるからそう見えるんだ。ジェイルは

別として他の奴らも反応くらいはできると思っせ?」

シグナム「では…おまえが最初の私との模擬戦に使ったあの移動法とはどちらが

速いのだ？」

「一護」単純な速度で言えば白哉の方が速いな。ま、今はあいつと同じ歩法の上に

完現術使ってるから俺の方が速いかもな……」

白哉（聞き捨てならんな黒崎一護！！）

「一護」！？今白哉の声が……？」

全員『????????』

ちなみに、この状態でもフェイトは目隠し続行中である。

……なんだよ……これ？

……やられたのか？……俺……

……後ろから刺されたのか……前から刺されたのかもわからねえ……

…………痛え……

白哉「鈍いな。倒れることさえも」

ルキア「白哉兄様！！！！」

ドッ！

ルキアの叫びも虚しく、一護の腹に再び刀が突き立てられる。

ノーヴェ「む……無茶苦茶じゃねえか！」

ウエンディ「い……一護……」

一護「……まあ……これから先はこつこつやっらばかりだからな……気をしっかり持てよ」

はやて「うっ……もう結構キツイねんけど……」

白哉「……解るぞルキア……成程この子供は………奴によく似ている……」

ガッ！

白哉「！」

一護「……もう死んでるだの……誰ソレに似てるだの……俺のいねー間に

勝手にハナシ

進めてんじゃねーよ…!」

一護は息絶え絶えながらも白哉の死覇装の裾を掴んで言葉を紡ぐ。

ルキア「…!」

白哉「…放せ小僧」

一護「…聞こえねーよ…!」こっち向いて喋れ」

白哉「…そうか…余程その腕、いらぬと見える」

ドッ!」

白哉がそう言い終わるとほぼ同時に裾を掴んでいた一護の手に蹴りが加えられた。

一護「!?!」

恋次「!」

一護「な…何すんだル…」

ルキア「…人間の分際で…兄様の裾を掴むとは何事か!身の程を知れ!小僧!」

一護「…な…?」

一護はルキアの言葉を行動を理解することが出来ない。

ルキア「参りましょう兄様！今の此奴の行動でこの朽木ルキア目が覚めました！

どうぞ私を尸魂界へとお連れ下さい！慎んで我が身の罪を償いましょう！」

一護「ま…てコラ…何言ってるんだよルキア…てめえ…ッ」

ドン

一護「う」

一護は背を恋次に踏みつけられる。

恋次「往生際の悪い野郎だな。ジタバタしてなーでてめーはここで大人しく死ねよ」

ルキア「…この者にはわざわざ止めを刺すこともありませんまい。捨て置いてもいずれ

このまま息絶えましょう。参りましょう兄様」

一護「…待てよルキア！何のジョークだよ…！こっち見るよオイッ！オイ…ッ」

ルキア「動くな…！」

無理にでも動かこうとする一護を制するルキア。

ルキア「…そこを一步でも動いてみる…！私を…追ってなど来てみる…」

私は貴様を絶対に許さぬ…！」

そう言つて振り向いたルキアの目には涙が…

ルキア「いずれ死ぬ命。そこに伏して一瞬でも永らえるがいい」

サアアアアア…

辺りには雨が降り出している。

白哉「…よからう。その者には止めは刺すまい」

白哉は刀から手を下しながらそう言った。

白哉「先程の二撃で魂魄の急所、？鎖結？と？魄睡？を完全に砕いた。その者は半刻も

せぬ内に死ぬだろう。仮に生き永らえたとしても力の全ては失われる。

死神の力はおろか、霊力の欠片さえ残るまい。

恋次「

恋次「はい」

恋次は虚空に斬魄刀を差し込み鍵を開けるように捻る。

恋次「解錠！」

キン……

そして、尸魂界へと繋がる門が出現し、開いた。

ルキアたちはその中へと入り、尸魂界へと帰っていく。

一護はそれを見ていることしかできない。

…… 声が出ねえ …… 動けねえ ……

…… どうしてだ ……

…… 俺はまた …… 護られた …… !

一護「あああああああああああああ」

辺りには一護の慟哭が虚しく響き渡った ……

なのは「どろして…こんな…」

なのは泣きながらそう呟く……いや、なのはだけではない。

そこにいる者たち全員が、一護の悲痛な嘆きで表情を曇らせていた。

……痛え……体が重い……寒い……痛え……

血が……止まらねえ……血が……

雨が止んだ気がした。

一護「……………痛くねえ…？」

やべえ、俺もいよいよ死ぬのか。これ多分死にかけて痛みも何もわかんなく

なってるんだ、俺。そういえばさっきまであんな冷たかった体

も…なんか

あ…たかい気がする…あ…たけえ…」

そう思い一護が目を開けると…

眼鏡をかけたおっさんのドアップが…

鉄裁「むっ!?!」

一護「オギゃあああああああああ」

一護の途轍もない、命の限りの絶叫が上がる。

鉄裁「おお！素早い反応！良いですな！」

一護「ちっ…近い近い近いっ!?!」

鉄裁「店長！黒崎殿が目を覚ましましたぞ店長!?!」

一護「テメー見たことあるぞ！ゲタ帽子の仲間だろ！」

なんで俺のフトンに入ってたんだよ!?!出てけっ!?!」

ズキッ!!

一護「いつ!?!?うあっ…」

一護は突然体に走った痛みを顔に歪ませる。

一護「（…あれ？…俺…死んでねえ…どうしてだ？…
…てかよく見たら

ここ俺ん家じゃねーよ！どこだここー！？」

浦原「ホラホラダメでしょ黒崎さん。傷なんてまだまだ塞がっちゃ
いないんだ。

あんまり動くと死にますよん？」

一護「…ゲタ帽子…！…そうか、ここあんたの家か」

浦原「ご名答？」

一護「…あんたが俺を…助けたのか…？」

浦原「おや？心外っスねえその言い方。

まるで助けて欲しくなかったみたいに聞こえる」

一護「……………」

一護の頭には、穿界門の向こう側へと消えていくルキアの姿が浮か
んでいた。

一護「……………そうだ……………あそこには石田も倒れてたろ？あいつ
どうした？」

あいつもここに？」

浦原「いえ、帰りましたよ彼は。元々彼の傷は血はたくさん出ちやいるが、

大したものじゃなかった。あのまま放つといっても丸2日ぐらいは

死ななかつたでしょう。だから傷自体はあの場で殆ど治せました。

帰り際心配してましたよ、黒崎サンのことを

一護「石田が？俺を？まさか」

浦原「アタシは一応彼にもここで少し休むように言っただんですがね……」

~~~~~以下省略~~~~~

浦原「朽木さんを救えるのは彼だけだ」

一護「…？俺だけ？か。はっどーしろってんだよ俺に…」

ルキアは尸魂界に帰っちゃったんだぞ！！どうやって尸魂界まで追っかける

ってんだ！？どうやって助けりゃいいんだよ！？

できやしねーじゃねえかつ…！！

浦原「…本当に無いと思えますか？尸魂界へ行く方法」

一護「！！ある…のか！？どうやるんだ！？どうしたら行ける！？  
教えてくれ！！」

浦原「勿論教えますよ。ただし、条件が一つ。これから十日間、ア  
タシと一緒に

戦い方の勉強しましょ」

一護「べっ…何だそれ！？修行でもしろってのか！？そんなヒマね  
ーだろ！」

ルキアは尸魂界アツチでいつ殺されるかわかんねーんだぞ。

そんなコトしてる間に少しでも早く…」

浦原「わかんない人だな」

フォツ…ゴダン…！！

一護は杖を突き付けられ、床に這いつくばらされる。

浦原「言ってるんですよ。今のままじゃキミは死ぬ、と。勝てるん  
スか？

今のキミが彼らと戦って。アタシは今回敢えてキミを彼らと  
戦わせました。

それは、そうした方が口で言うよりキミには解り易いと思っ

たからなんスよ」

一護「（何だ…この威圧感……！？切先を…突き付けられてるみてえだ…）」

浦原「今のキミの実力じゃ、尸魂界で戦うには何の役にも立たないって事実をね。

キミは弱い。弱者が敵地に乗り込むこと、それは自殺って言うんスよ。

？朽木サンを救うため？？甘ったれちゃいけない。

死にいく理由に他人を使うなよ」

浦原は一護にそう告げる。それはまるで叱るようであり、また、諭すようなもの

でもあった。

浦原「尸魂界は…通例、極囚の刑の執行までに一月の猶予期間をとります。

それは朽木サンの場合も同じ筈。これからキミをイジメるのに十日間、

尸魂界への門を開くのに七日間、そして尸魂界へ到着してからの一三日間、

充分間に合う」

一護「十日で俺は…強くなれるか？」

浦原「勿論。キミが心から朽木サンを救いたいと願うなら。」

想う力は鉄より強い。半端な覚悟ならドブに捨てましょ。十日間アタシと

殺し合い、できますか？」

一護「どーせ俺ができねえつつつたら…誰もやる奴いねえんだろ。しょうがねえっ！」

やってやるーじゃねえか！」

雨が止んだ気がした。

その日の夕方……浦原商店地下……通称・勉強部屋……

??「どっひゃー……！！なんだこりゃー……っ  
！！？」

誰かがバカみたいな大声で叫んでいる。その声の主は……

浦原「あの店の地下にこんなバカでかい空洞があったなんて――  
――！！！」

ここの店主でもある浦原喜助の自演であった。

一護「ウルセーな。わざわざ代わりに叫ばなくても十分ビククリしてるよ！」

浦原「フフフ…そうです。何をかくそうこの？勉強部屋?!黒崎サンの為に我々の

オーバーテクノロジーの粋を結集して、たった一昼夜で完成させたシロモノ

なのです！」

一護「あれか？あんたらの店長は客を無視してハナシを進める主義なのか？」

鉄裁「……………(汗)」

さすがの鉄裁も庇えないようだ。

浦原「閉塞感を緩和させるために天井には空のペイントを！」

一護「刑務所と同じ考え方だな」

浦原「心につるおいを与えるために木々も植えておきました！」



一護「一本残らず枯れてるな」

浦原「これだけのものを道路や他人様の家の地下にナイシヨで作るのはそりゃあ

骨が折れましたとも！」

一護「よくわからんが犯罪なんじゃねえのか、そついつのって？」

ジェイル「おお！！彼とは気が合いそうだね！！！」

ゼスト「……………本当に気が合いそうだから困るな……………」

一護「ああ……………まっただ……………」

ジェイル「ふふふふふ……………しかし……………興味深いな……………霊力とは……………いつその事デバイスでも

……………使えるようにしてみようか……………そうすれば虚に対しても

……………」

一護「できんのか？」

ジェイル「もちろん！キミの体を調べれば……………」

一護「だが断る!！」

ジエイル「そこをなんとか!！」

シグナム「フム……私もその件については気になるな……」

一護「シグナム!？」

ジエイル「そうだろう、そうだろう!ほら、後でいいから!少しだけ調べさせて

くれないかい?」

一護「………はあ………わーったよ!但し!本当に少しだけだからな!！」

ジエイル「フフフフフ……もちろんわかっているよ」

コイツの言葉がどこまで本当なのかわからない。

浦原「今のあなたは朽木白哉に霊力の発生源である? 魄睡? とプースターである

人間? の鎖結? を破壊されている。つまり霊力を持たない? 普通の

？ただの魂魄？なんスよ。

？死神？と戦うには、まずその失くした霊力を元に戻すところから始めなくちゃ

お話にならない。

まずはその？魂魄の体？を自在に動かせるようになりましよう。

？霊力？とは霊なるものに働きかける力。？霊力？が高まればそれだけ

？魂魄の体？は鋭い動きが可能になる。

逆に言えば、その？魂魄の体？で？実の肉体？以上の動きができるようになれば

それは？霊力の回復？を意味するんスよ」

一護「…なんかよくわかんねーな。何だよ？じゃあラジオ体操でもやりゃいいのか？」

浦原「まさか。

そっスね。説明するより始めちゃった方がいい。おーい！用意してー！」

そう浦原が言うと、

ウルル「…よ……………よろしくおねがいします…」

浦原商店の一人の少女・ウルルがヘッドギアのようなものを持って佇んでいた。

一護「はい!？」

浦原「最初のお勉強?彼女と戦ってくださいな」

一護「な…!？」

浦原「ルールはカンタン。どちらかが動けなくなった時点で勉強終了。

彼女にのされる前に、彼女をのしちゃってくださいね？」

一護「バ…っバカ言うな!!あんな子供殴れつてのかよ!？」

浦原「おやア、案外難しいと思いますよオ。その体じゃ」

一護「何イ!？」

ドサツ、ドサドサツ

ウルルは地面に一護用と思われる道具一式を置く。

一護「!?!?おい、ちよつとまってよ!俺はまだ…」

ウルル「…これ…ちゃんとつけてくださいね…死にますから」



浦原「スルーした！」

一護「ヤベーヤベーヤベー！何だアレ！？あんなの喰らったら即死じゃねーか！！」

気休めかもしんねーけど、せめてこのヘッドギアぐらいつけとかねーと……」

だらり……

一護「……ってどつやって着けんだよコレ……！！？」

浦原「黒崎サン黒崎サン！」

こつするんすよ！おでこにこつやってくっつけて……」

ぐいっ……

浦原は額にヘッドギアをくっつける仕草をする。

浦原「思いつきり叫ぶんす。

？受けてみよ正義の力！正義装甲ジャスティスハチマキ！！  
装着っ！！！！？」

どー……ん

一護「そ……そうか！わかった！こつやっておでこにくっつけて……

……ってできるか……！！！！！！！！！！」

ビターーーーン!!

ズドン!!!

一護「おわーーーーーっ!!」

浦原「ね? 恥ずかしかつてる場合じゃないでしょ?」

一護「他人事みてーに言ってるな!!」

く…くそっ!! しょうがねえか…!! う……………っ

? 受けてみよ正義の力! 正義装甲ジャスティスハチマキ!!

装着!!!?

> i 3 1 0 3 3 | 3 5 0 6 <

どんっ!!!

浦原「うわあ…ホントにやっちゃったこの人…」

だらりーーん…

一護「てめえ!!!」(怒)





浦原「……ほづ……！」

ブンブンブンブンブン！……！

一護は反撃といわんばかりにラッシュを仕掛ける。

一護「（顔は狙わねえ……！ガマンしてくれ……！ヘッドギアに少し当てるだけだ……！」

そうすりゃこの体重差だ。絶対に勝負はつく……！」

ブンッ……！……！ビッ……！

しかし、一護のこぶしはヘッドギアには当たらず、ウルルの頬を掠めてしまう。

一護「（しまった！顔に……！……！）」

トッ……

すると、ウルルは一瞬で一護が突出している腕の上に飛び乗り、頭に蹴りを見舞う。

ブワッ……！ガガガガガガア……！！……！！

浦原「セ……！……！フ？」

だが、その一撃は浦原によってギリギリ寸止めとなったようだ。

一護「…っ」

一護は無事であった。しかし、

一護「…げ」

鉄裁が体を受け止めていたからだが……

一護「……………そうか……………俺の…負けか……………くそ…ッもう一回やろっぜ！」

次は勝てる!!」

浦原「いーえ！オメデトさんですよ。レッスン1クリアっス！」

一護「はア!？」

予想外の一言に一護は混乱する。

一護「な…なんでだよ!？俺その子に負けたんだぜ!？」

浦原「おやア、あたしゃ？のされる前にのしちやえ?って言っただけで、

?ウルルをのしたらレッスンクリア?なんて一言も言っていないよ?」

一護「何イ!？」

浦原「元々この子は対死神戦レベルの戦闘能力を持つてるんすよ。」

？人間の魂魄？じゃどうあがいたって勝てやしません。…ま  
だ息苦しいですか？」

一護「…え？…あれ？そういえば……」

浦原「体の動きづらさは？ないでしょう？いつから？」

一護「………だいぶ前から……」

浦原「そうですね。このレッスンは一発勝負！最初の一撃を  
かわせるかどうか！

それだけです。霊力つてのは魂魄が消滅の危機に瀕した時に  
最も上昇しやすい。

だからこういう一発勝負。

うまく霊圧が上がればパンチをかわせてめでたしめでたし！

一護「上がらなかったら？」

浦原「パンチ喰らって死にますね」

一護「てめえ……（怒）」

浦原「まあまあ！いいじゃないか！結果、霊力は回復したんだし！」

一護「………（怒）」

浦原「どうです？合格祝いだ！このまま…」

一護「お…何だよ？このままメシとかか？」

ガイーン！！！！

突然、一護の因果の鎖に斧が振り下ろされて鎖が両断される。

一護「…な…っ！？」

浦原「このままレスン2ってのは？」

一護「さて、ここで再び予告だ」

はやて「また〜？今度は一体何？」

一護「今回は…俺が一回虚になっちまうから」

なのは「ちょ…ちょっとまって！！死神になるための修行で虚になつたの！？」

一護「まあ…なつたつってもちょっとだけだな」

フエイト「ちょっとでも大変だと思っただけど…」

一護「まあ…そうだな…そのおかげで助かったこともあるし、苦し

んだこともある。

無理矢理な方法で力を手に入れようとするとこうなるんだ…

…」

浦原「因果の鎖が切れても、虚にならず生き延びる方法が一つだけあります。それは…

？死神になること？です！」

一護「！」

浦原「そう！レッスン2とは死神の力を取り戻すためのもの！」

このレッスンを終えた時、キミは再び死神の力を手に入れる。

さあ始めましょうか、レッスン2？シャタード・シャフト？

！！GOッ！！！！」

そう言っつて浦原は前の方を指差す……が、

パカッ……

なぜか一護の真下に穴が開いた。

ストーーーン…

一護「ギャーーーーー」

浦原「フフ…ビックリしましたか、アタシの最上級のフェイントに…」

一護「あああああああああああああああ」

浦原「…？」

一護「あああああああああああああああ」

浦原「…ずいぶん深いね…？（汗）」

ウルル「がんばりました」

鉄裁「縛道の九十九！？禁?!」

勝手ながらこのレッスンの終わるまで、貴方の腕を？禁？じさせて

頂きました！」

浦原「さあ！その状態でここまで上がってきてください！それがレッスン2！」

シャワード・シャフト  
？絶望の縦穴？！！」

一護「バ…ッバカ言え！できるかよそんなこと！！」

浦原「おやア、できるできないを論じている暇は無いですよ？ほ  
うら…」

？浸食？は既に始まっていますよ

浦原がそういつのと同時に、一番端の鎖に口が無数に出現し、鎖を  
喰らい始めた。

一護「！！」

ガッガッガッガッ

一護「うわああああああああ」

浦原「断ち切られた因果の鎖はそれ自身が自らを喰らい始めるんす。  
それが？浸食？」

一護「あアッ！！」

ガン！！

一護「くそッ潰れるッ！こんなキモチ悪リーモン潰してやるよ！！」

ゴリッゴリゴリッゴリッ

浦原「駄目スよ、喰うのを邪魔すると…」

バリ…バリッ……ブチッ……バクン!!

鎖は押えつけられていた一護の腹をかじって喰ってしまった。

浦原「自分が喰われちゃいますよ」

トサ……

一護はあまりの激痛に立っていられずに倒れ込む。

一護「……………~~~~~ツッ……ッ!」

浦原「?絶望の縦穴?の底に於いて、自己浸食が完了するまでの時間…」

およそ72時間!3日です!」

一護「!」

浦原「それまでに死神になってそこから這い出してきてくださいね。

でないと虚になった貴方を…あたしらが始末しなきゃならなくなる」

一護「…てめえっ…俺を殺す気が…!」

浦原「アナタが諦めるならそういつことになる」



約70時間後……絶望の縦穴……

一護「くそ……っ登れねえ……もうどれだけ時間が経った……？わかんねえ……」

どうしたらこんな所登っていけるんだよ……？」

ジン太「よオ！」

そこへ、ジン太が食糧と思われる皿を持って現れた。

ジン太「食いもん持ってきてやったぜ。そろそろハラ減るころだと思ってるよ……」

一護「ハ……何言ってるんだ。減ってたまるかよ……よく見るよ。まだ因果の鎖だって

けっこう残ってるぜ……」

ジン太「………まあ、とりあえずメシはここに置いとくぜ。

この穴ん中じゃ時間がわかんねえのも仕方ねえしな」

一護「……時間……？」

ジン太「あんたが？絶望の縦穴？に入ってからちようど70時間が経った。

早い奴ならそろそろ虚になる頃だ。それともう一つ…

最後の？浸食？の規模は今までの比じゃねーぜ！！」

バグーン！バクバクバクッ！！

「一護」！！……ぜ……全部の鎖が……！？」

胸にまで続いている因果の鎖はそのすべてを捕食用の形態に変え、

自らを喰らい始める。

ガッガガガッガガッガガ

「一護」……やめろ……止まれよオマエら……っ！止……」

ガッ……！

そして、とうとう最後の鎖を喰いつくし、胸に孔が開く。

「一護」……あ………あ……ア……が……アアアッアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアア」

ドロ……

すると、「一護の顔の周りに仮面が現れ始める。

ゴアッ……！

一護「オア…アアアアアアア」

鉄裁「……………！」

フェイト「うう……………」

なのは「これは……………」

自分のよく知る者が人ならざる者に変貌していく姿に動揺を隠せないのはたち。

ゼスト「だが……………虚になるときは最初に霊体が爆散するとか言っていなかったか？」

そこへ、ゼストが至極まっとうな疑問をぶつける。

一護「ああ……………後で聞いたんだけど…あれは俺の抵抗の証だったから、

仮面から先に生まれるっていうめちゃくちゃな順序になったんだと」

ジェイル「そうか……………キミは……………諦めてなかったんだね……………」

~~~~~聞こえるか、一護？~~~~~

一護「…どこだ？ここ…」

??「こっちだ」

そう言われ振り向くと一人の男が佇んでいる。

一護「誰だあんた？」

「？誰だ??何を言ってる。私だ　だ」

一護「……………?（聞こえない）」

「……そうか、お前にはまだ届かないのか…悲しいことだ。

一体幾度声を囁かせば私の声はお前に届く？

お前以上に私を知る者などこの世の何処にも居はしないのに

「!」

~~~~~省略~~~~~

「そして知れ！朽木白哉に消された？死神の力？は朽木ルキアから

譲り受けた？死神の力？だけだったということをして！！」

一護「……………なに…？」

「当然だ。奴はそれだけに狙いを定めていた。それだけを消せば事は終わると

思っていたからだ。奴は油断した！

お前自身の？死神の力？を奴は見落としたのだ！！！」

一護「……………俺自身の…？死神の力…？」

「そうだ、朽木ルキアの？力？によって目覚め始めていたお前の？力？は

朽木白哉の攻撃の寸前に魂の奥底へと身を潜めたのだ。さあ  
捜せ。

隠れ去った？死神の力？を捜し出せる時があるとするれば、それはこの世界が

崩壊を始めた今を於いて他に無い！！

今降ってきている無数の匣。この中のたった1つだけにお前の？死神の力？が

隠れている。それを見つけ出せ！」

一護「…ム…つムチャクチャ言うなよ！…どうやって…」

「言い訳はきかない。時間は無い。」

この世界が完全に崩れ去る前に見つけなければ…お前は虚となるのだ…！」

ボツ……………

……………だいたい俺は元々霊力だ何だを察知する能力には欠けてんだ。  
………って、何か

そんなことを石田が言ってた気がする……………？石田…？

そっぴゃあいつはどうやって俺が死神だったことをつきとめたんだっけ…？

石田『かい？』

何か…何か簡単な方法で死神の力の発生源をつきとめられるやり方があったような…

石田『知ってたかい？』

何かエラソーに言ってたぞアイツ…？何だ…？何だっけ…？

石田『知ってたかい？死神の？霊絡？は色が紅ちがういつてことも』

一護「それだっ！！！」

ヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！！！

かなりの数の霊絡が流れてくる中、確かに紅い色の霊絡を見つける。

一護「こいつだぁ！！！！」

バカン！！！！

そして、箱が開くとそこには……

一護「……何……だ？斬魄刀の……柄……？」

「……よく……見つけてくれた……次こそは……私の名が……お前の耳に届くと良いな」

一護「……あなた……もしかして……」

ズ……………

一護が何かを言おうとした瞬間、世界が急速に崩壊を始めた。

一護・……………！！！！

「何をしている！崩れるぞ！！さっさと私を引き抜け！！！」

その頃の現実世界……………

鉄裁が限界と判断して繰り出した、封殺型縛道の？卍禁太封？が炸裂する瞬間、

ドドドドドドドドドドドド……………ズン！！！！

物凄い爆風が？絶望の縦穴？の底から発生した。

ボツ！ガガガガガガツガガガガツ……………

さらに、爆発の中から何かが飛び出し、

ジン太「な…何か出てきやがったっ！！あのガキか！？」

天井にぶつかりながら地面へ落ちる。

ズドン！！！！

ジン太「…な…何なんだよ…一体…？」

ブアッ！！！！

そして、煙が晴れて中から何者かが出てくる。その姿は……………



虚の仮面を着け、死神の証・死覇装を纏ったどちらともいえない姿であつた。

ジン太「死覇装に…仮面…虚なのか…？死神なのか…？…どつちなんだよ…！？」

チキ…

一護？は背中の刀に手を伸ばす。

ウルル・ジン太『！！』

ザンツ！！！！

二人は警戒して、戦闘態勢をとる。

ズ……………

一護？は刀身のない斬魄刀を引き抜く。

ジン太「ナメンな…！来んならこいよ！さっさと…」

ブン！！ガッ！！！！！！

しかし、一護？は自分の仮面にめがけて柄頭を打ち付けた。

ウルル・ジン太『！！！！』

グッ……ガラガラガラッ……

そして、一気に仮面をめくりあげると……

ウルル・ジン太『……あ……』

一護「ふうっ！」

死神の力を取り戻したいつもの不機嫌面の黒崎一護の顔があった。

なのは「よかったよー!!」

一護「いや……ここで死神になってなかったら俺ここにいないからな……」

フェイト「まあまあ、それでもだよ。だって、映像とはいえ自分の知り合いが

虚になったんだから……」

ドゥーエ「そうですね。ほら、妹達だって怖がっていたし……」

ノーヴェ「……………（ブルブル）」

ウェンディ「……こ……怖かったッス……」

「護」ああ〜……」

「護」俺は誓ったんだ！！生きて穴から出たら必ず！！てめーを！  
！ブツ殺す！！！！」

浦原「…へえ、そんじゃあ丁度いい。その気合い使ってこのままレ  
ッスン3に

入っちゃいますか！レッスン3はなんと！時間無制限！！斬  
魄刀を使って

アタシの帽子を落とせたらクリア……」

グン………ドッ！！！！ゴアオ………

浦原「…へえ。やりますねえ、折れた斬魄刀でここまでとは……」

「護」あつたりめーだっ！！本気出しゃまだまだこんなもんじゃね  
ーぞー！！

時間無制限なんて悠長なコト言っ  
てねえでよ！5分くらいで  
カタ付けよう

ぜー！！！！

浦原「……………そっすね。それじゃ5分でカタ付けてみましょうか」

そう言つと浦原は杖の中から刀を取り出した。

浦原「起きろ？紅姫？」

パキ…ベキンベキ…

一護「……………！」

浦原「正真正銘斬魄刀ですよ。こいつはね」

一護「斬魄刀の……………名……………」

浦原「そう、斬魄刀にはそれぞれに名前があるんす。そしてこれが彼女の名前。

いくよ、？紅姫？」

ドン……………！！

ガッ！！ギギギギギギッ

浦原「逃げもせずその折れた刀で刃を受け止めたことは褒めてあげましょ。」

姫は  
たいした度胸だ。だけど…そんな斬魄刀かたなで拵かたなぎきれるほど紅

優しくないっスよ」

ゾリ……………ッ

一護「！」

ドッ

浦原の紅姫は一護の斬魄刀の残った刀身を斬り落としてしまった。

一護「（…やべえっ！）」

ダッ！！

一護「（ウソだろ！アリかよあんなの！！斬魄刀を斬り落としてしゃがった！）」

浦原「言われたでしょう？ただ巨きいただけなんですよ。キミの刀は」

一護「くッ！？」

浦原「靈気が詰まってないんだ。ただ膨張してフワフワと刀の形を

成しているだけ」

浦原は一護が苦し紛れに振るった刀を難なく避ける。そして、

浦原「だからこうして簡単に碎けてしまっ」

ガンツ！！

とうとう残っていた刀身さえも全て壊され、柄だけになってしまった。

浦原「さて、刀は無くなった。どうします？まだそいつで向かってきますか？

なに、アタシの帽子を落とすだけだ。その柄だけでもできないことじゃない。

だけどそれはもう、度胸や勇気じゃないってだけの話。

先に言っておきましょうか。まだその玩具でアタシと戦う気なら、アタシは

キミを殺します」

……情けない……何なんだ、俺は？……なぜ逃げる？……

……そんなもん

だったのか、俺の？覚悟？なんてのは？……情けねえ！

……全く……救いよつゝの無え甘ったれだ……

『お前は』

逃げ回る一護の前に、再び　　が現れる。

一護「…おっさん…！」

「なぜ逃げる一護」

ゾアッ！！

一護「…！」

突如、一護の周りの風景が一変する。

「お前はまだ私を呼んでいない。」





柄も鏝もない、出刃包丁のような斬魄刀で唯一無二の相棒？斬月？  
を手に入れた

黒崎一護が現れた。

一護「……………」

浦原「…さてと、そいじゃ斬魄刀も出てきたところで、本格的にレッ  
スン3

始めましょうか！」

一護「……………」わりい浦原さん、うまく避けてくれよ」

浦原「はい？」

一護「多分、手加減できねえ」

ポツ！！！！！！

一護のその一言の後に、右腕に霊力が集まり始め、いまだに肩に残  
っていた布が

霊力によって吹き飛ばされる。

浦原「！！」

キリキリキリキリキリキリ

一護の霊圧はさらに収束していく。

浦原「啼け！？紅姫？！！」

ブンー！……ドツ！……！

そして、一護は薄れていく意識の中で浦原の帽子が飛んだのを確か  
に確認した。

勉強会終了から1週間後……黒崎家の一護の部屋……

一護「……」……これでいいんだよな……」

~~~~~回想~~~~~

浦原「7日後の午前1時！マドを開けて待っておいてくださいね！」

~~~~~

一護「……イヤな予感ハバシバシするけどな………いい風だ  
な……」

キラッ！

「護」…あ？何…」

ドゴッ！…ドチャンッ！…！…！

「護」…な…ッ何だ今の！？何が…」

ドロドロ…ズルッ…ズ…

「護」…な……？」

~~~~~以下、伝言の内容~~~~~

これからすぐに

(浦原) 商店前に集合

P . S .

~~~~~

「護」ギャーーーーッ！…！

「護の部屋のふすまが一気に血みどろのようになってしまった。

「護」な…何してくれてんだあの野郎！…これじゃまるっきり惨殺現場の

ダイイングメッセージじゃねえか！…ちゃんと消えるんだろ  
うなコレ！…？

…ん？何だ…？追伸…？」

~~~~~

P.S.

今、これを見て

「ダイイングメッセージみたい」

とがありきたりな事を

思った人は

ツッコミの才能がないです。

~~~~~

一護「やかましいわっ！！」

ズバン！！！！

一護「…じゃあな…遊子…夏梨……親父」

そう呟いて一護は扉を開ける。すると…

一心「グッモーニンツイッチ…ゴーーーーーッ！！」

ズドゴア！！！！

父親の一心が頭から降ってきた。

一心「くお……今の攻撃をかわすとは……さすが我が息子……」

一護「な……何やってんだよてめえは!？」

一心「……で……出かける前に……これをお前に……」

そう言つて一心が差し出したのは古びたお守りであった。

一護「?何だこのきつたねーお守りは?」

一心「き……汚ねーとは失敬な!昔、母さんが俺にくれたお守りだぞ!

運とご利益のカタマリだ!」

一護「な……何してんだよ!もらえねえよこんなもん!」

一心「あ……あたりめーだ!誰がやるか!誰がやるか!誰がやるか!」

旅行の間貸してやるだけだ!終わったら俺に返しに来い!」

一護「……………」

一心「オラ!返事はどうした!?!ちゃんと返せよ!?!なくしたらテ  
メー

ヒゲそるからな！！俺の！！」

一護「お……おう……」

グ……

一護「……じゃあ！借りてくぜ！」

一心「おう……」

織姫・石田・チャド『おーーーーー！！！！』

浦原商店の地下……魂が抜けた一護の体に興味津々な一護の仲間たち……

一護「てかオマエらなんで勝手にヒトの体さわってんだよ」

コン「そうだそうだ！これからしばらく俺の体になンだぞ！

ナレナレしくさわってんじゃねーよ……」

一護「おわぁ……」

コン「あ！でも井上さんだけはさわっていいからね？」

一護「コ……コン！なんでテメーがここにいんだよ！？」

織姫・石田『（ぬ…ぬいぐるみが喋ってる…ッ！）』

コン「男一匹コン、花も嵐もふみこえて尸魂界へのり込む所存…」

グッ

ココココココココココココ

チャドとコンの夢の再会がここに果たされた。

コン「ギャゴアアアアアアアアアア

な…なんででめーがココに！？や…やめっ…やめろー！  
！！」

ヒイイイイイイイイ……………

浦原「用意はいいつスカ？開くと同時に駆け込んでくださいね」

一護「わかった」

穿界門を開く準備の整った浦原が問いかけ、それに一護が答える。

コン「んんんー！んんんんんん！んんんんんん！んんんフ！んんん  
フ！」

一護「…コン！」

コン「！」

一護「…家の連中のこと、よろしくたのむな」

浦原「いきます…！」

一護「おう…！」

そして、4人と1匹は穿界門の中へと入っていった。

~~~~~申し訳ありませんが、ここから瀟霊廷突入後まで一気に飛ばします~~~~~

この後、一護は一人で瀟霊廷に突入しようとしたところをみんなに呆れられ、

門番の？丹坊の斧を吹き飛ばしたり、三番隊隊長の市丸ギンに吹き飛ばされたり、

流魂街では村長の家に乱入してきた自称流魂街一の死神嫌いの岩鷲と取っ組み合いの

ケンカを繰り広げたり、瀟霊廷への唯一の侵入方法である空鶴の花鶴射法を使える

ようにするための霊珠核の修行で暴発させて再び呆れられたり、結局突入直前で

岩鷲が詠唱に失敗し、コントロールすることができずに瀟霊廷に突入することに

なったりして現在……

??「いよッホオ!! ツイてるウ!!」

背後でそういう声が聞こえる。

??「配置につくのがメンドウだったから隅っこの方でサボってた
ら、目の前に

手柄が落ちてきやがった!

ツイてるツイてる。今日のオレはツイてるぜっ

そして、てめーはツイてねえ」

「護」あ？」

岩鷲ともう一人は走ってどこかへ行ってしまった。

??「よオ。訊くが…どうしてオメーは逃げなかった？あのヤローは俺等の力が

自分より上と見て逃げたんだろ？

俺はあっちの方が正しい判断だったと思うがな」

一護「あんたの力が俺より上なら逃げることに意味は無え。

絶対に追いつかれるからな。

けど、あんたの力が俺より下なら倒して進みやアそれで済む。

そう思ったただけだ」

??「成程…どうやら莫迦じゃないらしい」

??「はそう言うなり、いきなり斬りかかってくる。

ビド

それを一護は間一髪で躲し、一気に反撃する。

ガッ!!

??はそれを鞘で受け止めそこへさらに攻撃を加えようとする。

一護は鞘を踏み台にして空中へ逃れる。そして、2人は同時に互いを攻撃した。

??「……一応、名前を訊いところか」

一護「…黒崎一護…」

二人の額からは血が流れ出ている。

??「…一護か。いい名前じゃねえか」

一護「…そうか?名前褒められたのは初めてだぜ」

??「ああ、名前に一の付く奴ア才能溢れる男前と相場は決まってるんだ。」

十一番隊第三席副官補佐斑目一角だ!一の字同士仲良くやる
うぜー!」

一護「やだね!」

一角「師は誰だ一護」

一護「……………十日ほど教わっただけだから…………師と呼べるかどうかは
わかんねえけど…………」

戦いを教えてくれた人なら居る」

一角「誰だ」

一護「浦原喜助」

一角「!!!!」

……………そうか……………あの人が師か……………それじゃあ……………手エ抜いて殺すのは
失礼ってもんだ」

ガッ!!!

そう言うと一角は刀の鞘と柄をぶつけて名を呼ぶ。

一角「延びろ!!!? 鬼灯丸?!!!!」

すると、刀と鞘が融合して槍のような形状に変わった。

一護「(槍……………!!!!)」

一角「驚いてるヒマあ無えぞー護！ーいくぜ！ー見誤んなよ！ー」

一護「誰が！ー」

ゴッ！

一護「う」

ドッドッドッドッ！ー

一角の素早い攻撃を受けつつも後退していく一護。

一護「へ！槍の間合が長いつてことぐらいわかってるぜ！誰が見誤るかよ！」

一角「違っぜ」

一護「何？」

ゴウッ！

一角は一際腕を長く伸ばして攻撃してきた。

ガンッ！

一角「裂ける鬼灯丸！ー！」

ガカツ！

一角の声に呼応するように、鬼灯丸は三節棍のような形態に変わる。

一護「！」

ドッ

そして、一護の右腕はいとも容易く斬り裂かれてしまった。

バチャチャツ……

一角「？見誤るな？つてのはこういうことさ。鬼灯丸は？槍？じゃねえ、

？三節棍？なんだよ。痛えか…その手じゃもうロクに剣も握れねえだろ」

一護は一角の話の特に聞くでもなく、斬月の柄の巻き布で腕と斬月を固定し、同時に

強引に止血を始めた。

ギユ~~~~~ツ！！

一護「よし…！」

一角「ああ？何して……！」

ドッ！！！！ガァン！！！！！！！！

一護が斬月を振り下ろすのを一角は間一髪で躲す。

すると、一角の後ろの壁が吹き飛んだ。

一角「…な……………」

一護「もう終わったみたいなの口きくなよ。俺の剣をまだ見せてねえ。

こっからだぜ一角。今度はあんたが剣握れなくなる番だ」

一角「…上等な口をきくじゃねえか…餓鬼が」

一護は一角の素早い攻撃にさらされるが、一角の鬼灯丸に素手で傷をつけることに

成功する。

そして、一角が傷ついた鬼灯丸に一瞬気をとられた瞬間に、一護は反撃に移る。

ダンッ！！

一護「もう一度言っぜ一角」

一角は鬼灯丸を前に掲げて、防御の態勢をとる。が……

一護「次に剣を握れなくなるのは…あんただ」

ドン！！！！！！

防御した鬼灯丸ごと一角の体は斬り裂かれた。

一角「はあっはあっぐ…くそ…ッ」

この一撃だけで、一角はかなりのダメージを負ったようだ。しかし、

一角「へっ…どうした…もう終わりかよ…？残念だったなあ…俺はまだ…」

剣を握れるぜ…！！」

一角は全く引こうとしない。それどころか、闘争心はまだ上がっているようでもある。

一角「俺に剣を握らせたくなけりや…この腕落とすより他に方法は無えぞ！」

一護「…剣を引けよ」

一角「断るぜ」

一護「引けっつてんだ！！勝負はついてる！もう判んだろ！あんたの負けだ！！」

一角「何の寝言だ？こいつは戦いだぜ。勝負を決めるのは生き死にだけだ。」

更木隊第三席斑目一角……ここで退いて永らえるほど……腑抜けに生まれた

憶えは無え!!!」

そう言つて一角は一護へと肉薄する……が、

一護「遅えっ!!!」

今度こそ完全に鬼灯丸を破壊され、さらに腕も斬られて剣を振つこともできなくなった。

一角「くそ……強えなあてめえ……ちっ、ツイてねえや」

ド……

一護「……ツイてねえのはお互い様だ、ちくしょうめ」

そう言つた一護の右腕からも、大量の血が流れ出ていた。

その後、一角の血止めの薬を拝借し、ルキアの居場所を教えてもらった一護は、

岩鷲と合流したが、四番隊の山田花太郎を人質にすることに失敗したために強行突破で

ルキアのもとへ向かおうとする。しかし、そこで人質にした花太郎からルキアの居る

場所まで連れて行くという提案がされる。そして、懺罪宮の入り口付近に一護たちは

地下水道から姿を現した。

一護「……………!!」

一護は何かに気づき、階段の方へ向かっていく。

岩鷲「どうかしたか……………」

岩鷲が一護に尋ねるのを制止する一護。

一護「……………階段の所に誰がいる……………」

岩鷲「!」

花太郎「!!!」

砂煙が晴れ、階段の所にいる人物が露わになる。

一護「!!!!!」

恋次「…久しぶりだな…俺の顔を憶えてるか？」

一護「……………阿散井恋次…！」

そこには因縁の人物、六番隊副隊長・阿散井恋次の姿があった。

恋次「…意外だな。名前まで憶えてたか…：…上出来じゃねえか」

一護「…そりゃどうも」

二人の間には、一触即発の空気が漂う。

恋次「言った筈だぜ。俺はルキアの力を奪った奴を殺す。てめーが生きてちゃ、

ルキアに力が戻らねえんだよ」

一護「…殺す気で連れてった奴が何言ってるやがる！通してもらっぜ
…！」

恋次「そうしろ。てめーに俺が殺せるならな！こいよ。カズクは…
嫌いじゃ

ねえだろ？」

ギアン…！！

恋次「…おい黒崎一護…」

突然、恋次が一護に話しかける。

恋次「…訊くが、ルキアをどうやって助けるつもりだ？」

一護「…どうやって？」

恋次「ここで俺を倒せたとして、まだ11人の副隊長がいる。その上には更に13人の

隊長格がいるんだぜ。それを全員倒す以外に、ルキアを助ける方法は無えんだ。

それをためーはやるってのか？」

一護「…やれるさ！

隊長が何人！？副隊長が何人！？関係ねえよ！倒してやる！！

そいつらがジャマするってんなら全員だつてな！！」

恋次「……………何だそりゃ？その自信のどこに根拠がある？

死線を一つ二つ越えたぐらいで何をそんなに思い上がってやがる…

斬魄刀が変わったな？まさかその程度で強くなったと…

自惚れてるんじゃないかねえだらうな？」

ガッ！！

恋次「吼えろ…？蛇尾丸？！！！」

ガシヤシヤッ！！

一護はその一撃を受け止めるが……

一護「！？（と…止められねえ…ッ！？）」

ガァン！！

そのまま押し負けて、倉庫に背中から突っ込んでしまう。

ガシヤ！！ガカァッ！！

恋次「はっ…はっ…」

ググ…

一護は膝をつくが、すぐに立ち上がるうとする。

恋次「…しぶとい野郎だ…そんなにルキアを助けてえか…」

一護「…バカ野郎…？助けてえ？んじゃねえよ…？助ける？んだ！」

恋次「ふざけんな！！」

ガシヤア！！

恋次「てめえがルキアの霊力を奪いやがったからルキアの罪は重くなっただんだ！！」

わかってんのか！？てめえの所為でルキアは殺されるんだよ！！

そのてめえがどのツラ下げてルキアを助けるなんてぬかしやがる！？

ふざけんじゃねえ！！！！」

一護「…俺のせいでルキアが殺される…？わかってるさそんなこと…！！」

だから俺が助けるんじゃねえかよ！！！！」

ギアンツ！！！！

恋次「ぐ…ぐ…くそがあつ！！！！」

一護は恋次の連続攻撃の隙をついて、攻撃しようとする。

恋次「……!!」

一護「終わりだ恋次!!!」

ブン!!

しかし、その一撃は空振りに終わり……

恋次「言ったら、てめーは万に一つも俺には勝てねえ」

ドン!!!!!!

逆に、恋次に左肩から胸にかけて直撃されてしまう。

一護「げほ……っ（……躲された……!?なんで……）」

恋次「わかったか……てめーにルキアは救えねえ。俺に殺されるてめーにはな」

ゴッ!!!!

一護に蛇尾丸の一撃が迫る……

~~~~~

浦原「そんなもんスカ！ガツカリだなあ！！ホントに…ガツカリだ！！」

黒崎サン、キミの剣には？恐怖？しか映っちゃいない。

躲す時には？斬られるのが怖い？攻撃する時には？斬るのが怖い？

誰かを守ろうとする時にさえ？死なれるのが怖い？キミの剣はくだらない

恐怖ばかりをアタシに語る。そうじゃない。

戦いに必要なのは？恐怖？じゃない。そこからは何も生まれ  
ない。

躲すのなら？斬らせない？！誰かを守るなら？死なせない？！

攻撃するなら？斬る？！

ほら、見えませんかアタシの剣に映った……？キミを斬る？  
という？覚悟？が

ザッ………ドン……！！

すると、一護の周りに霊圧が収束し始める。



浦原「……できるじゃないスカ…覚悟。…忘れないで下さいよ……  
この一振りを」

~~~~~

ガッ!!

一護は蛇尾丸の一撃を素手で受け止める。

恋次「!」

一護「…待たせたな恋次…覚悟だ。てめえを斬るぜ」

恋次「!!」

恋次は一護の豹変に危険を察知し、距離をとる……

ドゥッ!……!

そして、一護の右腕にあの時と同じように霊圧が収束し始める。

キリキリキリキリキリキリ……

恋次「……………!!…ちィッ!」

ドゥッ!……!……!……!……!

一護の剣が振り下ろされる。

その一撃は蛇尾丸を破壊し、恋次にも深手を与えて吹き飛ばし、

恋次は壁に叩きつけられた。

恋次「ゴボツ…おおおおおおおおおおおおお」

恋次は痛みで咆哮を上げる。

恋次「…まったく…骨の髄まで野良犬根性が染みついてやがるんだ…厭になるぜ。」

星に向かって吠えるばかりで、飛びつく度胸もありやしねえ…」

ダン…！

一護「！」

ガッ！

恋次は一護の胸ぐらを掴んで言う。

恋次「…俺は…結局朽木隊長に…一度も勝てねえままだ…ルキアがいなくなってから」

ずっと…毎日死ぬ気で鍛錬したがそれでもダメだった…あの人は遠すぎる…

力づくでルキアを取り戻すなんて…俺にはできなかつたんだ
…！…黒崎…

恥を承知でてめえに頼む…！！…ルキアを…ルキアを助けて
くれ…！！」

一護「……………ああ……………」

ズ…………ドツ…………

恋次は力尽きて倒れた。そして、一護にも限界が訪れる。

一護「……………」

グラァ…………ドサツ…………

はやて「…………この人も辛かつたんやな……………」

一護「確か…流魂街からずっとルキアとは仲間だったらしい…だからこそ俺のことが

い

ルキアが殺される原因になった俺のことが許せなかつたらし

なのは」というか…………一護くん…………さっきから血を流し過ぎじゃ…

…」

シグナム「そ…そうだな…しかも、左肩から胸にかけての傷はあの刀の入り方だと

致命傷になるはずだが……」

一護「まあ……あれは虚の仮面が左胸の所に出てきて受け止めたからだ」

フエイト「！？死神に戻った時の仮面の事？どうして……」

一護「それが……俺が手に入れた力の代償みたいなもんさ…あとで解る」

花太郎のおかげで回復した一護たちは、再び懺罪宮へと足を踏み入れる。

しかし、足を踏み入れた瞬間に途轍もない霊圧が彼らを威圧する。

そして、とうとうその存在が一護たちの目の前に現れる。

??「黒崎一護だな？」

一護「………！なんで…俺の名前…てめえ一体……」

??「なんだ、一角からきいてんじゃねえのか？」

十一番隊隊長・更木剣八だ。てめえと殺し合いに来た」

一護「（更木剣八……………こいつが……………十一番隊隊長……………）」

剣八「…どうした？言ってんだぜ、俺はてめえと殺し合いに来たってな。

何の返事も無えってことは始めちまってるのか？」

一護「！…！」

ガッ

一護は斬月に手をかけるが、

ドサッ

一護「！花太郎！！岩鷲！！」

花太郎「…う…あう…」

一護「…花太郎…！！」

岩鷲「バ…バカ野郎一護…！俺も花もちよつと霊圧にアテられただけだ…」

かまうんじゃねえ…！俺らのことはいいから前向いてろ…！

キョロキョロ

してっとなあつという間に殺されちまうぞ……!!」

一護「岩鷲!!花太郎連れて先に行け!!こいつは俺が何とかする
!!オマエは

先に行つてルキアを助けてくれ!!」

岩鷲「なんとかつてオマエ……一人で……」

一護「うるせえ!!いいから黙つてさっさと行け!!」

岩鷲「……………わかつた!!」

ダッ……

一護「……意外だな……二人揃つて追っかける素振りもナシかよ……俺ら
を止めるのが

あんたらの仕事じゃねえのかよ」

剣八「言つただろ、俺は?てめえと殺し合いに来た?つてな。てめ
えの仲間だの朽木

何たらだのが、どこで死のうが興味は無えよ」

「護」…上等だ…ちくしょうめ

ギリッ…

「護」ふーっふーっ…ふーっ…

剣八「…悪くねえ。

構えは固いし隙だらけだが、霊圧だけはかなりのモンだ。そこらの副隊長レベル

じゃ相手にならんだろう。一角が負ける訳だぜ

「護」…そりゃどうも

剣八「…だが俺との間にもまだ差があるな…どうだ、一つハンデをやるうか」

バツ

そう言つて剣八は死覇装をはだけさせると…

剣八「てめえから先に斬らせてやるよ。どこでも好きな所を斬りつけて来い」

「護」………な…！？な…何言つてんだ…？

構えてもいねえ奴に斬りつけられるかよ！バカにしてんのか
！？」

剣八「バカになんてしてねえさ。ただのサービスだ。構えてねえ奴に斬りつけねえって

けよ。
心構えは立派だが、そんな小綺麗なモンは別の機会にとつと

…そう気負うなよ。楽しくやるうぜ。

殺そうが殺されようが、所詮は暇潰しだろうが。

ホラ来いよ。首でも腹でも目玉でも、何ならこの一撃で俺を殺したっていい。

ビビッてんじゃねえよ!!来い!!!!」

一護「くそッ!!後になって恨むなよ!!」

ドン!!……ドッ……

しかし、一護の振り下ろした斬月は剣八の体に傷一つ付けられてはいなかった。

一護「(嘘だろ……なんで…キズ一つついてねえんだよ…!!)」

剣八「…この程度かよ。興奮めだ。次はこっちからいくぜ。頼むから、

一振り二振りで死ぬんじゃねえぞ」

全員『ジーーーーー……………』

シグナム「な……………なぜ私を見る!？」

一護「いや……………アイツと比べたら遙かにマシだなと……………」

シグナム「な……………わ、私をあのような猛獣のような奴と比べるんじゃない!—!」

はやて「いやあ……………だって……………なあ?」

ヴィータ「うんうん……………」

シグナム「うう……………しばらくは模擬戦は控えようか……………」

なのは「でも……………あの人……………怖いね……………」

一護「まあ……………アイツの本当に怖いところはそんなんじゃないけどな……………」

フェイト「?」

ドレン

一護「はあっ…はっ…はっ…はあっ…」

一護は自分が何回斬りつけても傷つかない剣八の強さに辟易している。

一護「くそッ…！どうしてだよ…！当たってるんだ…！なのに斬れない…！！」

そんなに力の差があるつてのかよ…！ちくしょうめ…！

いや…！落ち着け…落ち着くんだ…斬れないワケが無え…

俺は今、あいつの霊圧にビビッちまってる…！それがマズいんだ…！

落ち着いて霊圧を研ぎ澄ませば斬れないワケは無え…！！」

一護は自分にそう言い聞かせ、斬月の言葉を思い出す。

一護「…斬月のオッサンも言ってたじゃねえか…！恐怖を捨てる…前を見る…」

退けば老いるぞ…臆せば死ぬぞ…！（勝てるっ…！！）

ッし…！やってやらァ…！！」

そう言って剣八の元へ向かおうとしたとき、ある事に気づく。

ドクン…！！！！

「一護」……………チャドの霊圧が……………消えた……………？」

そう、先ほどまで確かに感じていたチャドの霊圧が消えたのである。

霊圧の消滅はその持ち主の死を意味する。なので一護は動揺する。

「一護」(まさか!!ウソだろ!!チャドが負けた…!!?死んだのか…!!?嘘だ!!)

そんなワケが無え!!チャドが負けるなんてそんなワケが…

「!!」

ポウ……………

だが、一度は消えたように感じたチャドの霊圧は微かにだが、確実に残っている。

つまり、生きているのだ。

「一護」(そうだ……………何をビビッてんだ俺は……………俺がここで負けたら、チャドも

井上も石田も岩鷲も花太郎も夜一さんも、俺に力を貸してくれた連中がみんな

死んじまうんだ!!ビビッてるヒマなんか…無えじゃねえか!!」

そして、一護は剣八の前へと進み出る。

剣八「…やっと出てきやがったか…死ぬ覚悟はできたのか？」

それともただ諦めただけか？」

一護「どつちも…外れだ！！」

ドッ…！！

一護は剣八の体を斬りつけ、確かに傷をつける。

一護「…悪いな、まだ死ぬ気にはなれねえんだ。俺が死んだら背中にあるもの

みんな壊れちまうんでね！！」

ドッドッドッドッドッドッドッ

剣八「なんだ、やりやアできるじゃねえか。

…まだ緩めるなよ。そのまま研ぎ澄ませてる。こっからが楽しいところだぜ。

なア、黒崎一護！！」

ゴォッ！！！！ガンッ！！！！！！！！

ガッ！！ガガガガガッ！！ガァン！！！！

二人の刀がぶつかり合う。

ガッ！！グアッ！！！！！！

そのさなか、剣八がおもむろに斬月の刀身を掴んで回転させる。

一護「！！！！」

そこへ剣八が刀を伸ばして突いてくるが、一護は状態を捻って躲し、さらに

その勢いのまま斬月を掴んでいる剣八の手に蹴りを入れて距離をとった。

が、目の前にはすでに剣八の姿は無い。

チリン

一護「！！！！」

ガァン！！！！

背後からの鈴の音に反応して、なんとか受け止める一護。

剣八「いいぞ！いい反応だ！！！！」

ギァン！！！！

剣八「集中が増してるな！」

さっきまでと違ってちゃんと鈴の音が聞こえてるじゃねえか！！

鈴も眼帯もより戦いを愉しむ為だけにつけてんだ。

そうやって有効利用してくれねえとつけてる意味が無え」

一護「くそ…ッ、ナメヤがって…だから斬魄刀も解放しねえってワケか…」

…わかってんのか？俺の剣はもうあんたを斬れるんだ…

ナメて手エ抜いてると…」

剣八「…俺の斬魄刀に名は無え」

一護「…え…？」

剣八「俺の刀はむき出しだ。元々封印自体してねえんだよ。

俺の斬魄刀のこいつが本体だ」

一護「…そうかよ。それを聞いて少し安心したぜ…じゃあ、あんたの剣はもうそれ以上

強くはならねえってワケだ。それなら…」

ヒュンツ！！ガッ！！！！！！

「護」！！！！」

剣八「それなら…何だ？？それならもうちょっとで勝てる？とも思ったか？

ナメてるのはてめえだ。俺が斬魄刀を封印しねえのは、霊圧がデカすぎて

全力で抑え込んでも封印できねえからだ。だから普段戦う時は常に加減して

斬る癖をつけた。わかるか。そうでもしねえと敵が脆すぎて戦いを愉しむ

「暇も無えんだよ」

ドッ！！！！

剣八の剣は受け止めていた斬月を貫き、一護の胸に突き刺さる。

剣八「…だから緩めるなって言っただろ、霊圧をよ。勝機の一つ二つ見つけたくれえで

「緩めやがって…」

ズ……

剣八「つまんねえ幕引きだぜ」

ガシャ…ガシャン…………ドッ…………

斬月は折られ、一護は地面に倒れ伏す。

剣八「……ちつ、俺のことを斬れた奴も、戦いの最中に鈴の音を聞けた奴も……」

久し振りだったのによ……」

一護「はっ……はっ……はっ……」

剣八「……終いか。……つまんねえな……」

一護「ゲほッ（……くそ……ッ！……くそッ！……くそッ！……くそッ！……くそッ！……くそッ！……くそッ！……くそッ！……」

死にたくねえ！死にたくねえ！死にたくねえッ！

こんなところで死んでられつかよ……！！まだ死ぬ訳にやいかねえんだッ！！

動け！動けよ体……！！止まれよ血ッ！！俺をもう一度戦わせ
てくれ……！！

俺は……俺はルキアを……助けなきゃいけねえんだ……！！（……）

すると、剣八が去っていくのと入れ違いになるようにそこに斬月が現れる。

斬月「戦いたいのか？勝ちたいのか？それとも生きたいのか？どれだ」

斬月は倒れている一護に問いかける。

一護「…勝ちたい…」

斬月「…聞こえんな」

一護「戦うだけじゃ意味が無え…生き残れるだけじゃ意味が無えんだ…！」

勝ちたい…！勝ちたい…！！！！」

斬月「…いいだろう。ならば連れて行つてやる！」

そう斬月が言うと、一護の意識を黒いものが覆う。

そして、一護が目を開けるとそこは、斬月と初めて出会った自分の精神世界であった。

一護「……………ううは…！！！」

ズザザァッ

そこで一護は地面がさかさまになったことを思い出しそこへ寝転がる。

斬月「何をしている？」

一護「！だ…だ…だってこうしてねえとまた落ちるだろ…！」

斬月「その心配はない。あの時はお前の虚化によって、この内なる世界の安定が

失われていたからそうなっただけのこと。だが今は違う。見る、あれだけの

戦いの中にあってもお前の内なる世界は微動だにしていない」

一護「待て待て。じゃあ何か？俺の心ん中ってのはこの縦横デタラメなのがフツ一の

状態ってことなのか？」

斬月「どうやらお前は少しばかり強くなったようだ…」

一護「スゲーな、堂々の無視かよ」

斬月「立て一護」

ブンッ

そう言っつて斬月は一護に抜き身の刀を一本投げる。

一護「おわ！？つとッ！あああ危ねえな！！抜き身の刀投げる奴があるかよー！！」

斬月「持っている。お前の刀だ」

一護「…え？だってコレ、オッサ…斬月じゃな…」

斬月の言葉に一護は困惑する。

斬月「？浅打？護廷十三隊に入れぬ下級死神の持つ名も無き斬魄刀だ」

一護「イヤ、だから俺の斬魄刀は斬月」

斬月「？斬月？というのは…お前が先程敵に折られたこれのことか。

……これはお前には渡せない」

ブンッ！！

斬月はそう言うとお出現させた？斬月？を放り投げる。

一護「な…！何すんだよ…！」

??「退け」

一護が？斬月？を取りに行こうとすると、背後から突然声が聞こえ、物凄い速度で

何かが一護の横を通り過ぎた。

一護「く…ッ！！（何だ…！？白い…死覇装…！？）」

白い死覇装を纏った何かは、？斬月？を掴むと着地する。

一護「…な…何だよオマエ…！？」

その姿は、全身が真っ白の黒崎一護、自分自身の姿であった。

白一護「何だは無えだろ、相棒」

一護「……………！！！」

斬月「これからお前が、私を持つに足る者かどうか試す。もう一度私を手にしたくば、

自分の手で奪い取ってみせる。敵はお前自身だ！！！」

白一護「ハッ、奪い取る…ねえ。いいじゃねえか。是非そうしろ。

お前にそれができんならな相棒！！！」

ガン！！……………グンッ！！！！

白一護は早速？斬月？で斬りかかってくる。

一護はそれを？浅打？で受け止めるが……………

一護「！（…う…ッ、受け切れねえ…ッ！？）」

ガッ！！ザザザザザアッ！！

受け切れずに弾き飛ばされてしまう。

一護「（……………凄え…ッ！！斬月って…こんなに凄え刀だったのかよ…！？）」

霊圧で… 大気が灼き切れそうだ…！！バケモンじゃねえか…
！普通の斬魄刀が

棒切れに見える…！こんなモンで勝てるワケが無え…！！」

白一護「どうしたよ相棒？ボヤボヤしてると…殺すぜ」

ブオアツ…！！

白一護は斬月の柄の巻き布を持って、斬月を振り回し始めた。

一護「…な…！？」

白一護「おら…！」

ガアンツ…！！

一護「（…な…）」

白一護「ちっ、外したか」

一護「（柄の巻き布で斬月を飛ばす！？何だよこの戦い方！？こんな
なの…」

俺は思いつきもしなかった…！！」

白一護「ハッ、情けねえなアお前！」

一護「……………」

白一護「こんな凄え刀持って、何であんな血塗れにされるんだ？理解できねえよ！

お前は会ったばかりの奴の名前きいただけでそいつの親友になれるのか？」

一護「…何だと？」

白一護「お前のやってるのはそういうことだって話さ！

斬月を呼び出しただけで、もう斬月を使いこなした気でいやがる！

自分のことばっかで斬月の力を引き出そうとも理解しようともしちやいねえ！」

一護「……………！」

白一護「斬月の力はこんなもんじゃねえ！こっちが心開いて力を貸せば、まだまだ

幾らでも強くなる！！だがそいつはお前にやムリだ！斬魄刀のことなんか

気にも掛けず、自分さえ鍛え上げれば強くなれると信じ込んでんじまってる

お前にはな…！」

斬月「……………」

「一護」(そうだ、確かに俺は斬月のオッサンを理解しようなんてしてなかった…)

斬魄刀は道具じゃない。みんなそれぞれ名前を持って生きてるんだ。

それなのに…

何が安心しただ！？フザケンじゃねえ！同じじゃねえか！！俺も！！！！

俺だって名前を知ってるだけで、斬月のオッサンのことを何一つわかつちや

いねえ！これじゃ名前なんて無いのと同じだ！！

斬魄刀の名前にすら興味を示さねえあいつと何も変わらねえ

！！

知りたい………」

白一護「…さア、そろそろ終わりにするぜ。見せてやるよ。斬月を使いこなすつてのが

な！」
どういうことかを。死ぬまで斬月コイツを使いこなせねえお前に

ドン……！！！！

白一護は止めを刺そうと一護へと肉薄する。

一護「……………教えてくれないか斬月のオッサン。少しずついい。あんたのことを俺に。知りたいんだ。俺に力を貸してくれるあんなのこと。

だから教えてくれ。そしてもう一度…あんと一緒に戦わせてくれ……………

…オッサン……………!!」

ガァン!!…!

一護が心でそうつぶやくと、一護の持つ浅打と白一護の持つ斬月がたちどころに

入れ替わる。

白一護「…な」

一護「(もう一度……………俺にチャンスをくれるのか……………」

ありがとうオッサン!!…!」

ドクン!!……………!!

斬月「信じる。お前は一人で戦ってはいない。一護！」

戻って現実世界……一護は立ち上がっていた。

先程折られたはずの斬月も元に戻り、さらに尋常じゃないほどの霊圧を纏っている。

ドン……！！

剣八「！！」

一護は剣八に躍りかかり、肩口を斬りつける。

ガン……！！！！

そして、そのまま受け止めた剣八の刀を押し戻しながら斬りあげた。

バンツ……！！！！ガガガガガガガッ……

剣八「はっ……はっ……はっ……はーっ……はーっ……はーっ……はーっ」

一護「…悪いけど時間はかけてられねえ。…一気にカタをつけさせてもらっぜ」

剣八「…一気にカタをつけるだと…？そいつア困るな…せっかくここまで」

楽しくなってきたのによ！！

できるだけ長引かせて、いこうぜオイ！！」

一護は向かってくる剣八の顔に向けて、斬月を突出す。が、剣八はそれを避ける

そぶりも見せずにつつまみ、顔を斬られながらも一護に接近してくる。

一護「！！！！…な…」

ドン！！

一護へ向けて剣八は突きを繰り出す。一護は斬月を避けなかった剣八に動揺したため、

間一髪で突きを避ける。

剣八「ははっ！！たまんねえな！！」

てめえがなぜ復活できたのか！？てめえがなぜ急激に強くなったのか！？

気になることは山程あるが……とりあえず今はどうでもいい
！！今はこの戦いを

楽しもうぜ……！」

「護」(くそツ……！！圧してるのは俺だ……！斬撃の数もダメージも！

圧倒的に俺が上の筈だ……！」

なのに斬っても斬っても……なんで倒れねえんだツ……！」

お……おかしいぞあんた……！！どうかしてる……！そんなに戦いが好きかよ……！？」

死ぬのも斬られるのも怖くねえのかよ……！」

剣八「………どうかしてるだ………？どうかしてるのはお前の方だ……！！！」

それだけ強くてなぜ戦いを好きにならねえ……？愉しめよ……！
死も苦痛も……！！

その為のただの代償の一つだろうか……！！！」

シグナム「な………なんなのだコイツは……！」

一護「言っただろ？コイツの本当の怖さはな、？どんなに斬っても決して倒れない？」

それに限る。剣八って名前の意味はな…？幾度斬り殺されても絶対に倒れない？」

って意味なんだ…コイツにはピッタリな名前だろ？」

クアットロ「……………」

ウーノ「うう……………またクアットロが気絶……………」

ドゥーエ「幽霊と同じくらいダメだったみたいね……………」

ちなみに、正確には剣八 幽霊なのはここだけの話。

ゼスト「しかし……………自分の命でさえも……………戦いを愉しむ為の道具ではないとは……………」

六課の全員はこの未知の生き物のような剣八の存在にかなりの恐怖を抱いているようだ。

なのは「うう……………顔で既に怖いのに……………もっと怖いんだけど……………」

一護「……………ガマンしろ……………」

こいつは技術開発局の連中に作らせた、靈力を無限に喰らい続ける……………」

化物だ」

一護「！」

剣八「今迄こいつに喰わせてた分の靈圧を……………」

ガッ…ズアツ！！！！ズ…ン…ドオオン……………」

剣八「全ててめえを殺す為につき込む。それだけのことだ」

剣八が刀を振るうと、一振りで建物が完全に崩壊した。

ドドドドドドドドドドドドドドドド

斬月「聞こえるか一護。奴の剣の悲鳴が」

オオオオオオオオオオオオオオオオ

一護「…ああ」

斬月「あれが奴には聞こえない。

信じ合わぬ者同士、共に戦えば互いの力を損なうのみ」

そう、剣八の斬魄刀は持ち主の靈圧に耐え切れずに、徐々に崩壊を始めていた。

斬月「己の力しか信じぬ奴にはそれが解らない。一護、お前は私を信じられるか」

一護「…当然だろ。俺の力全部、あんたに預ける。好きに使ってくれ。そして…」

…俺に力を貸してくれ」

斬月「……………ああ…！」

そう斬月は答えると、斬月の柄を握る。

ドン……………！！！！

剣八「ほう！ここにきてまだ霊圧が昇がるのか！面白え！！」

一護「昇がるさ。俺は斬月の力を借りて、斬月と二人で戦ってたんだ。

自分一人ではか戦おうとしねえあんたには、絶対に負けねえ」

剣八「斬月…？その斬魄刀の名か…？斬魄刀の力を借りて…斬魄刀と共に戦う…？」

んてのは 戯れ言だ。斬魄刀は戦いの道具だ。？斬魄刀と共に戦う？なんてのは

自分の腕で戦えねえ弱り切った負け犬の科白だぜ。俺やてめえの科白じゃ…

一護は腹部を半分以上斬り裂かれた状態で倒れる。

ドゥッ！！バシャ…バシャシャツ…バシャバシャツ…

また、剣八も斬月が引き抜かれたために傷口から血が噴出する。

剣八「…ハッ、何が悪いみんなだ」

ピキ…ツキ…ン…

剣八の刀は持ち主の敗北を意味するかのごとく折れてしまう。

剣八「てめえの勝ちだバカ野郎」

ド……………ッ

そして、剣八は己の敗北を認めて倒れ伏した。

薄れていく意識の中で一護はやちるの声を聞いた。

やちる「ありがと！！！！……いつちーのおかげで剣ちゃんは楽しく戦えたよ！」

あんなに楽しそうな剣ちゃんを見たのは久しぶりでした！

ほんとにありがと!！」

そう言つとやちるは剣八を抱える。

やちる「…いっちー、できれば死なないでね。そしてできれば、また剣ちゃんと

遊んであげて。お願い」

そして、やちるは剣八を抱えて去っていった。

ここで一護の意識は完全に途切れている。

なのは「い…一護…くん……」

一護「ああ…やっぱりきつかったな…みんな……」

フェイト「こんな…こんなになるまで戦わないといけないの!？」

一護「…そうだな…向こうの世界には非殺傷設定なんて優しい代物も無いし、

死神にしたって虚にしたって何時でも命がけなんだ……

そして、ルキアは命がけで俺と俺の家族の命を助けてくれた。だから俺は

あいつを命がけでも助けてやりたかったし、そういう恩を受けたまま現世で

安穩と生きているような…

そんなつまらない奴には俺はなりたくなかったんだよ」

シグナム「一護……」

はやて「一護くん……（あ…あかん…今は真面目な話なのに…そんなカッコいい顔

されてもつたら……／／／／／）」

ヴィータ「…はやて？どうかしたのか？顔が赤いぞ？」

一護「やっぱり気分が悪くなったのか？はやて」

はやて「ううん…！何でも無いんよ…！！」

乙女「s『ピキーン…！…』」

早くも一護ラバーズははやての異変を感じ取ったようだ。

一護「まあ…このあとも問題ではあるんだが……」

ジェイル「フム…とりあえず、キミはどうやって生き延びたのかが先程から

「気になって仕方がないんだが…」

一護「ああ…それは夜一さんが運んで治療してくれたんだよ」

全員「夜一さん？ネコの？」

一護「そ、ネコの」

全員「いやいや、そんな馬鹿な…」

一護「まあ、説明してやるから待ってるって…」

さて、ヴェロツサ……あの映像は飛ばしてくれ…頼む……！

(小声)

ヴェロツサ「あの……？ああ！あれね……！まあいいけど……本当にいいのかい？」

一護「何回も訊かんでいい……！頼むからあれだけは飛ばしてくれ……！」

先程から一護が飛ばしてほしいと言っているものはなんなのか……

それはこの小説ではおそらく描写されることは永遠に無いだろう……

乙女'sに何されるか分つたもんじゃないので……

気になって仕方がない人は原作14巻をご覧ください(ry

一護の過去・その3 (尸魂界救出篇) へ続く……

第24話 一護の過去・その2（敗北・修行・尸魂界潜入篇）（後書き）

いかがでしたでしょうか……今回はトラウマシーンの剣八戦だったのですが、

六課勢のリアクションが微妙だったかもしれません。

最近は一護たちばかり書いてたので上手く書けませんでした。

何か意見等がございましたら、気軽に感想ページに書き込んでください。

可能な限り、修正していきたいと思います。

では、また次回にお会いしましょう！！

第25話 一護の過去・その3（尸魂界救出篇）（前書き）

やっとこさ完成です。

難産どころではなかったです。

今回も長いですので読みづらかったりビミョーな所があるかもしれませんが、

よろしく願います!!

あと、簡単な報告と言つかお気に入り件数が300件に到達しました。

みなさん、いつもありがとうございます!!

一護の過去もいよいよ大詰め。

新たな力を手に入れる為に一護は修行を開始する。

果たして、一護はルキアの処刑に間に合うのか………

第25話 一護の過去・その3（尸魂界救出篇）

尸魂界……………双極の丘の隠し部屋……………

一護「（…どこだ…ここ…？俺は…死んでねえのか…？）」

夜一「…目が覚めたようじゃの」

一護「…夜一さん…！！」

目を覚ました一護に話しかけたのは、黒猫の姿の夜一であった。

一護「無事だったのか…！よかった…」

夜一「ああ、おぬしよりはずっとな」

一護「そうか…夜一さんが助けてくれたのか…ありがとな…」

夜一「何、あれだけの傷で即死しなかった自分の生命力に感謝するんじゃない」

一護「傷…そうか…随分斬られてたからな…俺…！そうだ…！」

夜一「！」

一護は何かを思い出したように起き上がるが、

バツン…！！

一護「ぐ…ッ」

腹の傷が開いて再び出血してしまう。

夜一「ば…莫迦者！動く奴があるか！！自分の怪我の程度がわかってらんのか！？」

一体どうしたというんじゃ！？？」

一護「チャドが…危ねーんだ…！助けに行かねーと…！！」

夜一「落ちつけ！」

どすっ！

一護は夜一のネコパンチで頭を押さえつけられて強引に寝かせられた。

夜一「チャドなら大丈夫じゃ。井上も石田もな」

一護「え…？」

夜一「戦った相手が良かった。傷は負ったが生きておる。

井上と石田なぞ上手く敵をかわしてまだ無傷じゃ。

とにかく、しばらくはその結界の中で大人しくしておれ。

半死人が助けに行つたところで役に立たんじやろっ。

何しろ臓物の半分が潰れておったからの…

これが懐に入っておらねば、

おぬしの胸は真つ二つになっておったところじゃ」

そう言つて夜一は何かを背後から取り出した。それは……

夜一「しかし驚いたぞ。おぬしがまだこれを持ち歩いておったとはな…」

一護「…な…それが…入つてた！？俺の懐に…!?!」

一護が死神に戻つた時につけて現れ、そして、恋次との戦闘の時も刃を食い止め、

花太郎にすすめられて地下水道に棄ててきたはずの顔の半分までが潰れた仮面であつた。

夜一「何じゃ？持ち歩いておつたんじゃないのか？」

一護「イヤ…実は昨日恋次と戦つた時もそいつのお蔭で助かったらしくてさ、

だから俺はお守りとして持つときたかつただけど…

花太郎がどうしてもすてた方がいいて言つもんだから…

地下水道に棄てて来たんだ」

そう、確かに一護は一度この仮面を棄てたのである。

しかし、仮面は再び持ち主の危機に呼応するかのように出現したのだ。

一護「あ、花太郎ってのは四番隊の奴でさ、敵なだけどいー奴なんだ。

恋次にやられたキズもそいつが治してくれたんだぜ」

夜一「……………」

夜一は何かを考えるように黙っている。

一護「それにしてもなんでこれが懐に…確かにすてたと思ったんだけどな……………」

そう言っで一護はその仮面を取ろうとする。が……

夜一「…待て、それは儂が預かるう」

夜一によってストップが掛けられてしまった。

一護「え？なんでだよ。せっかく戻ってきたのに……」

夜一「よこせ。口答えは許さん」

一護「は…はい…どうぞお納めください……」

一護は夜一に理由を尋ねるが、夜一は無言を言わさぬ態度で一護から

仮面を取りあげたのであった。

ココから作者と一護の二身上の都合により、スキップいたします。

夜一「…とまあそんなわけでこの道具でおぬしを運んだワケじゃが、
ときに…」

ハラの傷の具合は大丈夫かおぬし？まアあれだけ叫び倒せば
そういつことにも

なるうな。以後気をつける」

一護「（野郎…ッ…!）」

ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……

なのは「????????何があったの?」

フェイト「うん…いきなりそんなわけに飛んだんだけど？」

シグナム「…とりあえず…一護が叫び倒すようなことが起こったと
いうことは

わかったのだが……」

一護「……なんでもねえ……」

ロツサ「ニヤニヤ」

はやて「???ロツサ……ニヤニヤして気持ち悪いで?」

ロツサ「グハッ!?!」

シスコンに500のダメージ!!

なのは「……なんか…怪しい……」

一護「………(平常心!平常心!!)」

フェイト「ねえ……なにがあつたの?」

シグナム「そうだが、今更隠すこともあるまい?」

シャマル「それとも…見られちゃマズイものなの?」

一護「………ノーコメント(その通りだよ!!)」

ロツサ「まあまあそのくらいにしてやりなよ」

はやて「む〜…まあええわ…」

一護「ていうか……お前ら夜一さんのことには突っ込まないのな…」
フェイト「うん…こっちの世界の使い魔とかもそついうことできるし…」

はやて「うん、ザフィーラもな」

一護「ああ…そついうことが」

一護「…要するにこいつは、靈力を込めると空を飛べる道具ってことか…」

夜一「そうじゃ！尸魂界にも2つとない貴重な道具じゃぞ。ありがたいと思え！」

一護「そんな貴重な道具が…なんであんなの手元にあるんだ…？」

…変身はできるわ、キズは治せるわ、貴重な道具は持ってるわ…夜一さん…

あんな一体何者なんだ…？」

夜一「……………それは…」

ズ…ッ！！！！

夜一が何かを言おうとした瞬間、突如巨大な霊圧が出現した。

一護「こ…この霊圧は…！！…あいつだ…！！」

そう、この霊圧の持ち主は一護の力を消し去った張本人、朽木白哉であった。

夜一「懺罪宮の方か！！」

ダン！！

夜一「待て一護！何をする気じゃ！」

一護「懺罪宮には岩鷲と花太郎が向かってる！！俺が行かねえで誰が助けるんだよ！！」

グンツ！！パキツバキバキバキ…

一護は道具に霊圧を込める。

一護「飛べ！！」

バサッ！！！！

夜一「待て！一護！！！！」

すると、翼が開いて一護を懺罪宮へと導いていった。

懺罪宮……………

オンツ！！！！！

隊長クラスの霊圧が突然出現し動揺する浮竹。

白哉は霊圧の持ち主に覚えがあるようである。

ルキア「…こ…この霊圧感覚は…まさか…」

ブンツ！！！！

何かが吊り橋の横を通り抜ける。

バサツ！！！！！！ザアツ……………

それは、3人を救いに来た黒崎一護であった。

ルキア「…い…」……………

ザッ……………

一護は着地すると、花太郎の元へ向かう。

一護「大丈夫か花太郎。悪い。先に行かせて逆に怖い目に遭わせちまったな。」

…岩鷲は？…そうか…

…ルキア、助けに来たぜ」

ルキアは一護を辛そうな顔で見つめる。

一護「なんだその顔！？助けに来てやってんだからもうちよつと嬉しそつにしるよ」

ルキア「…莫迦者…！来てはならぬと言った筈だ…あれほど…

…追ってきたら許さぬと…！ぼろぼろではないか…莫迦者…！」

一護「…まったくだ。だから…後でいくらでも怒鳴られてやるよ。」

あいつを…倒した後でな！」

ルキア「…い…一護…！」

一護「何だよ？ここまでできて今更退けとか言うんじゃねーだろうな。」

退かねえぞ。「冗談じゃねえ。俺はてめーを助ける為にここまで来たんだ。」

てめーがもし、ここで死刑になりたいって言おうがそんなこと

知ったこつちや無え。俺はてめーを引きずつても助け出さ
ぜ！

こつから先、てめーの意見は全部却下だ！わかったかボケ！
「！」

ルキア「な…なんだそれは！助けられる側の意志は全て無視すると
言うのか！？

そんな横暴な助け方があるか！！」

一護「うるせえ！助けてもらおう奴がゴチャゴチャ言うな！！てめー
はそれらしく

その辺でブルブル震えながら？お助けー！！？とか言ってる
やいいんだよ！！！」

一・ルキ『~~~~~』………『

ルキア「………相変わらずだな貴様は…相変わらず…私の
言うことを

少しもきかぬ……」

一護「あたりめーだろ！てめーの言うことは俺の心配ばっかじゃね
えかよ！

こんな時ぐらい自分の心配してる！！心配すんな！死にやし
ねえよ！

それでも俺、ちょっとは強くなつたつもりなんだぜ」

浮竹「…白哉、あれは誰だ」

白哉「無関係だ。少なくとも今、兄の頭を過つた男とはな。奴は何者でもない、

ただの旅禍だ。私が消す、それで終わりだ。この些細な争いのすべてが終わる」

一護「…随分と悠長に構えてるじゃねえか。あんだけルキアと喋つても斬りかかつて

こねえなんてよ」

白哉「…誰に向かって口を利いている。私に、貴様如きの隙を衝けと言つのか？」

ズ…

一護「！」

白哉「大層な口を利くな小僧」

ザッ…

一護はこの物凄い霊圧の中、斬月を構える。

白哉「…ほう、この霊圧の中で顔色一つ変えぬか…随分と腕を上げた様だな…」

どうやって再び死神の力を手にしたのか知らぬが、あのまま現世で安穩と

暮らしておれば良いものを…捨った命を捨てる為にこんな処まで来るとはな…

愚かな奴だ」

一護「…捨てに来たつもりなんて無えよ。あんたを倒して俺は帰る」

白哉「…大層な口を…利くなと言った筈だ小僧」

フッ……………

そして、白哉の姿が掻き消える。死神の高速歩法・瞬歩である。

キーン……………ガッ！……………

白哉はあの時と同じように背後から一突きにしようとするが、一護は斬月の刀身で

その一撃を受け止めていた。

一護「…大層な口か？見えてるぜ朽木白哉」

ガンッ！！！！

互いに刀を振りぬき、距離を取る。

白哉「…成程……………どうやら思っていた以上に腕を上げたに見える。
…仕方ない。」

ならば貴様がその力に自惚れる前に、見せておいてやろう

そう言つと白哉は斬魄刀を自らの目の前に掲げる。

白哉「千年？いても埋め様の無い、決定的な力の差というやつを」

ルキア「だめだ一護！！！！逃げ……………」

白哉「散れ」

ピンッ！！！！！！

だが、白哉が斬魄刀の名を告げるよりも早く、夜一が斬魄刀に包帯を巻いて止めていた。

浮竹「…あれは…」

白哉「貴様は…夜一！！！！」

花太郎「誰…ですか…？知らない人だ…」

ルキア「いや……………聞き覚えのある名だ…確か……………」

白哉「先代隠密機動総司令官及び、同第一分隊？刑軍？総括軍団長
……四楓院夜一。」

久しく見ぬ顔だ。行方を晦ませて百余年…死んだものとはかり思っていたが…」

一護「…夜一さん。助けに来てくれたんだろ？サンキューな。でも悪い、どいてくれ。」

俺はそいつを倒さなきゃならねえんだ」

夜一「…倒す？おぬしが？あ奴を？…愚か者」

ヒュッ！！！

一護「え…」

ドン！！！！！

夜一は瞬歩を使うと一護の腹の傷に手を突き入れた。

ルキア「な…ッ！？」

一護「…な…何すんだ…夜……い…」

ガクン！！

そこで一護の意識は暗転した。

なのは「！？そんな…」

シグナム「あの者は味方ではないのか！？」

一護「ああ…後で聞いたんだがよ…アレは内臓に直接麻酔の薬を叩き込むために

したんだと。だから別に裏切ったわけでも攻撃したわけでも無えよ」

フェイト「だからって…もうちょっとやり方が…」

一護「あの時はそれぐらいに緊迫した状況だったんだよ…仕方ねえな」

再び隠し部屋……………

ドン……………

一護は夜一の襟を掴んで壁に押し付けて問い詰めている。

一護「…どうしてだよ…どうして俺だけ連れ帰ったんだ！！！！」

あそこに残されて生き残れる可能性一番高いのは俺だ！！こ
れじゃ岩鷲も

花太郎もルキアもみんな殺されちまう！！」

夜一「自惚れるな。おぬしとて可能性は無い。彼処におった誰一人、
白哉を相手に

生き残れるものなぞおらぬ」

一護「てめエ……」

ギョーン！！ダァン！！！！

一護は夜一に床に叩きつけられる。

夜一「騒ぐな。折角閉じた傷口をまた開ける気か」

一護「げほっ……ごほ」

夜一「……確実に白哉から逃げ切る為には、一人抱えて逃げるのが限
界じゃった」

一護「……それなら……どうしてルキアじゃなくて俺を……」

夜一「確かに……あの時、彼処におった者の中で白哉を倒せる可能性
のある者なぞ

皆無じゃった。じゃが3日あれば、おぬしだけはその可能性
が見えてくる。

そう思ったから僕はおぬしを連れ帰った。

…彼処には、白哉の他に浮竹もおった。

奴はルキアの直属の上官で義理堅い男じゃ。賊とはいえルキアを助けに来た岩鷲と

あの四番隊の小僧を牢に入れこそすれ、殺すことなぞ考えられぬ。

じゃから一護案ずるな。おぬしは此処で強くなれ。

今のままでは白哉には勝てぬ。じゃが三日で勝てるよう鍛え上げてやる。

そして、もう一度おぬしの手で…今度は皆をまとめて助け出せ！…」

双極の丘の隠し部屋地下……………

夜一「…最初に訊いておくがおぬし…その斬月が常時開放型の斬魄刀だということには

気付いておるか？」

一護「そうなのか！？常時開放っていうと剣八みたいな？どうも他の連中と形が違い

ねーし…」
すぎるからおかしいとは思ってたんだ。名前呼んでも変形し

夜一「…やはり気付いとらんかったか…では…その斬月がもう一段階解放できるという

ことも知らぬな？」

一護「！？」

夜一「斬月に限らず全ての斬魄刀は実は二段階の解放が可能なんじや。

一つ目の解放を？始解？、二つ目の解放を？卍解？と言い、この二つの解放が

できることが隊長になる為の必須条件の一つとされておる」

一護「！必須…」

夜一「そうじゃ、つまり隊長格は唯一人の例外を除いて全員がこの？卍解？を

修得しておるといふ訳じゃ」

一護「…例外…？」

夜一「更木剣八じゃ！！長い尸魂界の歴史の中でも？卍解？ができぬどころか、

自分の斬魄刀の名も知らぬまま隊長位に就くことができたのは奴ぐらいじゃ。

それほど奴の戦闘能力とそれに対する執着は護廷一三隊にとつて大きかったの

じゃろう。それは戦ったおぬしが一番よく解っておる筈じゃ」

一護「……………」

夜一「？始解？状態と？卍解？状態での同じ斬魄刀の戦闘能力の差は、個人の資質と

い
鍛錬の度合にもよるが…一般的に5倍から10倍と考えてい

一護「10倍…！！！」

一護はその能力の上昇率の大きさに驚きを隠せない。

夜一「驚異的な上昇率じゃろう？じゃがそれ故に、？始解？から？卍解？に至るには

才ある者でも十年を優に超える鍛錬が必要となる」

一護「ちょ…ちょっと待ってくれよ！そんな時間は…」

夜一「無論解つておる。十年二十年とかかるのはまともに修行を重ねた場合の話……」

かなりの危険が付きまとうが、おぬしには全く別のやり方で

……

三日で？正解？を修得してもらおう

シグナム「10倍か！！そこまで上昇するとは……」

なのは「……私って……そんな状態の一護くんに喧嘩売っちゃったんだ……」

一護「あくまで目安だつて。俺がそこまで上昇してるかはあまり考えたことなかったし」

フェイト「でもあの力は凄かったよ。それに10年掛かるのを3日でやるなんて……」

ティアナ「そうですよ！数字だけ見ても明らかに異常な成長速度ですよ！？」

一護「まあ……そのせいで何回か死ぬかとも思ったこともあったし……」

ドゥーエ」といっか私たちは正解そのものをまだ見てないんですけど……」

ジェイル「ふふ……僕は先に見せてもらったよ（ニヤリ）」

ウエンディ「ドクターだけズルいっスー！」

ノーヴェ「そうだぞー！」

ブーブーブー……！

ナンバーズたちによるブーイングの嵐である。

ウーノ「これはO H A N A S H Iが必要のようですね……（ゴゴゴゴゴゴ……）」

とうとうウーノまで怒り出す始末である。

ジェイル「え……ちょ……まっ……イタタタ！？な……ナズエだあああー！？！？！？」

しばらくお待ちください………

チーーン………

ゼストの時に引き続き、顔面ぼこぼこの科学者が出来上がったよう

だ。

ロツサ「お〜い……………いいかげん続きを見ないのかい……………見ないのか……………グスン……………」

しばらく(30分ほど)ほったらかされたロツサであった。

? 卍解の為の三日間? 一日目……………午前11時33分……………

夜一「? 修行のためにと持ってきたのは、とりあえずは人の形をしているのっぺらぼうの

人形であった。

一護「……………な……………何だその妙な人形は……………」

夜一「? 転神体? 隠密機動の最重要特殊霊具の一つじゃ。斬魄刀の本体を強制的に

転写して具象化することができる」

一護「……………? ……よくわかんねえな。それが卍解の修行に要るのか?」

一護はあまりよく解ってないようである。

夜一「無論じゃ。? 始解?に必要なのは斬魄刀との? 対話? と? 同

調?。対して、

? 正解?に必要なのは斬魄刀の?具象化?と?屈服?。?具象化?とは対話の際

こちらが斬魄刀側の世界に行くのではなく、斬魄刀を我々の世界へと喚び出す

ことを指す。通常、ここにたどり着くまでに十年以上の鍛錬が必要じゃ。

じゃが、おぬしは相討ちとは言え更木剣八と対等に戦った。潜在的には既に

?具象化?かそれと同等レベルに達しておると儂は見る」

一護「……………あ……………」

一護は剣八に一度敗れた時に、斬月が現れたのを思い出した。

夜「……………憶えがあるようじゃの。斬月をこいつに刺せばその?具象化?の状態に

強制的に持っていける。そうすれば儂の力で具象化状態を保つてやる。ただし、

この方法で?具象化?できるのは1回きり!期限は3日!その間に何としても

具象化した斬月を討ち倒して?屈服?状態にしろ!それがで

きなければ………」

ガッ!!

夜一がそう言い終わる前に斬月が転神体に突き立てられる。

一護「…できなかった時のことは聞かねえ。

それしか方法が無えんなら…やるしか無えだろ！」

ドゥ!!!!

すると、転神体ごと斬月が弾け飛び、一護の背後に具象化した斬月の本体が現れた。

斬月「…どうやら随分回復したようだな……」一護「

一護「…オッサン…！」

夜一「…話は聞いておったな？」

斬月「無論だ」

夜一「戦闘方法は任せる。すぐに始められそうか？」

斬月「…ああ」

斬月はそう短く答えると、地面に手を当てる。

ズ……ツ……ドドドドドドドドドド……!

すると、地下の隠し部屋のいたるところに全て形状の違う斬月たちが大量に出現した。

一護「…な…何だこりゃ…!？」

斬月「この中に一本だけ…本物の斬月^{わたし}がある…」

私を倒すことができるのはその一本だけだ。私を？屈服？状態にさせたくば、

私に殺される前にそいつを見つけ出せ！そして……………」

私を斬り伏せて見せろ!!!

ガッ!!

一護「くッ!!」

一護は刀を折られて後退し、また新たな刀を掴みに行く。

一護「くそッ!!」

斬月「…18本目…」

斬月は折った刀の本数を確認すると、一護を追撃し始める。

「護」！」

「護はその中で一つの刀を見つけた。」

「護「あった！！」」

ガッ

「護「やっぱり？本物？の形は…これしか無えッ！！」」

パンツ！！！！

しかし、その刀は斬月の掌でいとも容易く砕けてしまった。

斬月「緩い」

ドッ！！

斬月は刀を横なぎに振って一護を斬りつける。

斬月「…言った筈だ一護。ここにある刃達は全てお前の精神の一片。」

これはその中から戦いの為だけに容らえた一片を見つけ出す試練。

今のは、？斬月^{わたし}？に頼ろうとするお前の精神の？脆さ？の一片。

それすら見極められぬうちは、正解などは口にするな！さあ、次だ一護！

伏している暇など…無い筈だ！！」

一護「…あたりまえだ！」

ドンッ！！

折れた斬月が地面に突き刺さる。

少し遅れて一護が大勢を崩さないように踏ん張りながら後退して行く。

一護はもう刀を折られても態勢を崩すことは無くなっていた。

斬月「…51本目…」

ブンッ…ガッ

一護は残った柄だけの斬月を投げ捨てると次の斬月を手に取り、

再び斬月に向かっていく。

一護「次だ！！」

ブン！！！！

斬月が刀を横なぎに振ってくる。

ガッ

一護はそれを受け止める瞬間に刀身をずらし、斬撃を受け流す。

さらに、そのまま速度を殺すことなく反撃に転じる。しかし、

ドオン！！！！！！

一護の刀は斬月の後ろにあった岩を砕いたが、斬月自体は空中に回避していた。

さらに、

ヒュン！！！！ガン！！！！

斬月は自分の持っていた刀を一護の刀に投げつけて折ってしまった。

一護は折れた刀の行方を無意識に追ってしまっ。

バチツ！！！！ドツ！！！！ズドオン！！！！

一護は地面に降りてきた斬月に殴り飛ばされて岩に激突する。

斬月「…敵から目を離すな。…52本目だ」

一護「くそ…もうちよいだったのによ…」

ギアン！ガガツ…ギイン！！ギャリツ…ガツ…ガン！！

一護と斬月はかなりの時間が経った今でも刀で打ち合いを続けていた。

ギアン！！！！

一護はすでに一本の刀で5分以上も戦い続けており、通常の接触ではほとんど

刀を折られることは無くなっていた。

一護「まだだッ！！！！」

一護はそう言って再び斬月に肉薄しようとするが……

がしゃん…

斬月が突然転神体に戻り、倒れてしまった。

一護「…あ？」

夜一「刀を置け、一護。…一日目終了じゃ」

ドパアンー!!

一護「ふー————~~~~~」

一護は今、隠し部屋の隅にある温泉に入っている。

一護「……………あ」

女性陣『……………// // // // // // // // // // //』

ロツサ「あ……………ゴメン……………忘れてた」

一護「……………\ (^ ^) /……………」

ゼスト「……………なんというか……………まあ……………気にするな」

ヴァイス「……………同じ男として……………同情を禁じ得ないな」

ザフィーラ「……………強く生きる……………」

ジェイル「大丈夫……………きつといいことあるって……………」

その時の男性陣は語った……………『すごく……………優しい気持ちになれた……………』

と……

一護「チキシヨオオオオ!??!?!?!?!」

みんなに優しくされてかえっていたたまれなくなった一護であった。

一護「…修行…一日目終了ってことはいつの間にかもう夜になってたってことか…」

確かに体、あっちこっちギシギシいつてんもんなー。

ここ時間わかんねえからその辺の感覚狂っちゃまうよ…」

バシヤ

そう言つて一護は顔にお湯をかける。すると、

一護「!」

シユウウウウ…

一護の頬にあった切り傷があつという間に治ってしまったのだ。

一護「な…何だこの温泉!? スゲー勢いでキズが治るぞ!？」

ああッ!?!?いつの間にか痛みが引いたと思ったら、体のキズ

もほとんど

消えてるじゃねーか！！すげえ！すげえぞ！！」

バシャバシャバシャ……

一護「（口ん中切ってんのも治るかな…）」

ずずー……っ

夜一「一護」

一護「んふフツヨルイチさんフん？」

一護は温泉のお湯を口の中に入れていたのでぐちゃぐちゃと聞き取りづらい。

夜一「どうじゃ湯加減は？」

一護「んっオッケーフー、フンいいカンジだぜフン」

夜一「そうか、それは何よりじゃ。それでは儂も入るとしよう」

そう言うと夜一は今着ているものを脱ぎ始めた。

ポフー……！！！！……？？？？

一護はあまりのことに口の中のお湯をすべて吹き出してしまった。

一護「ばぶっ！？？げほげほがほ！！」

あッ…アホか！何言ってるんだあんた…ってコラア！！！！

だから何で下から脱ぐんだあんたは！？」

一護の焦った声が隠し部屋に響き渡る。だが、夜一は意にも介さず…

夜一「フフ…相変わらずおぬしは期待通りの反応をするのう…浅い男じゃ」

一護「バカにしてんのかてめえ！！！！」

一護「……………チラッ（汗）」

コッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコ

一護が恐る恐る振り返ると、そこには般若が数め…ぐはっ！？

乙女「s + 『一護^{くん}……………ちよつと O H A N A S H I I よつ
か（するか）？

ちなみに返事は聞いてない？』

一護「ちよ…これは俺が悪いのか！？いや…待て…待て…待て…待て…
くだせ…」

夜一「喜助の奴は昔からコッソリ悪さをすることだけは病的に上手かったからのう…」

十三隊、
…旧い話じゃ。幼い頃は二人毎日のようにここで遊び…奴が

儂が隠密機動に入ってからにはここでお互いを高め合った。そして…」

一護「ちよっ…ちよっと待ってくれ夜一さん！十三隊…」

ってあいつやっぱり死神だったのか!？」

夜一「？喜助のことか？」

一護「そうだよ！おかしいとは思ってたんだ！尸魂界にはやたら詳しいし、」

斬魄刀は持ってるし…尸魂界こっちの連中の中には名前聞いただけで

顔色が変わった奴もいた！教えてくれ夜一さん…あいつ…
何者なんだ？」

夜一「…あいつめ…まだ話したらんかったのか…全くしょうのない…」

は…
…いいじゃろう。ここまで来て教えぬ訳にもいくまい。…奴

先代護廷十三隊十二番隊長そして、技術開発局創設者に
して初代局長を

務めた男じゃ」

なのは「お〜い…一護くん…戻ってきて〜」

一護「……………ハッ!?俺は一体?????」

シグナム「ようやく元に戻ったか…」

はやて「で……………質問なんやけど……………」

なんでそないな偉かった人があんなところで駄菓子屋なんて
しとるん?」

一護「ああ…浦原さんのことな…あの人は尸魂界を永久追放された
からな……………」

あと、駄菓子屋は趣味なんじゃね?」

はやて「趣味で……………それに永久追放って何したん?」

一護「そこはお約束の?後で解る?だ」

はやて「む……………」

？卍解の為の三日間？二日目……………

ガンー！……………ギリ……………ギギギギギギ

一護と斬月の修行は二日目に入っていた。

すると、突然天井にある入り口が…

ドンー！！！！

何かの攻撃によって大きくなってしまった。

？？「…こんな処に潜って何やってんのかと思ったら…そいつは…
てめえの斬魄刀の

本体か？」

ポツ……………ズダンー！！！！

降りてきたその声の主は……………

恋次「隠れてコソコソ卍解の修行か…面白そうなことやってんじや
ねえか…

俺もませろよ」「

懺罪宮の前で戦った、六番隊副隊長・阿散井恋次であった。

一護「……………！！恋次……………！！！！」

恋次「？何でてめえがこんな処に？？そう言いたげなツラしてるな。

何、大した理由じゃねえ。ちょっと時間がなくなっちまっただけだ。

俺も少し集中して鍛錬する場所が欲しかっただけだ」

一護「時間が……………なくなった？…？…どういうイミだよ？」

恋次「……………そうだな。てめえには教えといてやる。

ルキアの処刑時刻が変更になった」

一護「……………何だと？」

恋次「新しい処刑時刻は……………明日の正午だ」

三人『……………！！！！』

恋次「癪な話だが、今の俺の力じゃルキアを助け出すには少しばかり足りねえ。

だからここへ来た。安心しろよ。何もてめえの修行をジャマしよって

ワケじゃねえ。俺も具象化までは修得済みだ。卍解まではあと僅か。

こっちはこっちで好きにやらせて貰うぜ」

そう言っつて恋次は自らの斬魄刀・蛇尾丸を具象化した。

夜一「…あ…明日…じゃと…？そんな…それではとても卍解なぞ…」

そう夜一が狼狽していると、

パンツ！！！！！！

夜一「！！！」

一護が自分で刀を折って言う。

一護「…そんなんでいいのかよ夜一さん…この修行…あんたから誘ったんじゃ

ねえのかよ…だったらあんたから諦めてんじゃねえよ…」

夜一「じゃが一護…！もし明日までに卍解が完成せねば…」

一護「言っつたる。できなかつた時のことは聞かねえ。期限が明日になつたつてんなら…」

今日中に片付けりゃいいだけの話だ！！！！」

そう言った一護の目には、確固たる決意が浮かんでいた。

数時間後の隠し部屋……

ドッ……バタタタタッ……

一護は膝をつき、血が地面に滴り落ちる。

一護「はっ……はっ……はっ……」

一護は今、疲労とキズで肩で息をしている状態である。それでも尚立とうとする一護に

斬月が尋ねる。

斬月「……まだ立ち上がるのか……一護……！」

斬月のその問いに一護は笑って答える。

一護「……あたりめーだろ……誓ったんだよ……絶対に助けるってな……」

斬月「誓い……だと……誰にだ」

一護「誰でもねえよ……ただ俺の……魂にだ……！」

ゼスト「ムウ……………何という気迫だ……………!!」

シグナム「（それでこそ…私の惚れ…じゃなくて見込んだ男…………）」

シヤマル「（シグナムが何を考えているかってすぐわかるわね…………）」

？「…解の為の三日間？三日目……………午前？時……………」

恋次「じゃあ、俺は行くぜ」

先に修行を終えた恋次はルキアを救いに行こうとしている。

一護「…ああ」

一護はそれだけ答えると修行を再開する。

恋次「夜一さんよ。あいつは…本当に大丈夫なのか？」

夜一「…案ずるな」

恋次「…誰も案じちゃいねーよ。勘違いすんなよ。」

死なねえかどうかを訊いてんじゃねえぞ。修行もあそこまで進みはしたが、

本当に卍解まで辿り着けんのかって訊いてんだよ！」

夜一「…さあ…」

恋次「うおーーーい」

恋次の問いかけに対する夜一の返答はにべもない。

斬月「……………行くぞ一護…もう一度だ！」

そして、斬月と一護の修行の風景はかなり異様な光景が広がっている。

一護の周囲を十人以上の斬月たちが囲んでいるのである。

斬月「言うておくが、刻限が迫っているからといって手を抜いてやるつもりは

無いぞ！」

一護「あたりめーだ！そんなもん！こっちも抜かせるつもりは無えよー！…」

夜一「…恋次、おぬし…自分が初めて立って歩いた時のことを憶えておるか？」

恋次「あ？憶えてるワケねーだろそんなもん！」

夜一「憶えておらぬということは意識しておらぬということじゃ。ならば

なぜ立ち上がった？

人は皆生まれながらに立ち上がることを知っておる。鳥は皆飛ぶことを

知っておる。魚は皆泳ぐことを知っておる。それは本能というやつじゃ。

本能で知っておるからこそ、皆、迷いなくその力を手に入れようとする。

奴の、一護の迷いの無さはその本能を思わせるのじゃ。

奴は恐らく本能的に判っておるのじゃろう…自分がその力を持っておることを…

じゃから僕は信じる…奴が………？正解に至る者？じゃということを………！」

そして、時はこの日の正午……………極刑の執行時間……………

双極の矛の真の姿にして極刑の執行者である燬？王が今にもルキアを貫こうとする。

ルキア「さよなら」

ルキアのその眩きとともに極刑は終わる筈だった……………しかし、

バンツ！！！！！！！

燬？王の炎が晴れてくると……………その中には……………

> i 3 2 0 2 2 | 3 5 0 6 <

一護「よう」

ルキア「……………一護……………！」

斬魄刀百万本に値する威力の燬？王の一撃を斬月で受け止めている一護の姿があった。

ルキア「…………………………あ……………」

ルキアは一度開きかけた口を閉じ、出かけた言葉を飲み込み一護に訴える。

ルキア「莫迦者！！何故また来たのだ！！！！」

一護「あ…あア!?!」

一護は突然怒鳴られて困惑する。

ルキア「貴様ももう解っているだろう! 貴様では兄様には勝てぬ! !

今度こそ殺されるぞ! ! 私は今もう覚悟を決めたのだ! ! 助けなど要らぬ! !

帰れ! ! ! !

ドンッ

一護「うおっ!?!」

ルキア「一護! ! !」

バサアッ……

燬? 王は一護から距離をとる。

一護「第二撃の為に距離をとったのか……いいぜ来いよ」

ルキア「よ…止せ一護! もうやめろ! ! 二度も双極を止めることなどできぬ! ! !

次は貴様まで粉々になってしまっ! ! ! 一護! ! !

ルキアは必死に一護を止めようとする。そこへ……

ガシャン！！

燬？王に何かが巻き付いた。

一護「！！！」

バキン！！！！

そして、2人の隊長格がその道具に刀を差し込み、燬？王を破壊する。

ザア！！……ダン！！！！

それを確認した一護は、双極の磔架に飛び乗る。

ルキア「な……何をやる気だ一護！？」

一護「決まってるだろ。壊すんだよこの……処刑台を！」

一護は当然のごとくそう言い放ち、斬月を振り回す。

ルキア「な……よ……止せ！！それは無茶だ！！いいか！聞くのだ一護！！！！」

この双極の磔架は……」

一護「いいから、黙って見てろ」

ルキア「……………一……………護……………」

そして、一護は双極の磔架に斬月を突き立てた。

キイイイイイイ……………ゴツ!!!!!!!!!!

その衝撃波は、双極だけでなくその下の地面まで貫いた。

一護「…助けるとか帰れとか…ゴチャゴチャうるせーんだよ teme
ーは。」

言つたら、テメーの意見は全部却下だつてよ。二度目だな…
今度こそだ、

> i 3 2 0 2 0 | 3 5 0 6 <

助けに来たぜルキア」

ルキア「…礼など…言わぬぞ……………莫迦者……………」

一護「…ああ」

ルキア「い……………一護…訊くが…これからどうする気だ…?これ程の目
の前で上手く

姿を晦ませる方法など……………」

一護「逃げる」

ルキア「！む…無理だ！相手は隊長だぞ！！逃げ切れる訳が…」

一護「じゃあ全員倒して逃げるさ。オマエだけじゃねえよ。」

井上も石田もチャドだって来てるんだ。

岩鷲も花太郎も手伝ってくれた連中は、みんな助け出して連れて行く」

護送人員「s「ぐあッ！？」」

ルキア「な…何だ…！？」

護送人員「s「うわあ！？うつ！おぐッ！？」」

ルキア「…お前は…！恋次…！！」

護送人員たちをなぎ倒して現れたのは、阿散井恋次であった。

恋次「ルキア…！！」

一護「！」

ルキア「良かった！生きておったのだな恋次！！良かった…」

一護「恋次！」

ぐいっ

ルキア「ん？」

一護はルキアを持ち上げる。

恋次「あ!？」

ルキア「お…おい一護っ!？何をする気だ貴様!？」

そんなルキアの声もお構いなしに一護は思い切り振りかぶる。

恋次「待てよコラ……てめえまさか……」

ピタア……………

一護「受け取れっ!……!」

ブンッ!……!……!

そして、一護はルキアを恋次に向けて投擲した。

ルキア「きゃあああああああああああああ」

恋次「馬鹿野郎!……!……!……!……!……!」

がっしい……ゴロゴロゴロゴロ……

ルキア「…ば…莫迦者!…一護貴様あ!……!」

恋次「落としたらどうすんだこの野郎!……!」

一護「連れてけ!!!」

恋次「な…」

一護「ボーツとしてんな!!! さっさと連れてけよ!!! てめーの仕事だ!

死んでも放すなよ!!!」

グッ…

一護のその言葉を聞いた恋次は、すぐさま逃亡を開始する。

ルキア「れ…恋次!!!」

それを同じ副隊長の三人が追っていく。しかし、

> i 3 2 0 2 1 — 3 5 0 6 <

ザン!!!!!!!

突如、三人の目の前に一護が瞬歩を使って出現する。

三人『!!!!!!』

ブウン……ガッ!!

一護は斬月を自分の目の前に突き立てる。

大前田「邪魔だア!!!!」

勇音「奔れ!!!!?凍雲?!!!!」

雀部「穿て!!!!?敵霊丸?!!!!」

大前田「打つ潰せ!!!!?五形頭?!!!!」

三人は斬魄刀を開放して応戦しようとするが……

ドン!!!!

一護は大前田を五形頭ごと打ち砕く。

勇音・雀部『!!!!』

ガッ……

雀部「!」

ゴトン!!!!

次に一護は雀部の右腕を掴み、思い切り顎を殴りあげて気絶させる。

ヒュン……ドッ!

最後に勇音も突き飛ばし、副隊長を斬魄刀を使わずに撃退した。

そこへ、何かが高速で近づいてくる……一護はそれを、

ガンツ！！！！

斬月で受け止めた。

それは、斬魄刀を構えた朽木白哉であった。

一護「…見えてるって言ったろ、朽木白哉！」

白哉「…何故だ。何故貴様は…何度もルキアを助けようとする…！」

一護「…こつちが訊きてえよ。あんたはルキアの兄貴だろ。なんであんたは

ルキアを助けねえんだ！」

白哉「…下らぬ問いだ。その答えを貴様如きが知ったところで到底理解などできまい。

…どうやら問答は無益な様だ。行くぞ

ドウツ！！！！

その一言で二人は霊圧を開放する。

ガガガガガガガガ…ガン！！！！

白哉「…最早私のとる道は一つ、黒崎一護貴様を斬る。そしてルキアをもう一度、

次は私の手で処刑する」

「護」…させねえさ。その為に来た」

「護は天踏絢を脱いで、戦闘態勢に入る。

ドッ…!

そして、2人は同時に駆けだした。

ガン！ギン！ゴツ！！ガガツ…ボツ！！ゴツ…ガン！！…!

この2人が切り結ぶたびに地面はめくれ、あたりは凸凹の状態である。

ギアン！！！！…ザザツ！！

白哉「…成程…瞬歩までは完全に修得したというわけか……だが…」

「護」やっぱり悠長だなあんた。呑気に俺の力分析してるみてえだ
けど、

いいのかよそれで？俺を斬るんじゃないかったのか？

俺はまだケガ一つしちゃいねえぞ！それともあんたの力って
のはこの程度だって

言いてえのか！？出せよ卍解」

その一言を聞いた瞬間、若干であるが白哉の顔が歪む。

一護「あんた言ったな、俺を斬ってそして自分の手でルキアを処刑するって」

白哉「…それが何だ」

一護「気に入らねえっ！俺はてめえを倒すぜ。俺の力を全部懸けて。

てめーの力の全てを一つ残らず叩き潰してやる。

てめーの手でてめーの妹を処刑するだど？ふざけるんじゃないやねえ。

てめーの理屈もてめーの都合もどっちも知ったこっちゃねえ。

ただ、ルキアの前で二度とそんな口きかせねえ。

出せよ卍解。叩き潰してやる。

そんで、ルキアの前で泣いて謝らせてやるよ」

白哉「…安い挑発だ、小僧。だが貴様が何と喚こうが私の心は変わりませぬ。

ルキアと、そして貴様の運命もな。

卍解だど？図に乗るな小僧。

貴様如きが私の正解を受けて死ぬなど千年早い」

白哉は斬魄刀解放の構えをとる。

白哉「散れ……？千本桜？」

ザアツ……

白哉のその一声で斬魄刀の刀身が桜の花びらのように散り、一護へ向かってくる。

オオオオオオオオオオオオ……

ブオン！！！！……ドン！！！！！！

しかし、一護が斬月を振り下ろすと巨大な光がその無数の刃を飲み込んだ。

ガアン！！！！

その一撃は白哉よりも後方へと進み、丘の端まで到達した。

パサツ……パタタ……

白哉の左手に掠ったのか、手袋が破れ落ちてその上に血が滴っている。

白哉「…今の光は何だ。貴様の斬魄刀の能力か…？黒崎一護…！」

一護「ああ…斬撃の瞬間に俺の霊圧を喰って、

刃先から超高密度の霊圧を放出することで斬撃そのものを巨
大化して飛ばす。

そいつが斬月の能力だ。

狙って撃てたことは一度も無かった。今日まで俺は、

自分がどうやってこいつを撃ってるのかさえ解ってなかった
んだ」

浦原商店での最初の一撃も恋次の時の一撃も一護は無意識のうちに
の斬撃を

撃ち出していた。

一護「…浦原さんが言ってたんだ。

？アタシが教えられるのは気構えまでっス？ってな。その意
味が、

斬月と修行して初めて解った。

俺に斬月のことを伝えられるのは、斬月だけだったんだ」

回想

斬月「…よじやく己の意志で撃てるよじになったな…ならば教えてやろつ一護。」

名を知ると知らぬのでは…その発する力は自ずと大きく違ってくる。」

よく覚えておけ一護、その斬撃の名は……………」

~~~~~

一護「？月牙天衝？」

それが一護と斬月の唯一にして絶対の技の名であった。

一護「…もう一度言っぜ朽木白哉。卍解して俺と戦え！！！」

俺は絶対にてめえを倒す！」

白哉「…天を衝くか…大逸れた名だ……………よかろつ。」

それほど強く望むのならば、私の卍解その眼に強く刻むが良  
い」

白哉は逆手に持った千本桜を高く掲げ、それを地面に落とす。

一護「（…剣を…放した…？）」

白哉「案ずるな、後悔などさせぬ。その前に貴様は私の前から塵と  
なつて消え失せる」

すると、剣は地面に刺さることなく沈んでいき、

白哉の背後に桜並木のように剣の葬列が出現する。

白哉「卍解？千本桜景敵？」

その葬列が一気に散り、数多の刃達が一護を襲う。

ダン！！！！

一護はそれを飛び上がって回避すると、そのまま月牙天衝で刃を吹  
き飛ばして

白哉を攻撃する。が……

白哉「…甘い」

先程吹き飛ばした刃達は、白哉の前に再び集まり、今度は完全に月  
牙天衝を止めた。

一護「！！」

さらにそれだけには留まらず、そのまま一護の周囲を囲んで一気に  
攻撃を仕掛ける。

一護はそれを受け止めようとするが、前を受け止めているうちに背

後を完全にとられ、

ドンー!!!!!!

遂には全身に千本桜の一撃を受けてしまった。

白哉「…千本桜の真髄は、数億に及ぶ刃による死角皆無の完全なる全方位攻撃だ。

貴様の斬魄刀の能力は確かに高い。だが……

鈍重窮まる大技だけでは、千本桜を躲すことなど永劫叶わぬ」

一護「はっ…くそっ…はっ……もうちょいいけると思ったのによ…

…やっぱり…ムリだったか……そりゃそうだよな…

こっちだけ始解のまま…卍解に勝とうなんてのがナメた話だ…」

一護は全身に刃を受けながらもなんとか立ち上がる。

白哉「…言葉に気をつける小僧。

まるで貴様が卍解に至っているとやっているように聞こえる」

一護「…ああ…そう言ってんだよ朽木白哉!」

白哉「…何だと…?」

一護「…訊き返すなよ……聞こえてんだろ。それとも信じられねえだけか…？」

二度も三度も言わねえぞ…俺の言葉は信じられなくても…

てめえの眼なら信じられるだろ！朽木白哉！！！！

しっかり見てけよ。こいつが俺の……………卍解だ。

おおおおおおおおおおおおおおおお

ガッ……………ドン！！！！！！！！

一護が地面を踏みしめると同時に青白い霊圧が一護から噴出する。

そして、霊圧の奔流が収まると一護は斬月を前に突き出し、右腕に左手を添える。

すると、斬月の巻き布が右腕に巻きつき、霊圧が高まり血が吹き飛ばぶ。

これで準備は完了した。

一護「卍解」

キイイイイイイイ……………ドゥ！！！！！！！！

一護が静かにそう告げると、斬月の切先から物凄い量の霊圧が放出される。



瞬歩が得意である自分が全く反応できないレベルの速度で接近してきた

ただの旅禍である筈の少年に。

「護」……………どうもその？我々の誇り？ってやつが、ルキアを殺すことに繋がってる

みてえだな……………だったらあなたの言う通り、俺はそいつを踏み躪るぜ。

その為<sup>ちから</sup>に手に入れた<sup>ちから</sup>正解だ！」

一護は一步下がって白哉に向けてそう宣言した。

ドゥーエ「ああ…これが一護さんの正解…カッコいい…／／／／／／」

トーレ「……………この場合はどうしたらよいのだ？」

ウーノ「……………しばらく放って置きなさい……………」

なのは「私たちは二度目だね…でも…やっぱり疾いね…」

フェイト「次元世界最速なんじゃない…？」

一護「そうか…？さすがにそこまではねえだろ？」

シグナム「いや…あながち間違いでも無いかもしれんな…」

一護「なんか…俺に対するお前たちの評価が異様に高い気がするんだが…」

そこは乙女ヴィジョンによる補正です。

白哉「…貴様、何故私の喉元から鋒を退いた…余裕のつもりか。

…驕りは勝利の足許をつき崩すぞ…今一度言おう。

貴様のそれは卍解ではない。

そんな矮小な卍解などありはしない。

旅禍風情が卍解に至ることなどありはしない。

…悔いるがいい、今の一撃で私の喉を裂かなかったことを。

…奇跡は一度だ。二度は無いぞ小僧！」

ゴア…

再び一護に千本桜の刃達が襲いかかる。しかし、一護は簡単に避け

て白哉へと

接近しようとする。

二方向からの同時攻撃も、今の一護からしたら遅いようで、

ギリギリまで引き付けて最小限の動きだけで躲されてしまう。

ザァンッ！！

今度は一瞬で白哉の目の前に現れ、刀で斬りつけようとする。

ガンッ！！！

これは白哉の千本桜が作り出した壁に阻まれるも、刀自体は白哉に当たる寸前で

受け止められていた。

それを確認すると一護は白哉の背後へと回る。白哉は気配を察知し、

千本桜を向けるが、これもまた躲されてしまう。

一護は躲した体勢のまま、次の動きへと移る。

白哉は千本桜が全く追いつけない一護の高速機動に驚きを隠せない。

一護はそれに構わずさらに速度を上げ、

ッッッッッッッッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！



白哉の周りを高速移動する。その速度は残像が大量に発生するほどのモノであった。

白哉「！」

一護「どうした、ついてこれねえか？まだもうちょい速くできるんだけどな」

白哉「…余り図に乗るな小僧！」

白哉はそう言うのと今まで使っていなかった手を使って千本桜を操り始める。

一護「（スピードが上がった！！）」

ザツ…ドシャア…！！

白哉が手で操り始めた途端に速度が倍になり、一護は避けながら徐々に

空中に追い込まれていく。

そして、ついに…

白哉「！」

千本桜が一護の周囲を覆い、全方位攻撃を加えた。が……

ガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！！

一護は目にも留まらぬ速さで刀を振りぬき、千本桜の刃を全て叩き落としたのである。

白哉はその光景を信じられないものを見るような目で見ていた。

一護「奇跡は一度だったよな」

すると突然背後から一護の声が聞こえ

一護「じゃあ二度目は何だ？」

白哉に向けて斬月が突き出された。

ドッ！！……………タタタタッ……………

白哉は斬月を右手でそのまま受け止めていた。

白哉「…そうか…」

そして、何かに納得したように呟く。

白哉「卍解としての戦力の全てをその小さな形に凝縮することで、

卍解最大戦力での超速戦闘を可能にした…それが貴様の卍解の能力という訳か…

良かろう…ならばその力ごと…全て押し潰してくれろ！！！！」

ドッ……………

白哉は天鎖斬月を握る力を強める。

ジャア！！

一護は刀を引いて白哉の手から斬月を開放させる。

白哉「…見るがいい、黒崎一護。」

これが、防御を捨て敵を殲すことだけに全てを捧げた千本桜の………真の姿だ」

すると、今までバラバラになっていた千本桜の刃達が集まりだし、それを作り上げる。

白哉「殲景・千本桜景敵」

それは一護と白哉の周囲を囲む大量の刃の葬列であった。

白哉「…案ずるな。この千本の刃の葬列が一度に貴様を襲うことは無い。」

この？殲景？は私が必ず自らの手で斬ると誓った者にのみ見せる姿」

ズ…ガッ！！！！

白哉が手をかざすと、刃の中の一本が降りてきて白哉の手に収まる。

白哉「見るのは貴様で二人目だ」

「護」…そりゃどじも  
「護」

ドゥドゥドゥドゥドゥドゥドゥドゥドゥドゥ

白哉「行くぞ黒崎一護」

ドゥ…!!…!!

ガッ…!!…!!

二人は同時に駆け出し、ぶつかり合った。

ドン…!!…!!…!!…!!

ガッ…!!ガギッ…ガアン…!!…!!…!!…!!  
…!!…!!…!!…!!

空中に浮かんでいる千本桜の刃達にどちらのモノともわからない血が付着する。

ガン…!!…!!…!!

一護と白哉は瞬歩での超高速戦闘を展開している。

並みの死神や実力者が見たら音だけしか聞こえないであろう速度で

この2人は切り結んでいた。

ガガッ…バンッ!!!ザザザザザザザ…

此処で異変が起き始める。今の踏込は二人完全に同時であったのに  
もかかわらず、

一護の方が肩に深い傷を負ったのだ。

一護「(迅ええ…!? 殲景? つてのになつてからどんどんスピードが  
昇がつてやがる…! けどまだついていけねえ速さじゃねえ。

俺ももう少し速くできる……………)

そう思つて視線を上げると、一護の目の寸前に白哉の刀が迫つてい  
た。

一護「!」

ドッ…!!

一護は咄嗟に避けるが頬を斬られる。

さらに、白哉が通り過ぎた方を向こうとすると、背後から白哉が再  
び斬りつけてきた。

ガンッ…!!

一護は何とか白哉の剣を押さえつける。

白哉「…どうした、随分と動きが鈍くなってきたぞ…黒崎一護」

一護「そうか？俺にはまだあんたの剣は止まって見えるぐれーだけどな」

白哉はその問答にはそれ以上答えず、目線だけを剣の葬列に向ける。

キュンッ……ガッ！！

すると、剣群から一本の刀が白哉の左手へ向けて降りてくる。

ドッ……！！

そして、白哉はそれを一護の右足に突き立てた。

一護「ぐ……」

白哉「破道の四？白雷？」

ドン……！！！！

白哉は追い打ちをかけるように鬼道で一護の右胸を貫いた。

初級破道である筈の白雷も、白哉ほどの実力者が撃つとかなり凶悪な威力になる。

一護「……よく見とけ…ティアナ…ここから先に映るのが…」

俺が手に入れた力の代償だ…いや、ティアナだけじゃねえな…

お前ら全員にも言えることだ……」

ティアナ「…一護…さん…？」

一護「はっ…ごほっ…げほっ…」

白哉「……限界だな、黒崎一護」

一護「…なん…だと…？」

グ…ッ

そう言っで一護は体を起こそうとするが……

一護「（体が…動かねえ…！）」

そう、体が重りがついてるかのように重く動かすことが出来ないのである。

白哉「…貴様はどうやら？殲景？になって私の速力が昇がったと感

じているようだが

それは違う。？殲景？ばらばらだった刃を刀の姿に押し固めて爆発的に

殺傷能力を高める為のもの。速力は変わらぬ」

一護「…落ちてたのは…俺のスピードの方だったって………言いてえのか……」

ヴィータ「これは…あのときのなのと同じじゃねえか!!」

なのは「一護くん……」

一護「あのときってのは見てないからよくわからんが…俺の体はとっくの昔に

限界が訪れてたんだ。瀟霊廷に入ってから戦闘の連続…それは俺の体に

確実に疲労を溜めていった。そして、卍解での急激な霊圧の上昇が引き金に

なって俺の体のバランスは簡単に崩壊し、まとも動くことも出来なくなった」



ティアナ「そんな…戦闘の真っ最中なのに…」

一護「ティアナ…これは俺だけの戦闘だったから被害を受けたのは俺自身だった…」

だけどこの六課ではどうだ？

戦闘指揮を執るお前が戦闘中に動けなくなるとエリオやスバルはお前を庇って

真っ先に被害を受けることになるんだ。今のお前なら…わかるよな？」

ティアナ「はい……」

白哉「…貴様はよく戦った。

幾人もの隊長格を退け、千本桜の斬撃をその身に受けながらよくぞここまで

耐え抜いたものだ。だが感じるだろう。

貴様が幾ら耐えようとも、最早貴様の肉と骨が死んでいるのだ。

此処が貴様の限界、終わりだ黒崎一護」

白哉は刀を振り上げ、今にも一護にとどめを刺そうとしている。

一護「（動け、動けよ！動け動け動け！！動け！！何の為にここまで来たんだ！！」

勝つ為だ！！生き残るだけじゃ意味が無え！戦っただけじゃ意味が無え！！

勝たなきゃ何も変えられねえんだ！！勝つんだ。俺は…勝ちてえ」

??「ちっ」

ガッ！！

白哉「！」

突然、動けないはずの一護の手が振り下ろされた白哉の剣を受け止めた。

一護？「…バカが…言っただろうが…てめえに死なれちゃこっちも困るってよ…」

白哉「…莫迦な…何者だ貴様…」



ティアナ「ヒっ…!？」

シグナム「これが…」

なのは「力の代償…?!」

一護「そう…死神化した時に同時に虚化した為に…コイツは俺の力の中で生まれた。」

そして、俺の力が増大するに伴ってコイツの力も増大していったんだ……」

フェイト「じゃあ…一護が強くなればなるほど…」

はやて「こいつも強くなって……」

一護「ああ……そのまま…俺を呑み込もうとするんだ」

一護？は普段の一護ならば絶対に上げないような耳障りな高笑いを上げる。

一護？「やっぱりめえは下手糞だ!!一護!!!」

てめえの正解の霊圧にやられて体中の骨が軋んでんじゃねえか!!

情け無え奴だ、見せてやるぜ俺が!!」

ガシヤア!!!

一護？は掴んでいた千本桜の刃を素手で握りつぶす。

一護？「卍解の使い方ってやつをよ!!!」

白哉は再び剣群から刀を呼び寄せる。

ギゴオ!!!

一護？が斬月を構えると、なぜかそこからは青白い霊圧ではなく

赤黒い禍々しい霊圧が放出される。

オンツ!!!

そして、一護？はそのまま斬月を振るって黒い月牙を放った。

白哉が警戒して構えをとるよりも早く、一護？は白哉の背後へと回り込み、そして…

ズオア!!!

再び黒い月牙を放った。

二つの月牙に挟まれた白哉は上空へと逃れようとする……が、



「このまま俺にやらせりゃ……勝てるってのが判んねえのか！  
！」

メキメキメキッ……

一護「くそツッ！！くそッ！！バカが……ツッ！！あああ……」

一護「あああああああああああああああああああああああ」

バキン！！！！バラッ……バラバラバラッ……

一護「はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……ふっっ！」

そして、自我を取り戻した一護は自力で仮面を引きはがして復活した。

一護「……悪りーな、邪魔が入っちゃってよ……さア、仕切り直しといっつぜー！」

白哉「………良かるう。……今の姿が何であったかは問うまい。

……お互い、最早そう何度も剣を振るう力は残ってはいまい。

次の一撃で幕だ」

一護「ああ。

……最後に……もう一回だけ訊いていいか？

あんたは…どうしてルキアを助けねえんだ」

白哉「…兄が私を斃せたなら…その問いにも答えよう」

一護「…ちえっ」

白哉「千本桜景蔵……………終景・白帝剣」

白哉がその名を口にすると、千本桜が集まって巨大な羽のようなものを形作る。

一護「…凄えな。悪いけど俺はそんなスゲー技は無えぞ。」

斬月が教えてくれたのは月牙天衝一つだけ……………俺にできるのはもう、

一つの斬撃に…全ての霊圧を込めることだけだ……………いくぜ…

朽木白哉「……………」

ドン……………!!

一護の斬月からも巨大な黒い月牙が出現する。

オオオオオオオオオオオ……………

その二つがぶつかる光景は、まるで黒白の翼のようなものであった。



ドンドンドン……

砂埃が晴れてくると、2人の姿が現れる。

バンツ！！！！！！

突然、一護の肩口から血が噴き出し、前のめりに倒れようつする。  
が…

ドツ…

斬月を地面に突き立てて体を支えて倒れない。

一護「（倒れねえ……ツ！！）」

バンツ！！！！！！

同じように、白哉も胸から肩にかけて斬り裂かれていて血が噴き出  
す。

そして、白哉の手の中には千本桜の姿は無かった。

先程の一撃で一護の斬月に打ち碎かれたのである。

白哉「…知リたがっていたな……私がルキアを殺す理由を。

罪あるものは裁かれねばならぬ、刑が決すれば処されねばな  
らぬ。

それが掟だからだ」

一護「…掟だから……殺すのかよ。てめえの妹でも…」

白哉「…肉親の情か…下らぬ」

一護「何……だと……？」

白哉「掟に比すればあらゆる感情に価値など無い。

そんな下らぬ感情などもとより持ち合わせてはおらぬ。

我が朽木家は四大貴族の一、全ての死神の軌範とならねばならぬ存在。

我らが掟を守らずして誰が掟を守るといつのだ」

一護「…悪い……やっぱり俺にはわかんねえや…俺が…俺がもし…」

あんたの立場だったとしても…やっぱり俺は掟と戦つと思つ」

白哉「…黒崎一護、私の刀は……貴様のその奔放さに砕かれた。

私は最早、ルキアを追わぬ。この勝負兄の勝ちだ」

ザン……！！

白哉は一護にそう告げると瞬歩でどこかへと去っていった。

一護「勝った……？……勝ったぞ……俺の勝ちだ……！！！」

ぐにゃ……

一護は自らの勝利を宣言した……が、ふいに一護の視界が歪む。

一護「……あ……やべ、立ってんの限界だ……俺……」

徐々にバランスを崩し、一護は倒れて……

グアアアア……ごちん……！！！！

織姫「あいた！」

いかなかった。

一護は井上のおでこに強かに後頭部をぶつけてしまった。

一護「……………（悶絶）」

織姫「ご……ごめんね、黒崎くん大丈夫！？あたし石頭でごめんね！！

受け止めようとしたんだけど……」

一護「井上！？」

石田「……何だ、血まみれの割に意外と元気そうじゃないか黒崎」

一護「石田！チャド……岩鷲……！！」

そこには仲間たちの姿が……

一護「誰だ!？」

マキマキ「イヤ…いっすよ、俺は無視してくれて」

一護「…みんな無事だったんだな…良かった…」

石田「無事ではないけどね。」

君のやられっぷりに比べればみんな無傷みたいなものさ」

一護「…井上は?ケガ無えか…?」

織姫「え?あ…あたし!?あたしなんて全然!!」

あたしなんて全然役に立ってないのに、石田くんが守ってくれたり、

他の死神さんが守ってくれたりして!更木さんとかおんぶしてくれたりして!

だから全然…全然危なくなんかなくて…ただ…ただ…ただ  
黒崎くんのごことが…

ずっと心配だっただけで…ごめんね黒崎くん…守ってあげられなくて…

ありがとう黒崎くん…生きててくれて…黒崎くんが…無事でよかった…」

一護「…ありがとう…井上…」

なのは「（この人…強敵だね…今更だけど…ルキアさんも怪しいけど…）」

「一番はこの人だね…」

フェ・シグ・シャ『（胸ならば負けてない!!）』

ドゥーエ「（全体的なスタイルなら私ね）」

はやて「（胸…スタイル…————or————）」

「護」?????????????」

それから数十分後……双極の丘の麓……

「護」…何だったんだ…?今は…

いきなり四十ナントカがどうとかナントカ催眠がどうとか、

そんなこと言われてもワケわかんねーよ…」

織姫「…あたし何も聞こえなかったけど…」

チャド「今の声は四番隊って言ってた…井上は四番隊と直接接触してないから霊圧を」

捕捉できなかったんだろう…」

一護「大体隊長が隊長を斬ったとかって…瀨霊廷内のモメ事じゃねえか…」

そんなの俺達に言っただろうすんだ？」

石田「言うべきだと判断したから言っただろう」

一護「あ？」

石田「…わからないか黒崎。」

その藍染という隊長が中央四十六室……………話の流れから見て瀨霊廷の

最高司法機関と見ていいだろう…それを全滅させ、自分の目的を恰もその

四十六室の決定であるかのように見せかけて遂行しようとしていたのなら

……………その目的とは何だ？」

一護「……………」

岩鷲「……………処刑…か？」

石田「そうだ、僕達が尸魂界しゆかいに入ってからどんどん早まっていった朽木さんの

処刑の期日…君も違和感を感じていた筈だ。

だが、それも全て今の話で繋がった。

五番隊隊長・藍染惣右介…彼の目的こそが……………朽木さんの殺害なんだ！」

バツ！！

一護はルキアが移動したという双極の丘を見据える。

一護「……………ルキア……………！！」

藍染「そうか、残念だ」

藍染の凶刃が恋次に振り下ろされる。

ガッ……………

しかし、それは一護の漆黒の刃で受け止められた。

バサアッ……

一護「…よオ。

か。  
どうしたよしゃがみ込んで、ずいぶんルキア重そうじゃねえ

手伝いに来てやったぜ恋次！」

ガン！！！！

一護は藍染の剣を払いのける。

恋次「…一護……」

一護「おう」

恋次「悪い…助けに来てくれたん……」

一護「何だア！？ルキア運ぶだけで随分ボロボロじゃねーか。

やっぱ逃げるだけでもオメーにや荷が重かったか？」

恋次の言おうとした言葉の上にかぶせるように一護は皮肉を口にす  
る。

恋次「…あ！？何だそりやてめーこそ随分ガタガタに見えるぜ？

こんなところ来るより布団にでも包まってた方が良かったんじ



やねえのか!？」

一護「何だとオ!?!それが助けに来てくれた奴に言うセリフか!?!」

恋次「バカか!?!俺は礼言おうとしたらろつがよ!?!それをてめーが……」

ルキア「ぐ……ぐむ……ぶはあっ!?!」

恋次「お……おうルキア……」

一護「元気か……?」

ギロツ!?!

ルキアは涙目で恋次を睨む。

ルキア「たわけ!?!息止めの新記録に挑戦中か私は!?!」

ゴツ!?!

恋次「うっ」

そして、そのまま恋次のアゴをグーで殴った。

ルキア「全力で胸板に押しつけたまま会話しおって、危うく死ぬところだ莫迦者!?!」

市丸「すみません。手エ出したらあかん思てあの子が横通るん無視しました」

藍染「ああ、いいよ。払う埃が一つでも二つでも目に見える程の違いは無い」

一護「…あいつが……藍染か」

恋次「ああ」

一護「………まだ……逃げる体力残ってるか恋次？」

恋次「残ってるが逃げねえぞ」

一護「お前な…」

恋次「まだ策はある。この折れた蛇尾丸で、やれることはまだあるんだよ。」

戦うぜ俺は。オメーだってわかってんだろ、逃げてもムダだつてことぐらいよ。」

だったら倒すとまでは言わねえが、あいつら何とか動けねえようにして、

堂々と双極（ニ）の丘を下りようぜ」

一護「…はっ、しょーがねえなっ……そんじゃいつちよ……共同戦線と

「いくか！！」

ザン！！

恋次は折れた蛇尾丸に手を添えて構える。

恋次「この技を使えるのは一回だけだ。

だがこいつを喰らえば敵には必ず隙ができる。

藍染隊長は強えエ、できる隙はほんのわずかもしれねえが

……

その隙を衝いてくれ」

一護「……わかった」

ブン！！ガン！！！！

恋次は折れた刀を地面に叩きつける。

恋次「……いくぜ蛇尾丸……狒牙絶咬」

ドッ……ドッドッドッドッドッドッ……

すると、折られたまま散らばっていた蛇尾丸の破片たちが空中に浮かび始める。

そして、それらは一気に藍染に向かって飛んで行った。

オアツ……………ドン！！！！

一護はそのまま藍染へと肉薄し、斬月を横なぎに振った。が……………ト……………

それは藍染の人差し指一本で受け止められ、そのまま……………

ドン……………！！！！！！！！！！

腹部を横一直線に斬られてしまった。

ブラン……………

藍染「おや、腰から下を斬り落としたつもりだったが…浅かったか」  
ドシャ……………

一護は体を支え切れなくなり、膝をついて倒れ伏した。

なのは「……………うそ……………」

シヤマル「そんな……………」

はやて「……………あぁ……………」

フラッ……

一護「おっと……大丈夫か……？」

はやて「う……うん……」

フェイト「エリオたちは絶対に見ちゃダメだよ……！」

シグナム「な……何なのだコイツは……！」

クアットロ「……………（失神）」

ドゥーエ「これは……」

（イヤなものね……好意を寄せてる相手が殺されかけるのを見るのは）

藍染はとうとうルキアを捕まえてしまう。

ガシヤッ……

不意に音のした方を見ると、一護が体を動かさそうとしていた。

一護「はっ……はっ……はっ……はっ……」

だが、体が背骨のみで繋がっているこの状態では動くことはできな

い。

藍染「可哀想に、まだ意識があるのか」

一護「はっ…はっ…」

藍染「実力にそぐわぬ生命力が仇になってるね。

だが無茶は止した方がいい。

君の体は、今背骨で辛うじて繋がっている状態だ。

幾ら頑張ろうと立つ事はおろか体を起こす事もできないよ。

精神論じゃない、構造的に不可能なんだ。

良いじゃないか、君達はもう充分役に立った。

そこで大人しく横になってたまえ。君達の役目は終わりだ」

一護「…役…目…だと…!？」

藍染「そうだ、君達が侵入してくることはわかっていた。その場所もだ。

西流魂街に現れると。

だからその近辺には常に監視を置き、君達の到着からすぐに瀕霊壁を落とした。

そして門の内側には三番隊と九番隊を向かわせ、ギンに直接君を追い払わせた。

ば、  
静霊壁が下り、門の内側には隊長格がうろついているとなれ

残る侵入方法は志波空鶴の花鶴大砲しかない。

派手な侵入だ。しかもその侵入者は隊長格がとり逃がす程の実力者。

否が応でも瀨霊廷中の死神の目はそちらへ集中する。

実際、廷内侵入後の君達の活躍は素晴らしかったよ。

お陰で隊長が一人殺されても大した騒ぎにならずに済んだ。

実に動き易かった」

一護「ま…待て…あんた…なんで俺達が…」

西流魂街から来るってわかったてたんだ…？」

藍染「…おかしな事を訊くね、決まっているだろう。

西流魂街は浦原喜助の拠点だからだよ。

彼の作る穿界門で侵入できるのは西流魂街だけだ」

一護「…な…」

藍染「…何だその顔は、君達は彼の部下だろうか？」

君達は浦原喜助の命令で朽木ルキアの奪還に来たんじゃないのか？」

一護「…ど…ど…どうい…」

藍染「…成程、どうやら何も聞かされてはいないようだね。…まあ良い。」

最後だ、僕が教えておこう。

死神には基本的な四つの戦闘方法があるのを知っているかい？

斬術・白打・歩法・鬼道の四つがそれだ。

だが、そのどれもに限界強度というものが存在する。

どの能力も極めれば死神としての魂魄の強度の壁につきあたり、

そこで成長は止まる。つまりはそこが死神の限界だ。

ならばそこを突破して、全ての能力を限界を超えて強化する方法は無いのか？

あるんだ、ただ一つだけ…それは死神の虚化だ」

藍染が示した方法とは、一護がその領域に片足を踏み込んだモノで



あった。

藍染「死神の虚化、虚の死神化。

相反する二つの存在の境界を払うことでその存在は更なる高みへと上り詰める。

理論的には予てから存在するとされてきた手段だった。

僕自身は特に虚の死神化に着目し、幾つかの死神に近い存在の虚を

送り出すことに成功した。

自らの霊圧を消すことのできる虚、触れるだけで斬魄刀を消すことができ、

死神と融合する能力を持つ虚。

だがどれも新たな存在と呼ぶには程遠い屑ばかり。

僕以外の者も皆、無知と倫理に妨げられて、結局その方法を見つけられる者は

誰一人としていなかった。それを造りだしたのが浦原喜助だ。

彼が造り出したのは瞬時に虚と死神の境界線を取り払うことができる、

尸魂界の常識を超えた物質だった。物質の名は？崩玉？。

危険な物質だ。彼もそう感じたんだろう、？崩玉？の破壊を試みた。

だが彼は結局自らが造ったその？崩玉？を破壊する術を見つ  
けることが

できなかった。そこで彼は仕方なく一つの方法をとった。

それは？崩玉？そのものに防壁をかけて、

他の魂魄の奥底に埋め込んで隠すという方法だ。

…もう解るだろう、その時彼が隠し場所として選んだのが君  
だ朽木ルキア」

一護「…何……………だつて……………？」

藍染「僕がそのことをつきとめた時、君は既に現世で行方不明にな  
った後だった。

僕は直感した。浦原喜助の仕業だと。

義骸は全て力を失った死神を回復させるため高濃度の霊子体  
で構成されている。

そのため全ての義骸の行動は尸魂界から捕捉できる。

義骸に入った死神が行方不明になるなどあり得ない話だ。

だが彼はかつて、霊子を含まない霊子体を自ら開発し、それを  
使って

捕捉不可能な義骸を造ったことで尸魂界を追放されている。

追放に至った理由はもう一つある。

その義骸が入った死神の霊力を分解し続けるからだ。

そのため、中に入った死神は霊力がいつまでも回復せず、

義骸との連絡は鈍くなり、そしてやがてその魂魄は霊力を完  
全に失い……

死神からただの人間の魂魄へと成り下がる。

解るか、彼は君に力を貸した訳じゃない。君を人間にする  
ことだ

？崩玉？の所在を完全にくらませようとしていたんだ。

…だが、幸い数か月後に君は現世で発見された。僕はすぐに  
四十六室を……」

~~~~~なんか長いのでここから省略します。~~~~~

藍染「破道の九十・？黒棺？」

ギョーン……ギシッ……

ん？呼んだ？え？私じゃない？

藍染の放った黒棺は狛村を容易く呑み込み、打ち砕いた。

一護「（……………同じ隊長格同士で……ここまで手も足も出ねえのかよ……………」

藍染「…鏡花水月の？完全催眠？は完全無欠だ。例えかかるとわかっけていても

逃れる術などありはしない」

ギン「九十番台詠唱破棄！怖いわア、いつの間にそんなとこまでできるように」

ならばつたんです？」

藍染「いや、失敗だ。本来の破壊力の三分の一も出せていない。

やはり九十番台は扱いが難しいよ……さて、済まない。

君達との話の途中だったね」

~~~~~再び省略いきます~~~~~

藍染が取り出した道具のスイッチらしきものを押すと、地面から六本の柱が現れ、

藍染の右腕を何かが覆う。

藍染「これがその」

一護「…待……………」

藍染「こたえ解だ」

ドッ！！！！！

そして、藍染はルキアの胸部に何かで覆われた右腕を突き刺した。

ズ…ズ…ズル…ッ

そして、その中からクリスタル状のモノに包まれた、一つの小さな玉が出てきた。

藍染「…驚いたな、こんな小さなものなのか…これが…？崩玉？…」

ギユ…ギユウウン…

一護「（…傷が…消える……………！）」

藍染「…ほう、魂魄自体は無傷か…素晴らしい技術力だ…」

だが残念だな、君はもう…用済みだ。殺せギン」

ギン「…しゃあないなア、射殺せ？神鎗？」

ギンの斬魄刀がルキアを今にも貫こうとする。

が、次の瞬間思いもよらないことが起こる。

全員の視線の先には、ルキアを庇って神鎗の一撃を受けている白哉の姿があつた。

ルキア「…兄……………様…！」

ドサ…

白哉は地面に膝をつく。

ルキア「に…兄様っ…！？兄様…何故…何故私を…！？どうして…  
兄様…兄様…

兄様っ…！」

ザッ…

止めを刺そうと藍染は二人に近づこうとする。

ババツ！！

ルキアは白哉を庇って頭を抱きかかえる。

チキ…

だが、藍染が刀に手をかけるとほぼ同時に

ドン！！！！

駆け付けた碎蜂と夜一が瞬時に動きを封じた。

藍染「…これはまた随分と懐かしい顔だな」

夜一「動くな、筋一本でも動かせば」

碎蜂「即座に首を刎ねる」

藍染「……成程」

ドン！！！！

夜一「！」

ズン！！ズドン！！ゴシヤア！！

そこへ現れたのは…

夜一「……………！！こいつらは……………！！」

白道門以外の門番たち三人であった。

夜一「莫迦な……………！！此奴等まで手懐けておったというのか……………！！」

藍染「…どうする？幾ら君達でも僕を捕えたまま彼等とは戦えまい」

夜一「ちっ…」

??「おおおおおおおおおおおつ」

門番たちが近づいてくる中、上空から声が……

夜一「！」

ズドオン！！！！

それは、怪我の治った？丹坊と志波空鶴であった。

夜一「空鶴！！！！」

空鶴「おう夜一！あんまりヒマだったからよ、散歩がてら様子見に来たぜ！

さア、いくぜ？丹坊！」

？丹坊「おス！！」

空鶴「散在する獣の骨！尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪、動けば風、止まれば空、

槍打つ音色が虚城に満ちる！破道の六十三？雷吼炮？！！！」

ドパン！！！！！！



空鶴の放つ鬼道の一撃で門番の一人が吹き飛ぶ。

ズゴン!!!

そして、残りの二人を？丹坊が片付けた。

ギン「ひゃあ、派手やなあ…」

バシッ…バシッ…

ギン「どないしょ？」

ギンは飛んでくる破片を片手で払いながらそう呟く。すると、

ガッ…

乱菊「動かないで」

乱菊に片手を掴まれ、刀を首筋に当てられてしまった。

ギン「…すみません藍染隊長、つかまってもた」

夜一「…これまでじゃの」

藍染「…何だつて？」

夜一「…判らぬか藍染。最早おぬしらに…逃げ場が無いということ  
が」

ザッザッ…ザッ…ザッ…ザン！！！！！！

そして、双極の丘にはほとんどの隊長格たちが現れ、藍染たちを取り囲んだ。

浮竹「…藍染…」

射場「…藍染隊長…！」

東仙は副隊長の檜佐木が取り押さえていた。

夜一「…終わりじゃ藍染」

夜一のその言葉に、藍染は余裕の笑みを浮かべた。

夜一「…どうした、何が可笑しい藍染」

藍染「…ああ、済まない…時間だ」

夜一「！」

夜一は上空に何かを確認すると碎蜂に即座に指示を出す。

夜一「離れる碎蜂！！」

ドン！！

その言葉の一瞬後に、藍染に向けて上空から何か光のようなものが降り注いだ。

浮竹「……………ば……………莫迦な……………!!」

光の出ている空間の裂け目から巨大な手が出現する。

ギシツ……………ズオ……………!!

そして、空間の裂け目を手はいとも容易く広げて見せた。

碎蜂「メノスゲランデ大虚!!!!」

その中には無数のメノスゲランデ大虚たちの姿が……………

大前田「ギリアンか…！何体いやがんだ…!!」

檜佐木「いや…まだ奥に何か居るぞ…！」

そう、メノス達の奥には確かに巨大な目のようなものが存在した。

ポポツ…

そして、さらに二つの光が降りてくる。

それはギンと東仙の二人を包んでしまった。

ゴツ……………

大前田「！浮いた…っ!？」

さらに、光の中の藍染たちが浮き始めた。

射場「逃げる気かいこの…」

総隊長「止めい」

射場は追って攻撃を仕掛けようとするが総隊長に止められる。

射場「総隊長…！」

総隊長「あの光は？ネガシオン反膜？というての、大虚が同族を助ける時に使うものじゃ。」

あの光に包まれたが最後、光の内と外は干渉不可能な完全に隔絶された

世界となる。大虚と戦ったことのある者なら皆知つとる。

あの光が降った瞬間から藍染には最早触れることすらできんとな

ゴシヤン…！！

狛村「東仙…！！！」

ここで、今まで倒れていた狛村が東仙に言葉を投げかける。

狛村「降りてこい東仙…！！解せぬ…！！貴公は何故死神になった…？

亡き友の為ではないのか…！！正義を貫く為ではないのか…！！

貴公の正義は何処へ消えて失せた…！！」

狛村の力の限りの問いかけに、東仙は淡々と答える。

東仙「言つたらう狛村。私のこの眼に映るのは最も血に染まぬ道だけだ。」

正義は常に其処に在る。私の歩む道こそが正義だ」

狛村「東仙…！」

浮竹「…大虚とまで手を組んだのか…何の為にだ」

藍染「高みを求めて」

藍染は浮竹の問いに簡潔にそう答えた。

浮竹「地に堕ちたか、藍染…！」

藍染「…傲りが過ぎるぞ浮竹。最初から誰も天に立ってなどいない。

君も僕も神すらも」

藍染はそう言うと、伊達であったメガネを外して髪形を変える。

藍染「だがその耐え難い天の座の空白も終わる。これからは私为天に立つ」

その奥にあつた眼は…確かな狂気を孕んだ眼へと変わっていた。

藍染「さようなら、死神の諸君。そしてさようなら、旅禍の少年。」

人間にしては君は実に面白かった」

ドン！……！！

こうして藍染は空の亀裂の向こう側？虚圏？へと消えていった。

ヴィータ「こいつって何なんだよ……」

一護「まあ……コイツは本当に最強の存在みたいだな……」

ザフィーラ「……時に……この狛村という男は……」

一護「ああ……確か……分類上は人狼って言ってた気が……」

ザフィーラ「ふむ……一度でいいから会ってみたいものだ……」

一護「あ……お前も狼だっけか……」

はやて「そやね……ほとんど扱的には犬やったけどな」

一護「……よく……今まで頑張ったな……（目から汗が……）」

ザフィーラ「……いや……（泣）」

なんかよくわからん友情？が生まれた気がした。

数十分後の双極の丘……

白哉はルキアを呼んで話を始めようとしている。その容体はあまりいいとは言えない。

白哉「…ルキアそこに居るか」

ルキア「はい、兄様」

白哉「…お前に話しておきたいことがある。

五十年前の春の朝、その年最初の梅の咲く前に私は妻を亡くした」

ルキア「…存じてます。緋真様、兄様はその奥方に良く似た私を気に入りに、

私を妹として朽木家にお迎えになったのだと教えられました」

白哉「…そうだ。

ルキアにはそう言って嘘を教えるようにと私が屋敷の者に指示したのだ。

……緋真はお前の姉だルキア。

緋真は現世で死してお前と二人成吊へと送られた。

だが、そこで一人で二人を抱えて生きることになり、まだ赤子だったお前を

捨てて逃げたのだと、そう言っていた。

緋真はそれを悔いていた。私の妻になってからの五年間も、毎日のように

お前を捜し続けていた。

そして、五年目の春に……

緋真は私に、お前を妹として護ってくれと言って亡くなった。

私がお前を見つけたのはその翌年だった。

私はすぐにお前を朽木家に迎え入れた。

流魂街の者の血を貴族の家に混ぜることは掟に反し、朽木家の名を下げると

屋敷の者達には反対された。

だが、私は緋真を朽木家に迎えた時にもその掟を破っている。

だから私はお前を迎え入れた後、父母の墓前に誓いを立てた。



掟を破るのはこれが最後。これより先如何なることがある  
とも、

必ず掟を守り抜くと」

白哉のその独白を一護たちも黙って聞いていた。

白哉「…お前の極刑が決定された時…私は判らなくなっていた…

掟を守るといふ父母への誓いと妹を護るといふ緋真との約束と

どちらを守るべきなのか…黒崎一護…礼を言う」

小さな声ではあったが、確かに聞こえたのか一護は満足そうな笑み  
を浮かべる。

白哉「……………ルキア……………済まぬ」

藍染の反乱から一週間……………十一番隊隊舎……………

ガシャン！！！！

窓から人が飛び出してくる。

一角「ようし！！次！！！！」

そこにはいつにも増してツルツルテカテカの第三席の姿があった。

一角「オラオラどうしたテメーら！！誰も来ねーのか腰又ケ共！！」

一護「…しよーがねえな…そんなじゃいつちよ…俺がいくぜ！」

その対抗馬として現れたのは既にほとんど回復した一護であった。

一角「ほう…いい度胸だな一護。いいのか？病み上がりだろうが手加減はしねーぞ」

一護「病み上がりはお互い様だろ！つーか別に病んでねーよ。ケガしてただけで」

一角「同じだろ。ケガして治ったばっかなのも病み上がりって言うんだよ！」

一護「言わねーよ！」

一角「じゃあケガして治ったのは何て言うんだ言ってみるよ！！」

一護「そりゃオマエ…知らねーけど」

一角「ほれみる知らねーじゃねえか！！国語勉強し直せボケ！！」

一護「ンだと！？テメーこそ頭そってばっかで何も入ってねークセによー！！」

一角「あア！？」

どうでも良い事でかなりヒートアップしている二人。

ちなみに、一護の方が正解のようです。

一角「よオしわかった!!」

じゃあこいつで勝った方が正しいってことでどうだ!!!!」

一護「おーし来い!!!」

俺は国語が一番得意何だっつーコトを思い知らせてやるぜ!

」!

ガン!!!!!!(ガラッ)

剣八「おーーーす!」

二人の剣がぶつかったのと剣八が入ってきたのは同時であった。

剣八「…あん?…何だ、元気そうじゃねえか一護。傷はもういいのか」

一護「お…おう!お陰様でもうバッチ」

カッ!!

一護「!?!」

突然一護の木刀が斬り飛ばされる。

剣八「そうか…そいつア何よりだ…」

これで遠慮無く、てめえと戦れるってこった!!!!」

だんっ!!

剣八が言い終わるよりも早く一護は隊舎から飛び出す。

だだだだだだだだだだ……

剣八「てめえ!!!!待てコラ一護!!!!」

一護「誰が待つかっ!!あんと戦うのなんか二度とゴメンだ!!」

剣八「何だと!?!逃がすか!!!!」

ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ……ぎゃーぎゃー!!わーわー!!

全員「じーーーー……」

シグナム「だから!!全員で私を見るんじゃない!!!!」

一護「あ~~~~も~~~~足痛て~~~~……………」

一の。 剣八のヤロー本気で追っかけ回してきやがって…怖えーっつ

かよ… 霊圧だけで怖えーっつーの。俺ホントにあんな奴に勝ったの

自分で信じらんねーよ…

あ、やべー… 斬月、十一番隊舎おんぞうに忘れて来ちまった

…」

織姫「くろっさきく…！…！…！」

一護「ど…どうした井上？…っーかその服どうした？」

織姫「い…いないの…朽木さんが…瀨霊廷中のどこにも…」

白哉の病室……………」

恋次「…隊長…俺は…」

恋次が白哉に何かを言おうとする……………」が、そこへ

一護「恋次イ！！！！」

一護が窓から飛び込んできた。

恋次「うるせえよ！！」

ゴツ！！

一護「おう！？」

恋次「何の用だテメー…」

今、俺ちよつといいこと言つとこだったんだぞコラ…」

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリ……

一護「お…おう…すまん…」

ルキア…どこ行つたか知らねえか？」

恋次「あ？何だ！？ルキアがどうかしたのか！？」

一護「い…いや、知らねーならいいんだ別に」

織姫「黒崎く~~~~ん…3階の窓なんて登っちゃ危ないよ…」

一護「うお！？オマエこそ…」

てかスゲエな、どうやって登ってきたんだ！？

悪り！恋次！白哉！俺ら行くわ！」

織姫「おじゃましました恋次くん白哉さん！」

織姫「…ねえねえ黒崎くん、乱菊さん達には訊かなくてよかったの？」

朽木さんのこと…」

一護「あア、恋次が行き先聞いてねーなら

多分乱菊さんも他の誰も知らねーと思うんだ。

六花で一通り瀨霊廷ん中は搜したんだろ？

だったらもう心当たりは—か所しか無え！」

一護「おーおーやっぱりここだ」

そう、一護がやってきたのは志波空鶴の家。そして、案の定ルキアはそこに居た。

ルキア「…一護、井上…」

一護「…用事は済んだみてーだな。

帰んぞ、明日には現世への門を開けてもらえるってよ。

「よ  
まだオマエ体調万全じゃねーだろ。明日に備えて早めに休め

ルキア「…ああ、そうだな…お前には…

「一番に言わねばと思っていたところだ…私は尸魂界（じゆんかい）に残ろうと思う」

一護「…そうか…良かった」

ルキア「え…」

一護「…イヤ、オマエが自分でそう決めたんなら…

…残りたいて思えるようになったんなら…

…いいんじゃないかねえか、それでよ」

…思い出したんだ。俺がどうして、こんなにもオマエを助けたかったのか……………



次の日………双極の丘………穿界門前………

浮竹「…これが正式な穿界門だ。無論、君達のために靈子変換器も組み込んでおいた」

そこには、かなり豪華になった穿界門があつた。

浮竹「…一護君」

一護「浮竹さん」

浮竹「君にこれを」

一護「？何すかコレ？」

浮竹「一応尸魂界にも死神代行の発生に対応した法律があつてね、

現れた死神代行が尸魂界にとって有益であると判断された場合、

古来から必ずこれを渡す決まりになっている。

名を死神代行戦闘許可証、通称代行証だ」

石田「それじゃ朽木さん、元気で……」

ルキア「ああ…チャドも石田も井上も…皆元気でな」

一護「…じゃあな、ルキア」

ルキア「…ああ…ありがとう、一護」

こっちのセリフだ。

ありがとうルキア、お陰で

やっと雨は止みそうだ

一護「……これが俺の過去…だな……」

全員『……………』

見ている最中はそこまでなかったようだが、思い返してみるとかなりの出来事の

連続であったようで、皆に重い空気が漂っている。

一護「なあティアナ…」

ティアナ「はい…」

一護「俺の場合は…相当切羽詰まっていたからこういふ感じの修行に

なっただけで

お前にはまだ時間があるんだ。

六課にいる間だけでもお前は絶対に強くなれる。

だから…もうあんな無茶は…するなよ…」

ティアナ「はい……でも……一護さんも…無茶したら……ダメですよ……？」

一護「！……はは…そうだな…俺も気をつけねーとな…」

なのは「………なんか……私たち……」

はやて「蚊帳の外やね……」

一護「ティアナ…後で…俺の部屋に来てくれるか？」

ティアナ「！？！？！？！？！？！？！／／／／／／／／／／」

なのは「いいいいいい一護くん！？皆の前で何言ってるの?!?!?!?!?!?」

はやて「そーやで!!部屋に呼んで何をするねん!?!?」

フェイト「わ…私は……ふ…不純異性交遊は…いけないと…思うな…／／／／／／」

ポクポクポク……チーン!!

「護」！?!?!?そういう意味じゃねえよ!?!!

ただ、会わせたい奴がいるだけだよ!?!!

シグナム「ほほう……ではお前はどどういう意味だと思ったのだ?」

シャマル「詳しく知りたいですね」

「護」これって普通は立場逆じゃね!?!?

ティアナ「……違ったんだ……(ボソ……)」

スバル「ティア?何か言った?」

ティアナ「何でもないわよ!?!バカスバル!?!」

ドゥーエ「さあさあ!?!」護さん!?!答えて下さい!?!……!?!

「護」お……お前ら……や……やめ……ぎゃー……!?!?!?!?!?」

ロッサ「僕は……帰っていいのかな」

ヴァイス「……ま……今日は仕事も無いだろうから……飲みに行こう  
や……」

ゼスト「そつだな……」

ジェイル「たまには大勢で飲むのもいいね」

ザフィーラ「うむ…楽しもうじゃないか…」

男性陣は我関せずの態度を貫くことで満場一致したようだ。

一護「オメーら…！後で憶えて…！うわッ！？何すん…！」

一護は一身上の都合で早退されました（チーン）

続く……………（最後まで結局ここのね……………）

第25話 一護の過去・その3（尸魂界救出篇）（後書き）

いかがでしたでしょうか……

例によって六課勢の反応が薄く感じられるかも……

むつかしいです……（泣）

何かご意見やご感想などがございましたら、感想ページに気軽に書き込んでください。

質問をしていただいても構いません。

できるだけ早く返答したいと思います。

また寄せられたご意見などは真摯に受け止めて、作品に活かしていきたいと思います。

では、また次回にお会いしましょう……！！

第26話 再び日常へ (The return to daily life)

時間がかかってしまいました。申し訳ありません!!

その上内容もあまりよくないという……

それから、今回から少し書き方を変えてみました。

あまり変化がないかもしれませんが、

これからはこの書き方でいきたいと思います。

挿し絵は一枚の上に質が良くないです……なんかもうすいません……

それでも、楽しんで頂ければ幸いです。

あと、PVが50万アクセスとユニークが5万人を突破しました!!

皆さんいつもありがとうございます!! (PVはもう60万を越し

そうです)

これからもよろしく願います!!!

一護はティアナを自室に呼び出す……アイツと逢わせるために……

想いを伝えさせるために……

第26話 再び日常へ (The return to daily life)

一護の悲劇(笑)から一日たった日……………一護の部屋の前……………

ティアナ

「……………結局……………来たものの……………」

ティアナは一人で来るのは初めての為か緊張している。

そもそも何故次の日になったというのも、一護がお話?でダウンしたせいである。

ティアナ

「……………そうよ……………逢わせたい人がいるって……………だからきつと……………」

プシユー

ティアナが部屋の前でブツブツ呟いていると突然ドアが開いた。

ティアナ

「!?!?」



一護

「おう？もう来てたのか。じゃ、入ってくれ」

ティアナ

「ははははい！お…お邪魔します……」

一護

「お、おう…（ははははは？）」

そのころ…一護の部屋の近くの廊下……

なのは

「……………ティアナが入って行ったよ……………」

シグナム

「む…私も入ったことが無いというのに……………」

シャマル

「でも…逢わせたい人って…誰なのかしら…」

はやて

「いや…それは口実で二人は × \* なことを…」（見せられないよ）

フェイト

「なななな／／／／／／」

ドウエエ

「…こうなったら…いつその事ライアーズマスクであの子と入れ替わって

― 護さんと × \* なことを…」（見せられないよ）

エリオ

「…ウーノさん… × \* って何ですか？」（見せr y）

ウーノ

「もう少し…大人になってからですね…」（全くあの人たちは……）」

一護

「……………（はぁ…あいつ等…近くに来てるな…）」

ティアナ

「あの…一体誰に…逢わせてくださるんですか…」

一護

「ああ…ティアナ、俺の右隣…ここらへんに何か見えるか？」

そう言っつて一護は自分の右肩の辺りを指差す。

ティアナ

「はい…？確かになんかぼやけてますけど…まさか…お化け！

？」

一護

「ああ…そこまでビックリすんなって…俺も元は似たようなもんだし…」

ティアナ

「でもでもー!」

一護

「少しでも見えてるなら…俺はちょっと後押しするだけでいいな…」

ティアナ

「聞いてるんですか!?!」

一護

「おう、もちろんだ。大丈夫だから、そう警戒してやんなって…」

結構気にするらしいぞ」

ティアナ

「は…はあ…わかりました…」

一護

「じゃ、少し目を瞑っててくれ」

ティアナ

「は…はい…」

ティアナは一護に言われるままに目を瞑る。

トンッ…

ふと、額におそらく指であるつか？何かが当てられる。

ポウッ…

そこを起点に温かい何かが広がっていくのをティアナは感じていた。

ティアナ

「？あの…これは…？」

一護

「俺の霊圧を流してるだけだ…よし…もう目を開けていいぞ」

一護に言われてティアナは目を開ける。するとそこには…

ティーダ

「……………ティアナ……………」

ティアナ

「え……………」

6年前と変わらない姿の兄の姿があった。

ティアナ

「兄……………さん……………？」

ティード

「ああ…俺は真正正銘…お前の兄のティード・ランスターだ」

ティアナ

「でも…どうして……………」

一護

「こいつは…ずっとお前の横にいてな…気になって確かめたらお前の兄貴って」

わかって…それでこいつもお前と話したいって言うから…な」

ティード

「ああ…ずっと…お前の事を見てきた…俺の葬式の時に…お前のことが

見えているのに…何もしてやれなかった…お前が苦しんでる時も……

ただ見ていることしか出来なかった……すまない…ティアナ……

本当なら…こんな重荷をお前が背負う必要なんてなかったのに……

お前を守ってやらないといけなかったのに………一人にさせて

……

ゴメンな………」

ティアナ

「兄さん………謝らないで………」

ティード

「ティアナ………?」

ティアナ

「確かに…兄さんがいなくて辛かった時もあったけど…それでも…」

その時があったからこそ今の私がいるの…」

ティード

「…!」

ティアナ

「だから…ゴメンなんて言わないで…私は今…沢山の人と一緒にいて…」

幸せに過ごせてる…前に進めてる…だから…ありがとう兄さん…」

ティード

「そうか…もうこんなにも…大人になっていたんだな…」

ティアナ

「兄さん…」

ティード



「だが……体の方はまだまだ発展途中のようだな？」

ティアナ

「なっ！？／／／／／／／／」

ティータ

「そうだな……お前の友達のスバルちゃんだったか？」

そのくらいまでなってくれたら……あれ……ティアナ……？」

ティアナ

「まさか……ずっと見てたって……そのまんまの意味なの……」

？」

……………

ティータ

「いや……まあ……つい……出来心で……？」

ティアナ

「せっかく……逢えて感動してたのに……」

ティーダ

「ま…まあまあ…今の俺は幽霊だから殴れないって…」

一護

「いや、殴れるぞ。今なら」

ティーダ

「何で!?!」

一護

「今のティアナは俺の霊圧で一時的に霊力が目覚めてるからな

……

多分殴るくらいなら普通にできるぞ…てか…ちっちと殴られ  
る」

ティーダ

「そんな殺生な!?!」

ティアナ

「この……………」

ティーダ

「あ……ちょ……待つ……」

ティアナ

「くたばりやがれ……！変態兄貴……！！……！！……！！」

ドゴオオオオオン……！！

ティアナの強烈な右ストレートがティーダの左ほほを完璧に捉えた。

ティーダ

「俺もう死んでる……！！……！！……！！」

一護

「ま……今回は自業自得だな……」

ティアナ

「ふーっ……ふーっ……ふーっ……」

この後、この世界での成仏の概念が判らないため、そのままということが決まり、

しばらくの間は一護の部屋で謹慎させられることが決定したティー

ダ（幽霊）

であった。

ティード

「く……俺を倒しても第2・第3の俺が……」「ジャキッ!」

ああ!？すみません!すみません!!

一護

「はあ……」「ロイツとしばらく同居か……」

数分後の一護の部屋……

一護

「……もう……良いか?ティアナ……」

ティアナ

「ホントはまだ足りないですけど……まあこの位でいいです」

ティータ

「シクシクシク……」

ティータはお仕事をじじじじで部屋の戸隅で正座をさせられている。

一護

「さて……そろそろいいかな……」

ティアナ

「はい？」

一護

「いや……じじじじった……」

ピピ

一護がそう言って部屋のドアを開けるボタンを押すと……

ドササササササ……

なのは

「キャー!?」

シグナム

「何!?!」

シャマル

「あ……あらっ?」

フェイト

「キャン!?!」

はやて

「うわっ!?!」

ドゥーエ

「な……何が……!?!」

一護

「……………おい……………」

全員

『あ……………』

一護

「あ…じゃねー………」

全員

『……』

ズドドドドドドドドドド……

ティアナ

「ふふ………ありがとうございます………一護さん………」

誰にも聞こえないようにティアナはそう呟いた。

ティーダ

「おおー！ついにティアナにも春が………って………ギャー………」

出歯亀が約1名いたようだ。

そのまた次の日……

ウーノ

「はぁ……まったく……何で私たちが……」

トーレ

「まあ……言いたいことはわかるが……」

チンク

「とうか……ドゥーエ姉さまはともかく……クアットロは……」

そう愚痴を言いながら歩いて何かを探しているのは、ナンバーズのお姉ちゃん'sの

3人である。

どうしてこの3人かというと、ドゥーエ 本局へ出勤、クアットロ 寝坊という

クアットロだけアホのような理由のためである。



フェイト

「あれ？3人でどうしたの？」

そこへ通りかかったのは今日は非番のフェイトであった。

ウーノ

「お嬢様…あの…黒崎さんを見かけませんでしたか？」

フェイト

「あの…お嬢様はやめてほしいんだけど…それで？一護に何か用？」

トーレ

「実は…ドクターが約束通りに霊力の研究をさせてほしいとのことで、」

連れてきてくれと頼まれまして……」

詳しくは第24話をどうぞ〜

フェイト

「ああそれで……うーん……今日は朝に食堂で会った以外は会ってないよ」

チンク

「では、どこか彼の行きそうな所は？」

フェイト

「確か……ティアナたちが自主訓練に使ってたところで何回か見たことが……」

ウーノ

「ではそこへ行ってみます」

フェイト

「待って、私も今日は非番だから案内してあげる」

トーレ

「いいのですか？折角の休みですが……」

フェイト

「いいの。エリオたちも今日は訓練があってるし」

ウーノ

「では……お願いします」

自主訓練場（仮）……………

KEEP OUT KEEP OUT KEEP OUT  
P OUT KEEP OUT KEEP OUT

危険！！立ち入り禁止！！危険！！立ち入り禁止！！危険！！立ち  
入り禁止！！

という黄色いテープが張り巡らされて、奥へ行けなくなっていた。

4人

『怪しい……………』

ごもつとも……………

フェイト

「とりあえず……………行ってみよっか？」

ウーノ

「そうですね……」

チンク

「いいのですか？危険って……」

トーレ

「まあ、本当に危なかったらすぐに戻ればいいだろう」

そんなことを言いながら4人は先に進んでいった。

ある程度進んでいくと、そこには……

> i 3 2 6 3 6 | 3 5 0 6 <

卍解状態で座禅のようなものを組んでいる一護の姿があった。

フェイトがその状態の一護に話しかける。

フェイト

「一護！スカリエッティが霊力の研究がしたいって……一護

「？」

しかし、フェイトが一護に呼びかけても返事が返ってこない。

ウーノ

「？おかしいですね……反応が全くありません」

トーレ

「殴ってみるか？」

チンク

「！？さすがにそれは……」

フェイト

「ねえ……一護……どうして……」

フラ……ドサ……

一護を起こそうと肩に触れたフェイトは、意識を失ったのか倒れてしまった。

ウーノ

「！！お嬢様！？」

トーレ

「どうした！？」

チンク

「今、黒崎に触れた途端にお嬢様が……」

全員が慌ててフェイトに駆け寄るが、焦っていたために

結局全員が一護に触れてしまった。

ドサドサドサツ……

一護の精神世界………

ブンッ！！！！

白一護が一護の背後に回って死角から斬りつけようとする。

一護

「……………フッ!」

ギィン!!

それに一護は鋭く反応して白一護の白い天鎖斬月を弾く。

白一護

「チッ……………またかよ……………!!」

ブンッ!!……………

一護の精神世界では、一護と白一護による戦いが繰り広げられている。

一護

「……………そこか……………」

ヒュン……………ガッ!!

一護は瞬歩で距離を取った白一護をすばやく見つけ、背後を取って襟をつかむ。

白一護

「なっ!?!」

一護

「オラア!?!?!」

一護はそのまま白一護をビルに向かって投げつけた。

ドゴオオオオオン……………

天鎖斬月

「よし……………そこまでだ……………一護……………」

白一護

「待てよ! 斬月!?! 俺はまだ……………ゲホッゲホ……………砂喰っちゃまった……………」

天鎖斬月



「いいからお前は休んでいる……一護……お前に客だ……」

一護

「はあ？こんなところに客が来るわけ……」

そう言っつて斬月が目線で示した先には……いきなりビルの側面に  
出て、

右往左往しているフェイト達の姿があった。

フェイト

「あれ……？ここは……確か一護の……」

ウーノ

「お嬢様！……って……ここは……」

トーレ

「黒崎の……確か精神世界だったか……？」

チンク

「実際に見てみると……本当にめちゃくちゃな世界だな……」

ギイン……！

4人が現状の確認をしていると、遠くから剣戟の音が聞こえてくる。

4人が視線を向けるとそこには虚化の元凶（と現在は思われている）  
白一護と

眼にもとまらぬ戦闘を繰り広げている一護の姿があった。

フェイト

「あれは……！……！」

トーレ

「く……！！速すぎる……目が追いつかない……」

ウーノ

「私には姿も見えないですよ……音しか聞こえないし……」

ドゴオオオオン……………

チンク

「！？ビルに白い方が突っ込んだぞー！」

フェイト

「ねえ…………あの黒いフードの人…………こっち見てない？」

ウーノ

「あ…黒崎さんもこっちを見ましたね」

トーレ

「あ…………溜息をついてるぞ」

ブン……………

そっしっしっしているしちたー一護が目の前をやってくる。

4人

『……………』

一護

「はあ……お前らな……立ち入り禁止って貼ってあったろ……」

若干呆れ気味の一護である。

ウーノ

「すみません……ドクターが黒崎さんに霊力の研究を頼みたい  
そうで……」

あの……話は変わるんですが……私たちは一体……」

一護

「ちっ……あいつ憶えてやがったか……」

あと、今のお前たちに何が起こったかってのはだな……」

俺の霊圧はデカすぎて周りの奴等の……特に魂に影響を与える  
みたいでな……

多分お前らの魂がこっちに引っ張られたんじゃないのか？

この状態の俺は刀に完全に意識が飛んでるから、反応とかも  
しなかった

「だろうし……まあ、俺が此処から出る時に一緒に出れるんじゃないか？」

天鎖斬月

「ああ……おそらくそうだろうな……」

フェイト

「あの……さっきから気になってたんだけど……この人どなた？」

一護

「ん？コイツは斬月だぞ」

チンク

「え……？斬月ってもっとこつ……」

トーレ

「オッサンというか……」

白一護

「ププ……オッサン……（ゴスッ！）（グオオッ！）？」

今のは斬月が白一護に肘打ちした音

天鎖斬月

「正確には私の名は天鎖斬月だ。」

一護が卍解した状態で此処に來ると私の容姿も変化する。それだけだ」

一護

「ずいぶんザックリした説明だな……」

白一護

「おい！俺の紹介は無しかよ！？」

ウーノ

「えっと……あなたは…黒崎さんの……」

白一護

「おう！俺はこいつの中に住んでる虚だ！…さて…お前らの」とも喰って……」

一護・斬月

『やめんかバカもん!!』

ゴチン!!!

白一護の頭に二人の拳骨が落ちた。

白一護

「イテエよ!? 冗談だろうが!!」

一護

「お前が言つと洒落にならんだろうが……」

4人

『サーーーーー……— — — — —』

4人はやはりというか顔を青くしていた。

一護

「はぁ……俺がいる限りこいつはお前らを襲わねーよ……安心しろ」

白一護

「何だよ……軽い冗談なのに……ブツブツ……」

天鎖斬月

「はあ……一護……呼ばれているのなら戻った方が良いのではないか？」

一護

「ああ……そうだな。じゃ、鬼道はまた来た時に頼むわ」

天鎖斬月

「わかっている」

そう言った斬月の手には？猿にでもできる初級鬼道講座？という本が……

何故そんなもんが此処にあるのか……

白一護

「テメー！勝ち逃げかよー！」

こっちは納得がいていないようだ。



一護

「うるせえな…また今度相手してやるから大人しくしとけ」

白一護

「ちえっ…」

白一護は心底残念そうに呟いた。

一護

「じゃ、戻るから俺の服とか掴んでくれ」

トール

「うむ」

チンク

「わかった」

ちなみに、フェイト右腕、ウーノ左腕、トールとチンクは卍解死覇装の裾を

掴んでいた。

傍から見れば何だコイツら状態である。

そして、一護が目を開けると同時に4人の意識は再び暗転した。

一護

「……………おい……………丈夫か……………おい!」

ウーノ

「う……………うん……………え?」

ウーノが目を開けると一護の顔のドアップが……………

ウーノ

「!??く……………黒崎さん!?!か……………顔がち……………近いです!!/!/!/!/」

グイッ!!!

ウーノは一護の顔を思いつきり押し返す。

一護

「んお！？ああ……わりいな驚かせて……ウーノ、お前で最後だぞ」

ウーノ

「あれ……私は……」

チンク

「姉様だけが起きるのが遅かったので黒崎が心配していたのですよ」

一護

「体とかに異常はないか？」

ウーノ

「は……はい……／＼／＼大丈夫……です……／＼／＼／＼（私のことを心配して……）」

一護

「……？やっぱり顔が赤いな……熱でもあるんじゃない……」



そう言って一護はジェイルの研究室へと嫌そうな顔をしながら向かっていった。

フェイト

「心配してくれた……」

トーレ

「ホ……元に戻ってる……」

フェイト

「トーレ?どうかしたの?」

トーレ

「いえいえ!何でも無いですよお嬢様!!平和が一番です!!」

顔が怖かったなどは口が裂けても言えないトーレであった。

チンク

「トーレ姉様も損な役回りですね……(ボソッ)」

そんなチンクの呟きは風に吞まれて消えていった。

その後のジェイルの研究室……………

この作品にBL要素はありません。

これから先のジェイルには仮面を着けたハムが憑依してるかも……………

一護

「だからあー!!変な薬とか使うなって!!!!」

ジェイル

「良いではないか!良いではないか!!!」

一護

「良くはない!!!!」

ジェイル

「情けだあ…武士の情けだあ…!!」

一護

「そんなものかけるつもりもない!!!!」

ジェイル

「怖いのは…最初だけだからあさ!!」

一護

「そ…そんなに…来るなっ…!?!」

ジェイル

「きつと…癖になるから!!」

ドッタンバツタン!!

ドアの向こうに通りがかった女性職員たち

『ぽ~~~~~~~~~//>//>//>//>//>//>//>//>//』

ウーノ

「いいかげんにしてください!ドクター!!!!」

さすがに見かねたウーノが止めに入る。

ジェイル

「フフ……何人たりとも！私のごことを止めることができる者は  
いない！！」

一護

「やめろ…やめろといっている…！！」

ジェイル

「何を今更…これは皆のための実験なのだ…」

そう！これは気高い行為なのだよ…！！」

一護

「や…やめろおおおお…！！…！！」

ガイーン！！…！！

ジェイル

「ウグウオ！？」

ドサ……



ウーノ

「はあ……はあ……言う事を訊かないからです」

ウーノに背後から後頭部を思い切り引つ叩かれて、ジェイルは気を失った。

一護

「はあ……死ぬかと思ったぞ……」

ウーノ

「とりあえず今日は霊力の流れを測らせてください。」

ドクターはこんな状態ですので……」

一護

「おう……頼む」

次の日のジェイル……

ジェイル

「おいウーノ…今日はやけに女性職員が僕のことを見てくるんだけど…」

何か知ってるかい？それに昨日の記憶がはつきりしないし…  
……

後頭部はズキズキするし……」

ウーノ

「ご自分で考えたらどうですか？」(ジロツ)

ヒュオオオオオオ……

そう訊いてきたジェイルを絶対零度の瞳で一刀両断するウーノ。

ジェイル

「はい……そうします……すみませんでした……」

結局、真相は謎に包まれたままである(ジェイルだけ)。

続  
く  
……

第26話 再び日常へ (The return to daily life)

え〜…今回は…かなり好き勝手にやっつけてしまいました。

最後のネタが判る人はいるのだろうか…

何か意見などございましたら気軽に感想に書き込んでください。

そろそろアニメでも消失篇が始まりますね。

早く「Death & Strawberry 2」の場面が見たいです。

では、今回はこのくらいで。

また次回にお会いしましょう!!

第27話 シャマルパニック (Shamal panic) (前書き)

すみませんでしたぁ！！！！！！

二週間以上も間が空いてしまいました……

スランプに近い状態に陥っていたのが主な原因です。

なので今回も微妙な内容に……

しかも時間が掛かったくせに内容短いし……

悪い点を挙げていったらキリがないですね (泣)

ともあれ、何とか仕上げた27話、お楽しみください！！

平穏な日常……それは意外なものの手によって崩れ去る (笑)

第27話 シャマルパニック (Shamal panic)

ある日の機動六課……………そこでそれは突然発生した……………

ザフィーラ

「グフ……………」

ドサッ……………

盾の守護獣であるザフィーラが突然倒れたのである。

一護

「お…おい！？大丈夫か！！」

当然、一緒に行動していた一護は動揺する。

ザフィーラ

「ま……………まさか……………遅延性だったとは……………迂闊……………」

きゅ……………

そう言い残してザフィーラは気を失ってしまった。

一護

「遅延性……？まさか……毒か！？」

一護はザフィーラの言葉から一つの想定を導き出す。

一護

「だれか……そうだ！シャマルに聞けば……」

ダッ……

そう言って一護はシャマルを呼びに医務室へと走っていった。

ザフィーラ

「うっ……く……待て……一護……医務室は……ダメだ……」

若干意識の戻ったザフィーラが一護を呼び戻そうとするがいかんせん声が小さい。

さらに、またもや意識が遠ざかってくる。

ザフィーラ

「……………犯人は……………シャマ……………ガクッ……………」

このザフィーラの必死の訴えが一護に届くことは無かった……………

……………  
そもそもどうしてこうなったのか……………それは3時間前の医務室……………

ザフィーラ

「シャマル……………いいかげん俺で料理を試すのはやめてくれないか……………」

若干ゲツソリしながらシャマルにそう訴えているのは今は亡き

僕らのザフィーラ（注・死んでません）

シャマル

「お願い！…料理ができないってことがかなりのハンデになっ



てるのー!!

このままだとただでさえ人数が増えてきたのに……追い抜かれちゃうー!!」

注・一護のフラグのことです。

ザフィーラ

「せめて俺以外の男も連れてきてくれ……最悪俺がショック死してしまう……」

という訳で連れてこられた男性陣……

最初からいるザフィーラに加えて、ジェイル、ゼスト、ヴァイスさらには

グリフィスまで呼び出されている状態である。

ジエイル

「ザファイラ……どうして僕らはこんなところ（医務室）に連れてこられたんだ？」

ゼスト

「うむ……この後はエリオに槍での戦闘を教える予定だったのだが……」

ヴァイス

「医務室………良い響きだ………（ハアハア）」

グリフィス

「………とりあえず………自重してください」

ザファイラ

「すまん……俺も命が惜しいのだ………」

4人

『????????』

シャマル

「あら？結構来てくれたのね」

そう言いながらシャマルが何かを持って現れる。

ザフィーラ

「来たか……………」

それをザフィーラはまるで仇敵が現れたかのように迎える。

ゼスト

「お…おい…ザフィーラ？」

ヴァイス

「だ…………旦那…………冷や汗が半端ないっすよ……………」

ザフィーラは全身から冷や汗を流している。

その量は脱水症状になっても不思議でない量だ。

ジェイル

「なぜだろう…………物凄く……………」

グリフィス

「イヤな予感が……」

既に何か感じている二人……

シャマル

「大丈夫よ。今日はただの《……》クッキーだから」

ザフィーラ

「それがダメだと何度言えば……ブツブツ……」

文句を言いつつも既に諦めモードのザフィーラ。

そこで一人の男が行動を起こす。

ジエイル

「すまない！！今日は体の調子があまり良くないんだ！！僕は失礼させて……」

シャマル

「あら！なら丁度よかったわ。体にいいものだけしか入ってないから」

きつと効くわよ」

ジェイル

「うぐっ……」

いち早くこの空間から脱出しようとして試みたジェイルであったが、

シャマルの口撃（誤字に非ず）によって退路を塞がれてしまった。

ヴァイス

「なあ……これって確実に一護にやるためだろ？」

グリフィス

「そうですね……さすがに料理が苦手ということは判っているようですよし……」

まあ実験台というかそれ以外にないでしょうね」

ザフィーラ

「ふふふ……そんなことどうでもいいじゃないか……」  
「こは諦めて俺と心中してくれ」



言わなくても

いいじゃない!」!

5人

『いやいや』

それにしてもこの5人息がぴったりである。

シヤマル

「とりあえず食べてみて、それから文句を言ってちょうだい!」!

ザフィーラ

「その一口がダメだと」

とつとつ作者によって略される始末。

ヴァイス

「と……とりあえず……一口……」

ザフィーラ

「ま…待てヴァイス！！早まるな！！！！」

サク……………モグモグ……………

ヴァイス

「……………？味が……………しない……………？」

ゼスト

「何？」

ザフィーラ

「どういふことだ？」

グリフィス

「まさか……………余りの味に味覚が麻痺したんじゃ……………」

シャマル

「ちよつとちよつと！！いくらなんでもそれは「y」

シャマルの言い分ももつともだが、ここは敢えて無視である。

ヴァイス



「いや……コイツはマジで味がしねえ……それに……匂いもしないぞー!？」

ザフィーラ

「莫迦な……俺の鼻でも匂いがしないだど!？」

ジェイル

「これは……新たな研究材料の予感が……」

などなど各自好き勝手に批評している。

数分後……

ザフィーラ

「結果として……実力の向上は見られたが、味どころか匂いさえしないのは

いかななものか、ということでは今回は見送れ」

まあそうだろうね。

シヤマル

「~~~~~」

5人

『はあ……………』

5人はそれぞれ溜息をつきながら医務室を後にしたのであった……………

そんなことを知らない一護はただひたすらに医務室を目指していた。

一護

「全く……………一体何なんだ……………」

半分近くはお前の所為です。

ゼスト

「うっ……一護……」

一護

「な……ゼストさん！？まさかあんたも……」

ゼスト

「ああ……おそらくヴァイスとグリフィスもだ……」

一護

「な……クソっ！！……一体誰が……」

ゼスト

「ああ……そのだな……」

一護

「よし……とにかく今は医務室に……！」

ゼスト

「ま……待て……！！……グフッ……」

ザフィーラと同じく肝心なところで声が出ない。

ゼスト

「敵は……医務室に……あり……バタッ……」

歴戦の勇士ですらダウンさせるシャマルクッキー……恐るべし……

医務室……

一護

「シャマル!! 居るか!？」

シャマル

「あら? どうしたの? そんなに慌てて」

一護

「ザフィーラ達が倒れたんだ!! 速く手当をしてくれ!!」

シャマル

「!?!? わかったわ!

「それじゃあ誰かが来た時のために一護くんはここで待っていて  
！」

一護

「おうー！」

シャルル

「（……………もしかなくても……………私の所為……………？）」

その通りでございませう。

何故か必要以上に慌てた様子でシャルルは出て行った。

一護

「しっかし……………何であいつ等……………拾い食いでもしたのかな……………」

いくらなんでも失礼だと思っただが……………

ギョルルルルルルル……………

突然、一護のお腹が鳴った。

それもそのはずである。

なぜなら、一護はザフィーラと一緒に食堂へと昼食を食べに向かっていたのだ。

当然、何も食べていないうえに医務室までダッシュできたため、一護の空腹は

MAX状態である。

一護

「く……………／／／／／……………何か食うものでもない……………よな……………  
ここ医務室だし……………」

まあ、普通に考えたらこんな医務室なんかには食い物は置いてない。

一護

「！！」

だがこの日は違った。

一護の目には今、皿に載せられているクッキー達が写っている。

そう、このクッキーは件のリーサルウェポン・シャマルクッキーである。

一護

「ま…まあ……一個ぐらいなら……」

そんなものとはつゆ知らず、一護は空腹を紛らわすためにその手を伸ばした……

結局、ザフィーラ達は食中毒ということで数日間の医務室通いが決定となった。

その日の午後、一護はゼストの代わりにエリオの訓練に付きあうこととなった。

最初は何の問題も無く進んでいたかに見えた。が、しかし……

一護

「……………」

一護の顔色が明らかにおかしいのである。

例えるなら完全な青、真っ青である。

エリオ

「あ……あの……兄さん……？大丈夫……？」

さすがに心配になったエリオが一護に話しかける。

一護

「……………」

一護は答えない。

エリオ

「……に……兄さ……！？」



返事が無いのを不思議に思ったエリオが顔を覗き込むとそこには……

立ったまま白目をむいて気絶している死神代行・黒崎一護（故）の姿が……

エリオ

「死んでないですよ!?!」

おお!? エリオまで地の文に突っ込むとは……

エリオ

「……じゃなかった……だ……誰か……シ……シグナム副隊長……」

「……す……!……!……!」  
なのはさ……ん……!……!……! 兄さんが……兄さんが意識不明で……

エリオの必死の叫びが訓練場にこだました……

再び医務室……………

男衆

『う……………う……………う……………ん……………』

結局一護も食中毒集団の中に名を連ねることとなった。

機動六課内某所……………

そこには椅子に縛り付けられている白衣を着た女性を中心に数名の他の女性たちが

取り囲んでいる。

はやて

「さてシャマル……………あなたは何故そこに縛られてると思うん

「？」

シャマル

「えっと……お料理に……ちよつと失敗しちゃったから……？」

なのは

「ちよつと……？無味無臭で食中毒を発生させる料理の何処がちよつとなの？」

もしかして……フザケテルノカナ？カナ？（コホーコホー……）」

約一名、怒りすぎて某ベ　ダー卿みたいになっている。

フェイト

「鑑識の人が驚いてたよ……無味無臭のクッキーなんて初めて見たって……」

ドゥーエ

「全く……どこの暗殺者よ……このクッキー……どこかの市場に出したら」

数分でぼろ儲け出来るレベルよ」

何処の市場かは察してください。

ウーノ

「つまみ食いをした一護さんにも確かに批はありますが……」

これを処分せずにそのままにしておいた上に、一護さんがこれを食べる理由を

作ったのもあなたじゃないですか……」

シャマル

「うう……ごめんなさい……」

はやて

「それに……一番許せんのは……抜け駆けをしようとしたことや……」

女性陣（シャマル以外）

『そつだそつだ……』

はやて

「というわけで、これから一週間シャマルは医務室立ち入り禁止な……！」

シャマル

「な！？それじゃ患者の人たちは……！」

はやて

「その辺は抜かりないで……これから一週間はシャマルの代わりにウーノに

保険医を務めてもらうんや……！」

ウーノ

「不束者ですが……！」

そう言ったウーノは既に白衣を着ている。

シャマル

「そんなあ~~~~~（泣）」

ちなみに、ウーノには抜け駆けをしないという誓約書を書かせたそうです。

以下、蛇足的舞台裏……………

皆さんは気付いているだろうか……………

この集まりに何故か参加していない人物がいることを……………

そう、彼女の名は……………烈火の将・シグナムである。

実は彼女、非番であったために自室で料理の練習をしていたようなのだが……………

( 目的は言わずもがな、一護のためである。妬ましい…………… ) ( 怒 ) ( )

その結果として出来上がったものは烈火の将の名の通りに焼き過ぎた、

まっ黒焦げのマテリアルXだったそうだ。

本人曰く、

シグナム

「おかしい……私は卵焼きを作ったはずなのに……」

とのこと……

この前までシャマルをバカにしていた自分が恥ずかしくなったのか  
この集まりには

参加せず、黙々と料理の練習をしていたそうです。

続く……

一護

「えっ！？俺って今回は走って摘み食いして食中毒になっただけ！？」



第27話 シャマルパニック (Shamal panic) (後書き)

はあ~~~~~……

いかがでしたでしょうか……

ダメダメでしたよね……………あれだけ引つ張ってこの位か……………

というのが皆さんの意見だろうと思います。

うう……………

何かご意見ご感想がございましたら気軽に書き込んでください。

また、簡単なご要望でも構いません。

実現が可能でしたら返信にてお知らせします。

(出来ないときもお知らせします)

では、いつになるか分かりませんがまた次回にお会いしましょう！

！

うん：今回もネタ満載でお送りします。

ちなみに、サブタイの英語は「羨ましいぞ……!一護……!」です(笑)

次くらいは真面目にできたら……いいなあ……

あと、ユニークアクセス数が7万人と総合評価が1000ptを突破しました。

皆さんいつもありがとうございます……!

そして、これからもよろしく願います……!

2011/11/09 18:30を持ってアンケートを終了いたしました。

皆さん、アンケートにご協力ありがとうございます。

では、本編をお楽しみください……!

シヤマルパニックから数日、一護は休暇を貰っていた……

一護

「ふう……今日はどうすっかな……」

そう呟いてクラナガンの街を歩いているのは休養中の一護であった。

シヤマルパニックによってしばらく安静が続いていたので、息抜きにどうだと

ヴァイスに勧められて街にやってきたそうだ。

一護

「つつても……俺が街に出てもすることなんて殆どないんだけどな……」

とは言っても、このまま考えても埒が明かないので一護は服を捜すことにした。

その頃の機動六課……………

乙女's

『あゝ……………一緒に行きたかったな……………』

全員が口をそろえて同じことを言う姿は中々にシユールである。

ジェイル

「あのね……………僕の研究室は君たちのお茶会の会場じゃないんだけど……………」

そうやって乙女'sに突っ込んだのは本来のこの部屋の持ち主である

ジェイル・スカリエツィであった。

はやて

「まあまあ！ええやないかい！！

……………それに……………この中で誰が一番偉いんか分かつとるよね？」

とうとう職権乱用まで……

ジエイル

「ああ……世界の悪意が見えるようだよ……」

お前もネタに走るんじゃない!!

はやて

「はあ……それにしても……この団体ってかなりの大所帯になってきたんと

ちやう?」

なのは

「そうだね……元はといえば私とシグナムさんだけだったし……」

フェイト

「ホントならなのはたちの前にすずかやアリサがいるんだけどね」

はやて

「……実はな……ここだけの話……私がお世話になった聖王

教会の

カリムが一護くんに興味持ってるらしいねん」

ドゥーエ

「それってかなりの重要人物じゃない……確か……」

予言者の著書とかいう古代プロフェーティン・シユリフティンベルカ式のレアスキル持ちね」

シグナム

「しかし……なぜ彼女が……？一護とは全く接点は無いです  
が……」

はやて

「それがな……ロツサが一護くんの記憶をちよろつと見せても  
うてん……」

で、そのままこの人の話を直接聞きたい……とかいう話になっ  
たみたい……」

シャマル

「それは……かなりマズイですよ？唯でさえ天然のフラグメ  
ーカーなのに……」

容姿も普通にカッコいいと思いますし……」

乙女、s

『うんうん……!』

どうでもいいけどこいつ等ノリノリである。

乙女、s

『絶対に新しいフラグが建つ……!……!……!』

ジエイル

「キミたちって……イヤ……もう何も言つまい……!」

再び戻ってクラナガンの街……

一護

「結局あまり良いモンなかったな……まあ……地球に似てるとは

言っても

全部が全部ってわけじゃないだろうし……仕方ねえか……」

そう言っつて再び歩を進める一護。

一護

「すずかとアリサ……今頃何してんだろうな……あのとき……  
…終わらせたら

帰ってくるってアイツらには言ったけど……何時になるんだろうな……」

っと……弱気になってたらいけねえよな……」

海鳴にいたころの日常……翠屋で働いて……すずかやアリサに振り回されて……

士郎や美由希と鍛錬をし……偶に恭也に絡まれる日々、その何気ない事の大切さが

再び非日常へと戻ってから分かった一護であった。



一護

「……ん？アイス屋か………そういや………」

そう言って一護が思い出したのは………

ヴィータ

「何かよ！最近クラナガンにスゲーうまいアイス屋が出来たらしいんだよ。」

………でも最近は忙しくて行けないんだよなあ………ああ………  
アイス………」

というエターナルロリータの言葉であった。

一護

「まあ………ヴィータだけじゃなくてあいつら全員には世話になってるから………」

このくらいはしてやるかな………」

そう言って一護は、六課の人数分のアイスを（エリオとスバルのこ

とは考慮済み)

購入し、配達を依頼した。

一護 (一護は給料をあまり使わないので一応懐には余裕があったりする)

一護

「ヤバいな……もうすることが無い……こんな時間に帰っても暇だし……」

そう一護がブツブツ呟きながら歩いていると……

ドンッ

女性

「キャッ!?!」

一護

「じゅっ!?!」

女性とぶつかってしまった。

だが、一護は持ち前の反応速度で女性が倒れる前に抱きとめる。

女性

「ふえ………？」

女性から上がる気の抜けた声。まあ、それも仕方ない事である。

いきなり目の前に男性の顔がドアップで飛び込んできたのだ。

一護

「悪い……考え事してて余所見してた……ケガ……してねえか？」

女性

「は……はい……こちらこそポーツとしてまして……」

女性は一護の問い掛けに呆然としながらも答える。

そして、一護の顔を見て何かを思い出したように尋ねた。

女性

「…………あの……人違いでしたら……すみません……黒崎一護さん  
ですか？」

一護

「うえ？何で俺のこと……」

女性

「ええと……私は聖王教会の騎士でカリムというものでして……

それで、あなたのことはロツサからよく聞いているんです。

それに、はやてのこともよく知っているんですよ」

一護

「ああ……それでか……あのナルシストめ……勝手に話しやがっ  
て……」

カリム

「ま……まあまあ……（汗）

私がお願いしたようなものなのでそう責めないであげてくだ  
さい」

ちよつとイラツとした一護を静かになだめるカリム。

一護

「ああ…軽い冗談だよ…で？…何でこんなところでボーツとしてたんだ？」

話を聞いた限りじゃはやてよりも上の階級なんだろう？」

カリム

「はい…それが…お恥ずかしながら…一緒に来ていた者達と逸れて

…「…すみまして…」

一護

「あれ…？端末とかは持ってないのか？」

カリム

「はい…今回に限って忘れてきてしまいました…それに私の立場上…」

「…広域に無差別に念話を飛ばすわけにはいきませんので…」

一護

「そうか……わかった。じゃ、俺と一緒に探してやるよ」

一護はさも当然のようにカリムにそう提案する。

カリム

「あの……迷惑ではありませんか？見たところあなたは休暇中のようですし……」

一護

「いや……そのだな……町に出て来たまでは良かったんだがな……」

することが殆どないことに気がついてな……途方に暮れてた時に

あんたにぶつかったんだ。だから全然問題ないぜ！」

威張っていうことでもないがな。

一護

「うるせえぞ作者……！」

カリム

「????黒崎さん??」

一護

「ああ、悪い悪い！今ちょっと宇宙の意思（作者）と交信して  
た」

カリム

「は……はあ……（宇宙の意思??）」

一護

「まあ……しばらく歩いてみるか?」

カリム

「あ……はい……」

乙女's

『この気配……またフラグが……!……!』

二人でクラナガンの街を歩いている一護とカリム……それはデート  
…なのか？

一護

「はぁ…それにしても…見つからないな…どんな奴なんだ？」

カリム

「あれ？言ってませんでしたっけ？すみません…ロッサと私の  
秘書に

フェイト・テストロッサさんのお兄さんです」

一護

「うん？何だそのメンバー……それにフェイトのお兄さんって  
……」

一護の頭に過ぎる一抹の不安……お兄さんという存在……



一護がこの時思い出していたのは……

恭也

「なあのおはあわあ！……きいさあまあんぞに……あ……ちよ……忍！？」

俺は兄として妹の心配をだな……ええ！？母さんまで何を……ギヤー……！？」

という高町家のシスコン長男であった。

一護

「……………」（汗）

まさか……アイツの兄貴まであんなカンジ（恭也）じゃないだろっな……」

カリム

「はい……？確かに彼は妹思いの良いお兄さんだと思いますけど……」

一護

「その妹思いがいけないんだよ……俺の知り合いは……」

再び思い出して頭を抱える一護であった。

カリム

「ははは……(汗)」

それがどんなものかカリムにも想像がついたようだ。

一護

「まあ…ロツサがいるなら…白いスーツだし直ぐにわかるだろ」

カリム

「そうですね…姉としては恥ずかしいのでやめて欲しいのですけど…」

こんな時にも白スーツなのがヴェロツサである。

?????

「おいおいおい!!コイツってあの時の奴じゃね?」

?????

「あァン?そついやこんな派手な髪だったなァ!」

???

「何だよ…お前らこんな奴に捻られたのかよ…情けねえなあ…」

一護のことを何故か知っているような感じで近づいてくる男が3人。

一護

「ああん？お前ら…誰だ？」

???

「てめえ！！忘れたとは言わせねえぞ！！人が折角良い女捕まえたと

思ってたのに…」

???

「しかも…今日は別の女連れてんじゃねえか！！羨ま…じゃなかつた…」

悔し…でもなかつた…お前のことなんか何とも思っていない  
だからな！！」

???

「……………何のツンデレだ……………(汗)」

一護

「……………ああ……………あの時のチンピラ達が……………」

チンピラたち

『!?!?!?!?!?!?!?!?!?!』

カリム

「あら……………何か驚いてないですか？」

チンピラA

「てめえ……………何で俺たちの名前を……………」

一護

「へ……………?俺……………何か名前言ったか？」

チンピラB

「ああ!ハッキリと言ったぜ!!!」

チンピラC

「何をかくそう俺たちの名は……………」

チンピラたち

『チン・ピラ・たち！！だ！！だ！！だ！！だ！！』

ゴーーーーー

一護

「フーン……」

カリム

「あの……強く生きてー！」

全世界のチンさん、ピラさん、たちさんにお詫び申し上げます。

チン

「ええ！？悪いのって俺たち！？」

ピラ

「だから俺名乗るのいやだって言ったんだよ……」

たち

「……」

チン・ピラ

『お前は一番まともだからそんなことが言えんだよ!!!!』

一護

「なあ…もう帰っていいか…俺…」

チン・ピラ

『待てよ!!!!!!!!』

たち

「はあ…わりいけどそれは無理だわ…お前は俺たちに負けるんだからな!!!!」

チンピラたち

『うおりゃアアアアア!!!!!!!!』

存在だけでなく、言動にさえ漂う小物臭…こいつ等本物である。

一護

「はあ…カリム…後ろに下がってる」

カリム

「は…はい…！」

一護

「はぁ…俺って何か憑かれてんのかな…」

ガシッ…ゴッ…！…ドサッ…

一護は先ずチンのパンチを受け止め、顎にアッパーを喰らわせて昏倒させる。

ピラ

「やられるの早…！」

たち

「チッ…同時にやるぞ…！」

前後にまわって同時に殴りかかる残されたピラとたち（…）…  
だが、

ブン…！…スカッ…ゴイン…！…！

ピラ・たち

『グエツ!?!』

一護が直前でしゃがんだため、パンチは空振り、その上味方同士で相討ちに……

一護

「逆に聞くけど……何で一人増やしただけで勝てると思ったんだよ……」

たち

「別に……大した理由じゃねえよ……」

一護

「あん？意外とタフだな……お前……」

たち

「うるせえよ……まあいい……こいつらが勝てると思った理由

……

そいつはな……俺がこいつらもんを持ってからだよ……!」

ビュッ……ジャキッ……!」





だが、一護はナイフの一撃でさえ簡単に受け止めてしまった。

一護

「しばらく……………寝てる……！」

ゴッ……………ドサッ……………

最後に一護の右ストレートを喰らって残っていたたち（・・）も倒れた。

さすが不良王・黒崎一護である。

一護

「誰が不良王だ……誰が……！」

カリム

「ま……まあまあ……！黒崎さん！落ち着いて……！」

一護

「フッフッフッフ……………」

カリム

「それにしても…強いんですね……」

一護

「ま…この位はな…六課でも訓練してるし……」

ロツサ

「お〜い…何か騒がしいと思ったたらやっぱりここが義姉さん」

若干気が立っている一護の前に現れたのはやはり白スーツのロツサ。

一護

「ようロツサ…よくも勝手に話してくれたな…（怒）」

すかさず一護はロツサにヘッドロックを掛ける。

ロツサ

「わわ…！？何で君が此処にいるんだ一護！…ってまさか義姉さん！？」

「なんでばらしたんだ！！…内緒にしといてって……」

カリム

「まあまあ…いいじゃない」

ロッサ

「良くないよ!？」

????

「いつもナンパばかりでサボっていた天罰が下ったんでしょ」  
う

一護

「え〜っと…アンタは？」

突然現れたおかつぱ頭の女性に尋ねる一護。

シャツハ

「どうも、騎士カリムの秘書をしております。シャツハ・ヌエラです」

一護

「機動六課に協力している黒崎一護だ。よろしくな」

シャツハ

「はい、存じ上げています。そこに居るナンパ男のお蔭で」

シャツハもなかなか容赦ないな……

一護

「ほう……」

ギリギリギリ……

一護は容赦なくロツサに関節を極めている。

ロツサ

「い……イタタタタ!? 痛いって……ホントに!! ああ……そこは……  
そっちには

曲がらないって……あぁっ!?! ミシミシって音が……イヤアアア  
アア……」

数分後のソコには……

一護

「ふう…スッキリした!!!」

とホクホク顔の一護と

ロツサ

「うう…もうお嫁にいけない…」

と泣き崩れるヴェロツサの姿があった。

???

「全く…帰ってこないと思ったら…こんなところまで……」

カリム

「あら…クロノ提督」

ロツサ

「うわあああん!!一護がいじめるんだあ〜!!!!」

一護

「自業自得だろ」

クロノ

「そつか…キミが黒崎一護か…」

一護

「あんたがフェイトの…兄貴…？（似てない…？）」

クロノ

「ああ…クロノ・ハラオウンだ。海鳴市でエイミイにあっただろっ？」

彼女は僕の妻だ。それと…一応言っておくと…

フェイトは母が養子にしたんだ。僕に似てないのは当然だ」

一護

「…俺って顔に出るのか…？」

クロノ

「ふ…そのまんまの顔をしていたからな」

カリム

「あら…もう打ち解けたようで良かった」

だが、そつは問屋が卸さない。

クロノ

「時に黒崎……フェイトには手を出してないだろうな……」

一護

「やっぱりあなたもそつ言うヤツかよ!?!」

クロノ

「いいか…もし何かあって見る…アルカンシエルで……」

シヤツハ

「もう……いいかげんにしてください!?!」

ガイーン!?!?!

クロノ

「うぐうおっ!?!?!?!?!?!」



ドサッ……………

いいかげんに業を煮やしたシャツ八の一撃で沈むクロノ。

一護

「おい……………いいのか……………コレ……………」

シャツ八

「いいんです。どうせギヤグ補正がかか（以下自主規制）」

全員（クロノ以外）

『……………（大汗）』

アルカンシエルはどうかと思つぞ。

フェイト

「はっ！？何か身内が恥をさらした気が……………」

なのは

「フェイトちゃん？」

一護

「ま…何はともあれ見つかってよかったよ。俺はもうそろそろ六課に戻る」

「ことにするよ」

時間も時間なので一護は六課に戻ることにしたようだ。

カリム

「そう…残念です…もっとお話してきたら良かったのですが…」

一護

「まあ…そのうち…な」

ロツサ

「そうだね…僕がとりなせば何時でも良い筈だよ。」

時間があるときに来るといいさ」

シャツハ

「騎士カリム… 私たちもそろそろ…」

どうやらカリム達も帰るようだ。

ところでシャツハの肩には未だに伸びたままのクロノの姿があったりする。

カリム

「はい…では黒崎さん…また」

一護

「ああ…またな」

クロノ

「いいか！黒崎！！フェイトに手を出したら…ああっ！？待ってくれ！

シスターシャツハ！！僕はまだ…あああああ~~~~~

……」

一護

「……………(汗)」

一護が帰ってきた後の機動六課……………

はやて

「なあ一護くん…今日は誰を引っ掛けたん？」

一護

「…取り敢えずお前が俺をどう思ってるかは分かったな…」

はやて

「まあまあ！そう言わずに…な？そうでなければ声を掛けられたとか…」

一護

「あ〜っと…お前の知り合いつていうカリムって奴にならあつ

たな

はやて

「なん……やと……」

一護

「お……おい……はやて……顔が面白いことになってるぞ……」

そこには顔を劇画調に変えて戦慄しているはやてが……

はやて

「（全員！！お茶会場（ジェイルの研究室）に集合！……！！」

！）」

頭の中は混乱しているにもかかわらず、速攻で乙女、sを呼び出したはやて。

マルチタスクの無駄遣いである。

はやて

「一護くんはそいつでちょっと待っててな？」

そう言って劇画調のまま物凄い速度で走り去っていったはやてであった。

一護

「な…何だったんだ……？」

お茶会場（ジェイルの研究室）……………

はやて

「みんな…恐れていたことが現実のものとなったで…」

乙女's

『ま…まさか………』

はやて

「カリムが…一護さんに接触してもうた……orz」

乙女's

『orz』

こいつ等ノリノリ

はやて

「これは……詳しく聞く必要があると思つたやけど……どない？」

乙女's

『承認！……！』

はやて

「よっしゃ！……改めて……行くで……！」

お前ら……仕事は……？

六課食堂……

一護

「お…ちゃんと届いてたな……って…アイツら居ないんだがな……」

乙女<sup>、s</sup>

『一護(くん・さん)！……！……！』

一護

「おう！…どうした？」

はやて

「カリムとは何があったんや！…」

一護

「何って…アイツが一緒に来てたシャツハってシスターとロツサに

フェイトの兄貴のクロノと逸れたって言うから…一緒に探して、

で…ドゥーエの時と同じチンピラたちが絡んできたから追っ払った。

って感じだが……それがどうかしたか？」



なのは

「クロノくん!？」

フェイト

「お兄ちゃんにまで……」

はやて

「何でそのメンバーなん？」

一護

「なんでもカリムがあまり街に出たことが無いから何事も経験  
だって

い……………  
ロツサが連れ出して、結局全員付いて行くことになったらし

フェイト

「お兄ちゃんは何か言ってた？」

一護

「ああ……フェイトはやらんぞ……!とか言って絡んできてな……



「まあ…まだ完全には建っていないようなので…」

一護

「お〜い…もういいか？そんで皆には悪いけど六課の全員集めてくんねえか？」

はやて

「？なんで？」

一護

「いや…今日街で六課全員分のアイスを買ってきたからな。」

特にヴィータとスバルは欲しがるだろ？新しくできた店みたいだったし…」

はやて

「え…それってものすごく高くなかったん？」

一護

「俺はあまり使わないからな…余裕があるんだよ。」

それに、いつも世話になってるからな……コイツはその礼だ」

乙女、s

『ジーーーーーッ』

乙女、sは一護の心遣いに感動したようだ。

こついったさりげない行動でフラグは強化されていくのである。

この後、全員でアイスを美味しくいただきました。

案の定、ヴィータとスバルにめちやくちや感謝された一護であった。

カリム

「ふふ…カッコよかったわね…彼…早く逢いたいわ…」

実はこっちのフラグも乙女たちの想像以上に巨大化していたりする。

ちなみに、この独り言を偶々聞いた者がいたのか、教会騎士たちの間で

?騎士カリムにとつとつ春が!??という噂が流れたらしい……

続く……………

今回はいかがでしたでしょうか？

ちよつと無理矢理感が漂ってますね……まあ、あまり気にしないでください。

今回のアンケートは終了しました。

結果は次話の前書きで発表いたします。

この小説自体に対するご意見・ご要望なども随時受け付けています。

何かございましたらお気軽に書き込んでください。

感想もお待ちしています。

では、また次回にお会いしましょう。

どうも、遅くなりました。作者の黒棺です。

言い訳としては主に体調不良です。パソコンに向かうと頭が痛くな  
って……

ちなみに、サブタイの英語は「時すでに遅し」です。

あと、報告としてPVが80万アクセスとユニークが8万人、お気  
に入り登録数が400件を超えました。

皆さんどうもありがとうございます。

これから、遅くなったりすることも多々あるかと思いますが、どう  
かこの作品を

よろしくお願いいたします。

では、最新話をお楽しみください！！

日常の中でも鍛錬を忘れない……それは良い事なのだが……  
もう一人のバトルマニアが一護の前に立ちはだかる！！

第29話 あの時 してねばって思っ時あるよね？(Too Late)

フェイト

「ふふ…やっとこの時が……」

そう不気味に呟いたのは、機動六課ライトニング小隊の隊長である

フェイト・T・ハラウン執務官。

一護

「はあ…忘れてたと思ったのに……」

その目の前で陰鬱な空気を醸し出しているのは機動六課の民間協力者でフェイトと

同じライトニング小隊に所属している黒崎一護であった。

フェイト

「いい？一護…手加減なし…だよ？」

一護

「てつきりシグナムぐらいなもんかと思ってたんだが……」



しかもなんかデジャヴだし……ま、やるだけやってやるか」

ガシヤ……………

そして、2人は互いの得物を構える。

フェイト

「いくよ」

一護

「おう」

一・フエ

『はあっ……………』

ギインッ……………

観戦サイド……………

シグナム

「む…始まったようだな…」

なのは

「というか…無理に模擬戦する必要はもうないんじゃない…」

はやて

「そつやね…一護くんの実力がぶっ飛んでるんは確認済みやし…」

とはいえまだ見せてないものもあるのは本人と作者、ロツサぐらいしか

知らないのではあるが…

ジェイル

「一応ハンデとして卍解は使用禁止とのことだよ」

ウーノ

「ええ…それに靈力のデータが取れるので今回ののはやはり必要かと」

ガチャガチャ……

クアットロ

「あの…ウーノ姉様…カメラなんかどうして…しかも4台…」

ウーノ

「あら…記録用と観賞用さらに保存用と実用に取っておくのだけれど…」

誰だ！？コイツに変なこと覚えさせたのは！！！！

はやて

「うんうん！！ウーノもわかってきたやないか！！！！」

ああ……まあ……大体想像はついてたけどね……

乙女's

『やっぱりいるよね（な）実用！！！！』

乙女' S 以外

『実用って…何!?!』

判らない人たちからするとこんな感じですよ。

再び戻って模擬戦サイド……………

フェイト

「やっぱり…速いね…」

ヒュン! ヒュン! …… ガッ… ギン!!

そう言いながらフェイトは一護へプラスマランサーを放つ。

だが一護はそれの特性を感じ取ったのか避けずに斬り飛ばす。

一護

「よく言っぜ…ッと！全力じゃないにしろここまで付いて来といて…よッ…！」

ドッ…！！…！！

一護も負けじと月牙天衝（小）をフェイトへ向けて放つ。

これは本来の巨大な攻撃範囲を狭める代わりに攻撃速度を速めたもので、

この模擬戦の中で一護がフェイトの速度に合わせる為に考えたものである。

フェイト

「（！？速い…！防御を…！！）」

一護の月牙に対しての先入観からか、攻撃速度に驚いてしまい一瞬の判断が

遅れるフェイト。

その為に、バルディッシュはディフェンサープラスを発動させる。

ドガァ！！！！

そして、一護の月牙天衝（小）はフェイトに命中した。

なのは

「フェイトちゃん！？」

シグナム

「大丈夫だ高町… テスタロッサは直前で防御を張った。

それに……一護もその辺りは加減しているのだろう……

先程のあの一撃に普段ほどの威力は無い……………」

モクモクモク……………」

月牙が当たったフェイトの周辺にはかなりの煙が立ち込めている……………」

シグナム

「……………」ハズだ……………」多分」

なのは

「ちよ……………」もうちよっと自信持って言うてくださいよ!？」

一護

「……………」受け流したのか……………」

フェイト

「うん、でもまさかカートリッジを一個使うことになるなんて…

威力を抑えてるんだよね？さっきの月牙天衝は」

一護

「お前の速さに付いて行くための付け焼刃みたいなもんだけどな。

一応効くみてえだけど…実践ではまだまだだっただけだ…」

フェイト

「やっぱりあの…精神世界みたいなところで修行してるの？」

一護

「まあな。俺の技って規模がいちいちデカすぎるんでな…

……………それによく暴発するしな……………（ボソッ）」

そうこの男、鬼道の練習中に暴発させた回数が既に三桁以上。



その度に頭がもっさりアフロになって白一護に大爆笑されるのがオチと化していた。

フェイト

「？一護？（最後がよく聞こえなかった）」

一護

「んん！！何でもねえ…：そんなじゃ…：他にも修行の成果ってのを  
見せてやるよ」

フェイト

「うん…でも…簡単には勝たせてあげないよ？」

一護

「いくぜ…」

ブンッ！…！

そうやって一護は斬月をフェイトへ向けて投擲する。

フェイト

「これは…！…！…！…！…！…！…！」

シャッ……

ドガアッ！……！！

フェイトはデッドリー・ダーツを初見ではないためか避けることに成功する。

だが、

フェイト

「……………少し掠った……………！！」

デッドリー・ダーツの速度が思っていた以上に速かったのである。

フェイト

「（一護との模擬戦のことも考えて映像を見た時から想定はしていた…」

でも…ここまで事前予測との差があるなんて……………」

一護

「（…………ん…………やっぱりやり難いな…………）」

だが、当の一護はフェイトとは全く反対のことを考えていたりする。

一護

「（やっぱり…………こういう戦い方は向いてねえのか…………？）」

フェイト

「今度はこっちだよ！受けてみて！！ハーケン…セイバー！！」

フェイトが反撃に転じ、ハーケンフォームのバルディッシュから三日月形の刃

を射出する。

それは高速で飛翔、回転しながら自動誘導で一護へと向かっていく。

一護

「！？誘導系か！！チツ…………！！」

ブンッ！！…………フォン！！…………ガギイイイン！！！！

一護は瞬歩で回避をするが、魔力刃は的確に追尾していき、遂に一護を捉える。

一護

「ク……………」

斬月で何とか受け止めはしたものの、魔力刃は消えずに一護へと迫り続けている。

フェイト

「さっきのお返しだよ…セイバーブラスト!!!」

一護

「何!?!」

ドガアツ!!!!!!!!!!

フェイトのその声と同時に魔力刃が爆発し、一護を襲った。

トーレ

「おお……さすがお嬢様……伊達に執務官ではいらっしやらないな……」

いつの間にか合流している数名のナンバーズたち。

チンク

「さすがに今のならダメージぐらいは……」

ジェイル

「いいや……よく見てみるといいよ……」

チンク

「え……?」

フェイト

「それは……………何？」

一護

「ああ……………お前らにはまだ見せたこと無かったよな……………」

そう言った一護の前には円状の霊圧の壁が発生している。

フェイト

「まさか……………鬼道……………」

一護

「お！よく憶えてたな……………ここら辺までなら詠唱破棄できるよ  
うには

なっただけど……………やっといて正解だったな」

そう、斬月にこの防御縛道までは詠唱破棄で発動できるようにみっ  
ちりと

仕込まれていた。

一護

「縛道の三十九・円閘扇。お前らの魔法で言う防御系だ」

フェイト

「苦手だったんじゃ……」

一護

「いや、今でも苦手なまんまだぞ。

でも……そのままにしておくほど俺も呑気なわけじゃないからな……」

フェイト

「そっか……今のを防がれるなら……もっと強い一撃でいかなきゃね……!!」

一護

「こっちは先ずお前の動きを止めねーと……な！破道の三十二・黄火閃!!」

ドゥッ！！！

一護はフェイトへ斬月を水平に向け、破道・黄火閃を放つ。

フェイト

「当たらないよ！！」

フェイトはそれを躲し、反撃に出る。

フェイト

「サンダースマッシャー！！！！！！」

ゴウッ！！！！

一護

「……………雷鳴の馬車……………」

ブンッ！！ドガアッ！！！！！！

一護はそれを鬼道を詠唱しながら月牙天衝で相殺し、フェイトを攪乱するために



移動し続ける。

ブンッ！！！

一護

「……………糸車の間隙……………」

フェイト

「詠唱！？させない！！！！」

一護の意図に気付いたフェイトは阻止しようとする。が……………

ヒュン！！！！ブン！！！！

フェイト

「あ…当たらない…！？」

六課の中では飛び抜けた速度を持つフェイトですら一護の瞬歩には付いていけない。

一護

「……………光もて此を六つに別つ……………」

そうこうしている間に、とうとう一護の詠唱が完了する。

ブンッ！！！……………

そして、フェイトの視界から一護の姿が消えた。

フェイト

「な……………！？どこに……………」

フェイトは一旦建造物の屋上へ降りる。その時、

ザッ！！！！

一護が再び背後に現れ、背中に手を当てられる。

一護

「終わりだぜ…縛道の六十一・六杖光牢！！」

キーン……………ガガガガガッ！！！！！！

フェイト

「なっ！？動けない……………！！！」

一護

「ふう……………これで模擬戦終了……………でいいんだよな？」

フェイト

「ふう……………はい……………参りました……………」

ちなみに、一護が

一護

「（いや）……………土壇場で成功して良かったぜ……………」

とか思っていたことは皆には内緒である。

ジエイル(マッド)

「フフフフ……全く……イイものを見せてもらったよ!!」

これで研究がはかどるといふもの!!…これで霊圧の研究は実践段階に

移しても良いだろうねえ……………フフフフフ……………」

ウーノ

「エリオさん、キャロさん、ルーお嬢様、アレを見てはいけません。」

目の毒です。視神経が腐ってしまいます」

エリオ

「は…はい……………(サッ)…目を逸らした)」

キャロ

「え〜っと……………(サッ)…目を逸ry)」

ル

「うん、見ないよ（そもそも見てさえいない）」

ジェイル

「あつるえ〜！？…ナズエ…目ヲソラスンディスクカ…てか酷くない！？

……うう…最近はみんなが冷たいな……目から汗が出てくるよ……（泣）」

結局一人で盛り上がって、一人で落ち込む（いつもの）ジェイルであった。

シグナム

「しかし…霊圧の解析が出来たのは確かにありがたいな」

なのは

「そうですね…一護くんだけに任せずに済むようになるし…」

ティアナ

「魔法に付与できれば戦術の幅が広がりますし…」

スバル

「ねえねえティア！」

ティアナ

「ん？何よ？」

スバル

「幽霊って見えるようになるのかな？」

ティアナ

「……………なるわね」

まさに？経験者は語る？である。

スバル

「えっ！？」

ティアナ

「ん？」

スバル

「ほ…本当に見えるよつになるんだ……………」

ティアナ

「…あんだ…考えなしにあれこれ聞くからそんなことになるのよ」

クアットロ

「ええ…見えるのは…イヤですわ……」

トーレ

「大事の前の小事だ。我慢しろ」

クアットロ

「ひどいつー!？」

一護

「何の話してんだ？」

そこへ、模擬戦を終えた一護たちが帰ってくる。

はやて

「2人ともお疲れ様。で、どないやった？模擬戦は」

一護

「さすが隊長だなって感じた…俺の動きをよく見てるし…」

躲すのがきつい攻撃が何回かあったしな」

フェイト

「でも最後の方は動揺しちゃって……」

一護

「その為に鬼道を使ったんだ。俺の行動予測に無い動きだからな」

フェイト

「まんまと嵌っちゃったわけだね……私もまだまだだなあ……」

なのは

「一護さんの弱点って段々減ってきてない？このままじゃ公認チートだよ？」

一護

「なんだそりゃ（汗）そんな称号いらねーよ」

シグナム

「では一護……次は私と模擬戦だ！！」



一護

「今の話からどうしてそうなるんだ!？」

シグナム

「いや…お前たちの模擬戦を見ていたら…つい…な?」

一護

「いや…な?って言われても…」

フェイト

「それはわかるなあ」

一護

「わかるんかい!…いや、今日はもういいだろ…結構疲れるんだぞ…」

ジェイル

「ふむ…今日の所はもうデータは十分だから無理にすることは…ヒイツ!?!」

見かねて助けに入ったジェイルを般若の形相で睨むシグナム。

完全にジェイルは縮み上がってしまった。

一護

「ほら、ジェイルもああ言ってるし（最後まで言えてねーけど……）

また今度相手してやるから……な？」

シグナム

「むう……それなら……」

ようやく引き下がったシグナムであった。

ジェイル

「シグナム怖いシグナム怖いシグナム怖いシグナム怖い……」

いろいろと報われないジェイル君であつたまる……

一護

「あ〜……強く生きるよ……」

今日のまとめ 「コイツ（ジェイル）ってオチに使いやすいな」

b y 作者

その日の夕方……

ジエイル

「はあ……今日はいろいろあったけど……何とか完成したぞ……試作品……」

これで魔力を霊圧に変換できる筈……」

正確には、魔力を霊圧に近い性質のものに変換する機能である。

だが、おそらくダメージは与えられる筈である。



まだやってた……………（汗）

所変わって聖王教会……………

騎士カリムの部屋……………

カリム

「……………」

この部屋の主である騎士カリムは現在とても難しい表情を浮かべていた。

カリム

「もし……………この予言の通りになったら……………」

カリムを悩ませているもの、それは元来の

旧予言

「古い結晶と無限の欲望が交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる」

という予言から、2か月ほど前に急に变化した新たな予言の所為である。

その内容は

新予言

「魂の力を使役するもの、自らの世界に絶望し

想定の世界より数多の海へと舞い降りる

彼の者、この地にて出会いし者のために再び剣を取り戻す

無限の欲望は彼の者に協力し、世界の闇と対立す

されど彼の者、戦いの果てに二度絶望し

完全なる闇へと身を委ね、全てを滅ぼす魔獣と化す

その戦いを境に数多の海は混沌へと誘われる

というものであった。

カリム

「確実に被害を受けるのは機動六課…それと黒崎さん…それに…」

カリムが気にかけているのはそれ以外にもう一つ。

カリム

「すべてを滅ぼす…魔獣…これは黒崎さんの力のことかしら…？」

いいえ…そう決めるのはまだ早計ね……」

彼女の予言を一護たちが知るのもう少し先のことであった……

それと同時刻の????の研究所……

?????

「そろそろ……キミたちにも動いてもらうことにするよ」

この場所はミッドチルダの某所に巧妙に隠された研究所。

このこの主の白衣を着た研究者らしき男が端末を操作しながら数名の人間？



に声を掛けた。

?????

「任務の内容は追って知らせるから…取り掛かる順番でも決めておいてくれ」

?????

「ふむ…では吾輩から先に行かせてもらおうとしようか」

?????

「ああん!?何だよ!俺を先に行かせる!」

?????

「悪いが譲れぬよ…坊ニやの成長を確かめたいのでな」

?????

「そいつは俺も同じ…(ガシッ)(ああ!?)」

?????

「好きにさせてやれ」

?????

「フッ…感謝する」

プシュー……………

?????は短く礼を伝えるとその部屋を出て行ってしまった。

??????

「どづいづつもりだよ!?!」

?????は止めた?????に突っかかる。

??????

「あの男で奴の今の実力が測れるのならそれに越したことはない。  
い。」

それに奴が…黒崎があの男に敗けるとでも?」

??????

「チツ…俺はやくアイツと闘やりたいだけだつてのに……………」

??????

「フン…………我慢しろ」

?????

「ククク…さあ！始めようじゃないか！！黒崎一護くん！！！」

君は彼らに勝てるのかな…？クククククク……………」

その不気味な眩きは闇にまぎれて消えていった……………」

これから世界は混沌へと向かう……………」戦わなければ生き残れない！！！」

T o b e c o n t i n u e d……………」

いや〜めっちゃ時間が掛かってすいません。

しかも短いし……

今回はいかがでしたでしょうか？

というか予言ってあんな感じでいいんでしょうか？

書いてて「厨二病か!？」って感じで恥ずかしかったんですけど……

何か意見や感想などございましたらお気軽に書き込んでください。

些細な事でも励みになります。

では、また次回にお会いしましょう!!

どうも、作者の黒棺です。

今回の話は内容的に賛否両論…というか否の方が多いかもしれませ  
んが、

どうかご了承ください。

辻褃合わせて言われたらそこまでなんですけどね……

それと、いつの間にか1万文字越えてまして……読みづらいかも……  
加えて、ご指摘がありましたので書き方を変えて名前表記を無くし  
てみました。

これの方がよかったならこれからはこの方法で行きたいと思います。  
たびたび書き方が変わってすみません。

感想あたりで今回の書き方について書き込んでいただければ幸いです。  
す。

では、今回で折り返しというか後半に入っていく第30話。

お楽しみください!!

機動六課に訪れた休息の日……

だが、闇はすぐそこにまで迫っていた……

第30話 機動六課の休日・前編 (Peaceful break away)

「前略、ギン姉へ。」

あのちよつとした事件から二週間が経ちました……………

機動六課女子寮……………スバルとティアナの部屋

一足先に起きたスバルが寝起きの悪いティアナを起こそうとしている。

「ティア……………朝だよ……………時間だよ……………!」

「つう……………ん……………」

しかし、ティアナは起きようとしなない。

「……………!……………フ……………ン……………」

すると、何かを思いついたようにスバルはティアナのベッドに侵入する。

そして、ティアナの布団を剥ぎ取って馬乗りになった。

「ティアア！起きて！」

「うゝん……むじや……」

しかし、それでも起きようとしなない。

ゆゝゆゝゆゝ……

さらに体を揺さぶるなどのアクションも取り入れるスバル。

「ほらティア！今日は練習場セットの当番なんだから！はゝやゝく  
ゝ！」

「うう……んゝん？……ん？」

するとティアナが何かの異変に気づき目を覚ました。

そして、その視線の先には……

モニユモニユ……

「あ！起きた？」

自分の胸を揉みしだいている相棒の姿が……………（羨ましっ！！）

モニユモニユ……………

そして目を覚ました今もなお揉み続けている。

「……………（怒）でええええええいい！！！！！！！！！！」

ドゲシッ！！！！！！

「うわぁ！！！！！！」

さすがに我慢できなかったのか、スバルを蹴り飛ばしたティアナ。

「あんたはまた！ちょっと油断するとすぐそうやってセクハラを！！」

慣れた対応の様子を見るに、これは結構日常的に行われているようである。



「ああ〜ん！ちょっとした触れ合いなのにい〜（泣）イタタタ……」

ティアはすっかり元のティアに戻りました。

それに、この間の事件がきっかけでエリオやキャロたちとも色々深い話も

できるようになって……なんだか嬉しかったりもします。

あと、少し変わったのはドクターたちと一緒に来たルーテシアちゃんも

訓練に参加するようになったんです。

理由を聞いてみたら……「キャロには負けない」って言ってました。

最近の子って進んでるんだな〜って…そんなことはどうでもいいかな。

ゼストさんは反対してたんだけど、お母さんのメガーヌさんが良いと言ったので

渋々だけど納得したみたい」

『はあ〜……………』

フォワード陣＋1名の疲れた声が訓練場に流れる。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様！」

疲労困憊といった感じの5人に声をかけたのはスターズ小隊長のなのは。

「でね、実は何気に今日の模擬戦が第2段階の見極めテストだったんだけど……………」

「どうでした？」

そう言っつて横に控えているライトニング小隊長のフェイトと

スターズ小隊長のヴィータに視線を向け、尋ねた。

そして、返ってきた答えは……………」

「合格」

『早っ!?!?』

即答だったのでさすがに突っ込むスバルとティアナ。

「ま、こんだけみっちりやってて問題あるなら大変だった」

と補足を入れるヴィータ。

『あはは……』

エリオたちもこれには苦笑いようだ。

「私も皆いい線言ってると思うし、じゃ、これにて2段階終了!」

『やったあ〜!?!?!』

なのはの2段階終了の宣言とともに上がる喜びの声。

魔王様の厳しい訓練(という名のシゴキ)に耐えて……ズドオオオオオオン!?!?!)

作者復活中……………しばらくお待ちください……………

ふう…何やらピンク色の太い砲撃が飛んできました。

と…とにかくみんな頑張ったんです!!

「デバイスリミッターも1段解除するから、後でシャーリーの所へ行ってきてね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練すつからな」

『はい!…!…!』

フェイトとヴィータの言葉に返事をする5人。しかし、あることに気付く。

「え……………明日?」

キャラの疑問にヴィータが答える。

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「今日は私たちも隊舎で待機する予定だし」

「皆、入隊日からずっと訓練づけだったしね」

なのはとフェイトがさらに補足する。

『?????????』

しかし、フォワード陣たちはよくわかっていない様子。

「ま、そんなわけで」

「今日は皆、1日お休みです」

『わああああ〜!〜!〜!〜!〜!〜!』

そして、なのはのお休み宣言でようやく気付いたようだ。

「街にでも出掛けて遊んでくるといいよ」

『は~~~~い!~!~!』

フォワード陣の喜びの音が訓練場に響いた。

所変わって機動六課食堂

『以上、芸能ニュースでした。続いて政治経済…』

隊長たちはニュースを見ながら朝食を済ませている最中であつた。

『昨日、ミッドチルダ管理局地上中央本部において、

来年度の予算会議が行われました。3度目となる再申請に………』

この空間にはかなり和やかな空気が漂っていた。

……何故かザフィーラはドッグフードを食べていたのだが……

「これも主の願い故……」

お疲れ様です……

『当日は首都防衛隊の代表、レジアス・ゲイズ中將による管理局の防衛思想に

関しての表明も行われました』

『……！……！……』

しかし、レジアスの名前が出ると空気が若干だが変わった。

「……？……？……どうした？」

彼のことをよく知らない一護はどうしたのか分からずに困惑する。

「ゼスト……」

その場に来ていたジェイルがレジアスの嘗ての親友であるゼストに声をかける。

「フン……大丈夫だ。まったく……トレーニングをサボっているな……」

「は……？ゼスト隊長……？」

何の脈絡もなくゼストの口から出てきた言葉に困惑するメガーヌ。

「何……アイツの見た目がまるでヒゲダルマのようになっていたからな」

『ひ……ヒゲダルマ……（汗）』

「どつせそのうち確かめに行くのだ……今ここで騒いだところで仕方あるまい？」

「……知り合い……なのか？」

事情を知らない者たちを代表して一護が尋ねる。



「ああ……無二の親友だった」

「だった……？」

「私たちがジエイルに拾われた件について絡んでいる……可能性がある。」

それだけのことだ。そのことを除けば今でも友のつもりだ」

「そっか……なら俺からは言うことは何も無えな」

「確か……この部隊はアイツによく思われていないのであったな？」

ゼストは確かめるようにはやてに問う。

「ええまあ……そもそもこの部隊は突っ込みどころ満載の部隊やし……」

「ううむ……今すぐ奴の所へ乗り込めたらブツ飛ばして認めさせるのだが……」

何気にここ数年で過激になってるゼスト。

『魔法と技術の進歩と進化：素晴らしいものではあるが……しかし！……！』

それが故に我らを襲う危機や災害も10年前とは比べ物にならないくらいに

危険度を増している……！！

兵器運用の強化は！進化する世界の平和を守るためである……！！  
『！』

管理局の抱える慢性的な問題、人手不足の解消のためにも兵器の運用を強化する。

それがレジアス中将の求めるものであった。

『首都防衛の手は未だ足りん。地上戦略においても我々の要請が通りさえすれば、

地上の犯罪も発生率で20%、検挙率に於いては35%以上の増加を初年度から

見込むことができる……！！……！！』

「このオッサンはまだこんなこと言ってるのな……つとすまねえ……」

ヴィータから辛口コメントが飛び出したがゼストがいるのを思い出し、引込める。

「いや、そのくらいもって言ってやれ」

だが当の本人からはGOサインが出てきた。

「ま……まあ……レジアス中將は古くから武闘派だからな……」

さすがにフォローをしようとシグナムが加わるが……

「フン！あんなに太っていて武闘派を気取るとは……恥を知れというのだ……全く……」

大体！自分の年を考えると……ブツブツ……」

今度は自分から文句を言い始めたと思ったら一人の世界に……

「やっぱり……怒ってるじゃないか……」

とジェイルは呟いた。

「あ……ミゼット提督」

なのはは表明の席にある人物を見つける。

それによってなんとか話題を変えることができた。

「ミゼットばあちゃん？」

「お……おいおい……提督ってすげー偉いんじゃないか？……良いのか？」

さすがの一護も提督という地位の高い人物に対してはあちゃんと呼ぶヴィータに

驚きを隠せない様子。

そして、画面の中には3人の人物が座っている。

「あ……キール元帥とフィルス相談役も一緒になんだ」

「伝説の三提督揃い踏みやね」

フェイトとはやての補足説明が入る。

「でもこうして見ると……普通の老人会だ」

「ダメだよヴィータ。偉大な方たちなんだよ」

微妙に失礼なことを言うヴィータをたしなめるフェイト。

「それにしても……総隊長の爺さんみたいな人たちだな……」

そういうお前も大概に失礼である。

「それは尸魂界の？」

一護の呟きに出てきた人物のことを尋ねるシグナム。

「ああ……まあ……総隊長の爺さんの方が元気そうだがな……」

「そんなに強い方なのか？」

「そりゃ…お前…尸魂界の死神たちの頂点みたいな人なんだぜ」

「へえ…あの人たちの頂点か…ええ…」

何故かここにいる全員の頭の中に出てきたのは十一番隊のこわもて連中ばかり。

そんなにインパクトが強かったのであろうか？

「いや…一番隊の連中には十一番隊みたいな奴はいねえぞ」

「あれ？そっなの？」

皆を代表してフェイトが尋ねる。

「ああ…一番隊ってのは大体優秀な奴…つまりエリートが集まるらしい。」

「ま、爺さんが直接指揮すんだから当然だけどな」

「ちなみに…総隊長って…どのくらい強いん？」

「多分…本気でやったら六課の隊舎周辺一キロ以上が焼け野原になる…かな？」

「うん…もうわかったわ。あんたら規格外」

分かっていただけではあったが、突っ込まずにはいらなかったはやて。

「待て待て！あんたらって俺も入ってんのか！？」

ちなみに修業後の一護が剣を振るとそれだけで六課の隊舎が消滅します。

『逆に聞くけど入ってないと思ってたのか？』

「う………（汗）」

全員に言い返されてぶつ音も出ない一護であった。

「貸すのはいいけど…こかすなよ？プロテクターは？」

「自前のオートバリアです」

一台のバイクの前で話しているのはティアナとヴァイスであった。

「しかしなんだな…俺は時々お前らの訓練とか見るんだけどよ。」

最近お前…立ち回りがちょっと変わったよな？」

「あ…は、はい…」

「お前、今まではシングルでもチームでもコンビでも動きが全部同じだったけどよ、」

最近は大分臨機応変になってきてるみたいだぜ？」

意外とよく見ているヴァイス。魔導士経験があるのは伊達ではない



ようである。

「センターらしい動きになってきたんじゃないか？」

「皆さんのご指導のおかげで……………あとバカ兄貴の……………（ボソッ）」

何気に結構役に立っているティータ（幽霊もどき）である。

ヴォーン！

ヴァイスがバイクの起動を確認する。

「よし！いい調子だ！ほれ！！」

そして、ティアナにキーを投げ渡す。

「はい」

それをティアナは笑顔で受け取った。

「……あの……これ……聞いちゃいけないことだったら申し訳ないんですけど……」

ふと、ティアナが遠慮がちにヴァイスに話を切り出した。

「ん？」

「ヴァイス陸曹って魔導士経験ありますよね？」

「まあ……俺は武装隊の出だからなあ……ド新人相手に説教くられる程度にゃあよ」

だが、そう言ってティアナに向けた視線には微かな悲しみがあつた。

「あ………」

何かを感じ取り言葉に詰まるティアナ。

「とはいえ……昔っからヘリが好きでな、そんで今はパイロットだ」

だが、当の本人は一瞬のうちにそれを引っ込めてしまっていた。

「ほれ、相方が待つてんだろ？行ってやんな」

そう言って去っていくヴァイス。

「ありがとうございます!!」

ティアナもお礼もそこそこにスバルの元へと向かっていった。

「ハンカチ持ったね？IDカード忘れてない？」

街へ出かけるエリオの世話をあれこれ焼いているのはフェイト。

「えと…大丈夫です！」

「あ、お小遣いは足りてる？もし足りなくなると大変だから……」

「あの……フェイトさん！その……僕ももうちゃんとお給料を頂いてますから……」

「あ……そっか……」

「……エリオももっと年相応の感じで甘えてもいいと思うんだが……」

取り敢えずフェイト、お前は世話を焼きすぎだな。

エリオぐらいの歳の時は自分で色々やってみたがるもんだぜ」

そつツッコミを入れたのは様子を見に来ていた主人公（の筈）の「護であった。」

「仕方ないじゃない……心配なんだもん！……」

「はは……大丈夫です。ありがとうございます」

エリオ……お前はいい子や……！……！

「むっ…取り敢えず、エリオは男の子なんだしキャラより二ヶ月年上なんだから、

ちゃんとエスコートしてあげるんだよ？あ、勿論ルーちゃんもね？」

「あ…はい！」

「しっかり頑張れよ？エリオ」

「はい！兄さん」

「ごめんなさい！お待たせしました！！」

「ごめんね…エリオ」

少し遅れてだが合流したキャラとルーテシア。

「あ！キャラもルーちゃんもいいね。かわいいよ」

「二人ともよく似合ってるぞ」

『ありがとうございます……!』

フェイトと一護に褒められ、照れながらもお礼を言う二人。

で、エリオはどうして……

「あ……………」

言葉を無くして見とれてましたとき。(服装は皆さんが想像したの  
でどうぞ)

初々しいのお…………… 何故か急に老け込んだ作者

六課の入り口では出掛けるスバルたちをなのはが見送っているところであった。

「じゃ、転ばないようにね。」

「大丈夫です。前の部隊にいたときはほとんど毎日乗ってましたから」

「ティア、運転上手いんです」

「そう」

「あ、お土産買って来ますね！クッキーとか」

「嬉しいけど…気にしなくていいから、二人で楽しく遊んできなよ。ね？」

「はい！」

「行ってきます！！」

そうスバルとティアナは言つと、さっそく街へと向かっていった。

そこへ少し遅れて一護たちがエリオたちの見送りにやってくる。

「よう！スバルたちはもう行ったみてえだな？」

「あーうん、さっきね。ライティング隊も一緒にお出掛け？」

ちなみにルーは便宜的にライティング隊扱いとなっています。

『行ってきます！！』

「はい、気を付けてね」

「あんまり遅くならないうちに帰るんだよ？夜の街は危ないからね」

『はい！！』

フェイトはエリオたちがほとんど見えなくなるまで手を振っていた。

「さて………戻るか」

「ん？」



「そうだね」

3人が玄関から戻ると向こう側からシグナムとヴィータの二人がやってきた。

「シグナム」

「ヴィータちゃん」

フェイトとなのはが二人を呼び止める。

「二人ともどうしたんだ？」

「もしかして…外回りですか？」

「ああ、108部隊と聖王教会にな」

「ナカジマ三佐が合同捜査本部を造ってくれるんだってさ」

「ヴィータちゃんも？」

「あたしは向こうの魔導士の戦技指導。全く教官資格なんて取るもんじゃねえな」

実は頼りにされて嬉しいんじゃないな（ドグシャツ！！！！）……………何でもないッス。

「捜査回りのことなら…私も行った方が…」

「準備はこちらの仕事だ…お前は指揮官で、私はお前の副官なんだぞ？」

シグナムの気配りに感謝するフェイトであった。

「そっぴゃさ、話は変わるんだが…さっき言ってたナカジマって…  
…スバルの？」

この中でナカジマ三佐を知らない一護が確かめるように聞くと、

「そう、スバルのお父さんだよ」

と、なのはが説明した。

「あと、108部隊にはスバルのお姉さんのギンガって子もいるよ」

「へえ〜…ちなみに……合同捜査ってのはジェイルの言った…？」

「ああ…この世界で虚を生み出し、送り込んできていると予想される者だ」

一護の問いにシグナムが答える。

「アイツが言うには今までに研究用に確保していたレリックも

軒並み奪われてるって話だ」

それに続いてヴィータがジェイルからの情報を補足した。

「あと、レリックに隠れてあまり表には出てきてないけど…ジュエルシートも

管理局の保管庫から盗み出されてるって……」

「なんか…さつきから俺の知らない単語がかなり出てくるな…」

「あ…ごめんね？ジュエルシールドっていうのは手にした人や動物の願いを無差別に

叶える宝石のことなんだ」

ジュエルシールドのことを知らない一護に当事者だったフェイトはジュエルシールドの

力を簡単にだが伝える。

「無差別に…か…」

「レリックとジュエルシールド…二つに共通することとでわかってるのは…」

「どちらもロストロギアで…」

「そして、どちらもかなりの高エネルギー結晶体である…というところのみか…」

上から順に一護、なのは、フェイトにシグナム。

「ま、今から考えててもしょうがねえ！だからさっそく行ってくる」

そう言ったのはヴィータ。少しだが漂った暗い空気を変えようとしたのだろう。

「そうだな…そもそもうだうだ考えるのは性に合わねえし」

「フ……全く……そういうことは胸を張って言うことではないというに……」

若干呆れながらも少し微笑みながら、ヴィータに続いてシグナムも出て行った。

「（最近…微弱にだが虚の…特に破面の霊圧を頻繁に感じるようになった……）」

六課の廊下を歩きながら一護は思考に浸っていた。

「（それも明らかに十刃クラスの霊圧……何処にいるかまでは特定出来ねーけど…」

「……アイツらが出てくるってなら……さすがにアレも使わねーとな…）」

『一護さ〜ん！お客さんが来てるんで今すぐ六課の玄関まで来てくださ〜い！〜！』

とここで突然シャーリーから館内放送で玄関への呼び出しがかかった。

「俺に…客……？誰だ？ロツサか？しかも玄関って逆戻りだし……」

誰が呼び出したのかわからないのが無視するわけにもいかないので、

一護はすぐに玄関へと向かった。

六課の玄関口、そこには人の良さそうな金髪の眼鏡をかけた青年が待っていた。

「えっと……あんたが俺に用があるっていつ……？」

「あ、はい！いきなり呼び出してすみません……僕はなのはやフェイトの幼馴染の

ユーノ・スクライアって言います。気軽にユーノって呼んでください」

「いや、気にしてねえよ。それに敬語はよしてくれ。歳も同じくらいだし……」

おっと……俺は自己紹介してなかったな……黒崎一護だ。俺も気軽に一護でいいぜ」

「うん、アコース査察官から聞いてるよ。すごく強いって」

「あのナルシストめ……また人のこと勝手に……（怒）」

そのころのロッサ……………

「ブルッ！？な…なんだ…今どこかで死亡フラグが建った気が……………」

「まあ…どっかに場所を移すか？俺に会うためだけに来たんじゃないだろ？」

「うん…それじゃ…屋上あたりでいいかな？」

「おう」

機動六課内のある廊下……………

「あれ……………？どうして一護がまた玄関から……………って……………ユーノ！？」



屋上へ移動中の一護とユーノを目撃したのはフェイトであった。

「ズ…ズズズズズッしよ…後をつけていくのは…よくないよね…  
…でも…」

今のフェイトの頭の中に浮かんでいるのは……

「なのはに手え出したら許さねーぞ…!!」

と屋上で一護をシメているユーノの姿であった。

というかユーノのキャラじゃないし……

「づう〜……」

そして、悩みに悩みぬいた末にたどり着いたのが……

「ぬっふぶ〜…こんなビッグイベント持ってきてくれて

ありがとなフェイトちゃん…!!」

我らが狸部隊長であった。

「あれ……もしかなくてもわたし人選間違えた!？」

そつだよ……もう手遅れだけどね……

「お……2人は屋上に行ってるみたいやな……ならサーチャー飛ばして……」

「あつ……2人ともゴメン……」

機動六課屋上……

「それで……話つてのは……?」

屋上にやってきて、一護からそつ切り出した。

「うん……こんなことを聞いたら……失礼かもしれないけど……」

君は…どうして戦っているんだい？この世界は…君にとっては関係のない

世界なんだろう？」

「……………そう……………だな……………最初はただの義務感からだっただけ……………」

「義務感？」

「そう…虚たちがこの世界に現れた経緯ってのは聞いてんだろ？」

「うん…君がこっちの次元世界に来た時に一緒に来たんだらうって……………」

「ああ…だから俺の所為で関係のない人が傷つく…それなら止めるのは

アイツらを連れてきた俺のすることだ……………ってな……………」

「でもそれは……………」

「ああ…でも今は違う…もちろんそのことを忘れたわけじゃねえ…

でも

それだけじゃねえって…俺が死神の力を取り戻した時に気付いたんだ。

俺の元の世界の仲間…俺のために自分の力を分け与えてくれた。

この世界でできた仲間は俺に温かい居場所を…帰ってくる場所をくれた。

元の世界の仲間には…もう会えねえけど…この世界の仲間なら護れる。

そして…その仲間が護りたい世界って言うなら…俺が命を懸けてでも

護る価値がある。だから、俺は皆を護って戦ってるんだ」

「一護…君は……」

ユーノ回想……

「ねえなのは…最近…何かいいことあった？」

電話口の向こうから聞こえてくるなのは声で何かを感じとったユーノ。

「え…うん……気になる人が…できたかな…」

その人…私が海鳴に出張任務に行ったときに助けてくれたんだけど…

その時…私の顔を見てすごく辛そうな顔してたの…」

「それは…どうして…なのかな…？」

思い人の突然の言葉にユーノは動揺するも、勤めて冷静になのはに尋ねる。

「うん…多分ね…私を襲った怪物が…その人の所為で生まれたって言ったの。」

だから…自分の所為で他の人が傷ついているのが…嫌だったんじゃないのかな」

「それって…」

「うん…昔の私と同じ…でもね…その人は自分で前に進んだの…だから…」

最初は羨ましかったんだと思う…でもそのうちにどんどん気になっ…

ほんとに…色んなことで助けてもらった…私の教導が行き過ぎそうになった時

体を張って止めてくれた。誰も気を遣って言わなかったことを教えてくれた。

完全に好きだって思ったのはその時かな…」

「そっか……なのは…こんなことしか言えないけど…頑張っ…」

ユーノは言葉少なながらなのはを応援する言葉をかける。

「うん…ありがとねユーノ君！でも……フラグを所構わず乱立させてるから…」

実際はかなり大変なんだよね…」

「……………はい？」

思わず聞き返すユーノ。

「だから！私以外にもその人のことが好きな人がたくさんいて……」

ユーノ回想終了……

「ふふ…最初になのはから聞いたときはどんなナンパ師みたいな人かと」

思ってたけど…いい意味で予想を裏切られたよ」

「おいおい…ナンパ師って何聞いたんだよ……まあ…その…なんだ？

そういう…女性関係みたいなヤツは今は到底考えられないな……」

「それはまた…何で？」

「ここだけの話……最近虚たちの霊圧を頻繁に感じるんだ。

それも雑魚だけじゃなくて……明らかにこの世界の戦力じゃ太刀打ちできない

クラスの奴らのな」

「そんな……！？それじゃ……どうやって……」

一護の言葉に動揺を隠せないユーノ。

「大丈夫だよ、そのために俺はここにいるんだ。

でも……アイツらの目的はまだわからねえ……そして……

下手をすると俺もアイツらに負けたり相打ちになったりするかもしれねえ……

だから今は……そっちに気を割いてる余裕がねえんだ。

これでもすずかやアリサと2年近く過ごしてきたんだぜ。

余裕があれば女性からの好意みたいなのは……気付けると思っただ

……多分……」



「そこは自信持って言おうよ!？」

微妙に自信がなかった一護にツツコミを入れるユーノ。

「まあそれは置いてだ…俺さ…この世界に来るときに約束したんだよ……」

必ず…海鳴へ…アリサとすずかの所に皆で帰ってくるって……

死体やボロボロの状態で帰ったってそれは…何か違うだろ？

だから今、俺はアイツらとの戦闘に集中したいんだ…もちろん…

それ以外のことにだって気は向けてはいるけど…微妙な感情の機微とかは

今の俺にはちょっと難しいんだ。それに…気付いたとしても…答えてやれない」

「そっか…（君のそのすべての行動が…仲間を護る…それに繋がってるんだね）」

変なこと聞いてごめんね…それと…なのはたちを…よろしくお願ひします!?!」

「おう!?!絶対に護って見せるぜ!?!」

一人の青年の誓いが屋上から上がった。

六課内…狸部隊長室……

「あ…あかん…これ…私ってかなり失礼なことしてたんじゃない…」

「だ…だから言ったのに…」

と部隊長室内で戦々恐々しているはやとフェイト。

この時、すっかりサーチャーとの双方向通信を開いているとは気づいていない。

《ほう…何が失礼だって…？》

『！…？』

と突然室内に響く声。それは言うまでもなく……

「い……この声……もしかして……」

「い……一護……?」

《大正解!!!!!!!!!!(怒)》

という叫び声と同時にかなりお怒りの一護のドアップが先程まで見  
ていた画面に。

『ギャー!!!!!!!!!!』

《まったく……何か視線感じて振り返ってみたら……サーチャー飛ばして  
やがって……》

《ははは……》

ユーノの苦笑いも若干だが聞こえてきた。

「でも…でも…一護君…さっきゆうてた事って…ホンマなん？」

《ん？虚のことか？それなら本当だ。近いうちにアイツらはまた来るぞ。》

それも今度は前に見せた大虚クラス以上のヤツがな》

「そ…それなら…対策とか…」

《ジェイルの開発しているものはまだ試作品だ。実際の戦闘で使えるかは

今のところは未知数…ってはなしだ。

だから次の戦闘でゼストさん辺りに運用試験を頼むらしい。

それまでは対策はできるだけ早く現場を特定するってことくらいだな》

「でも…《ストップ！》一護？」

尚も食い下がろうとするフェイトにストップをかける一護。

《心配し過ぎなんだよお前らは…特にフェイト！さっきの話はもの例えだ。》

大丈夫だ！死にやしねえよ！ー！《

「一護くん…」

《はやても…まさかやめろ何て言っんじやねえだろっな？》

「だって…あのデカイ虚より強いヤツがでてくるんやろ？」

そんなとこに一人で行かせるなんて…あたしには………」

《なら…信じてくれ》

『え……………？』

《俺が絶対に勝つって信じてくれ。それだけで十分だ。何もいらねえ》

「そ…そんなんでええん？」

《おつよー!》

「ふふ…一護って偶に変なヤツって言われたことない?」

《にゃんだと!?!》 誤字に非ず。

「そつやなあ…相当に変な奴や」

一護フルボッコ中……………

《僕もそう思うよ(なるほど…これが噂のフラグー級建築士か……………)  
》

そしてまさかのユーノの反乱である。(変なことも考えてるが……………)

《お…お前らなあ……………》

「うん!信じるで!!!絶対勝つてや!!!」

「私も…信じてるよ…!」

《全く…普通に言えねえのかよ……》

『《あはははははは！！！》』

その頃のクラナガン某所……事故？現場……

「陸士108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。現場検証のお手伝い  
に参りました」

その場にやってきた女性は、先ほど一護たちが話題にしていたスバ  
ルの姉

ギンガであった。

「ありがとうございます」

「横転事故と聞きましたが……」

「ええ…ただ…事故の状況がどうも奇妙でして…運転手も混乱して  
るんですが」

…どうも何かに攻撃を受けて…荷物が勝手に爆発したとか言うん  
ですね…」

「運んでいた荷物は缶詰や飲料ボトル…爆発するようなものじゃ…  
…」

「…それと…下の方に妙な遺留品が……」

そう言つて捜査員が視線を向けた先には、ガジェットドローンと思  
しき残骸。

そして、その先には……

「…！これは……生体ポッド！？」

クラナガンの街…



ゴトッ……ゴトッ……ジャラッ……

「……」

「エリオくん？」

「どうしたの？」

突然歩きを止めたエリオを気にする2人。

「キャロ、ルーテシア……何か聞こえなかった？」

「何か？」

キャロはルーテシアに聞こえなかったか確認するが、

「うっん……聞こえなかった」

やはり聞こえてはいなかったようだ。

「ゴッッ…といつか…ゴッッ…といつか…！」

そして、エリオは路地裏への入り口に目を付けた。

ダッ…！！

路地裏へと走り出すエリオ。

『…！』

キャロとルーテシアもそれに続いた。

路地裏……

ガゴン……

突如としてマンホールが開いた。

『!.....!』

その様子を警戒しながら見つめる3人。

ヒタッ.....

そして、マンホールから出てきた手は子供の小さなものであった。

『!.....!.....!』

再び機動六課に戻ってジェイルの研究室.....

「.....おや.....?ガジェット反応があったようだねウーノ」

「ええ.....ですが.....私たちのではないので.....おそらく.....」

「奴らの…か…一体何が…あ！」

突然、何かを思い出して固まるジェイル。

「…どうされましたか？」

「…うーノ…今日って…もしかして…聖王のクローンの子が…

輸送される日じゃなかったかい…？」

かなり大事なことを忘れていたジェイルは焦り始める。

「……………あ！」

ウーノも今回ばかりは忘れていたようだ。

「し、至急はやてくんに連絡！！反応があつたのは…下水道！数名を派遣…」

「ドクター！ライティング4…キャロお嬢様から全体通信です！！」

「!?!」

《こちらライトニング4！緊急事態につき現場状況を報告します!!

3rdアベニューF・23の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見!!》

「!ドクター!!」

「ああ…キャロくん…すまないが…その近くに小さな子供もいなかったかね?」

《え…はい…ケースを持っていたらしい小さな女の子が1人…》

《あと…この子は意識不明です》

それに続いてエリオからの補足が加わる。

「ならば…すぐにその子の介抱をお願いできるかい?」

六課で手の空いてる人は救急の手配をしてくれ」

《はい…でも…この子って…一体…》

「どうせ…後になつたわかるだろうから…今のうちに言っておく  
う……」

六課の皆もよく聞いていてくれ……その子は…奴らが聖王のゆり  
かごを

起動させるために生み出した……聖王女オリヴィエのクローン  
だ!」

『……………』

t o b e c o n t i n u e d ……

……… いかがでしたでしょうか………

後半の方の一護は、台詞を色々合わせて言わせてみたんですけど………  
何かいまいちかも………

何か感想やご意見などございましたら気軽に書き込んでください。

というか……ユーノも折角出てきたのにほとんどしゃべってないし………

まあ……まだ出す予定自体はあるし、ある程度の活躍はするんですけど………

バックアップというか支援的な意味で。

そして、いよいよ次回から本格戦闘と相成ります。

破面や黒幕の一部メンバーも出てきます。

誰かって？みんな大好き(？)ドン観音……(ズドオオオオオ!!!  
!)

作者、虚閃直撃でダウン中につき代打一護。

一護

「また次回も見てくださいよな？」

### 第31話 機動六課の休日・後編 (Emergence of curse)

どうも！作者の黒棺です！！

何かだらだら書いた所為か15000文字近くまでいってしまい、急遽戦闘の所を次話に回すことになりました。

といってもこの話を投稿したらずぐ戦闘回を投稿するので一気に読んでください。

補足としまして、日常篇はこの話までで戦闘回から次章となります。あと、PVが累計100万アクセスを突破いたしました。

皆さんいつもありがとうございます！！

折角100万までいったので、番外編として皆さんが今まで感想の所で

出してくださいったアイディアの実現をしたいと思います。

まあ…もう少し落ち着いてからですが……

では、最新話お楽しみください！！

助けた少女は聖王のクローン。その事実は六課の全員を動揺させた。そして、謎の敵とのその少女とレリックを巡る争いが今始まることになっていた。



第31話 機動六課の休日・後編 (Emergence of curse)

「聖王オリヴィエの……クローンやて……?」

ミッドチルダに住んでいる者の中では知らない者はいないその名。

古代ベルカの王・聖王女オリヴィエ。またの名をゆりかごの聖王。

「そう…なんに使うのか…まあ大体想像はつくが…聖王のゆりかごを起動させる

ためには聖王の子孫が必要となる。おそらくその為に生み出されて輸送中を

襲撃されたのだろう」

「ちよい待ち!何で襲われるん?

必要なのはガジェットを使用してきた奴なんじゃ…」

「……………フム……………何時かは知ることになるんだろうが……………今は聞かないで

いてくれないか?うかつにこれを知ると君たちの命にまで関わってくる」

『！……！』

「だが、これだけは言える……最初にゆりかごを利用しようとしているのは……」

ガジェットを使用してきた奴らじゃない……とはいえ……奴らもゆりかごに

少なからず興味があるようだがね……」

「うん……わかったわ。よし……全員、待機態勢……！デッキを外して  
る子は

配置に戻ってな……！」

はやての号令が六課内にこだました。

「ユーノ、お前はこれからどうするっ……」

出勤となったため、配置につかなければならない一護がユーノに尋ねる。

「一応…仕事の合間に来たからもう戻るよ。ここにおいても任務の邪魔になるし」

「わかった……またな、ユーノ」

「うん、任務気を付けて…」

「おう!!」

そうして、2人は別れてそれぞれの場所へと戻っていった。

ミッドチルダ旧市街地……某所……

「……………一様…準備は整いました」

「そうかね…………ご苦労だったな」

ここで2人の人間？が会話をしている。

男の方は中年男性というぐらいの見た目であろうか。

そして、もう一人の女性は成人前後といった見た目である。

「いえ……………」

「しかし…………話に聞く聖王があのようなお嬢ちゃんとはな……………」

「気になりますか？」

「何…吾輩はただ任務をこなし、そしてぼつニニちやと相見えるのみ…！」

「承知しております」

「レリックとやらの方はお主に任せよう」

「はい……」「武運を……」

ブンッ……！！

そういうと女性はものすごい速度で移動していった。

そして、それは破面たちの響転と同質のものであった。

「フム……吾輩たちのデータをわずかに与えただけでここまで模倣するとは……」

機動六課とやらは苦戦するであろうな……」

場所は変わって聖王教会・本部……

そこには戦場とは少し違った和やかな空気が流れている。

「それにしても…あなたの制服姿はやっぱり新鮮ですね」

「ああ…制服が似合わないというのは友人どころか妻にまで言われますよ」

そういった会話をしているのは、どちらの六課の後見人である

一護のフラグ被害者カリム・グラシアとシスコンのクロノ・ハラオウンであった。

「誰がシスコンだ!!!誰が!!!!!!」

「あの……どうされました？」

突然叫んだために可哀相な人を見る目で見られたクロノ。

「い…いえ……何でも……ないです……クッ……作者め……」

ガチャ……

「失礼します」

そこへ、シスターシャツハと共にシグナムが入ってくる。

「あ、シグナム！お帰りなさい」

「合同捜査の会議は…もう？」

「ええ…滞りなく」

「こっちは丁度…六課の運営面の話が済んだところだよ」

「ここからはこれからの任務についての話。あなたも同席して聞いておいてね」

「はい」

そうカリムから提案があった直後、

ピピピピピピピピピ…

突然カリムの開いている画面に着信の知らせが……

「?はやてからの…直接通信?」

クラナガン…路地裏……

「エリオ!キャロ!ルーちゃん!」

「ティアさん!スバルさん!」

ようやく現場にフォワード陣が集結した。

「この子か……また随分ボロボロに……」

ティアナが女の子の状態を確認する。

「地下水路を通って…かなり長い距離を歩いてきたんだと思います  
…」



「レリックのケースを…引き摺ったまま……」

そして、キャロとルーテシアが状態からの予測を立てる。

「まだ…こんなに小っちゃいのに……」

「はい……」

スバルとキャロは少なからずショックのようだ。

「ケースの封印処理は？」

「キャロとルーテシアがしてくれました。ガジェットが見つける心配は……」

「無いと思います……それから…これ……」

ジャラ……

そう言ってエリオが持ち上げたケースにはもう一つ分のケースが

あったと思しき鎖が……

「ケースはもう一個あった？」

「今…ロングアーチに調べてもらってます」

「隊長たちとシャマル先生、リイン曹長に「護さん…あと対虚用装  
備の

運用試験のためにゼストさんとアギトがこちらに向かってく  
るそうだし…」

「取り敢えず現状を確保しつつ、周辺警戒ね」

『はい！！！！』

状況を的確に把握しているティアナの指示が現場に飛んだ。

機動六課ロングアーチ……………

《そう…レリックが…》

「それを小さな女の子…しかも聖王のクローンの子が持ってたんよ…」

《なっ…聖王の…クローン!?!》

画面の向こうでクロノが狼狽するのがわかる。

正確にはクロノだけではないが、それほどまでに驚くべき事態であった。

「うん…ジェイルが言うには間違いないって…」

《クローンなだけでも大問題なのに…その上聖王とは…》

「だが…聖王の記憶を引き継いでいる…というわけでは無いようだ。

しかし…人造魔導師として体に手を加えられている可能性もある」

とはやてに代わって専門的なことをジェイルが補足する。

《暴走の危険性は？》

シャツハがジェイルにあの子の危険性を尋ねる。

「いや…まず無いだろうな。考えてもみたまえ…いくら人造魔導師  
とはいえ…」

あの子は精々5〜6歳といった感じだ。

そのような子供が…危害を加えることなど…こちらから強力な攻  
撃を仕掛けでも

しない限り起らないだろうよ」

《？攻撃をしたら……反撃されるのですか？》

シャツハはジェイルの言葉に疑問を持ったようだ。

「いや、そうではない…聖王にはとある固有能力がある…その名を  
？聖王の鎧？。」

本人の意思とは無関係に発動する防衛機能だ。

事故現場には爆発したようなガジェットの残骸があったと聞く……

おそらく流れ弾が接近して？ 聖王の鎧？ が反応したのだろう。

まあ結局のところはガジェットの自爆に近いね……」

《なるほど…簡単に言えば攻撃しても無駄だし、

怪我するから止めとけということか？》

「ま、ざっくり言つとそういうことだよ

クロノも大方の事情は把握したようだ。

《シグナム…あなたも向こうに戻っていた方がいいわ》

ここでカリムがシグナムに現場へ助太刀に行くことを勧める。

《はい》

《シャツハに送ってもらえばすぐに戻れるから……》

《ありがとうございます。騎士カリム》

再びクラナガン路地裏……

ここではシャマルが女の子の診察を行っていた。

「どうだ？シャマル」

その場を代表して一護が尋ねる。

「うん…バイタルは安定してるわね。危険な反応も無いし、心配ないわ」

「はい」

「よかった」

この中で一番心配していたキャロとスバルが安堵の声を上げる。

「ごめんね皆…お休みの最中だったのに……」

「いえ」

「平気です!」

フェイトが緊急出勤になったことを謝るが皆は気にしていない様子。

「ケースと女の子はこのままへりで搬送するから…皆はこっちで現場調査ね」

『はい!……!』

「護くん、この子…へりまで抱いて行ってもらえる?」

「……ん、ああ……」

「護にしては珍しく齒切れの悪い返事である。」

「どうしたの？」

心配したシャマルが尋ねる。

「いや…なんか…雰囲気が…昔の妹に…似ててな………」

「あ…ごめんなさい…」

「おいおい…何でお前が謝るんだよ…俺の気分の問題だし、今は別のことに」

集中してる余裕なんてないからな」

「うん……でも…無理だけは…しないかね？」

「ああ…大丈夫だ」



機動六課ロングアーチ……………

ピュピュッ！…！

「ガジェット…来ました…！！！」

シャーリーがガジェットの襲来を告げる。

『…！！』

ガジェットの出現に作戦司令室に緊張が走る。

「地下水路に数機ずつのグループで…総数…16…20！さらに複数の虚も」

「一護くん！地下水路の方の虚の強さはどのくらい？」

はやては目安を確かめるためにへりにいる一護へ通信を送る。

《アイツらはただの雑魚だ！

対策が無けりゃお前らには強敵だが…今のゼストさんなら問題なく倒せる《

「了解や！他は？」

「海上方面…12機単位が5グループ！あと飛行型の虚が総数10体ほど」

「虚を抜きにしても…多いな…」

「どうします？」

「そつやな…」

ピピッ！

はやてたちが対応を決めかねているその時、突然外部から通信が入ってきた。

《スターズ2からロングアーチへ！

こちらスターズ2、海上で演習中だったんだけどナカジマ三佐が許可をくれた。

今現場に向かっている。それからもう1人…」

とここでもう一人の人物に通信が変わる。

「《108部隊、ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったのですが…

そちらの事例と関係ありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか?》

「うん、お願いや!

ほんならヴィータはラインと合流!協力して海上の南西方向を制圧」

《南西方向、了解です!!》

通信の向こう側でラインが元気に返事をする。

「なのは隊長とフェイト隊長は北西部から、一護くんは遊撃で虚に当たってや」

《了解！！》

《任せろ！！》

「へりの方は…ヴァイスさんとシャマルに任せてええか？」

《お任せあれ！》

《しっかり守ります！》

「ギンガは地下でスバルたちと合流。道々…別件の方も聞かせてな  
」？」

《はい！》

「お前たち…準備は良いか？」

「一番の年長者ということではエストがフォワード陣に確認をとる。」

『はい！…！』

「今回、俺は虚を中心に捌かなければならない。必然的にガジェットはお前たちが

相手をする事となる。気をつけるよ？」

『了解！…！』

「それじゃ…みんな…いくわよ？」

『Stand by』

『セーット…アープ…！…！』

ビルの屋上……

「フォワードの皆……ちょっと頼れる感じになってきた？」

「ふふ……もっと頼れるようになって貰わないと」

「そいつはまた……なのは隊長は手厳しいな」

一護たち3人の談笑が途切れ、屋上が光と黒い霊圧に包まれる。

「早く事件を解決して……また今度お休みあげようね？」

「うん」

「行くぞ！虚の周辺の奴らは無視しろ。そこらへんは俺がまとめてやる……！」

「任せるね？」一護くん

「ああ…気をつけるよ?」

「一護もだよ?あんなこと言っても心配なのは変わらないんだから  
!?!」

「わかってる。大丈夫だよ」

2人の間に漂う何かあったぞ感……

そして、そこに目ざとく気付くのは……

「む?…?何?2人だけの話?」

明らかに不満たらたらのジト目を向けるのは。

「何でもね?よ!そいじゃ、お先に!?!」

ブンッ!?!?!!

そして、一護は軽く流して空へと飛び出した。

「あ！逃げた！！フェイトちゃん！後で詳しく聞かせてもらおうよ！」

ザッ！！

なのはは納得がいかないのかオハナシ予告をして飛びたつ。

「ちょ…一護！ズルいよ逃げるなんて！！」

何とも締まらない出撃になってしまった。

地下水路内……

「キミがギンガ・ナカジマ陸曹か……」

「はい…英雄と言われているあなたがどうしてそうなったのかは気になりますか…」



まさか……スカリエツティと共にいたとは……」

道中でギンガと合流したスバルたちは地下水路を進んでいく。

その途中でギンガはゼストと話をしていた。

「情けないことに殺されかけたところをアイツに助けられてな……それと……」

任務に関係ない話ですまないが……後日君の父上ゲンヤ殿に会わせてほしい」

「それは……どうして？」

「詳しいことは会った時に話すと決めていたのだが……君たちの母親のことだ」

「……わかりました……では、後日こちらから連絡をさせていただきます。」

それと……その場には私とスバルも同席させてください」

何かを察したギンガはその申し出を了承する。

「わかった……すまない……」

「ギン姉？何話してるの？」

はっ！？まさかギン姉って年上好（ゴイン！！！！）イタア！？」

そこにまさかの空気を読まないスバルの登場である。

しかも完全に的外れなことも言っている。

「何バカなこと言ってるのよ！？」

そのため、しっかりとティアナにぶん殴られている。

「もお〜…殴ることないじゃんティア〜……」

「フン！自業自得よ！！」

「……」

地下水路をしばらく進んでいくと、開けた場所にたどり着いた。

キャロとルーテシアはレリックのケースと思しきものを発見する。

「キャロ…私が持つてるから封印処理お願い」

「うん……」

ヒュン……

「!?」

本当にわずかだが聞こえた風切り音に反応するエリオ。

「……何かが来ている……」

ゼストも殺気が近づいてくることを感じ取り警戒を強める。

「キャロ！ルーテシア！封印は後でいい！！今は近くに固まれ！！全員でだ！！」

『り…了解！！』

そうして一塊になろうとした瞬間。

ブンッ！！

レリックのケースを持ったルーテシアの背後に1人の女性が突然出現する。

「！？…ルーテシア！伏せろ！！」

ゼストの叫びが響く。

「！！」

ジャキン！！！！

声に反応してすぐさましゃがんだルーテシアの頭上を、一振り of 刀が通り過ぎる。

「……あら……外してしまいましたか……予想以上に反応がいいです  
ね？」

心底意外と言った表情を作る刀を持った女性。

その服装はかつての破面たちを思わせる服装であった。

「訓練なら……毎日やってるから……」

すかさず距離を取りながらそう答えるルーテシア。

「フン！……！」

ブォン！……！

一時的に女を戦闘不能にしようとしてゼストは槍を横薙ぎに振るう。

ヒュン………ザッ……！

だが女はすぐさま距離を取り追撃を避けた。

「旦那……！」

「お前たちは下がっている……アギトはフォワードたちを守れ！」

「貴様……一体何者だ……それは…斬魄刀か？」

人からは感じられない何かを感じ取りその正体を確かめようとする  
ゼスト。

もとより返答には期待していなかった。いわば事務的な対応に近い。  
だが、意外にもその問いに答えが返ってきた。

「そうですね……便宜上私のことは？セクンドウム？ともお呼び  
ください。」

あなたが現在思い浮かべている人物の部下のようなものです。

それと……この刀は斬魄刀であって斬魄刀ではないもの……とてもあ  
の方たちの

刀と同じとは言い難い出来損ないです。これで満足いただけまし  
たか？」

「なるほど……ではもう一つ聞こう……貴様は我々の敵か？」

「やれやれ……穩便に済ませたかったです……仕方ありません。」

「かづくでもレリックは頂いていきます!!」

「ダンッ!!!」

「ギン!!!!!!」

ここにかつての英雄と2の名を持つものの戦いが始まった。

「ロングアーチ……」

「ライティング5虚とガジェットの混成部隊とエンゲージ!!」

「スターズ1とライティング1もあと1分ほどでエンゲージです」

「スターズ2ライン曹長と合流、フォワード陣とゼストさん…ガジェットの

目標点に進行中…このペースなら先行できます!!」

虚を遊撃中の一護……

「月牙………ッ…天衝オ!!!!!!」

> i 3 7 1 6 7 — 3 5 0 6 <

ゴオアッ!!!!!!

ドガガガガガガッ!!!!!!

一護が放った月牙天衝は虚を付近にいたガジェット諸共吹き飛ばす。

ギュー!!

順調に敵の数を減らしている一護の元へ一斉にミサイルが放たれる。



「チツ…鬱陶しい!!縛道の三十九!円開扇!!」

ガガガガッ!!!

完全にミサイルたちを受けきると、

一護は斬月の柄の巻き布をつかんで振り回し始めた。

ブウン…ブウン…ヒュン!!!!!!

ガッ!!

斬月は一体の虚の体に突き刺さる。

「喰らい…やがれ!!!」

ズガガガガガッ!!!

そして、一護はそのまま虚ごと斬月を振り回して周りの敵を一掃した。

「多対一か…そついや尸魂界での戦い以降はあんまりなかったな…」

付近の虚をあらかた片づけた一護は別の場所の虚を探す。

「！！フェイトとなのはの方に行ってやがる！！クソッ！！」

ブンッ！！！！

一護はフェイトたちの下へと急ぐ。間に合えど。

その頃のフェイトたち……………

2人は順調にガジェットを撃破していたが、

突如現れた数十機にわたる新たな増援に囲まれていた。

「！！……………増援……………？」

「！！この反応……………」

その空域の雲の遙か上……

「ふふ……この？ プリムム？ が能力の一端であるIS？ シルバーカーテン？。

あの男の技術のコピーであるのははなはだ遺憾ですが中々に使い勝手がいい」

機動六課 ロングアーチ………

「航空反応増大！！これ…ウソでしょ！？」

「なんだ…これは…！？」

ロングアーチに驚きの声上がる。

それもその筈…増援できたとされるガジェットの数が常軌を逸していたのだ。

「波形チェック…誤認じゃないの？」

「問題…出ません!!どのチェックも実機としか…」

「なのはさんたちも目視で確認できるって…」

「バカな!!…これはIS…しかもシルバーカーテンだ!!？」

そこに、ジェイルの信じられないとも言えるような声上がる。

「どづいづことなん!？」

「アレは…幻覚を用いて対象を惑わすクアット口の先天固有技能…

通称・IS?シルバーカーテン？」

「でも…クアット口は今この六課に……」

《ええ…確かに此処にいますわ》

クアットロ自身も気になっているのか通信を入れてきた。

「いや…奴の存在で気付くべきだった…虚を作れるなら…

私のように戦闘機人も作り出せると……」

「何か対策は無いん？」

「シルバーカーテンの能力は人や動物だけでなくレーダーなどの電子機器にも

及ぶ……一番有効な方法と聞かれば……大出力の魔法で幻影諸共吹き飛ばす

くらいしか思いつかない……頼りなくてすまない……」

「うん……それだけ分かれば十分や!!」

「はやてくん？」

「グリフィスくん…ウチも出るから…あとはよろしくな？」

「了解です!!」

なのはたち北西方面の戦場……

ガガガガッ!!スウ……

なのはとフェイトの魔法がガジェットたちを破壊するが、それに混じった幻影が

攻撃をすり抜ける。

「くっ…目視でも判別できないなんて…それにこの動き…アグスタの……!!」

「!?!?なのは!気を付けて!!虚も混じってきてる!!」

「ギィアアアア!!」

そうフェイトが言うのが早いか、虚がなのはへと襲いかかるつもり。

「!?!」

なのは初めての虚との戦いを思い出し、体が硬直してしまふ。

「なのは!?!避けて!?!」

それでも動けないのは。

そこへ……

「オラアアアアアア!?!?!?!」

ドシュツ!?!?!

なのはたちへ虚が向かったことを感知した一護がギリギリで駆け付けた。

「!?!一護!?!」

「悪い……いつもギリギリになるな……間に合ってよかった……」

「い……一護くん……」

「まだ敵はいる……いけるか？」

「あ……うん……」

一護の到着で鼓舞されたからかそれともまた助けられて嬉しかったのか、

いつもの調子に戻ったなのは。

「よし、そうじゃ……いくぞ……」

一護は霊圧を高め、鬼道を放つ用意を始める。

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば  
空

槍打つ音色が虚城に満ちる」



そして、一護の鬼道の詠唱が完了する。

「最悪でも虚だけは吹き飛ばす！！破道の六十三・雷吼炮！！」

一護の放った特大の雷吼炮は、ガジェットと虚を巻き込んで吹き飛ばす。

しかし、吹き飛ばせたのは虚とあくまでガジェットの一角のみ…

残っているガジェットから再び幻影が生まれ、辺りを囲い始める。

「うわっ……すごい威力……」

なのはの口から感嘆した声がこぼれる。

「なんとか虚は倒せたな…とはいえ……」

どいつが本物かわからんこの状況で…何処までやれるか…」

「鬼道には広域殲滅の術とかはないの？」

「いや…あることはある…こいつら一帯を囲って超重力で押し潰すヤツが…」

「じゃあそれで……」

「だけど無理」

「何で!？」

「俺は鬼道が苦手って言っただろ？九十番台なんて使いこなせるわけがねえ」

「ダメな方向に自信满满だね……」

「仕方ねえだろ……」

「なのは……一護……私がここに残って敵を引き付けるから……」

「なのははヴィータと一緒に地下に……一護はへりの護衛に……」

「ふえ……フェイトちゃん!？」

「ま……待てよ!……」

「いくら3人でも…そのまま空戦してたんじゃ時間が掛かり過ぎる  
……」

ドガアアアアアン!!!

そうやって話している間にもガジェットたちの攻撃は激しさを増す。

「限定解除すれば広域殲滅で纏めて落とせる……」

「それはそうだけど……」

「なんだか…嫌な予感がするんだ……」

「それについては同意するがよ……良いのか？そんな簡単に使って  
……」

「それは……」

《割り込み失礼!! ロングアーチからライティング1へ、その案も  
限定解除申請も

部隊長権限にて却下します》

そこへ、はやてからの通信が割り込んできた。

「はやてー！」

「はやてちゃん…何で騎士甲冑！？」

「はやて……………」

《フフン……………一護くんに見せるんは初めてやる？…どう？…似合ってる？》

「お前…ホントに部隊長だったんだな！！」

『あら』

《ちょ……………それどういう意味！？今まで私のことなんだと想ってたん！？》

「いや…部隊長権限なんてほとんど使ってるの見たことなかったし

……」

《もう……ええわ！！私の実力見たる！！！！》

「まあ……冗談だよ……半分は（ボソツ）」

お前の実力はシグナムからよく聞いている……信頼してるよ」

《なんか……今聞き捨てならない言葉が聞こえた気がするんだけど……  
とにかく、クロノくんから……私の限定解除許可を貰うことにした。

空の掃除は私がやるよ》

「さっきの奴で虚は最後だ。だから俺も自由に使ってくれ」

《ありがと。ちゅうわけで……なのはちゃんとフェイトちゃん、一護くんは

地上に向かってへりの護衛。スピードの関係上一護くんが先行して辺りを

牽制しといてや》

「あいよ！」

《ヴィータとリインはフォワード陣と合流、ケースの確保を手伝ってな？》

《了解！！》

「君の限定解除許可を出せるのは…現状では僕と騎士カリムの一度ずつだけだ。」

「承認許諾の取り直しは難しいぞ？使ってしまったていいの？」

クロノが再申請のことを考えて再度確認を入れてくる。

《使える能力を出し惜しみして…後で後悔するのは嫌やかな》

「場所が場所だけに…SSランク魔導師の投入は許可できない…

限定解除は3ランクのみだが…それでいいか？」

《S……それだけあれば十分や!》

解除されるのが3ランクのみと聞いて少し考えるはやてだが、

それで十分と判断したようだ。

「はあ…八神はやて…能力限定解除3ランク承認…リリースタイム  
120分!」

クロノは僅かにため息をつき、はやての限定解除を承認した。

キイイイイイイン……

そして、はやての足元にベルカ式の魔法陣が出現する。

「リミット…リリース!!」

その言葉とともに、ベルカ式魔法陣が途轍もない量の光を放ち

はやてのリミッターを解除した。

そして、限定解除したはやては雲のさらにも上まで飛び上がっていた。

「よし……久しぶりの遠距離広域魔法……いってみよか!!」



「ロングアーチ1、シャリオからロングアーチ0、八神部隊長へ」

《はいな！》

「サイティングサポートシステム準備完了です。

シュベルトクロイツとのシンクロ誤差、調整終了」

《うん、了解。ごめんな。

「精密射撃とか長距離サイティングはラインと一緒にやないとどうも  
苦手で…」

「その辺はこっちにお任せください！準備完了です！」

《おおきにな》

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ…」

はやての詠唱と共に白い魔法陣が5つはやての前に出現する。

《スターズ1、ライティング1安全域に退避、ライティング5はヘリの護衛に

入りました。着弾地点の安全確認》

「おっし！第一波…いくよー…！！！！フリース…ヴェルグ…！！！」

「フリースヴェルグ第一波発射！発射軌道…正常！」

「グループEに着弾します…5、4、3、2、1、0!」

キイイイイイイン……ゴォア!!!!!!!!!!

一旦は躲したかに見えたガジェットたちであったが、

着弾後の爆発に巻き込まれて幻影諸共跡形もなく吹き飛ばす。

「グループE消滅。続いてB着弾。消滅」

「同じくA消滅」

「追撃第2波、発射!」

「シャーリー!」

ドクターと協力して消滅時のデータから幻影と実機の

判別パターン割り出しを！手掛かりがあれば必ず見分けられる」

「うん、全力で見つける！！」

「今回僕はサポートに回ろう…任せておきたまえ！！」

2人はグリフィスの指示に力強く答えた。

再び地下水路……

ギーン！ガガッ！……ドオン！！！！

地下水路の中で、水を撒き散らしながら激突する2つの影。

「クッ……チィッ！！……さすがに速いな……」

普段から一護の動きを見慣れてなければ反応すらできんかった…」

「そうですか…こちらとしては着いてきていること自体が驚きなのですが…」

「フン…アイツの動きに比べたら…捌くことぐらいは容易い。

それに貴様…剣を握って日が浅いだろう?」

「たった数回切り結んだだけでそこまで分かるのですか…」

でも…あなたも段々とですが…速度が落ちてきていますよ?」

「く…あまり疲れが見えていないところを見ると…お前は…戦闘機人か?」

「そうです。まあ、正確には戦闘機人だった者ですが…ね!」

ギーン!!!

セクンドウムはそう言つとゼストを弾き飛ばして距離を取る。

「戦闘機人だった…だと？…どういう…！まさか…」

「あら、ここまでヒントをあげたらさすがに気付きますか？

そうです…戦闘機人の技術とサルベージされた虚のハイブリッドモデル…

それがあの方によって生み出された私たちです」

そして、やはり数名同じような存在が生み出されているようだ。

「どつりで…その体格ではありえない力だと思っていたところだ」

「むう…失礼ですね。仮にも女性ですよ？」

少しだが表情を変えてムスツとした雰囲気を出すセクンドウム。

「お前を女扱いしていたら命が幾つあっても足らんな」

「ふふ…これが楽しい…という感情なのでしょうね…ですが…

そろそろ終わりにしましょう…遅れるとあの方にどやされてし

まじので

《(ゼストさん!!今、そこへヴィータちゃんと一緒に向かっています。)

あと少しでいいので持ち堪えてください!!》

「!!フフ……簡単に言ってくれるな……」

「あら?諦めないんですか?」

「ああ……俺には……まだやるべきことがあるからな……それに……」

「?」

「俺に気を取られて後ろががら空きだ!!」

「!?!」

バツ!!

ゼストに言われてセクンドウムは振り返る。

ゴッ！！！！！

そして、ギンガとスバルの2人の拳がセクンドウムの腹部を捉えた。

「グウ！？……チツ！！」

ザッ……

「ハア……ハア……やっつけてくれますね……」

少なからずダメージが通ったのか、表情を歪めて肩で息をしているセクンドウム。

「すまん……下がっているといったが……正直助かった」

ゼストはいいタイミングで救援に入ってくれた2人に感謝の言葉を掛ける。

「いえ……ギリギリまであなたが引き付けていて下さったからです……」

それに……相手を少し怒らせたみたいですね……殺気が先ほどとは





さすがのゼストも安堵の声を漏らす。

「これはまた…天井壊してきたあたしが言つのもなんだけど…

色々壊しすぎだろ……崩れねえだろうな……」

「周りに配慮する余裕が無かったからな……

まあ廃棄都市区画だし大きな問題はないだろう……」

「……ダメです……逃げられました……」

キーン……ラインが逃亡されたことに気づき、捕縛魔法を解除する。

すると、そこには人が1人通れるほどの穴があげられていた。

「あの一瞬で切り抜けたのか……」

ズズウウウウン……！！！！

「な……何！？」

「…大方…ここを抜け出す時に数本の柱を壊していったのだろう……  
元々奴との戦闘であちこちにガタが出ていたのだ……壊すのは容  
易いだろう……」

「おい！悠長に解説してねえで早く脱出するぞ！！スバル！！」

「！はい！！ウイングロード！！！！！！」

スバルが地面に拳を打ち付け、ヴィータが入ってきた穴に向けて  
ウイングロードを展開する。

「スバルとギンガが戦闘で行け！！あたしは最後に飛んでいく！！」

『はい！！』

「ねえキャロ、ルーテシア…レリックの封印処理…お願いできる？」

キャロとルーテシアに封印処理を頼むティアナ。

「あ、はい」

「うん、大丈夫」

「ちょっと考えがあるんだ…手伝って！」

「はい(うん)!!」

ティアナは何か秘策があるようだった。

ゴウ!!ドオン!!……

はやてのフレイスヴェルグがガジェットたちを次々に破壊していく。

「はあ…はあ…」

若干の疲れが見え始めているが、まだまだ余力はあるようだ。

「さあ…あと何機や？」

《9編隊…いえ8編隊に減りました》

「幻術パターンの解析…でき始めています」

「観測隊からの連絡は…複合識別作業…順調です…！」

「いけます…！」

《うん！さすがは機動六課のオペレーター陣や…！》

「いや…本当に優秀だね…助手に欲しいくらいだ。」

最近ウーノが一護くんにゾッコ(ゴシュツ)！！ ウーノが撲殺(グオツ)！？

ドウビバゼンデジダア……（血）「

口は災いの元です。 作者経験談

「さあ…ガンガンいくよ…！照準よろしく…！」

流血沙汰を軽く無視して気合を入れ直すはやて。

何気に一番酷い

《はい…！》

ロングアーチの皆も無視のようだ。

《皆がいじめるんだあ…！！！！（泣）》

時空管理局・ミッドチルダ首都地上本部……

「なんだ！一体何事だこれは！？」

ここでは、レジアス中將とその副官が映像を見ながら問答をしていた。

「本局遺失物捜査部…機動六課の戦闘…そのリアルタイム映像です。

撃たれているのは…予てより報告のあったAMF能力保有のアン  
ノウン

それと…今は殲滅されてしまいましたが…最近噂になっていた虚  
と呼ばれる

化け物もいたようです。

撃っているのは…おそらく六課の部隊長…魔導士ランクは総合S

S

「ん！？地上部隊にSS！？聞いておらんぞ！！」

「所属は本局ですから…」

「後見人と部隊長は？」

「後見人の筆頭は、本局次元航行部隊提督クロノ・ハラウン提督と…」

リンディ・ハラウン統括官。そして、聖王教会の騎士カリム・グラシア殿の

お三方です」

「チツ…英雄気取りの青二才どもが……」

「部隊長は八神はやて二等陸佐」

「八神はやて！？あの八神はやてか？」

「はい、闇の書事件の八神はやてです」

バンツ！！！！

レジアス中將は机を叩いて憤慨する。



「犯罪者ではないか！…！そのようなものに部隊を任せるなど…」

「八神二佐らの執行猶予期間は既に過ぎています……ですので…」

「同じことだ！犯した罪が消えるものか！…」

「問題発言です。公式の場ではお控えなさいますよう」

「わかっている」

「それと…民間協力者として…虚を倒せるものが1人…」

「…何…！？」

「第97管理外世界・地球出身…黒崎一護。職業・死神代行…このことです」

「死神…代行！？何の冗談だそれは！？」

やはり、先入観からか何を馬鹿など言いたげな中将。

「それが…冗談ではありません…現にミッドに出現した虚はすべて彼が撃破。」

同時に六課の出張任務中に出現した虚も単独で撃破しているとの報告が……」

「この男……一体何者なのだ……」

「それと…これは未確認情報ですが……ジェイル・スカリエッティが司法取引を

持ちかけてこれを受け入れたとの情報が……」

「!??な…何だと!? 奴はッ…私の……」

何か喋られてはまずいことがあるのか、激しく動揺するレジアス中将。

「ですから!! 公式の場での発言には気を遣ってくださいと」

「む……すまない…奴からは…私に関する情報は出ていないのか?」

そこからは副官である彼女にしか聞こえない大きさの声で話す中将。

「はい…今のところ何の報告も上がっておりませんので…大丈夫かと」

「むう…これでは迂闊に手は出せんな…まあいい…今回は静観する」

「了解しました」

地下水路の上の廃棄都市……………

《ちょっと…セクンドウム…何でそんな大量破壊紛いのことになってんの?》

「ちょっと…相手が増えて厄介だったから纏めて潰そうとしてるだけ」

《あなたねえ…潰れた地面からどうやってレリックを探すのよ……

迂闊に吹き飛ばしたらあなただって無事じゃすまないわよ?》

「問題ない……」

《問題ないって……》

「この程度でやられるなら…警戒なんてしてない」

《!それは…そうだけど……》

「あなたの方はどうなの?上手く幻影は使えてる?」

《いや…それが…幻影ごとブツ飛ばされてかなり面倒なことに……》

「それで人のことを偉そうに心配したの?というかさっきのお姉さまキャラ何?

聞いててサブイボが立ってくるんだけど……」

《あ…あなたねえ!!》

ゴズウウウウウン!!!!

《あ…あ…潰れちゃったじゃない……》

「大丈夫…プリームムなら見つけれ!!」

《自分で探せや!!!!》

そうやって気を抜いてると……

キィィィン!!ヒュンヒュンヒュン!!!!

「!!これは…拘束魔法!!」

ブンッ!!

セクンドウムはキャロとルーテシアの拘束魔法を躲すために上空へ飛び上がる。

そこへ……

バンバンッ！！ゴウッ！！

ティアナの銃撃が2発、アギトの炎が3発、跳躍の最高到達点に飛来する。

「ええい！！鬱陶しい！！」

ガガガガッ！！！！

セクンドウムは斬魄刀を抜くと、体ごと回転させ回転切りの要領で弾丸と炎を吹き飛ばす。

さらに、前面、両側面からヴィータ、スバル、ギンガが接近してくる。

「クッ……………！？（槍使い2人に融合騎が……………）」

ここで、セクンドウムはエリオとゼスト、リインが見当たらないことに気付く。

だが時すでに遅し。

タッ……………

ジャキツ！！

地面に降り立った瞬間に前後から2人の槍に挟まれ、身動きができなくなった。

「ここまですぬ……」

キイイイン……バチン！！

そう言ってゼストの横に現れたリインがセクンドウムにバインドを掛ける。

「く……な……何で解けないのよ……私の力なら……」

「無駄だ……そのバインドは俺たち全員の魔力で編まれている……」

解きたければそれ以上の魔力を使うしかない……

消耗している今のお前には到底不可能だ……諦める……」

「ふう……市街地での戦闘に公務執行妨害……その他諸々で逮捕する」

廃棄都市のとある場所……

「あ……あら……セクンドウム……捕まっちゃった……これって私の所為？」

プリームムと????が話している。

「フム……自業自得の部分もあるが……お主も無関係ではなかるうな」

「ま……まあ……後で助けてあげればいいか……うん、そうに違いない  
！！」

「はあ……吾輩はそろそろ決行するぞ……本当に撃つても良いのだ  
な？」

「あの……出来れば7割程度でお願いします」

「ふ……保証はせん」



「しなさいよー!」

このノリはどうかならんのだろうか……

「あのお嬢ちゃんへの能力が本物であるなら……7割程度なら耐えられるだろう」

「では……お願いします。私はセクンドウムの方へ向かいますので」

「うむ、任された!」

ギユオオオオオオオ……

やがて?????の手の周辺に重い霊圧が集束し始める。

「さあ……ぼつニや……君にこれが防げるか?」

《セクンドウム……ゴメンちゃい!私の所為で捕まって》

《あんだ…謝る気ないでしょ……（トトトトトト……）》

《ああ！？そんなに怒らないでっばー！助けてあげるから、私の  
言とおりに

そいつらに伝えて！ね？》

《嫌な予感バリバリんだけど……まあいいわ……》

へり周辺………

「く…想像以上に先に行ってたな………」

ギユオオオオオオオオ………

一護は巨大な霊圧の集束を感知する。

「！！！！これは……まさか……虚閃!？」

「見えた!！」

そこへ遅れてなのはたちが到着する。が……

「来るな!なのは、フェイト!……そこで止まってる!……!」

「……どういじ……」

ロングアーチ……

「市街地にエネルギー反応!！」

「大きい!！」

「そんな……まさか!！」

「これは…砲撃！？でもこんな反応今までにない…そんな…推定S  
ランク！？」

廃棄都市のセクンドウムたち……

「《逮捕はいいけど…》」

『！？』

「《大事なへりは…放っておいていいの？》」

『なっ！？』

《ああセクンドウム！もう一言追加！…》

「《あなたはまた…守れないかもね…》」

「!?!」

その一言に過剰に反応するヴィータ。だが、もう遅い。

「?虚閃?!?!?!?!」

そして、その一言と共に凶悪な赤黒い閃光がその手から放たれた。

「ああ!?!」

『そんな……』

六課の面々に絶望の色が浮かぶ。

「クソッ……間に合ってくれ……」

ギョーン……！

一護はさらに加速してへりとの距離を詰める。

そこへ……

「？虚閃？！！！！！！」

赤黒い閃光が飛来した。

ドガアアアアアアアアアア……

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.....

第31話 機動六課の休日・後編 (Emergence of curse)

いかがだったでしょうか……

続いて皆さんお待ちかねの彼奴との戦闘回をどうぞ！



第32話 暴風男爵（WEATHER VANE）（前書き）

続けてきました戦闘回。

サブタイの意味はスペイン語での暴風男爵です。

そして、いよいよ出ます。アイツが！！

今回ギャグほぼ無し。無いとは言わない。だってアイツは……

まあ気にせずお楽しみください！！挿し絵満載です。

へりへと放たれた虚閃。

そして、奴は現れる……あの時のように……

第32話 暴風男爵（WEATHER VANE）

「砲撃…へりに直撃…？そんな筈ない！状況確認！！」

「ジャミングが酷い！データつきません！！！！」

「そんな……………」

「ヴァイス陸曹と…シャマル先生が……………」

「てめえええええ！！！！」

ヴィータは我慢できずにセクンドウムに掴み掛る。

「副隊長！落ち着いて！！！！」

スバルがすぐに止めに入るが、

「うるせえ!!!!」

ヴィータには取りつく島もない。

「おい！仲間がいんのか！？何処にいる!! 言え!!」

スウ……………

「!?! エリオくん!! 後ろ!!」

エリオの背後に忍び寄る何かに気付いてギンガが声を上げる。

「!?!」

ドンッ!!

「グッ…………… ケースを……」

しかし、エリオは不意打ちで吹き飛ばされてケースを奪われる。

ドンドン……

ブンッ……!

ティアナが銃撃で応戦するも、響転もどきで回避されて見失う。

「……こいつも!?」

「何処に……」

ガッ……!

「あつ……もうちょっと丁寧に扱ってよ……!」

「もう……助けてあげたのに礼の一つも無し?」

「はいはい……ありがとうございます(棒)」

「はあ……もういいわ……」

2人で口げんかをしながら、

近くのビルの屋上にセクンドウムを小脇に抱えたプレミアムが出現する。

「なっ…セクンドウムを……」

「まさか…レリックまで手に入るとは思ってなかったですけど…儲けました」

「あなた…よく小脇に抱えられてる状況で余裕ぶれますね……」

「てめえら……」

「今回は私たちは引かせてもらいます」

「私たちは……？ではへりを撃つたのは別の者か……！」

ここでゼストが砲撃がさらに別の者が存在すると気付く。

「はい…彼は私たちとは比べ物にならない強さです。」

あなたたちでは…まず勝ち目はないでしょうね」

「まあ…精々頑張って生き残ってください。では…」

ブンッ！！！！！

そう言い残すと、2人（実際に移動するのはプリームムのみ）は逃亡した。

「反応……ロストです……」

ラインが反応を追い切れなかったことを知らせる。

「くそっ！！……ロングアーチ…へりは無事か？あいつら…墜ちてねえよな！？」

「ほっ……やはりか……ほっせ<sub>ニニ</sub>」

《スターズ2とロングアーチ！問題ねえよ！へりは無事だ！！》

回復した映像には斬月で完全に虚閃を受けきつた一護の姿があった。

「はあ…：危なかった…ギリギリやん…」

上空のはやても安堵の息を漏らす。

《ロングアーチ！これから俺は撃ってきた奴の追撃に入る…：多分相

手は虚だ。

いいか、敵と俺の近くに誰も近づけさせるな…これから先は殺し合いだ…

下手に近づかれると巻き込んで殺される…》

「は…はい…」

一護の雰囲気は若干気圧されながらも答えたシャーリー。

「なのはとフェイトもいいな？」

「う…うん………」

「気を…つけてね？」

「ああ…行ってくる」



ブンッ！！！

ダンッ！！ダンッ！！

一護はビルの屋上を瞬歩で飛びながら霊圧のする方向へと向かっていく。

「！！いた！！」

「ふ…見つかったか…フン！！」

ブンッ！！！！

?????は見つかるたびにその場から離れ始める。

「く…待てよ…オイこら！逃げんな！！！！」

「フン…誰が逃げて…いるもの…」

「ドン・パニーニ!!!」

「カツ!?…ほごあ!？」

ズドオオオオオン……………

パニーニ（笑）は一護のその一言で足場を踏み外し、

目の前の建物の中にももの見事に突っ込んだ。

《えっ…………?》

何故か通信の向こうの音がシンクロした気がした。

「お…お…い…………2度目だけど…………大丈夫か…………?」

さすがに居たたまれなくなっただか、声を掛ける一護。

すると、立ち込める煙の中から……………

「ジャー————ン！——！」

《ビクッ！？》

「ああ……またか……」

ロングアーチたちは突然の出来事に困惑するが、

目の前にいる一護は「変わってねー」みたいな顔をしている。

「ジャンジャンジャンジャー————ンジャジャ……ゲッホ！」

ばっさばっさばっさ……

「ジャー————ンジャ……ゲホッ！ゲホッ！ゲ————ッホゲホッ！」

バサバサッ……

「ジャ……ハ————ン……ヘイツ！——！」

ビシャーーーーーン……………

> i 3 7 2 7 7 | 3 5 0 6 <

「 …… 》

一護 + 六課

「 …… 」

ニ  
ル  
ド  
ニ

「 …… 》

一護 + 六課

「 ちょっと…待てえい! 」

クワツ!!

「 何だそのリアクションは! 」

「 イヤ…だって…これ2回目…」

「何だそのリアクションは！？何だそのリアクションは……」  
「！？」

「うるせーな…前から数えて6回目だぞそれ言つの」

「このドルドー二様の！華麗な名前を間違えた上に！

再びこの華麗な登場シーンを目にして尚…」

「華麗って…オマエ今足踏み外した上にむせてたじゃねえか…」

「相も変わらずそのような平静を装うとは…！」

「装ってねーって言ってんだろ。ガチで平静なんだよ」

「というか吾輩の名前を間違えたことは全力スルーか！？」

「いいだろ別に…俺からしたらどっちも大差ねーよ」

「ぐぬぬ…フン…まあいい…さて…<sup>二二二</sup>ぼうやは吾輩のことを覚えて

いたか…

ならば…もつすることは分かっているな？」

ビリッ…ビリビリッ…！！

2人の間で霊圧がせめぎ合い、周囲の空気が振動する。

「ああ……」

ズ……………

> i 3 7 1 6 5 | 3 5 0 6 <

一護は月牙天衝の構えに入り、ドルドーニの問いに答える。

「全力で…叩き潰す…！」

「よく言った…！<sup>ニ、ニ、ニ</sup>ぼうや…！！…！！…！！」

ゴオアッ…！！…！！…！！

『はぁっ！……！……！』

ギアンツ！……！……！

ドウッ！……！……！

ズリズリッ……！……！

「キャッ！？」

「うっ……！……！」

《な……あたしのごとくにまで届いてたで！？》

2人の激突による衝撃波は、遠く離れたなのはやフェイトさらには  
はやての

所にまで届いていた。

《ロングアーチ！今からの一護くんの戦闘データ…キチンと記録しててやー！》

《りょ…了解ですー！》

はやてからの指令に一瞬戸惑いながらも応えるシャーリー。

《おい！ロングアーチ！！今の衝撃波は何だー！》

今度は市街地のヴィータたちからの通信であった。

《今のは敵とライトニング5…一護さんが戦闘に入った時の衝撃波ですー！

と、いうかそこまで届いてたんですか！？》

《相変わらずアイツは無茶苦茶だな……》

というゼストの呟きも聞こえる。



《あはは…設定のバグとかなんじゃ……》

と失礼なことを言っているのはスバル。

《ふむ…あながち間違いでも……》

それに乗っかってきたのはジェイル。

「も〜!!皆は集中してほかの作業を進める!!」

さすがに耐えかねたなのはが爆発し……

「皆……オハナシ……スル？」

とオハナシ宣言をしてきたので……

《謹んでお断りします!!!》

と見事にシンクロして、もの凄い速度で作業に復帰した。

バチンッ!!

ドルドーニが繰り返してきた蹴りをそのまま蹴り返す一護。

今の一護の力は破面の特殊な皮膚・鋼皮イエロの上から蹴ったとしても

何の問題も無いほどに上昇していた。

「ほっ……」

以前とはかなり異なった戦い方に変わっている一護に驚きながらも

攻撃の手は緩めようとしないうドルドーニ。

ギンッ!!……

「ハアッ!!」

ドガツ！！！

「ぬうん！！！！……フフン……随分と強くなつたじゃないか二二三ぼつや。

しかし……鋼皮の硬さに耐えられるようになるうとも……

攻撃が鋼皮イエロを抜けないようでは私に傷はつけられんぞ？」

「……ああそうか……よっ！！！！」

オアツ！！！！

「ぬ！？」

ギイン！！！！……ギギッ……ギシッ……

ドルドーニは一瞬で一護の剣筋の変化を感じ取り、なんとか斬魄刀で受け止めた。

「……どの程度の力で踏み込めば……腕が斬り落とされるかは分かったみてえだな」

「全く……やってくれるではないか……侮っていたのは吾輩の方であっ

たか……

よかるう……ならば全力でお相手致そう。ぼう二やも三応えてくれるか？」

「ああ……もちろん……こつちも最初から全開だ……！」

「卍解……」

「まわ旋れ……」

「天鎖斬月……！」

「ヒラルダ暴風男爵……！」

ゴオオオオオオオオオオ……

「さあて……ここから……仕切り直しといこうじゃないか……！」

> i 3 7 2 7 9 | 3 5 0 6 <



ビュオオオオオオオオ……

「く……またぶつかったの!？」

「これ……次元震とか起らないよね？」

「《……………》」

無いとは言えない六課の皆であった。

「そついえばヴィータちゃん……レリックはどうなったの?」

《それが……すまねえ……奪われちゃった……》

「そつ……」

《今回はあたしの失態だ。フォワード陣はベストだった》

《ラインもですう……》

《俺が付いていながら…すまなかった…》

《あの…ヴィータ副隊長……》

《なんだよ！今は報告中……》

《あの…レリックには私たちで一工夫してまして……》

ギンガに促されてスバルとティアナが控えめがちにそう告げた。

「《???》」

「ケースはシルエットではなく本物でした。

私のシルエットって衝撃に弱いんで奪われた時点ではれちゃいますから」

「なので、ケースを解放してレリック本体に直接嚴重封印をかけて

…」

「その中身は…」

そう言ってスバルはキャロの頭の帽子を取る……そこには、

ピヨン…！

何故か小さな花が咲いている……

「こんな感じで！」

パチンツ！！……ポンツ！！

ティアナが指を鳴らすと幻術が解け、花がレリックの姿へと戻った。

「敵との直接接触が一番少ないキャロに持ってて貰おうって」

エリオの言うようにボックスのキャロだからこそその案であった。

「回避能力ではルーちゃんなんですけど…さっきも言ったように衝撃に弱いんで」



「なるほどー!ー!」

「は……はは……」

リインは関心の声を上げ、ヴィータは驚きのあまり声も出ないようだ。

「我々の出番は……どうやら無くなったようですね」

フォワード陣のすぐ近くに来ていたシグナムはそう呟く。

「彼らの任務は無事完了のようです……あとは……」

その横でシャツハは一護が戦闘している領域へと視線を向ける。

「ロングアーチ」

《はい、どうしました？シグナム副隊長？》

「こちらに一護の戦闘の映像を出せるか？」

《はい、少し待ってください……》

ブオンー！

そして、シグナムとシャツハの前に画面が現れ、戦う一護の姿が映される。

ドゴッ………

一護がビルの上で暴風男爵の一撃を受け止める。

ガラガラ………ドゴオオオオオ………

すると、一護より後ろのビルは衝撃で崩れ落ちる。







そして、勢いを振り切るかのように斬月を振るう。

するとそれだけで無数のソニックブームが発生し、嘴たちを切り刻んだ。

《な……》

その息をつかせぬような2人の攻防に見ている者たちは言葉を無くしていた。

《こんな…こんな相手に一護くんは元の世界で戦ったんか!？》

もはや割って入るなどという状況ではなかった。

《シグナム…一護くんの動き…何処まで見えとる?》

《正直…ハッキリと確認できるのはあの男の一撃を受け止めたり

立ち止まって攻撃する時程度です。あとは霞んで見えて何が何だか…」

《あの記憶の戦いだけではアイツはあそこまでは強くはならない…

まだ…我々に言っていない何かがあるのだろうか…》

と、強さの片鱗を見せ始めた一護を見据えながらゼストは呟いた。

「一護は…話してくれるよね…?」

「うん…きっと話してくれるよ…」

「《そっだよな(ろっ)……一護(くん・さん)》」

今はまだ戦いの中にいる一護に全員が心の中で問いかけた。

ドドツ!! パパツ……

戦闘を始めてどのくらいの時間が経ったであろうか……

戦闘はさらに激化し、互いの血が飛び散り始めていた。

ドガガガツ!! バチバチツ!!

今度は4本の嘴を受け止め他の2本は蹴りで弾き飛ばす一護。

そして、そのまま霊圧を込め始める。

「何!？」

「月牙……天衝!!!!!!」

ギユゴオオオオオ……ドバアアアア!!!!

そして、一護最強の黒い一撃が至近距離で撃ち出された。

「ぬグツ……ッ……ハアツ!!!!」

パン!!!!!!!!

ドルドーニは一護の月牙天衝を暴風男爵を前面に固めることで何と



か受けきる。

「ハア…ハア…今のは…なかなかにつかつたぞ……」

「はっ…はっ………おいおい…今のも受け切んのかよ………」

ドルドーニは肩口と脇腹に、一護は頬と左腕に少々の傷を負っていた。

「やれやれ……この技は…正直吾輩自身も危険だから使いたくなかつたのだが……」

「?…何をする気だ……」

「<sup>ニニニ</sup>ぼつやは十刃と戦ったことがあるのだろう?ならば知っているはずだ。

吾輩の今の力は十刃時代以上…ならば十刃時代の技はどれも使える」

「…まさか……」

「この世界は虚圏と違って構造が脆い…

迂闊に撃てば吾輩諸共世界の藻屑となりかねん…だが…

ぼつやを倒すためならそれも仕方なし！！！！いくぞ………」

そう言いつと、ドルドーニは肩口の傷から血を取り霊圧を溜め発動の触媒とする。

ギョギョギョギョギョギョ………

ズズウウウウウン………

《な…なんなんですか…これ……》

「どうしたんや！？シャーリー……」

《さ…先ほどの虚閃と同じ反応です……ですが…規模が違いすぎる

………

この廃棄都市区画一帯が吹き飛びかねないほどのエネルギー反応です!!」

「な……」

「……………」

ドルドーニが力を溜めていく姿を一護は無言で見つめ続ける。

「さあ……おそらくこれで最後だ……受けきれぬものなら……受けてみたまえ……」

「ほつちゅ……」

ズアッ………

辺りの空気が一気に吹き飛ばされる。そして……



「くっ……………そんな……………!!」

「一護……………!!」

なのはとフェイトから悲痛な声が漏れる。

一護に虚閃が直撃するのを2人は目の当たりにしたのだ。

むしろ取り乱さなかったのを褒めるべきであろう。

《ロングアーチ！見えへんのか！？》

《今解析中です！！さっきの一撃でノイズがまた酷く……………》

ズズズズズズズズズズ……………





ザアアアアアアア……………

限界が来たのか、ドルドーニの体が灰となって消え始める。

「お別れだ……………黒崎一護……………」

「ああ……………じゃあな……………ドルドーニ……………」

「……………フフ……………（嗚呼……………吾輩の名前……………）」

ヒュオオオオオオオオオオ……………

一護に看取られ、満足そうに破面の戦士は消えて行った……………

《……………！！映像戻りました……………！！え……………これは……………！！？》

「……………どないしたん……………！？一護くんは生きてるん……………！？」



《ライトニング5…一護さん健在…！辺りに敵の反応が無いところを見ると

一護さんの勝利です…！》

「《よかつた…！！！！》」

六課全員の安堵の声上がる。

「はあ…安心したら腰が抜けてもった…なのはちゃん、フェイトちゃん。

一護くん迎えに行ったってや」

《了解！！》

一護の現在地………

「一護くん!!」

「一護!!」

「……ああ……なのはとフェイトか……そっちは大丈夫だったか？」

「うん……一護くんのおかげで」

「そっか……」

「……一護？」

「一護から少ししか……というより殆ど覇気を感じず、不思議に思うフ  
ェイト。」

「いや……そっちの状況は？」

「もう皆は任務も完了したから撤収の準備してるよ」

「だから一護くんも早く……行くっつ？」

「わりい……俺は……あとでちゃんと合流するから……先に行つててくれ」

「うん……」

「早く……来てね?」

「ああ……」

一護の態度に有無を言わせぬものを感じて

なのはたちはこの場は素直に引き下がることにした。

「そつだ……やらなきゃやられる……そついつ世界なんだ……」

誰よりも優しいが故の葛藤……それは優しい筈のこの世界ですら

「護に忖なく付き纏う。

「俺は.....」

その眩きは風に掻き消されて彼方へと飛んで行った.....

t o b e c o n t i n u e d.....

第32話 暴風男爵（WEATHER VANE）（後書き）

いや〜…一週間弱でこの量は骨が折れました……

何故かめっちゃ気合いが入ったんで、いつもの倍くらいの速度で仕上がりました。

ちょっとくらい…休んでもいいですよね？ダメ？

まあ…数日は読みに回ろうと思っています。

たまってますし……読んでない作品が……

感想やご意見なども随時お待ちしております。

気軽に書き込んでください！！

では、また次回にお会いしましょう。

次はいよいよ最強の娘っ子の登場か！？お楽しみに！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1658v/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ Magical girls with Death&Strawberry ~

2011年12月17日01時49分発行